

---

# F B I から来た女: 4 ~ 清流・青の章

ユーリ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

FBIから来た女：4（清流・青の章

### 【Nコード】

N1887C

### 【作者名】

ユーリ

### 【あらすじ】

片桐真希を無事に救い出したコナン達だったが、赤の組織には逃げられてしまった。越水七槻がFBIからの任務を遂行する旅に出たと同時に、赤の組織と対をなす「青の組織」も動き出す。両組織が狙う、「RING」「クリーバー」「ブレイバー」に秘められた謎とは何なのか！？そして、両組織が2つの「RING」を奪取しようとするその隠された目的とは・・・！！？これは、コナン達と赤・青両組織との激しい戦いの話である・・・

ファイル334：新たな敵と越水七槻

江古田町郊外

ドバババババ・・・

こしみず なつき  
越水七槻

「ふんぬぬぬぬぬ！！」

あさい なるみ  
浅井成美

「あら、何の騒ぎかしら・・・」

タタタ・・・

成美

「あ、永井君！これ何の騒ぎ！？」

ながいともかず  
永井友和

「あつ、成美先生！！」

成美

「何だつてあの女の子、あんな所にはまってるの？」

友和

「なんでも、あの噴水の中に落ちたガーディアンがいるらしくて、彼女はそれを助けようとしているみたいです。」

成美

「あの女の子のガーディアン？」

友和

「それがちがうんです。」

「お、お嬢ちゃんもういいから……」

七槻

「何を言うとするね！絶対ここにいるったい！水の中に落ちたんやろ！でも探してみたら今は下にはおらん。給水口に吸い込まれたったい！吸い込まれた水は管ば通って、またこの上から出るハズ！！」

「否<sup>イナ</sup>、しかし君に悪いかと……」

七槻

「悪い事なんてなか！！ガーディアン、助けん方が悪かるうが！！」

「お〜い！水道局の人間はまだかあ！？」

トツ！

七槻

「そんなの待つとつたら手遅れになるけん！！それに……もう大  
体いる所は……わかった！！」

スツ！

七槻

「ガーディアン：RING・鉄猫<sup>アイアンキャット</sup>、リララ！！」

カッ！

ピョン！

ガツガツ・・・

友和

「ええ！！！」

成美

「食べてる！？あのガーディアン、鉄でできた柱を食べてるの！！？」

ガジガジガジ・・・

七槻

「よおし！！！」

ガバツ！

七槻

「おりゃああああ！！！！！」

ドバツ！！

「わ！！！」

成美

「キヤ！何！？どうなったの？」

シャアアアアア・・・

「ポ、ポワルル!!」

七槻

「アンタと同じ臭いのする場所ば探ったたい！」

「ありがとう！」

七槻

「安心すんのはまだ早か！ガーディアン：RING・フレイムスパロウ火小鳥、チャモ!!」

カツ！

七槻

「急いで体、暖めるけんね！」

ポオ・・・

「君のガーディアンは大丈夫なのかね？鉄の柱を食べて・・・」

モグモグ・・・

七槻

「食いしん坊で悪かね。でもガーディアン：RING・アイアンキヤットにとって鉄は大好物ったい！問題なかとよ!!」

友和

「へエ、良かったですね。」

成美

「あら？あの人、江古田美術館の現館長じゃない？」

友和

「ホントだ！」

成美

「それにこの女の子、どこかで見覚えが……ん？何コレ？（給水口の鉄柵が切つてある……このせいで館長のガーデンが吸い込まれたんだわ！！）」

「チツ。マズい事になりました！せっかく仕込んでおいたのに、変な女の子が来て噴水を壊してしまいました！！」

『女の子が噴水を壊した！？冗談も休み休み……』

「冗談ではありません！この通りを散歩するのが日課の江古田美術館館長のガーデンを噴水の中に引きずり込み、水道局員を装った我々が館長を誘拐する……途中までは計画通りだったのですが……」

『いいでしょう……しかし何があるかと、ミッションが変更される事はありません。館長を誘拐するのは今日でなくてはなりません。誰にも気づかれずにそつと……と思っていました……しかたありませんね。方法は問いません！ミッションを継続しなさい！！』

「ハッ!!」

バツ!!

「君の名前は？この町の人間なのかい？」

七槻

「ううん、旅の途中。ボスに頼まれた任務遂行の旅の途中ったい。名前は越水七槻。」

金城

「そうか。私の名前は金城。とにかくお礼をしたい。私の会社は隣町だが・・・一緒に来てくれないか？」

七槻

「!!」

スタツ!

成美

「!?!」

七槻

「まだ何かいるったい!!給水口の中に!!」

ギロツ!!



ザバアツ!!!

## ファイル335：突然の襲撃者

七槻

「まだ何かいるったい！給水口の中に！！」

ギロツ！！

ザパアツ！！！！

七槻

「チャモ！！リララ！！！」

ガツ！！

ガツ！！

ヒヨツ！！

ビタツ！！

バリイツ！！

バツ！

ドカツ！

成美

「ハスリルルが、館長の懐から何かを奪った！？」

サッ！

七槻

「しっかり捕まって！」

ヒヨイ！

七槻

「あのガーディアンば、追うったい！！！」

ダッ！！

成美

「永井君、これはきつと計画的な犯罪よ！！！」

友和

「ええ！！どうしてです！？」

成美

「切られていた噴水の給水口の鉄柵！そこに吸い込まれた館長のポワルル。その中から飛び出し、館長から何かを奪ったガーディアン達……どう考えたって……」

七槻

「その女医さんの言う通りったい。あの3体ば、人間の指示ば受けて動いてた！」

友和

「なんでそんな事がわかるんだい？」

七槻

「『印』ったい。3体共体のどこかに、こげん『印』ば、入れとっ  
たと！」

『B』

成美

「印！？あなたさっきの一瞬でそれを！？」

友和

「すごい動体視力……」

成美

「でもマズいわね！あのハスリルルの逃げ込んだ先は……『迷宮  
の樹海』と呼ばれる、江古田の森……」

江古田の森

ザワザワザワザワ……

成美

「越水七槻ちゃんだったわよね？ケガ人を抱えたまま闇雲に進むのは危険じゃ……」

七槻

「シッ！ヒソヒソ話が聞こえるったい。」

成美

「え、どこから？」

七槻

「『深い江古田の森に迷い込ませれば、逃げ切れたも同然』……そんな話ばしとっとう。でも残念ね。ボクのおじいちゃんは山や海や森の中で研究をしてた学者たい。生まれてから長い事自然の中で育ったボクやけん！都会まひン中より深い森の中の方が元気が出るとよ！！チャモ！！そこったい！！」

ゴオツ！！

成美

「……しげみの中に空洞が……」

友和

「中に人がいます！！」

「フッフ、『秘密のパワー』。岩場や木々の中に空間を作り出す手段です。しかし驚きましたね、さっきの噴水の件といい……」

七槻

「ごたくば聞きとっなか！！ガーディアンば使って人の物盗るち、

どぎゃんつもりね!!」

成美

「!(さっきのハスリルルがない!!)」

ゴボ・・・

ザバツ!!

ズルツ!!

成美

「キヤアツ!!」

七槻

「止めるったい、チャモ!!リララ!!」

ダツ!!

バシツ!!

「おやおや、あなたのフレイムスパロウとアイアンキャット、思った以上に疲れ傷ついているようですね。」

七槻

「？」

「お忘れですか?先ほどサメハダジョー達とぶつかり合ったのを。サメハダジョーとキバニアスジョーが持つ力『サメハダ鮫肌』。触れ合っただけで相手の体力を削り取るのですよ。さて・・・念のため、最終

形態でお相手いたしましょう。」

ギユアッ!!

「ハスリルルが水のマジックボールによって姿を変えし、ガーディアン：RING・ルンルラッパ!!」

メキメキメキメキ・・・

グググ・・・

七槻

「チャモ!!リララ!!女医さん!!」

プルルル・・・

青桐『調子はどうですか？潮<sup>ウシオ</sup>さん、滴<sup>シズク</sup>さん、泉美<sup>イズミ</sup>さん。』

泉美

「おお、総帥<sup>リーダー</sup>青桐!!順調ですとも!!来週から江古田美術館で公開される予定の伝説の：RING『ブレイバー』、そして今日はこれを館長自らが散歩に見せかけて極秘に持って行く日だった・・・まんまと奪ってやりましたよ!!」

青桐『けっごうです。』

潮

「後は・・・我らの顔を見たこの者達の・・・口を封ずのみ!!」

七槻

「いけん！このままじゃ、このままじゃ全員ここでやられるー！」

ヒョコ！

サアアアアア・・・

パツ！

七槻

「（さっき助けたポワルル・・・形が変わったー！ボクに何か伝えようとしていると？）！わかったー！今ったい、チャモー！」

カッ！

ヒュイイイ・・・

泉美・潮・滴

「何っ!？」

ボンー!!!

泉美

「む・・・消えたー！」

七槻

「ハア、ハア・・・何とか、逃げ切ったったい・・・」



ファイル336：越水七槻VS金泉躑躅『前編』

しばらくして、成美は目を覚ました。

成美

「ん……？」

七槻

「あ、やっと起きたみたい。」

成美

「な……永井君は？」

七槻

「心配せんでよか、ボクがここまで運んで来たみたい。」

成美

「あなた1人で？」

七槻

「そうつたい。」

成美

「あなた、何者なの？さつき、『ボスの命』がどうか言ってたけど……もしかして、『例のヤツら』の手先じゃないでしょうね？」

成美の言う、『例のヤツら』とは、成美に性転換手術をして彼女の『麻生成実の時の記憶』を奪った、赤の組織の事である。

七槻

「あゝ、ボクはその『例のヤツら』とは関係ないったい。ボクはFBIからの指示を受けてるだけだよ。」

成美

「え？じゃあ、あなたはFBI捜査官？」

七槻

「そっつたい。」

成美

「そう。じゃあ改めて自己紹介するわね。アタシは浅井成美。江古田小学校の保険医兼教師。江戸川コナン君、知ってるでしょ？」

七槻

「知ってるどころか、ボクはその子に一度負けた事があるったい。でも今は良き友達だよ。」

成美

「じゃあ、彼の正体も知ってるの？」

七槻

「もちろんったい。」

成美

「とりあえずアタシは2人を病院に連れて行くけど……七槻ちゃんはどうするの？」

七槻

「ボクはとりあえず、もうちょい先に行くったい。」

成美

「そう。気をつけてね。またいつアイツらが襲って来るかわからないから。」

七槻

「うん、気をつけるったい!!」

それから数日後・・・

越水七槻は長崎にいた。

タタタ・・・

七槻

「もしまたアイツらが襲って来た時、今のボクのカじゃ太刀打ちできん！今のボク達のカじゃあ・・・だからもつと探偵としての力ばつけるため、ここは避けて通れん!!」

『長崎Detective・Gym』

ガッ！

バァン!!

七槻

「たのもあゝ！！探偵の力量ば図りに来たったい！！ディテイクテイブマスター様はおるかゝ！？」

シィン・・・

七槻

「? Detective・Gymゆうのは探偵達の腕ば磨くために、ディテイクテイブマスターが経営している修練場のハズったい。なんで机やイスがあると?ここはジムじゃなかとかあ?」

キーンコーンカーンコーン・・・

ドヤドヤドヤドヤ！！

七槻

「！！な、何ね?何ね!?!」

ゾロゾロ・・・

七槻

「み、みんな勉強ば始めよつたと!ここは一体・・・」

タツ!

七槻

「むゝ。間違いなく、長崎の探偵修練場たい。あの女医さんが書いてくれた地図とも合ってるのに。ディテイクテイブマスターがおらんようになって、ジムがつぶれたんやるか?」

「いいえ！」

カチャ！

「ワタツツ私ならここにいますよ。」

某国某所

『青の組織』アジト

ズラツ・・・

青桐

「よくやってくれました。潮さん、泉美さん、滴さん。伝説の：R  
INGの1つ『ブレイバー』、これを見事入手したその働きを認め、  
あなた達を幹部に昇進させる事にしました。」

潮

「ありがとうございます。」

泉美

「リーダー光栄です、総帥青桐。」

滴

「謹んでお受けします。」

青桐

「では今日から、この構成員服を着用しなさい。」

バサツ！

オオオオオ・・・

青桐

「しかし！」

ビクッ！

青桐

「一方で私はあなた方が犯した失敗を許したワケではありません。あなた達の顔を見たという男女の医師と女子大生、彼らを取り逃がしたというあなた方の失敗を・・・この件に関して、私は特にあなた方に指示はいたしません。どのようにすべきなのか、自分達で判断できますね？」

泉美・潮・滴

「ハ・・・ハハッ！！！」

「私が長崎のディテイクタイプマスターであり、またこの市の探偵学校を最も良い成績で卒業した輝かしき秀才！金泉躑躅ですよ！！」

七槻

「アンタがディテイクタイプマスター様と？勝負、勝負たい！！」

タツ！

躑躅

「テスト用紙を配ります！」

コケツ・・・

七槻

「ととと・・・ボ、ボクは探偵としての力量は図りたくてアンタは訪ねて来たったい！今、学校の仕事ばしているのなら、それが終わってからボクの挑戦ば受けてほしか！！いっどこに行ったら、探偵としての力量ば図れるやる・・・」

グイ！

七槻

「ちよ、ちよつと！なんばしよつと！？」

ズルズル・・・

ドサツ！

七槻

「キヤツ！！！」

躑躅

「質問は、席について手を挙げてからするのですよ。探偵の力量を図りたいのなら、いかにも！このペーパー試験そのものがそうですよ！！」

七槻

「ええええええ！！！！」

躑躅

「私に挑戦したいという探偵見習いはあまりにも多く、戦い切れません。だからまず、受けていただくのはこのテスト問題。毎週行われるこのテストで成績がトップだった1人だけと、私は戦う事になっているのですよ。あなたの受験も特別に認めましょう。では、試験・  
・・始め！！！！」

バババババツ！！

七槻

「あゝ、なんで探偵の力量図りで学校の試験ばやるやるか。でも、しょうがないったい！！その場所によってその場所の決まりがあるち、じいちゃんも言っとな！！」

『予選試験

氏名

1：東都タワーに爆弾が仕掛けられ、大混乱になる事件があった。その爆弾の起爆装置に表示された、第2の爆弾が仕掛けられた場所を示す最初のヒントとは次のうちどれか。



ア EVIT イ NIXO ウ AMGA』

以下省略。

キーンコーンカーンコーン・・・

躑躅

「さあ、すぐに採点、発表ですよ。」

バツ！

ゴニョゴニョ・・・

躑躅

「採点が終了しました！！今回、この試験制度始まって以来の、満点が出ました！！満点をとった優等生さんは・・・越水七槻さんです！！おめでとございませす！！この金泉躑躅への挑戦を・・・許可いたします！！！」

カチャ・・・

パン！！

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ・・・

躑躅

「予選試験のペーパーテストも探偵の力量を図る手段であるように、本戦もこの試験会場でやるのですよ！！さあ、あなたは挑戦者サイ

ドヘー！！ルールはガーディアン・RING 2体使用の入れ替え戦！  
」

バツ！

ザシツ！

躑躅

「第2のテスト、実技試験・・・開始！！！」

七槻

「うおおおおー！！」

カツ！！

ガギイ！！

キン！！

タン！

七槻

「やっぱり強かねー！！よし、ここでチャモに交代したい！戻れ、リ  
ララー！！」

サツ！

シーン・・・

七槻

「あ……あららっ」

躑躅

「ウフフフフ……あなたのアイアンキヤットは、もう戻せない  
！……！」

ピキキキキイン……！！

ファイル337：越水七槻VS金泉躑躅『後編』

七槻

「な、何で！？リララを引っ込めようと思ったのに！！」

躑躅

「あなたのアイアンキャットはもう戻せない！逃げられない！！私のガーディアン：RING『ノズパルス』！その特殊能力は『マグネコア』！！鋼属性のガーディアンの体を超強力な磁力で足止めしてしまうのですよ！！」

ドコッ！！

七槻

「リララ！！」

タタタ・・・

躑躅

「ロツククラツシュ！！」

フッ！！

ズガガガガン！！

七槻

「うわああああ！！」

躑躅

「気をつけないと、あなたも巻き込まれますよ。」

七槻

「・・・岩!!」

躑躅

「そうですね！私は岩属性と磁石属性のガーディアン使い！！長崎市  
ディテイクティブマスター・金泉躑躅！！岩と磁石に時めく優等生  
ですよ！！実は属性の相性上では、あなたの方が有利だったので  
よ！鋼属性の攻撃は、岩属性にはとっても有効です！でも磁力によ  
って動きを制限されている今となつては、逆に鋼鉄の体が恨めしい  
事でしょう！！ディテイクティブマスターに挑戦するという事は、  
こつという事なのですよ！相性をも覆せる知識を、私はお勉強によつ  
て脳裏に刻み込んだのですよ！」

七槻

「ハア・・・ハア・・・リララ、さすがにディテイクティブマスタ  
ー様は強かね！でも、ボクだつて負けん！！必ずこの戦いば切り抜  
ける策があるハズつたい！それが見つかるまで・・・耐えて・・・」

躑躅

「いいえ、ありません！私の知識をもつて立てられたこの戦略を撃  
ち破る策なんて絶対・・・ありませんよ!!」

ズガガガガア!!

ダン！

七槻

「そげん・・・こつ・・・なか・・・早速・・・1つ見つけた」

い・・・その磁力はノズパルスの近くであればあるほど強く、距離をとるに従って弱くなる。ここまで離れば、足場をとられる事はなかとよ！」

躑躅

「で？だからどうなのですか？そんな事は言われなくともわかっています。鋼属性のガーディアンは防御力がズバ抜けている代償に、攻撃技は直接触れなければいけない攻撃がほとんど！距離をとったところで、そもそも攻撃自体が届かなくなるのですよ！近づけば磁力に足場をとられ、遠ざかれば打撃の攻撃ができない・・・あなたのガーディアンは手も足も出ない！でも私はちがう！距離なんて関係ありません！！磁力で反発・・・『ロツククラッシュ』から、『マグネステルスロツク』！！」

ジジジ・・・

バガツ！！

ドドドドド・・・

ガラ・・・

七槻

「クツ。」

躑躅

「勝負・・・ありましたね。当修練場のルールにのっとり、1体でも戦闘不能になった時点で終了！さあ、お帰りはこちらですよ！」

ガチャ！

ヒュウ・・・

七槻

「よか風つたい。これは山の方から吹いてくる風やね。山がこつちつていう事は、『北』はこつち・・・」

躑躅

「な、何を言っているのですか？」

七槻

「自分こそ何ば言つとると？さつさと闘技場に戻りいよ。まだ、決着は・・・」

コン！

コン！

七槻

「ついてなか！！！！」

ポゴツ！！

躑躅

「土の中を移動し、背後に・・・！！」

バツ！

躑躅

「いけませんわノズパルス！振り向いては・・・！！！！」

グググ・・・

グルン!

ヨタヨタ・・・

七槻

「リララ、今ったい!!」

ダダダ・・・

ゴキヤア!!

ミキツ・・・

ズズウ・・・ン・・・

躑躅

「ノズパルス!!」

七槻

「:RING図鑑には、『ノズパルスの鼻は磁石でできている』とある。つまり、鼻が磁石であるが故にゆえいつも北を向いているしかない・・・もしそれ以外の方向を向こうとしても、また北向きに戻る力で回転してしまう。回転でバランスが崩れたその時、攻撃ばされたら・・・!!」

躑躅

「・・・いつからその事に気づいていたのですか?」



七槻

「最初つたい。『あなたは挑戦者サイドへ』と言って、ボクをこちら側を行かせたけん。こちらば向いて戦わんといけん理由でもあるんやろかって……」

躑躅

「そ、それだけの事で……!?」

七槻

「って言っても、ただのカンつたい……うん！何度浴びてもよか風つたい！明日は晴れるとよ、きつと！」

スト！

七槻

「デイトイクタイプマスター様もお勉強お勉強つて机にかじりついておらんと、外に出てお天道さんや風や樹の声を聞いてみるとよかよ。本にも書いていない事いろいろ教えてくれるとよ、ね！」

躑躅

「フフフ、そうですね！」

「クツクツクツ、予想以上の才能の持ち主じゃな、越水七槻……総帥の言う通り、早めに始末した方がよさそうじゃな……」

パチン！

シューウウウウウ・・・

バサバサッ！

風蘭

「ウコン・・・ジンダイの言う通りの怪しいヤツだったわね・・・  
もしかしたら、アタシ達を裏切るかもしれないわ・・・よからぬ行  
動を起こされないように、しっかり見張っておかなくちゃ・・・」

ファイル338：江戸川コナンの苦悩の1日』1

ある日の米花町

この日、歩美は親友である東尾マリアの家に遊びに来ていた。

彼女達は屋根裏部屋に今いるのであるが、そこで歩美は異様な物を発見した。

季節外れも甚だしい雛人形である。

歩美

「ねえマリアちゃん、どうして今雛人形が出してあるの？」

マリア

「歩美ちゃん、無闇に触ったらアカンで。それはな、呪いの雛人形なんや。」

歩美

「呪い？」

マリア

「そや、その雛人形は下手に触ると呪いの封印が解けてまうんや。まあ、それだけやあらへんけどな。ホンマは早う処分したいんやけど、強力な力を持つ物やから捨てるのも難しいんや。」

歩美

「へエ・・・」

ちよつと胡散臭うさんくさいなあと感じながら、歩美はもう1つ気になる点を見つけた。

歩美

「どうしてお雛様が2つあるの？」

そう、なぜかお雛様が2つで、お内裏様がない。

マリア

「それはようわからへんのやけど、ただお雛様にも注意が必要なんや。」

歩美

「フーン・・・」

歩美はお雛様を取ってみる。

別段、普通の雛人形だ。

歩美

「呪いの雛人形ねえ・・・」

しかし、いじりまわしているうちに首が外れた。

ポキッ！！

歩美

「！！！！！！・・・あらっ？」

マリア

「あと、特にありえへん事やけど、絶対に首をもいだらアカンで。もしそうしてしまうと、封印が解けてまう。ウチら女には呪いはかからへんけど、この辺で一番の美少年に・・・恐るべき呪いがかかるからな!!!!」

キラ〜ン!!!

と、そこでマリアは歩美が持っているお雛様の首がもげているのに気づいた。

ジイイ・・・

マリア

「もう!!歩美ちゃんのドアホ〜ッ!!!!」

歩美

「ゴメ〜ン!!!!」

呪い、発動!!!?

同時刻・阿笠邸

コナン

「ったく・・・なんでオレが・・・」

コナンが愚痴<sup>グチ</sup>る。

刃

「文句言わないの。コナン君も阿笠博士にお世話になっているでしょ。」

ユリ

「そうよ。」

そう言うのは刃とユリだ。

今日は哀がにかけていて、コナンはヒマしていた。

そこで阿笠博士に会いに来たら、生憎博士は外出中。

そして、家の掃除をしていた剣野刃と金田一ユリの2人に付き合わせるハメになったのだ。

なんか悪い事の予兆じゃないといいのだが・・・

刃

「まあ、私としては町内で一番の美少年と名高いコナン君と一緒に掃除できて、うれしいけど。」

ユリ

「私も刃ちゃんと同じ事を考えていたわ。本当にコナン君かっこいいもん。」

誉<sup>ほ</sup>めているのか、煽<sup>おた</sup>てているのか・・・

と、その時・・・

カツ！！！！

コナン

「ん、なんだ？今の効果？」

ユリ

「さあ？作者のミスでしょ。」

コナンの言葉にそっけなくユリが言った。

コナン

「じゃあとりあえず、ボクは2階の窓拭いてくるね。」

キラキラキラキラ・・・

刃・ユリ

「うん、お願いね・・・え！！？」

2階へ行くコナンを見送ろうとした2人の目が点になる。

コナンがさつきとは全く違う格好をしていた。

その格好とは、頭に白いフリル付きのカチューシャを乗せ、エプロンドレスを着て、そして足には黒い小さな靴。

日本語でいうなら女中さんの服。

そして、今の流行の言葉ハヤリで言うなら、それは秋葉原で有名なメイド服であった。

一方のコナンは、そんな事を全く気にしていないらしく、2階へ上がっていった。

刃

「ユリちゃん・・・今、何か恐ろしいものが・・・」

ユリ

「ええ・・・ちょっと疲れているのかしら？」

刃も悪夢を見たような表情である。

2人は恐る恐る2階へ上がっていく。

さつき見た見た光景が夢であつてほしいと祈りながら・・・

そして、2人が見たのは・・・？

そこには、コナンがメイド服で窓拭きをしている姿があつた。

その姿を、影から見る2人。



ユリ

「どう思う、刃ちゃん。」

刃

「どづつて、そりゃ・・・」

一瞬言葉に詰まる刃。

刃

「コナン君の中で何かが目覚めたとか・・・」

ユリ

「まあ、似合っているから問題ないといえば問題ないんだけど・・・」

「

確かに違和感はない。

しかし、コナンが自分から女装するなんて、あまり考えたくない人である。

そこで、意を決して刃がコナンの本心を聞いてみる事にした。

刃

「アタシが聞いてみるから、ユリは下がってて。」

ユリ

「わかったわ。けど、私的にはアリだと言っておいて。私は受け止められるから・・・」

そう言くと、ユリは1階へ降りていった。

サツと後ろに近づくと刃。

刃

「コナン君？」

コナン

「何、刃ちゃん？」

手を止めコナンは振り返った。

ここでさりげなく核心をつく。

刃

「コナン君は・・・自分が人と違うな〜とか思った事ある？例えば、その・・・自分の趣味とか。」

コナンは人差し指を顎に当て考える。

コナン

「う〜ん、そうだね！。ボクはいたって普通だと思うけど。例えば人と違った趣味でも、自分が好きなら胸を張ってやるべきだと思うよ。」

コナンの台詞に、刃の心は暗くなる。

刃

「（すでにそんな・・・固い決意だなんて・・・！！）」

そんな彼女をよそに、コナンは続ける。

コナン

「自分のやっている事に自信を持って、堂々と生きるのが良いとボクは思うけど。刃ちゃんはどう？」

逆に質問される刃。

刃

「そ……そうね……その通りだと思うわ。」

刃は決めた、本音を言っておこうと。

刃

「まあ、アタシもユリも、多分哀ちゃん達も全然平気だから……その……コナン君がそういう服を着るのが趣味でも……その……」

コナン

「ハ？」

ようやく彼は刃の言っている事に気づいた。

どうやら彼女は、自分が着ている服の事を言っているようだ。

コナンは自分の体を見回し、さらに体を1回転させてみる。

見慣れぬ服、そしてフワッと広がるスカートに、ようやく異変に気づいた。

コナン

「ぬあああ！！な！！なんだ！！これはっ！！！！」

恥ずかしさのあまり、コナンの目には涙が。

そして、刃の方に振り向く。

コナン

「刃ちゃん！ど……どうしてボクにメイド服を！？ヒドいよぉ……」

どうやらコナンは、自分がメイド服を着ているのは刃がやった事だと勘違いしたらしい。

まあ以前の事を考えると否定しきれないのだが、もちろん今回は冤罪えんざいなので、刃もすぐに言い返した。

刃

「ア、アタシじゃないわよ！！アタシじゃ！！」

と、そこへ下へ降りたユリと共に、歩美とマリアが駆け込んで来た。

歩美

「うーん、遅かったようね……スゴ……」

マリア

「そやね。わ……」

予想以上の結果に啞然とする2人。

コナン

「歩美ちゃん！！それにマリアちゃんも！！」

そして、マリア達はコナンに事の説明をしだした。

コナン

「ハ？雛人形の呪い？」

マリア

「うん。昔々女装が好きな人形師がおったんや。そやけどその人形師は外見にコンプレックスを持つとったんや。それでどんどんジレンマが大きくなっていったんや。」

「ああ、どうしてワシはこんな体に生まれたんだ。」

マリア

「その人形師は腕がよくて、お殿様や家臣の家に雛人形を作って納めとったんやけど、ついにジレンマが抑えきれなくなったのか・・・」

「あ！気づいたらお内裏様に12単衣ひとえを！！」

マリア

「それがキモイっちゆうワサが城内で話題沸騰。運悪くちようどその人形師の横領事件とかも発覚してもうて、その人形師は斬首されてもうたんや。そやけど、最後の死に際になってもその人形師はなあ・・・」

「ああ・・・一度でいいから女の服を着たかった・・・！！」

マリア

「ほんで・・・その強い思いが、それ以来美少年を女装させる呪いになってもつたんや。」

コナン

「あんまり同情できる話じゃないね。特に横領って・・・」

コナンの率直な感想である。

マリア

「そやけど、そういう呪いに限って力が強いんや。」

それはコナン自身わかっていた。

なぜなら、なぜかこの服を脱ごうとしても脱げないからだ。

コナン

「でもなんでよりもよってメイド服なんだ？」

マリア

「そりゃたぶん、人形師の趣味やわ。」

そっけなく言うマリア。

マリア

「たぶん、コナン君に似合うと思ったんやろ。」

すると、それにうなづく人物が1人いた。

ユリだ。

ユリ

「確かにメガネっ娘のメイドさんはいいセンスしてるわね。さしずめ、チビエマってトコね。」

コナン

「(そんな事に感心してほしくないよ……)」

心の隅でボソツとつぶやくコナンであった。

マリア

「でも見惚れているばかりでは困るわ。呪いのかげられた日、つまり今日中に呪いを解かへんと……」

コナン

「解かないと……!?!?」

イヤな予感……

マリア

「一生女装が趣味の、男の子になってまうで。」

コナンの顔が蒼白になる。

コナン

「微妙な呪いだね。」

マリア

「そやな。」

と、ここでコナンは一番聞きたい事を聞いてみる。

コナン

「で、呪いを解く方法はあるの？この服脱げなくて……」

コナンに言われ、マリアも思い出した。

マリア

「ああ、それはな……その呪いのかかった人間、つまりコナン君の恋人を倒す事や。」

コナン

「……え!!?!?（それって、つまり……）」

歩美

「じゃあ、コナン君が哀ちゃんを倒すって事？」

マリア

「ま、そついうこつちな。」

歩美が言い、その言葉に、マリアが大きくうなづく。

コ哀のカップリングは既に公認なのだ。

コナンの心境は最悪であった。

何が悲しゅうてメイド服を着せられ、そして大好きな哀を倒さねばならないのだ。

刃

「それって、コナン君にとってはどつちに転んでもイヤな結果よね



？」

刃が、ズバリ真実を衝く。

マリア

「たぶん、職人の嫉妬か逆恨みか・・・それともイヤがらせか・・・やな。」

コナン

「（イヤがらせだ・・・絶対に！！）」

心の中でののしるコナン。

まあ確かに、コナンにとっては最悪のイヤがらせである。

ユリ

「まあ倒すって言うてもさあ、適当に戦って哀ちゃんにワザと負けてもらえばいいんじゃない？」

ユリが気の利いた事を言う。

しかし、悪い事は重なる。

マリア

「それなんやけど・・・実は、条件があるんや。」

コナン

「条件？」

また一体どんな条件がついているのか、コナンは不安になる。

マリア

「その対決を、お祭りのある所でやらなアカンのや。」

コナン

「何それ!？」

訳がわからない。

コナンには全く理解できない。

その考えに答えたのは刃である。

刃

「大衆に醜態を見せるって魂胆じゃないかな？」

大いにあり得る事だ。

歩美

「今日お祭りやってる所は・・・あ、確か帝丹小学校の運動場で、町内会の振興祭りがある。」

歩美が思い出して言った。

コナン

「ええ!!！」

町内のお祭りとなると、つまり知人も一杯来そうだ。

コナン

「（そ、そんな・・・人がいっぱい集まるような場所に、この格好で・・・!?!）」

考えるだけで悪夢である。

そして、考えすぎたのかコナンは倒れてしまった。

ドサツ・・・

刃・ユリ・歩美・マリア

「コ、コナン君!！」

4人が近づいて声を掛けるが、コナンは完全に失神している。

彼をマリアと歩美が急いでベットへ運んだ。

残った刃とユリは善後策を考える。

ユリ

「やっぱ、刺激が強すぎたのかなあ?」

刃

「とにかく、このままじゃマズいわ。コナン君の将来に関わるわ。とにかく哀ちゃんに適当に対決してもらって、ワザと負けてもらっしかないわね。」

ユリ

「けど哀ちゃん、どこへ行ってるのかしら? 私行き先聞いてないし・・・」

刃

「歩美ちゃんとマリアちゃんにも聞いてみよう。とにかく急がないと・・・」

ユリ

「そうね。」

彼女達は行動に移った。

その哀はというと・・・

公園にいた。

哀

「ハアアアア・・・」

深いため息をつく哀。

何やら、悩み事があるらしい。

「あれ？哀ちゃんじゃないですか。」

哀

「え!？」

声をした方に振り向くと、そこには・・・

哀

「あ、瑛祐さん。」

そこにいたのは、本堂瑛祐であった。

瑛祐

「どうしたんです。そんな思いつめた顔しちゃって。何か悩みでもあるのですか？」

そう、哀には今悩みがあった。

それは、四六時中コナンの顔が頭に浮かんでしまふ事である。

事に、夢の中には毎日のように登場するのだ。

もちろん、彼女自身彼とは相思相愛だと思っているし、周りのみんなも2人の仲を認めている。

これ以上求めるものはないはずなのに、なぜ彼の事ばかりに頭が働くのだろうか。

それが彼女の悩みであった。

それを彼にしゃべろうか迷ったが、何かしらアドバイスをもらえるかもしれないし、それに彼なら下手に口外する事もないだろう。

というワケで、彼に全て話してみた。

瑛祐

「（この子は本当にコナン君・・・イヤ、新一君の事を想っているんだな。）」

瑛祐はすぐに、哀の悩みが恋愛感情にある事がわかった。

もちろん、今までも2人の仲が深かった事は彼も知っている。

しかし、哀自身の気持ちが今までのものだけでは事足りなくなっているのだろう。

ただ彼自身ストレートに言うより、彼女自身が気づいた方が良かった。

瑛祐

「人が一生にできる事はそう多くないですから、悩むより行動する方が良いと思いますよ。それでも何を悩んでいるのかさえわからない時は、目を閉じて考えてみると良いでしょう。自分の心に素直になれば、なすべき事は見えてくるはずですよ。」

哀

「・・・（自分の心に・・・素直になれば・・・）」

しばらく哀は考え込む。

そして・・・

ファイル339：江戸川コナンの苦悩の1日』2

コナン

「とにかく！いつまでもこんな格好してるワケにはいかないから・  
早く元に戻るようがんばるよ。」

歩美

「ん〜、でもね〜・・・」

コナン

「で・・・でも何？」

歩美

「ビックリするほど似合ってるんだから・・・ムリしなくてもいい  
んじゃないの？」

確かに、コナンが着ているメイド服はキラキラと輝いているが・・・

キラキラキラキラ・・・

コナン

「い・・・いいワケないじゃないかぁ！こんなの・・・！」

歩美

「でも意外と好評だし・・・」

マリア

「・・・」

刃・ユリ

「まあ・・・」

コナン

「刃ちゃん達まで同意しないでよお!!」

歩美

「それに・・・さつきから私、1つ疑問なんだけど・・・」

コナン

「な・・・何？」

歩美

「コナン君・・・スカートの下はどうなってるの？」

ドキッとするコナン。

コナン

「な・・・何が言いたいの？」

歩美

「イヤ・・・だからホラ。」

ジリジリとコナンに近づく歩美。

歩美

「ね・・・ちょっとでいいから。」

コナン

「わー!!わー!!わー!!何やってんだよ!!そんな事・・・したら・・・」



・ボクは・・・ボクは・・・」

泣きながらハ〜ハ〜と言うコナン。

歩美

「ゴメンゴメン、私が悪かった。」

歩美はコナンに謝った。

歩美

「ま、これは私のせいだし手伝わせてもらっわ。ね？マリアちゃん。」

「

マリア

「ああ、哀ちゃんにはウチが説明しとくわ。」

コナン

「ほ・・・本当によろしくお願いね。」

バタン！

コナン

「とまあ、こんなワケで。」

刃

「ハハア、なるほど。つまりこれはコナン君の趣味ではなく、女装したかった人形師の呪いで・・・」

ユリ

「今日中にお祭りがある場所で哀ちゃんを倒す・・・そうしないと

一生、女装の呪いが解けないと・・・要するにそついう事ね?」

コナン

「うん、一言で説明するとそんな感じだよ。」

刃

「まあ、とにかく事情は把握したけど・・・」

コナン

「けど?」

ユリ

「そんな非科学的な言い訳考えなくても・・・」

刃

「女装がしたいならしたいと言ってくれれば・・・アタシ達はその・・・」

コナン

「・・・」

刃・ユリ

「呪いだの何だの、そんなわざわざ歩美ちゃん達と口裏を合わせてまで・・・」

コナン

「イヤイヤ全然わかってないよ刃ちゃんユリちゃん!!」

刃・ユリ

「ま、疲れてる時は気分転換も・・・ね」

コナン

「（『ね』じゃなくてっっ！！イ！！イカン！！これで今夜哀が負けてくれなかったら、オレは一生刃ちゃんとユリちゃんに・・・！！イヤ大丈夫！！哀なら哀なら、きつとわかってくれるハズだ！！きつと哀はワザと負けてくれるハズ・・・）」

哀

「自分の心に素直になれば・・・この心のモヤモヤの原因がわかるの？」

瑛祐

「ええ。すべての迷いを取り去れば、自ずと見えてくるはずですよ。自分の心が・・・本当に望むものが・・・」

哀

「（自分の心が望むもの・・・私の心が・・・本当に望むものは・・・）」

その瞬間、哀の瞳が大きく見開かれる。

哀

「！！！！わかったわ。」

瑛祐

「わかったんですね。」

哀

「どうして……今までこんな簡単な想いに気づかなかったのかしら……」

瑛祐

「人は……自分の素直な気持ちを認めるのが中々難しいものです。しかし……それが恋心という……」

そこまで言った時、哀が衝撃の一言を言った。

哀

「決着がついていないからよ。」

瑛祐

「……決着？」

瑛祐の声が怪訝けげんなものになる。

哀

「そう。じつはこの間マラソン大会があったんだけど、その時コナ君と1対1の勝負をしたの……あのうやむやに終わった勝負の決着……あの決着がついていないから、きつと私はモヤモヤしてたんだわ!!」

瑛祐はと言おうか迷ったが、とにかく一言。

瑛祐

「……斬新な結論ですね。」

哀

「そっかそっか。おかしいと思ったのよね。勝ち逃げされたみたいになってるから、悶々としてたのね。うん。」

何度も頷く。

すると、そこへマリアがやって来た。

マリア

「あ、おったおった。」

哀

「あら、マリアちゃん？」

マリア

「探したんやで。あの、コナン君から手紙が……」

マリアが手紙を差し出す。

哀

「何？手紙？」

哀は手紙を受け取る。

マリア

「うん、本人は直接話せへんから、要点だけ文章にしたで。」

哀

「へえ、どれどれ……」

そして手紙を広げてみる。

手紙の内容は・・・

『今日夜9時

帝丹小学校屋上にて待つ

勝負してください

(武器持参)

勝つのはコナン君』

哀

「・・・」

マリア

「えっと・・・その・・・詳しくは現地で・・・」

一通り読むと、哀はマリアに手紙を返す。

哀

「なるほど、果たし状ね。」

マリア

「え？あれ？」

マリアは哀の意外な反応に何度も文面を読み返す。

哀

「さすが私の愛する人。こっちの心はすでにお見通しだったとは・・・  
やはりできるわね。」

マリア

「え？イヤ・・・そうやなくて・・・」

マリアは哀の誤解を解こうとするが、哀は聞く耳を持たない。

哀

「でも勝つのは私よ！！お互い正々堂々と戦いましょう！！」

マリア

「あ・・・イヤ・・・負けてもらわんと・・・その・・・困る・・・」

マリアがオロオロしながら言う。

その光景を瑛祐がもうどうしようもないといった眼差しで見つめる。

瑛祐

「本心に気づくのも伝えるのも、なかなか難しいですね。」

そして夜、帝丹小学校。

コナン

「うーん。これはかなりの規模だな。」

5連休の真ん中であるせいか、祭りの規模は結構大きい。

運動場中に出店が出ていて、体育館でも出し物が行われている。

コナン

「この中を誰にも見られずに校舎に入るのは至難の業だな。」

コナンが予想以上の規模の祭りを見ながら言う。

歩美

「けど何なの？その格好は・・・」

横に立っている歩美がコナンを見る。

コナンは今メイド服を着ているのを隠すために、頭から体全体をスツポリ覆うマントを被っているのだ。

コナン

「放つといてよ・・・」

たくま

「ところで、マリアは？オレ、マリアに呼ばれて来たんだけど・・・」

「

歩美

「ええ、一緒に来てたんだけど・・・1行も一緒にいる間もなく迷子になったわ。」

コナン

「凄まじい方向音痴ぶりだね。それよりも、刃ちゃんとユリちゃんはどこ行ったの？」



歩美

「あの2人なら、なんか哀ちゃんを足止めするとか言ってたわよ。まあ、コナン君も感謝するのね。」

コナンとしては、決して哀にこの格好を見られたくはない。

だから、屋上での勝負も、哀が上がって来たら即効麻酔銃で眠らせようという、半ばだまし討ちを考えていた。

それを知っての歩美の発言である。

コナン

「はいはい、感謝するよ。ま、とにかくここを突破しないとオレの明日がないから・・・誰にも見つからずに校舎内に・・・」

その時、コナンの真後ろに誰かが現れた。

「何してるのコナン君」

ドキッ!!

コナン

「!!ふ、風月ちゃん!?!」

そこにいたのは風月であった。

風月

「あれ?何そのコート。何かのコスプレ?」

コナン

「な、何でもないよ！ー隠し事とかは何もないから！ー」

風月

「はへ？隠し事？」

コナン

「・・・あ・・・」

言うてはいけない事を言ってしまった。

風月

「・・・」

ピョコ！

その瞬間、コナンは風月の頭に猫耳が見えた気がした。

風月

「コナン君ダメよ こんな真夏にコートなんか着ちゃ・・・」

コナンに迫る風月。

コナン

「イヤ・・・まだ夏じゃないって・・・」

次の瞬間、コナンは猛然と走り出した。

風月

「その下どうなってんの見せて」

風月も全速力で追う。

コナン

「わー！！ダメだよー！！」

ピユーン！！

2人は行ってしまった。

歩美

「行っちゃったわね。」

たくま

「で？あの下どうなってんだ？」

その頃、帝丹小学校に1人の少年がやって来ていた。

「ここだったな・・・シエリーが通ってる学校は・・・」

セリフからわかると思うが、彼の名はジュネリック。

以前帝丹小学校に入り込み、哀を誘拐して自分の姉にしようとした少年である。

ジュネ

「どこを探してもいないなあ・・・どこにいるんだ！？シエリー！

「！」

ドカツッ！！

コナン

「キャー！！」

ドカツッ！！

ジユネ

「えー？あ！す．．．すみません．．．」

ポサツ．．．

コナン

「．．．痛い．．．」

ジユネ

「（な．．．なんてカワイイ女の子だ．．．）おおおおお、お名前は何て言うんだお嬢ちゃん！！」

コナン

「へ？な！！名前？へ！？な．．．名前は江戸川コ．．．！！コ．．．  
．！！あ、イヤー！！」

ジユネ

「江戸川コ？コ？何！？？」

コナン

「だからその、あ．．．あっと．．．！！え．．．え．．．江戸川

コーラルリーフです。」

ジュネ

「妖怪退治屋みたいな名前だね。」

そして江戸川コーラルリーフの苦惱は続く。

ファイル340：江戸川コナンの苦悩の1日』3

ピシッ！

歩美

「あ！当たった！！当たったわオジサン！！」

「ハハッ、上手じゃねえかお嬢ちゃん。」

歩美

「やっぱり？私、何やらせても天才なのよ。」

「んじゃ、カワイイお嬢ちゃんにサービスだ。」

歩美

「うわー、ありがとうオジサン。ヘッヘ、見て見てたくま君。オマケしてもらったわ。私がカワイイから。私がカワイイからオマケ。」

「

たくま

「そこを強調するな。ところで、コナン君は探さなくていいのかわ？」

歩美

「ん、光彦君と暁君にも探してもらってるけど、お祭りだからやたら人いるしね。」

たくま

「それよりも歩美ちゃん、綿菓子食べたくないか？綿菓子。オレが

おごってやるよ。」

歩美

「本当に？欲しい欲しい！！」

たくま

「後、あつちで金魚掬いしたくないか？金魚掬い。おごってやるよ。」

「

歩美

「何？何？たくま君、今日は随分太っ腹ねえ〜！」

そんな風にたくまと歩美がお祭りを満喫している頃、江戸川コナン

(女装中)は……

ジュネ

「イヤ、しかし……コーラルリーフさんにケガがなくてよかった。」

「

コナン

「あ……ハア……そうですか？」

相変わらず何の疑いもなく、女の子だと勘違いされていた。

コナン

「(イカン……まさかこの姿をジュネに見られるとは……って

いつか、どうしてジユネがここにいるんだろう？まあ幸い、女の子だと思われているからいいけど・・・男の子だとバレたら・・・」  
女装して夜な夜な学校に来る変態少年と・・・

コナン

「・・・(ダメだ!!そんな勘違いを許すワケにはいかない!!探偵として!!哀の彼氏として!!ここは無難に乗り切らない!!!とにかく、一刻も早くここを離れよ・・・)」

そう思うと、コナンは走り出していた。

ジユネ

「あ、そうだコーラルリーフさん。何かお祭りみたいだから、一緒に踊りませんか？」

しかし、すでにコナンはいなかった。

ジユネ

「あれ？コーラルリーフさんどこに行ったんだろ？仕方ない、とりあえずシェリーを探るか・・・」

哀

「どうして私が!?!」

ところ変わって体育館。



騒いでいるのは哀である。

刃

「もう登録しちゃったんだから逃げられないわよ。」

刃が不適に笑いながら言う。

今ここにいるのは哀と刃にユリ、そして風月の3人である。

哀はサツサと校舎に入りたかったのに、3人によって足止めを喰らってしまった。

で、今体育館にいる理由は、3人はただ足止めするだけでは逃げられると思ったのか、なんと勝手に体育館で行われていたコスプレカラオケ大会に出場登録していたのである。

ユリ

「多くの市民の皆さんがお待ちかねよ。今話題の美少女名探偵の歌を聞きたいってね。」

哀

「うっうう……」

ユリの言葉に言いくるめられてしまう。

「さっ！っ！って事で、2秒で着替えもすんだとところで！っ！」

いきなり司会の声が入り、スポットライトが点く。

哀

「ハ!？」

哀は自分の姿をしてみる。

まるでアイドルのようなきらびやかでフリフリな服を着せられていた。

哀

「ちょ!?!今どうやって着替えさせられたの私!?!ってか、ここどこ?!」

正解は、刃達が応援に呼んだ遠蘭鈴の仕業です。

「では歌っていただきましょう!?!歌は高橋洋子で『残酷な天使のテーゼ』!?!」

哀

「ええ!?!」

ワァアという大声援と共に曲が流れ始めた。

哀

「イヤイヤちょっと待ってよ!?!私、歌なんて……!?!」

「それでは歌って戴きましょう。」

有無を言わさず始められた。

もう無理だ。

哀はうる覚えの歌を歌い始めた。

そして、見事歌を歌いきった。

場内は大喝采である。

ユリ

「さすが哀ちゃん、空気の読める娘ね。」

刃

「あの状況で、うる覚えの歌を熱唱できるとはね。」

しかし、哀は3人の思わぬ事を口走った。

哀

「それではお次は刃ちゃん、ユリちゃん、風月ちゃん達美少女3人娘による・・・『時をかける少女』!!!」

逆襲。

風月

「はひ!？」

ユリ

「ほえ!？」

刃

「ええ!？」

3人の顔からサーツと血が引いた。

哀

「全く、あの3人ときたら・・・」

哀は忌々（いまいま）しげに、今ステージ上で『時をかける少女』を熱唱している3人の美少女、刃、ユリ、風月を見つめる。

哀

「早くコナン君と会いたかったのに、余計な事を・・・」

歌を歌わされたせいで余計な時間を喰ってしまった。

哀

「まあいいわ。さてと、早く行こう。」

着替えを終え、歌を歌う3人を横目に見ながら、彼女は足早に体育館から出た。

一方、ステージ上の3人は・・・

ユリ

「（ああ、哀ちゃんが逃げる！！）」

風月

「（ちょっと刃ちゃん、何とかしてよ！！）」

刃

「（そんなの無理に決まってるでしょ！！）」

今何か、テレパシーを使っていた気が・・・

ま、それは置いて・・・

3人は哀が出て行くのを見ているしかなかった。

そりゃ歌を途中で止めるワケにはいかないからだ。

そんな事したら町内の皆さんを確実に敵に回す。

ちなみに3人とも、哀と同じようなステージ衣装を着てノリノリで歌っている。

この数分後、彼女らはなんとか歌い終わるが、観客達に足止めされ、哀をすぐに追う事が出来なかった。

体育館を出た哀はなるべく人混みを避け、校舎に向かっていた。

哀

「（早く行かないと！）」

はやる気持ちを抑えながら、哀は校舎へ向けて進んでいく。

しかし、焦った事が彼女から警戒心を奪ってしまった。  
後ろからそっと近づいてくる影に気づけなかったのだ。

哀

「（もう少し・・・）」

そう思った次の瞬間・・・

哀は口と鼻を布で覆われた。

そして、その布が何かで濡らされているのがわかった。

哀

「うっ！！!?」

すぐにその液体はクロロホルムだとわかった。

だが、わかった時にはすでに手遅れだった。

哀

「うっ・・・」

もはや体の自由は利かず、そして彼女の意識は闇の中へと落ちてしまった。

しばらくして、哀は意識を取り戻した。

哀

「ここは!？」

周りを見てすぐにわかった。

校舎裏の器具庫だ。

体を動かそうとするが、力が入らない。

「ムダだよ。特製の痺れ薬しびを打っておいたからね。」

聞き慣れない声。

イヤ、ちょっとだけ記憶に引っかかる声。

哀がそつちに顔を向けると、彼女の前に見知らぬ男が立っていた。

哀

「あ、あなたはジュネ……!!」

そこに立っていたのは、かつて帝丹小学校に潜入し、哀を誘拐しようとしたジュネリック……

通称ジュネであった。

ジュネ

「久しぶりだね、シエリー。」

哀

「あなた、記憶を失ったんじゃないの!？」

そう、彼は自身で作った記憶を操る薬で記憶を失ったはずだ。

だが、彼は今ハッキリ『シエリー』と言った。

ジユネ

「確かに、ボクは一度記憶を失ったよ。けど奇跡が起きたのさ。こないだ階段から転げ落ちたら記憶を思い出したのさ。」

哀

「(そんな奇跡起きなきゃいいのに!!)」

本気でそう思う哀であった。

哀

「で、私をどうする気?」

大方予想はつくが、一応聞いてみる。

ジユネ

「そんなの決まってるさ。今度こそ君の記憶を操作して、ボクのお姉さんになってもらうんだよ。」

やっぱり。

ようは洗脳である。



そんなの、哀にとっては迷惑千万である。

だが、今回はあまり怖くはない。

ジユネ

「まあ、祭りが終わって人がいなくなるまではここで待たなきゃいけないけど。」

哀

「あら、そんな余裕はないでしょ。すぐにコナン君が助けに来てくれるハズよ。」

そう、彼女には信頼できる、愛すべきホームズがいる。

だから恐怖なんて微塵もない。

だが、ジユネは首をかしげながらこう言った。

ジユネ

「コナン？・・・誰だっけ？」

哀

「あら！！」

ズッコケそうになる哀。

どうやらコナンについては思い出せなかったらしい。

なんとも中途半端な奇跡だ。

哀

「まあ、覚えてないならいいわ。彼がスゴイとだけ言っておくわ。」

ジユネ

「スゴイ・・・スゴイって、まさか夜の首都高を、屋形車引いた自  
転車で80キロの法定速度ギリギリを守って走れるとか？あ！それ  
とも・・・300キロの虎を首投げしたり、女装させられたり、ヤ  
クザを蹴散らしたり、巨大ロボットを必殺技でぶっ壊したり・・・」

再び哀はズツコケそうになる。

確かに、コナンは何度か女装させられた事はあるにはあったが・・・

哀

「コナン君を『ハヤテのごとく！』の綾崎ハヤテ君と同じにしない  
でよ！・・・っていうか、あなたがサンデーを読んでいるとは意外だわ。」

「

ジユネ

「そりゃあ、ボクだって今は小学生だからね。ちなみにサンデーを  
読んだんじゃなくて、アニメを先に見てみて知ったんだよ。」

哀

「・・・」

ジユネ

「まあとりあえず、君が逃げないようにしておかないとね。」

そう言うと、ジユネは哀に近づいていった。

哀

「あ……キヤッツ……!!」

## ファイル341：江戸川コナンの苦悩の1日『4』

哀が捕まったその頃、コナンは校舎の隅にいた。

ようやくジュネから離れたが、息も絶え絶えだ。

コナン

「まずったな・・・でもどうにかジュネから離れる事ができたし・・・これで・・・よかつ・・・」

そこまで言った時、コナンは絶句してしまった。

自分の着ていた服が変わっていたのだ。

もちろん元に戻ったワケではない。

イヤ、むしろ悪化していると言つてよかつた。

スカートはミニになり、さらにカチューシャはウサ耳が付き、また胸元のリボンは大きくなり、そこに鈴がついている。

コナン

「うわああ!!な!!な!!何だこれ!!さらに恥ずかしい服になつて・・・!!なつてるけど・・・!!」

まるで世界コスプレサミットに出るような服だ。

イヤ、それよりも悪趣味かもしれない。

コナン

「(ど……どうしよう……服を隠すマントもなくしちゃったし……こんな……ミニスカなんて……) どうすれば……」

その時、コナンは目の前に浮いている変な人形に気づいた。

しかも、息を荒くしている。

その気持ち悪さに、コナンはその人形にカカト落としを喰らわせた。

ゴスツッ!!

コナン

「な!! 何なんですか!! あなたはいったい誰ですか!？」

シュウウ……

ピクピク……

「この時代のヤツは、カカト落としを決めてから人に名前を聞くのか?」

コナン

「え?(どどういう事?)」

「まあいい、知らぬなら教えてやるう。辛抱たまらず出てきてしもうたがワシこそが!! オマエに散々女装させている雛人形の呪い!! 人形師のゼペッドじゃ!!」

なんとコナンに女装させている張本人であった。

と、そこでコナンはある事に気がついた。

コナン

「つまり、あなたを絞め殺せばこのバカな呪いも解けると・・・」

コナンの手がゼペットの首に迫る。

ゼペット

「ぬおおお、待て待てー!!」

その時、携帯が鳴った。

ゼペット

「ほれ、電話じゃ！電話が鳴っておるぞー!!」

ピッ！

コナン

「はい、もしもし・・・え！？哀が消えた!？」

電話は刃からだった。

刃

「そうなの、3人で探したんだけどどこにもいなくて・・・コナン君追跡メガネ持つてるでしょ？それで哀ちゃんを探して。あの子確か、探偵団バッジを持つてるはずだから。」

コナン

「わかった。」

コナンは電話を切ると、追跡メガネの電源を入れた。

ピッ！

すぐにバッジの反応が出た。

コナン

「出た！ここは・・・運動場の隅の器具庫だ。ここからならお祭り会場を抜ければすぐだな。よし、待ってる哀！！」

コナンは立ち上がった。

しかし、そこへゼペッドが話し掛けた。

ゼペッド

「その格好でか？」

コナン

「！！！」

ゼペッド

「さっきのケリ超痛かったしー、もっと恥ずかしい格好もいいかもな。人目を避けて回り道した方がいいんじゃないの？」

これでは脅迫だ。

コナンはちょっと考え込んだが、すぐに強い意志を込めてこう言った。

コナン

「・・・ゼペッドさん・・・これは呪いではなく天罰なんです。」

ゼペッド

「ハ？」

思いがけないコナンの言葉に思わずそう言った。

コナン

「よく考えたら最近のボクは、あの子の事をしっかり見てなかった。だから哀が危険な目に。だから一番恥ずかしいのはこの服じゃなくて、ボクの心！！！！例えばどんな服を着ていても・・・ボクはあの子の彼氏だ！！！」

コナンは走り出した。

お祭り会場にはたくさんの人がいた。

その好奇の視線が彼に突き刺さったが、そんなものにはもうかまわず、彼はひたすら走った。

愛する女性を助けるために。

ちなみに、その通過途中には歩美とたくまや、光彦と暁もいた。

ただ、誰もコナンだとは気づかなかったため、そのカワイらしさに



思わず見惚れていた。

そして、器具庫に着くと、すぐにその重い扉を開けた。

コナン

「哀!!」

返事はない。

その代わりに1人の少年が近づいてくるのが見えた。

コナンには彼がすぐに誰だかわかった。

さっきのジユネだ。

だが、対照的にジユネはキョトンとしている。

ジユネ

「えっと、君は誰？コナンってのは男の子のハズだから・・・」

それがその少年、ジユネがコナンに放った言葉であった。

コナン

「え!？」

コナンは気づいていなかったが、いつのまにかメガネを落としてし

まっていた。

だから、今は素顔が見えている。

なるほど、コナンの素顔は中々の美形だから服装が女の子の物を着ているせいで女の子に見えてもおかしくない。

コナン

「(しまった。けどここで男の子って言うのも嫌だな・・・)」

さっきの決意はどうした？

しかたないので、ここは女の子のフリをしようと思った。

コナン

「わ、私は・・・江戸川コーラルリーフよ・・・」

おいおい。

そりゃあ偽名で言った方がいいからってねえ。

ちなみにコナンが偽名を言ったのは、似た様なシーンをサンデーの漫画で読んだのを思い出したからだ。

ジユネ

「ああ、さっきの子じゃないか。やっぱり妖怪退治屋みたいな名前だね・・・けど、君カワイイね。」

コナン

「え!?!」

ジュネはコナンの方に歩み寄った。

コナン

「え!？」

ジュネの言葉にとまどうコナン。

ジュネ

「ボクの彼女にならない？」

コナン

「ハア!？き・・・あなた哀ちゃんが目的じゃなかったの？」

ジュネ

「イヤ、シェリーはお姉さんとして来てもらって、君には恋人として。」

その言葉にコナンはカチンときた。

コナン

「ア・・・アンタみたいな・・・」

ジュネ

「え?？」

コナン

「アンタみたいなヤツに哀ちゃんをやれるかあ!!!!!」

ついに女言葉のままブチギレた。

そして連発式に改造された麻醉銃を、もうそれはくどいほど撃ち込んだ。

もちろん、1発でも十分な麻醉銃を何発も喰らってタダで済むはずがない。

ジュネは即効で眠ってしまった。

コナン

「永遠に眠りなさい!!!」

おいおい、それ探偵が言うセリフか？

コナン

「まあ、いいや。哀を探さないと。あ、けどな・・・」

やっぱり恥ずかしい。

コナンが困っているところへ、刃達が到着した。

まさに地獄に仏。

コナンは刃に後を託すと、その場を離れ、再び人気のない場所に。

コナン

「ふう。疲れた。」

その場に座り込むコナン。

その途端、気づいた。

コナン

「あれ、服が元に戻っている。」

ゼペッド

「フツ、オマエなかなかやるな。」

コナンの後ろから声がした。

コナン

「ゼ、ゼペッドさん。」

あの人形師だ。

コナン

「どうして？ボクはまだ呪いを解く条件を満たしていないのに・・・

」

ゼペッド

「フン。オマエはあんな恥ずかしい格好をさせられながら、愛する女を助けるために衆人環視の中でも走り切ったじゃないか。今さらオマエに女装させておいたところで、何の価値もないわい。」

コナン

「・・・」

ゼペッド

「それに、午前中一杯オマエの恥ずかしがる顔や困った顔を見て気が晴れたわい。今回はこれで十分だ。というワケでワシは再び眠りに付く事にする。じゃあ、あばよ。」

その途端、ゼペッドは消え去っていた。

コナン

「ったく。まあいいや。これでめでたしめでたしだよ。さて、帰ろう。」

こうしてコナンの女装騒動は終わったのであるが、実はまだ終わってない事もあった。

誘拐された哀は、ジユネとしばらくしゃべっていたが、その後口を塞がれ、さらに再び眠らされてしまった。

そのため哀が目覚めたのは刃に起こされたからであった。

刃

「……い……哀ちゃん。」

刃の声が聞こえる。

哀

「……え！刃ちゃん。あ、そういえば私ジユネに眠らされて……」

ジユネは？事件は？」

刃

「大丈夫、コナン君が解決してくれたわ。けどコナン君はすぐに出て行っちゃって。全くどこ行っちゃったのかしら。」

刃が言った。

事件解決にホツとすると共に、なぜコナンは出て行ってしまったのか？

そこで哀は思い出した。

哀

「刃ちゃん、今何時？」

刃

「え！？午後8時50分だけど。」

確か約束は9時のハズ。

哀

「いけない、私行がなくちゃ！」

彼女は昼間の手紙の事を思い出したのだ。

哀は夕方から考えている事があった。

それは今回の手紙は遠回しに2人きりになろうという事ではないのかと。

というワケで、哀は校舎に全速で向かうのであった。

2時間後

コナンは布団に入っていた。

コナン

「まったく、今日はとんでもない1日だった。早く寝よ。」

しかし、彼には何か引つかかるものが。

コナン

「でも・・・何かこう・・・忘れてる事が・・・」

今日の記憶を辿ってみる。

すると、あった。

コナン

「・・・ある!?!?!」

そういえば哀がまだ帰って来ていなかった。

時刻は既に11時。



コナン

「ヤバ！！」

彼はすぐに帝丹小学校へ向かった。

ファイル342：江戸川コナンの苦悩の1日』5

約束の時間は9時。

時刻は既に10時。

哀

「っていつか……どうして来ないのよ。」

コナンが送れた事により、哀の腕時計が死の危機に瀕<sup>ひん</sup>していた！！

哀

「10分前行動つて学校で習わなかったの？9時の約束したら8時50分には来るのが常識でしょ！！ねえ！！聞いてる！？」

そう言われましても。

哀

「も〜！！来るならサッサと来なさいよバカ〜ッ！！」

この時点で彼女の怒りはピークに達していた。

が、さらに1時間後。

ちよつと寂しくなってきた。

哀

「何よ……もあ……もしかして本当に来ないつもり……？」

そんな事を言い始めた。

哀

「ハア、失敗したなあ。今日携帯家に置いてきちやっただし、コナ君に連絡取れない。．．．もしかして私、嫌われちゃったのかな？ま、よく考えたら会った瞬間から、あんまり女の子らしいカワイイところを見せてこなかったし．．．嫌われて当然かな．．．」

女の子らしいカワイイところなんて．．．

ありましたっけ？

彼女にはそんな声が聞こえた気がした。

哀

「！！なぜかしら？私今、この腕時計にもものすごい殺意がわいたんだけど．．．」

ヒイイ！！

何も．．．

何も言ってますんよ！！

『哀はオレを守る。』

ふとそんな言葉を思い出した。

哀

「何よ。あんな事言ったクセに．．．結局放つたらかしじゃない．

・・・!!どうせ私との約束なんか忘れて・・・」

そこから先の記憶が飛ぶ。

コナン

「あの・・・哀?」

ふと目を開けると、待ちわびた人の姿が。

哀

「へ?あ・・・コナン・・・君?へ?あれ?私いつの間寝ちゃって・・・!??っていうか・・・今は・・・11時半?」

コナンが作り笑いしている。

それでごまかそうとしているようだ。

しかし、その途端彼の頭上を木刀が襲った。

ヒュン!!

哀

「9時に来るって約束じゃなかったかしら?」

コナン

「ごめんなさいごめんなさい。」

ひたすら弁解するコナン。

哀

「まあ要するに、宮本武蔵気分ってワケよね？」

コナン

「へ？」

哀

「ワザと遅れて敵の油断を誘うっていう兵法……」

コナン

「イヤ、そうじゃなくて……えーとどう言っているやらなんだけど……ちょっと素で忘れていたというか……」

ピキー!!

その瞬間、哀の中で何かが切れた。

コナン

「あれ？あの……哀……？」

哀

「素で……忘れて……いた……？」

明らかに恨みのこもった声で言う哀。

そして彼女の体は怒りで震えていた。

コナン

「うん。ちょっと色々あってね・・・その、スゴく面倒くさい事に巻き込まれて・・・」

哀

「面倒くさい・・・？」

コナン

「ち、ちがうよ！！め！！面倒くさい事に巻き込まれたんだよ！！」

哀の怒りのメーターがグングン上昇していく。

哀

「勝負して欲しいんだっけ？武器・・・早く持った方がいいわよ？」

コナン

「イヤ・・・あの・・・勝負はもういいっていうか・・・あ、ボクの負けでいいから・・・」

哀

「あなたがよくても・・・私の気が収まらないのよ！！！！」

哀がついに切れた。

コナン

「わっ！！！！」

コナンの悲鳴が響き渡った。

所変わって、ここは東尾家。

そのソファーに瑛祐とマリアが座っていた。

瑛祐

「そういえばマリアちゃん。どうしてあの手紙武器持参なんだ？」

今回手紙を書いたマリアに瑛祐が聞いてみる。

マリア

「え！そやかて武器勝負やったら、相手の武器を落とせば簡単に決着がつくやないか。それにその・・・素手だとホラ・・・組んず解ほくれつというか、その・・・肉体的接触がその・・・」

瑛祐

「フーン。マリアちゃんって意外と・・・」

マリア

「い・・・！！意外と何や！？意外と・・・！」

何となく怪しい会話が続く。

瑛祐

「けど呪いも解けたようだし、あの2人が戦う事はもうなさそうだが・・・本気で戦うとどっちが勝つと思っ？」

瑛祐が何気なく聞いてみた。

マリア

「そやね、武器を使うとなれば多分哀ちゃんやね。」

瑛祐

「それは、好きな人相手だと戦いにくいからか？」

マリア

「それもあるけど、実はウチ小学校の昼休みに練習用に木刀を持ち込んでたんや。哀ちゃんはその隠し場所を知つとるから、十中八九それを使っていると思う。その木刀はウチが昔京都で手に入れた霊験あらかたな物なんよ。そしてそれは使う者の潜在能力を極限まで高めるんや。哀ちゃんも何回か練習につき合っ使っているから慣れてるハズや。そやから、哀ちゃんにはコナン君の動きが、全部見えているハズやで。」

哀

「たあ!！」

哀の一撃を何とかコナンは避ける。

伊達にサッカーをやってはいない。

しかしいつまで避けていられるかわかったものではない。

コナン



「ゴメン！！本当にゴメン！！」

何とかコナンは哀をなだめようとするが、哀は全く聞く耳を持たない。

マリア

「まあ、その分感情も高ぶりやすくなるんやけど・・・哀ちゃんはそれさえも完璧にコントロールできとったから大丈夫やろ。」

そこでマリアは一端話を打ち切り紅茶を一口飲む。

瑛祐

「何らかの拍子でできなくなったら？」

マリア

「コナン君が大ピンチになるやろうけど、まあ大丈夫やろ。」

瑛祐

「本当に大丈夫なのか？」

さらに念を押す瑛祐。

マリア

「もう大丈夫って言ってるやろ、信じなさい！」

そしてそのコナンはというと・・・

大ピンチだった。

哀

「まったく、ずいぶんうっかり者の探偵さんね!..!」

木刀の攻撃をなんとか避けるコナン。

しかし、それもいつまで続けられるか。

コナン

「い・・・いかん。このままではマズイ!..!ど・・・どうすれば・・・?  
」

麻酔銃は既に撃ちつくされていて、キック力増強シューズは履いてはいるが蹴る物がない。

ボール射出ベルトは故障中ときている。

もはや、絶体絶命か?

その時、頭に響く声。

「こんな時こそ必殺技じゃよ。ルーク・スカイウォーカー・・・」

声のした方を振り向くと、そこには得たいの知れない、何というか

ハムスターのような生き物が、着物を着て立っていた。

コナン

「って、あなた誰!？」

「ホレ、漫画的な心理描写で天使と悪魔みたいなものがあるじゃん？  
アレアレ。ワシ天使。もしくは必殺技の化身。」

そう言うと、持っていたヒマワリの種を食べ始めた。

コナン

「もう少しマシなデザインの天使はいなかったんですか？」

しかしコナンのその言葉もどこ吹く風とばかりに、その自称天使は話を続ける。

「細かい事は置いておいて……こんな時こそ必殺……Aダツシ  
ユアタックを使うのじゃ!！」

コナン

「イヤイヤ、何勝手な事言っているんですか？」

「合言葉はE……わかったのならばがんばるのじゃぞE……もう  
一個。」

そうしてまたヒマワリの種を食べ始めた。

コナン

「ってかアンタ、それ言いたかっただけでしょ!？」

「胸の大きさが戦力の決定的な差である事を教えてやるのじゃ!!」

コナン

「うわああ!!どさくさにまぎれて何言っているんですか!!」

というか、体が7歳レベルではハッキリ言って関係ない事だ。

と、その時。

哀

「ハアアア!!」

哀の掛け声とともに、必殺技の化身は木っ端微塵に消え去った。

コナン

「ああ!!天使!!」

哀

「勝負の最中に何をゴチャゴチャ言ってるのかしら?」

コナン

「ああ、何だかわからないけど必殺技も倒されて・・・!!本当にピンチだ!!」

そして、哀はとどめの一撃を加えようと構える。

哀

「だいたい今日約束したのはコナン君の方じゃない!!ここ数日、私が・・・どんな想いでいたかも知らないで!!」

ここで哀は気づいた。

哀

「(あれ?)」

コナン

「ゴメン!!ゴメン!!けど、本当に色々あって・・・」

哀

「色々あったからって・・・どうして・・・私との約束は・・・)  
ねえちょっと私・・・一体何を口走って・・・」

心の中で思っている事と、口に出ている事が違う。

哀

「そりゃ女の子らしくなくて・・・カワイくないかもしれないけど・・・!!!(感情が・・・抑えきれない・・・!!!)」

だが体が勝手に動いていく、そしてコナンに向かって竹刀を振り下ろした。

コナン

「ゴメン!!本当にゴメン!!」

コナンは自分に留めの一撃を加えられるのを覚悟した。

しかし、目をつぶったまま、いつまでたっても何も起こらない。

不審に思って目をあけると、そこにはポロポロ涙を流す哀の姿があった。

コナン

「つて・・・え？」

そして哀の手から木刀が落ちる。

哀

「私の一番大切な人なんだから・・・それくらい覚えておいてよ・・・  
・だいたい誘拐されても姿を見せなかつたし・・・」

コナン

「・・・ゴメン、哀。」

そしてコナンはそつと哀を抱きしめた。

その途端、何かが吹っ切れたのだろう、哀は鳴き始めた。

5分後

コナン

「落ち着いた？」

哀

「うん・・・」

哀が落ち着いたところで、コナンは今日起きた事を全て話す事にした。

恥ずかしくても、愛する人の前で隠し事はするべきではないと思っ  
たからだ。

そして、哀も全てを話した。

コナン

「そうだったんだ。ゴメンな哀。オレここの所自分の事ばっか考え  
て・・・オマエの気持ちをしっかり気づいてやれなくて。」

哀

「私だつて・・・欲張りすぎてたんだわ。そしてそれを無意識に認  
めたくなかったんだわ。今日誘拐されたのはその天罰だわ。自分に  
素直にならず、さらにそれを押し込めようとしたから。」

コナン

「イヤ、天罰なんかじゃねえよ。オレが悪かったんだ。ちゃんと哀  
の事を考えていれば、オレが側に付いていれば・・・」

そしてお互い黙り込んでしまう。

沈黙を破ったのはコナンだ。

コナン

「まあ、何だかんだいって哀が無事でよかったよ。それに、哀の素  
直な気持ちを聞いてよかった。」

そして、哀も立ち上がって言った。

哀

「私も、自分に素直になれて良かった。」

コナン

「フツ。じゃあ帰ろうか。」

哀

「そうね。帰りましょう。」

2人は手をつないだ。

哀

「あーあ、けどコナン君のメイド姿見たかったな。」

コナン

「な！それをもう言うな・・・それだったらオレだってオマエのステージ衣装と歌を見たかったぜ。」

哀

「もう！！・・・ウフフ。」

コナン

「うん？・・・ハハハ。」

緊張も解け、2人は笑い始めた。

想いが再び繋がる時・・・

それは自分自身が素直になる時かもしれない・・・



ちなみにこの数日後、商店街では哀や刃達3人組の歌と謎の美少女  
(コナンの女装した姿)が話題になったという。

## ファイル343：息抜き！？動画研究部！！（前書き）

オリジナルキャラクター・ファイル33

白野琴葉しんの ことば

美保の母親で、京都府警本部長。

犯罪者に恐れられているモノスゴい人で、美保と銀一に9段突きと7段突きを授けたのも彼女である。

美保には強いが、夫であるマシューには頭が上がらない。

美保とはあまり外見が変わらないが、見分ける手段は1つ。

髪型が『ハヤテのごとく！』のマリアの髪型と同じである事である。山王学園高等部を10歳で入学して13歳で卒業している事から考えて、美保と同じくIQは測定不能、またはそれ以上だと思われる。銀一の母親である瀬藤愛子とは幼なじみであり、実の姉妹のように仲が良い。

彼女とは山王学園時代の同級生でもあり、学生の頃はお互いに名前にはちゃん付けで呼び合っていた仲である。

16歳の時に1人娘の美保を授かっており、現年齢は34歳だが本人は『自分はまだまだ若い』と思っているらしい（事実、深雪達からは琴葉は20代に見えている）。

基本的に何でもお得意の完璧超人だが、主に台所に生息しているゴキブリだけは大の苦手。

毎回家の誰かに退治してもらわなければ、腰が抜けて動けなくなってしまう始末である。

ファイル343：息抜き！？動画研究部！！

山王学園高等部

キンコンカンコン……

「はい、答案後ろから集めてね。」

祐美

「やあ2人共、どうだったテストは？」

波香

「どづつ……て。」

泉

「ねえ……。」

波香

「とにかく赤点さえ、赤点さえとってなきゃいいのよ！……」

泉

「そうすれば、無事に3年生になれるんだから……。」

祐美

「まあ、少しぐらいバカな方がモテるらしいから……あんまり深刻にならないでおきなさい。」

波香

「！なんか、さっきから随分上からの物言いね・・・」

泉

「ま、まさかユミリン。」

祐美

「ウフフ・・・バレてしまっはしょうがない！そうよ！一昨日一晩中考えた結果！ジタバタ悩んでもムダ、という結論に達し、答えは全て4と記入してやったわ！！」

泉・波香

「！！！」

ガガーン！！

祐美

「ウフフフフ・・・おかげでテストは3分で終了。残り時間は爆睡していたので目覚めもスッキリ。しかも4択ならこれで30点はいただいた計算！まさに完璧！完璧な解答！！」

波香

「革命・・・革命だわ・・・テストの革命が起こったわ・・・！！」

泉

「まさに大富豪の連続革命だねナミちゃん！！」

祐美

「どうよ？私は自分の才能が怖い！怖いわっ！！」

銀一

「このテスト、マークシートだったっけ？」

美保

「っていうか、赤点って35点以下なんだけど・・・」

波香

「しかしまあ、無事に試験も終わった事だし・・・久しぶりに部活動でもやりましょうか？」

泉

「わっ、いいね」

銀一

「部活動やってたんだ、波香ちゃん達。」

波香

「興味がある？だったら少し寄って行けばどう？」

銀一

「あれ？あそこにいるの、コナン君と哀ちゃんじゃないか？」

美保

「あ、ホントだ。おっ、2人共！」

コナン・哀

「！」

タタタ・・・

コナン

「銀一君、美保ちゃん！その他諸々！」

哀

「こんにちはー！」

泉

「はい、こんにちはー」

美保

「2人共どうしてここに？」

コナン

「ちょっとエルさんに用があって・・・」

祐美

「そつだ、君達も我らが部活を少しのぞいてみないか？」

哀

「どつする、コナン君？」

コナン

「まだ余裕あるし、お言葉に甘えてみよっか。」

波香

「着いたわ。ここよ。」

コナン達の前には、不可思議な建物がそびえ立っていた。

コナン

「動画・・・研究部？何ですか？動画研究部って・・・っていうか、変わった建物ですね。」

波香

「読んで字の如く、動画を研究する部よ。建物は設立した人の趣味だそうよ。」

コナン

「わ、いろいろ機材がいっぱい。あ、これ18ミリ。これハイパー  
ハープカメラじゃないですか。あ、わかった。要するに映研ですね  
？映画研究会。」

祐美

「ハ？」

波香

「イヤイヤ、別に映画とかは撮らないし・・・」

泉

「ニヤハハ、そんな難しい事はできないよ・・・」

コナン

「?じゃあ何をするんですか?」

波香

「決まっている!動画研究部とは文字通り動画を研究する部!」

泉

「世界中の面白おかしな動画を、撮ったり集めたりしてみんなで爆笑!」

祐美

「それが動画研究部!!略してYouTobe!!」

コナン

「・・・略?要するにヒマつぶしですか?」

祐美

「誰がヒツマブシかー!!」

美保

「祐美ちゃん、それを言うならヒマつぶしよ・・・」

泉

「そついえば哀ちゃん、帝丹で部活には入ってるの?」



哀

「う、うん。月曜から水曜まではコナン君達とサッカー部やバスケット部に混ぜてもらってるけど、他の日は何も・・・」

祐美

「だったら木曜から土曜だけでも来てやってみないか？」

波香

「ウチは元々、カワイイ女の子の動画を撮る目的で作られたものスゴクヌルい部だからさ。」

泉

「思い出作りくらいにはなるよ？」

哀

「うん・・・どうしよっかなあ・・・」

コナン

「で、動画部って具体的にどんな動画を撮っているんですか？」

波香

「ん？まあ作品はその辺に適当に転がってるけど・・・」

コナン

「あ、じゃあちょっと観せてくださいよ！」

ポチッ！

パッ！

『江戸川コナンの苦悩の1日』より

『アタシ、江戸川えどがわ小波美コナミ!!!ちよっぴりお茶目な女の子』

コナン

「うああー!!」

ドカッ!!

波香

「あー!!せつかくの作品が!!」

コナン

「何隠し撮ってんですか!!!しかもアテレコまでして!!」

波香

「いいじゃないの!面白いし!!」

祐美

「ちなみにカメラは世界各国、各地にあるし、アタシ達はどこにでも撮りに行くわよ。サメやイルカの国の珍事を撮ったのも我々だ。」

コナン

「撮っちゃダメですよ!撮っちゃ!!」

波香

「ならば、こんなのはどっつ?」

コナン

「え?」

ピッ!

パッ!

『伊豆埋蔵金伝説』より

ユリ『／／／／／ちよ．．．！コナン君どこ触ってるのよ／／／／／』

コナン『え？オレ．．．どこ触ってた！？そっいえばなんか柔らかいような．．．』

ユリ『．．．オ．．．オ．．．』

コナン『．．．オ？』

ユリ『／／／／／オシリ．．．／／／／／』

コナン『／／／／／えっ！？／／／／／』

ユリ『コナン君．．．案外エツチなんだね．．．』

コナン『ち．．．ちがうよ！偶然だって！』

ユリ『どうだか．．．哀ちゃんのだって触ったりしてるんじゃないの？』

コナン『／／／／／うっ！／／／／／』

ユリ『私の．．．どう．．．？』

コナン『どう．．．って．．．？』

ユリ『．．．だから．．．哀ちゃんのオシリとどっちが魅力的？』

コナン『／／／／／そ．．．そんなの、少し触れただけじゃわからないよ！／／／／／』

ユリ『／／／／／じゃあもつと触ってみる？／／／／／』

コナン『え？いいのか！？じゃあお言葉に甘えて．．．』

ユリ『／／／／／ヒヤッ！！／／／／／』

コナン『／／／／／（し．．．幸せすぎる）／／／／／』

コナン

「うおおおおおー!」

ベキッ!!

波香

「あゝ・・・」

哀

「コナンくん・・・何なのよ今は・・・」

コナン

「ち、ちがうって!誤解だよ誤解!!っていつか、マトモな動画はないんですか?」

祐美

「うゝん・・・マトモねえ・・・」

波香

「一応撮影計画中にはあるけど・・・」

コナン

「そう!そういうのですよ!!!で、どんなヤツなんですか?」

波香

「スタッフロールNG集。ホラ、ジャッキーの映画ってあるじゃない?あれのスタッフロールってNGシーンが流れるじゃない。あれあれ。」

コナン

「本編は!？」

祐美

「ないさ、そんなもの!!それが撮れるなら映研をやっている!!」

銀一

「いばって言う事がよ・・・」

哀

「へへ、私あれ好きよ。」

コナン

「え？」

哀

「ホラ、やっぱりNGシーンのジャッキーってかっこいいじゃない。」

「

美保

「そうそう!生々しい感じもして、憧れてしまつわよね。」

コナン

「わかりました!!じゃあそのNGシーンとやらを今からボクと銀一君がやってみましょう!!」

泉

「ほえ!？」

祐美

「イヤ、でも・・・」

波香

「やるって……」

ヒヨオオオオオ……

波香

「まさか！迷宮なしの名探偵はあそこまでするのか!?!」

祐美

「こ……これは絶対に撮り逃せん!!」

泉

「イヤ……止めた方がいいんじゃない……?」

コナン・銀一

「では!!行きますよ皆さん!!!!」

ガッ!!

祐美

「い!行くのかジャッキー!!」

エル

「何してんの?」

祐美

「あ、エル。」

クルッ！

ヒュ〜・・・

エル

「こんな所で遊んでないで、試験も終わったんだから生徒会の手伝いをしなさい。」

泉

「え〜、少しは休みとかあってもいいんじゃないの？生徒会も。」

エル

「私はヒナちゃんみたいに甘くないのよ！まったく・・・美保も剣道部に顔出してよ。人手不足なんだから。」

美保

「うん・・・」

ドシャ！

エル

「ところで今、何か変な音しなかった？」

波香

「さあ、気のせいじゃない？」

こうして、コナンと銀一のジャッキーへの夢は終わった・・・

白野邸

琴葉

「え？美保、動画研究部にも入ったの？」

美保

「うん、コナン君と哀ちゃんも入ったのよ。」

銀一

「ってというか、琴葉さんご存知なんですか？」

琴葉

「ええ、まあ……あの部は元々、愛子が作ったのよ。その……貴重なカワイイ映像を合法的に撮って残しておきたいって……」

美保

「じゃあ部室漁ったら、面白い映像が出て来るかもね。」

琴葉

「ハハ……そうかもしれないわね……」



白野琴葉「や……ちょお愛ちゃん！こんなの撮っちゃアカンよお  
く……！」

瀬藤愛子「琴葉ちゃんの大事な成長の記録なんやから、気にしない  
気にしない」

琴葉「も〜！アカンってば〜！！！」

琴葉

「……全部回収したハズだけど……観られる前に……消さな  
くちゃ……」

インターネット社会で一度流出した動画を回収するのは大変なので、  
気をつけましょう。

ファイル344：…どうする、ユリ！？どうなる、元太！！？『1』

その日、金田一ユリは、とても上機嫌だった。

なぜなら今日は、恋人である小嶋元太と放課後にデートする約束をしているからだ。

ユリ

「  
」

ファミリアとの戦い以来久しぶりのデートなので、ユリはとても楽しみのようだ。

しかし、運命とは残酷なもの・・・

ユリに、最悪の運命が襲いかかろうとしていた・・・

それは、給食前の事。

元太がいつもよりも早く給食を食べ終えたのだ。

彼は早食いが得意なので、これは至っていつもの事なのである。

しかし、妙なのはそれだけではなかった。

元太

「小林先生・・・オレ、今日用事があるから早退していいか・・・

「？」

なんと、元太が早退すると言い出したのだ。

澄子

「ええ、いいわよ。」

そう言いながらも、なぜか澄子の表情は重い。

何か知っているようだ。

否、澄子だけではない。

コナン達も同じく重い表情をしていた。

ただ1人、ユリをのぞいて・・・

元太が帰った後、ユリはコナン達から元太が帰った理由を聞き、驚愕していた。

ユリ

「ええっ！？元太君がお見合いっ！！？」

ユリが驚くのも当たり前前であるが、コナン達だってできれば信じたくない事だった。

なえならユリと元太はすでに学校公認のカップルで、コナン達は皆2人はすでに婚約の約束もしているものと思っていたからだ。

ユリ

「どうして・・・？私、そんな事聞いてないよ・・・」

コナン

「ホラ、ユリちゃんこの前カゼ引いて休んでたじゃない？あの時に元太君がそういう話をしだしてさ・・・」

哀

「なんでも、酒屋さんを大きくするために大会社の令嬢とお見合いする事になったんだって・・・小嶋君自身は、『ユリちゃんがいるからお見合いなんかしたくない』って反対してたんだけど・・・」

ユリ

「そんな事聞いてるんじゃない！！！！」

ユリの怒鳴り声に、コナン達はビクツとなった。

ユリ

「どうして、それを私に言わなかったのよ・・・お見舞いに来るついでに言う事ぐらい、あなた達にもできるでしょう！？私達、仲間なんじゃなかったの!？」

風月

「そ、それは・・・」

ユリ

「言い訳なんか聞きたくない！！どうせみんな、私達の仲を知って

おきながら私を困らせたいでしょ！？あなた達がそんな子だったなんて、思わなかったわ！！」

暁

「ち、ちがつよー！！ユリちゃ・・・」

ユリ

「もういい・・・もうあなた達なんか、大っ嫌い！！！」

そう言つと、ユリはランドセルを取って教室から走り出した。

ダッ！！

真希

「ユリ・・・ちゃん・・・」

バン！！

ユリは勢いよく阿笠邸の入口のドアを開ける。

その音に気づき、阿笠がリビングから出て来た。

阿笠

「どつしたんじゃ、ユリ君？えらく早い・・・」

ユリ

「ゴメン、博士……今は私にかまわないで……」

そう言うと、ユリは自室がある2階へと上がって行った。

阿笠

「ユリ君……?」

ユリは自室に入ると、ランドセルをドアの前に置き、ベッドに突っ伏した。

ユリ

「私……また好きな人を諦めなきゃいけないの?イヤだ……イヤだよ……またあんな思いをするなんて……ねえ……私はどうしたらいいの?私の前の想い人、あやさきハヤテ綾崎颯君……」

そう言いながら、ユリは引き出しから出した少年の写真が貼ってあるお守りをギュッと握りしめて泣いていた……

ファイル345…どうする、ユリ！？どうなる、元太！！？『2』

ユリ

「私…また好きな人を諦めなきゃいけないの？イヤだ…イヤだよ…またあんな思いをするなんて…ねえ…私はどうしたらいいの？私の前の想い人、綾崎<sup>あやさき</sup>颯君…」

それは1年前…

まだ、綾崎颯が都立潮見高校に通っていた時の事である。

実はこの頃、ユリもごく普通の高校2年生として潮見高校に通っていたのだ…

回想…

1年前…

リリス「あの…一緒にお昼食べない？綾崎君。」  
ハヤテ「ええ、いいですよ。一緒に食べましょう。ヴィンヤード先輩。」

平凡ではあるが、持ち前の営業スマイルと優しさで学内でも人気だった綾崎颯。

そんな彼に、西沢歩を初めとして多くの女子が好意を抱いていた。もちろん、リリスもその1人である。

少しずつではあるが、確実に関係を縮めていった2人。

リリスとハヤテの仲の良さに、周囲の者は2人はいずれ婚約する関係まで進展するものだとばかり思っていた。

しかし、運命とは時として残酷なもの・・・

楽しかった2人を、引き裂いてしまう出来事が起こった。

そう・・・

リリスが転校する事になってしまったのである。

転校の理由は、母の都合によりアメリカに行く事になったからである。

そして、ついに別れの時が来てしまった・・・

リリス『短い間だったけど、みんなと一緒に勉強できて楽しかったわ。ありがとう。後、綾崎君・・・』

ハヤテ『何ですか？先輩。』

リリス『話があるの。屋上まで来てくれない？』

ハヤテ『わかりました。』

リリス『綾崎君・・・あなたの事が好きだったの・・・私とつき合ってくださいませんか？』



ハヤテ『すいません、先輩・・・ボクは、先輩の告白を受け入れる事はできません・・・あ、イヤ！先輩の事が嫌いだってワケじゃないんですよ？告白されたのは嬉しいですし・・・でも、今のボクには・・・女の子を養う甲斐性がないんです・・・』

リリス『・・・へ・・・？』

その後ハヤテの説明を聞いて、リリスはようやく納得した。

リリス『へエ・・・幼稚園の時の彼女に言われた事を今でもずっと守ってるんだ・・・』

ハヤテ『はい。』

リリス『とんでもない子ね・・・綾崎君の前の彼女・・・』

ハヤテ『恥ずかしながら・・・』

リリス『まあ、私の気持ちは伝えられたから。じゃあね、綾崎君。』  
ハヤテ『さようならです、先輩。』

回想終了

ユリ

「悩んでいてもしょうがない・・・ちょっと散歩にでも行く・・・」

┌

ユリは裏口から外に出た。

ユリ

「ハア・・・」

ユリはアテもなく歩く。

ボーっとしていたためか、ユリは誰かにぶつかってしまった。

ドカツ！！

「コラ、お嬢ちゃん・・・どこ見て歩いてんだあ〜？」

運の悪い事に、ぶつかった相手は不良3人組だったようだ。

何となくダルシムとザンギエフとトルネコに似ているのは気のせい  
か。

「ぶつかっておいて謝りもしないとは、マナーがなってねえなあ〜  
？」

3人組はユリに突っかかる。

しかし、ボーっとしているためかユリは動かない。

「こうなりゃ少しマナーってヤツをお嬢ちゃんに教えてやるか。」

「オー」

そう言って、3人組はユリを引っぱろうとした。

その時だった。

「疾風の・・・如く!!!」

ドガガガガア!!!

突然突っ込んで来た少年によって、3人組はあっさりと気絶した。

ユリ

「・・・ハッ!!!」

ユリはやっと我に返る。

「大丈夫ですか？先輩・・・」

ユリ

「あ、綾崎く・・・ん・・・!？」

ユリの目の前にいたのは、なんと綾崎ハヤテその人であった・・・

ファイル346…どうする、ユリ！？どうなる、元太！！？』3

喫茶『泉美理』  
イヌミリ

ユリとハヤテは、喫茶店で談笑をしていた。

ハヤテ

「それにしても本当にいたんですね…幼児化した人間って…」

ユリ

「ア、アハハ…恥ずかしながら…」

ハヤテ

「で？先輩はなぜボーっとしていたんですか？」

ユリ

「そ、それは…」

ハヤテ

「案外、恋愛関係の事なんじゃないですか？」

ユリ

「うっ！！」

驚異的洞察力。

ユリ

「うん・・・実はね・・・」

ユリはハヤテに事情を話した。

ハヤテ

「ホウ・・・今つき合っている恋人が、店を大きくするためにお見合いをさせられそうになっていると・・・それ、完璧な政略結婚ですな。」

ユリ

「そうだね・・・」

ハヤテ

「先輩、その想い人の事が好きならば、お見合いを止めにいけばいいんじゃないでしょうか？」

ユリ

「え？」

ハヤテ

「ボクが前にやっていたバイトの経験から言いますと、政略結婚目的のお見合いは、必ず相手側に何らかの裏があると思っんです。だって、そういうのって誰も疑わないじゃないですか。店を大きくするためですしね。」

ユリ

「ハ、ハア・・・っていうか、綾崎君今までどんなバイトしてきたの・・・？」

ハヤテ

「いろいろです。中には命に関わるバイトもありましたよ。麻雀の代打ちとか」

ユリ

「だ、代打ちって……」

目が点になるユリ。

ユリ

「（綾崎君……あなたって人はなんてすさまじい人生を過ごしているの……）そ、そういうえば、綾崎君そのカツコって……」

ハヤテ

「ああ、これですか？実はボク、今ちょっとワケありで執事をやっているんですよ。」

ユリ

「執事？どうして？」

ハヤテ

「イヤ、博打しか脳のない両親に1億5000万の借金押しつけられて、ヤクザに売られそうになりましたね。その後いろいろあって、今は執事の仕事をしていますよ！」

笑いながら言うハヤテ。

しかし、ユリはとてもじゃないが笑えなかった。

ユリ

「綾崎君・・・私、あなたに同情するわ・・・」

ハヤテ

「ハハッ、ありがとうございます」

その時、電話が鳴った。

ハヤテ

「はい、もしもし・・・ああ、マリアさん？わかりました。」

ピッ。

ハヤテ

「ボクはもう帰らなきゃいけないので、勘定済ませて店を出ましよう。」

ユリ

「そうだね。」

ハヤテとユリは勘定を済ませ、喫茶店を後にした。

ハヤテ

「さようなら、先輩！」

ユリ

「綾崎君、ありがとう！相談して良かったわ。」

ハヤテ

「じゃあ、また。」

そう言うと、ハヤテは走っていった。

ユリ

「さて、これからどうしよう・・・」

そんな事を考えていると、次に喫茶店を出た2人組が何やら内緒話をしていた。

「小嶋酒店の息子と、ボスの娘が見合いという事になったか。」

「ボスも考えますね。」

ユリ

「!？」

2人組は話しながら歩いていく。

ユリはゆっくりと、2人の後を尾行し始めた。



ファイル347：…どうする、ユリ！？どうなる、元太！！？『4』

ユリはゆっくりと2人組を尾行している。

しばらくして、2人組は大きな屋敷らしき場所に着いた。

ユリ

「うわっ、大きなお屋敷ねえ・・・」

そう思いながら、ユリはしっかりとついて行った。

2人は、裏口らしき所から中へと入って行く。

ユリも後に続いた。

すると、2人を待っていたと思われる恰幅の良い男が現れた。

おそらく、この男がその大会社の社長だろう。

「しかしボス、うまくいったものですね。酒屋に政略結婚目的のお見合いを持ちかけて、こうもアツサリだませるとは・・・」

「そうだな。まさか、私があこの酒屋を乗っ取るつもりでお見合いを持ちかけたとは、あの酒屋も気づいてはおるまい・・・」

ユリ

「!?!」

ユリは聞き耳を立てた。

「バカな酒屋だ、私の作戦にまんまと引っかかりおって……つぶされる運命にあるとも知らずにな……ハッハッハッ!」

聞き耳を立てていたユリは、驚いた。

ユリ

「(そういう事だったのね……こうしちゃいられないわ!元太達に知らせなきゃ……)」

ユリは静かに、その場を後にした。

阿笠邸でユリから真実を聞かされた一同は、驚いていた。

コナン

「なんだって!?!」

哀

「政略結婚どころか、乗っ取り目的のお見合いですって!?!」

風月

「どおりでおかしいと思ったわ……」

暁

「みんな、そのお屋敷に行こう！今ならまだ間に合うかもしれない！」

マリア

「そやね！」

真希

「行きましょう！」

コナン達は、お屋敷へと向かった。

コナン

「ここがそのお屋敷か……」

哀

「中に入りましょう。」

そう言うと、哀は呼び鈴を鳴らした。

ピンポン！

ガチャ！

おおたけじゅんぞう  
大樽酒蔵

「何だね、君達は？」

暁

「ボク達は、小嶋元太君のクラスメートです。」

風月

「あなたの犯罪を未然に防ぎに来たわ！」

酒蔵

「犯罪？」

真希

「とぼけたってムダよ。こっちにはあなたが元太君の酒屋を乗っ取るつもりで、お見合いを持ちかけた事はわかってるんだから！」

酒蔵

「な、なぜそれを!？」

ユリ

「私が全部聞いてたの。」

酒蔵

「チツ……」

「お父様、それホント？」

酒蔵

「藍香！」

哀

「そうよ、全てはこの人が企んだ悪巧みよ。」

藍香

「お父様？私、そんな事一言も聞いてないけど・・・」

酒蔵

「うるさい！！」

バシッ！

藍香

「キヤッ！！」

酒蔵

「オマエは黙って私に従えばよいのだ！私のためにな！！」

ユリ

「許さない・・・あなたは絶対に許さない！！！！」

そう叫ぶと、ユリはスタンガントンファーを取り出し酒蔵を殴りつけた。

ドガア！！

酒蔵

「ぐおおおお！！」

ザザザ・・・

ユリ

「あなたみたいなヤツを、私は絶対に許さない！！覚悟・・・」

「そこまでだ、ユリちゃん！もう止める！……！」

ユリ

「げ、元太……君……！？」

ファイル348…どうする、ユリ!?どうなる、元太!?!?』5

ユリ

「許さない……あなたは絶対に許さない!!!スタンガントンフ  
アー!!!」

ガツ!!

ドガア!!

酒蔵

「ぐおおおおお!!」

ザザザ……

ユリ

「あなたみたいなヤツを、私は絶対に許さない!!覚悟……」

「そこまでだ、ユリちゃん!!もう止める!!!」

ユリ

「げ、元太……君……!?!?」

ユリ達が振り向くと、そこには目暮警部達を連れた元太が立っていた。

目暮

「大樽酒蔵とその一味!悪徳商売と見合い詐欺の容疑で、逮捕する  
!!!」

酒蔵

「ク、クソオ……」

こうして大樽酒蔵とその一味は逮捕され、警察に連行されて行った。

実は元太は、最初からこのお見合いの事に疑惑を持っており、自分で独断に大樽の事を調べていたのだという。

その調べによつて、大樽酒蔵が悪質な商売をしている事を突き止め、目暮警部達に連絡。

それによつて、この犯罪も未然に防ぐ事ができたのだった。

元太

「それで、オレの事が心配でお見合い相手の事を探ろうとしてたつてワケか？」

ユリ

「だ、だって……」

コナン

「いいじゃないか、元太君！」

哀

「ユリちゃんなりに、あなたの事を想つての行為なんだから……」



刃

「そうそう!」

元太

「ったく・・・」

元太はユリを引き寄せると、彼女の耳元で何やらささやいた。

元太

「(今度の休みに良い物プレゼントするから・・・楽しみにしとけよ、ユリ!)」

ユリ

「(え?)」

ユリは頬を赤らめる。

刃

「『今度の休みに良い物プレゼントするから、楽しみにしとけよ、ユリ』だって」

コナン・哀・歩美・光彦・マリア・たくま・風月・暁・真希

「わ」

元太・ユリ

「なっ!？」

元太も頬を染めた。

ユリ

「読心術で読み取ったでしょ、刃ちゃん・・・」

刃

「ギクツ・・・」

ユリ

「みんなも何『わ』とか言ってるのよ・・・」

コナン・哀・歩美・光彦・マリア・たくま・風月・暁・真希  
「ゲツ・・・」

ユリ

「みんな・・・殺すっ!!!」

コナン・哀・刃・歩美・光彦・マリア・たくま・風月・暁・真希  
「わっっ!!!」

ユリ

「待ちなさ〜いっ!!!」

その後、ユリは赤面したまま2時間余りもコナン達を追いかけて回したんだとか・・・

とりあえず、めでたしめでたし？

### ファイル349：今までの事件のおさらい3

今までのおさらい

ファイル01 - リアン、ジンとウオツカに襲われる。

服部平次、幼児化したリアン・ハートネスと出会う。

ファイル02 - リアン、服部家に居候。

『剣野刃』の名を作る。

刃、大阪で江坂繭美、八木幹彦、大沢健太と友達になる。

浪花の少年探偵団を結成。

ファイル03 - 刃、帝丹小学校に転校、コナン・哀と出会う。

同時に2人の正体が刃にバレる。

ファイル04 - 毛利蘭、スネイク達に襲われ、幼児化する。

ファイル05 - 毛利蘭、黒羽兄妹に救われ、居候。

『遠蘭鈴』の名を作る。

鈴、江古田小学校に転校する。

コナンと哀達、ドッジボールで賢橋小学校の平尾隆太達と対決。

以後、隆太と仲良しに。

ファイル06・07 - 哀、怪盗レディーと出会い、ライバル関係になる。

ファイル08 - コナンと哀、下校中にジンとウオツカを発見。

杯戸シテイホテルまで追跡するが、コナンが一度捕まる。

哀が間一髪、コナンを救出する。

シールドル、ジンに射殺される。

クラレット初登場。

哀、コナンから手編みのセーターをプレゼントされる。

回想シーンその1。

ファイル09 - 服部平次、ゲームセンターで殺人事件を解決。

ユーリ・マラスキーノ、改方学園教師に就任。

ターゲットのうちの1人を見つける。  
回想シーンその2。  
ファイル10 - 哀達、バスジャックに遭遇。  
犯人達を捕まえる。  
何者かの気配にコナンがおびえる。  
青井玲子初登場。  
回想シーンその3。  
ファイル11 - 哀達、愛犬行方不明事件を解決。  
コナンに笑顔が戻る。  
回想シーンその4。  
ファイル12・13 - コナン、哀、刃の正体が隆太にバレる。  
隆太、コナン達の仲間に加わる。  
播磨紅子初登場。  
仲間探しの旅行開始。  
ファイル14～16 - コナン達、瀬藤銀一（瀬戸川レオン）と白野美保（笠原麻衣）に出会う。  
2人の友達4人（天幕深雪、鳳美香、月島弓雁、エル・シーバス）と共に仲間に加え、青年探偵団を結成。  
ファイル17～23 - 桜野松葉、ジンとスコッチにそそのかされ、コナンと哀を誘拐する。  
松葉、その後ジン達の悪事を知る。  
松葉、哀達と共にスコッチを倒し、青年探偵団に加わる。  
蜂野鈴也も初登場。  
ファイル24 - 日向琴美が初登場、帝丹高校に転校してくる。  
本堂瑛祐の秘密発覚。  
黒の組織で不穏な動き。  
ファイル25 - コナン達男性陣、哀達女性陣を海での特訓で全員泳げるようにする。  
ベルモット、宮野明美の亡霊の手により幼児化し、組織から逃亡する。

ファイル26・27 - ベルモット、阿笠邸にやって来る。  
コナンと哀、ベルモットを金田一ユリとして迎え入れる。  
ユリ、阿笠邸に居候開始。  
コナン、哀、刃、ユリの正体が吉田歩美にバレる。  
歩美、コナン達の仲間に加わる。  
ファイル28・29 - コナン、カゼを引く。  
強盗が毛利探偵事務所の自宅に押し入り、コナン、捕まる。  
少年探偵団、強盗を逮捕。  
弥生と鈴、黒羽盗華の日記と謎の緑のカケラを発見する。  
スネイクが国際犯罪組織『ペンデュラムアッド』の1組織、『緑の組織』と判明。  
ファイル30 - 美保、自宅の図書館で祖母からの手紙を発見、泣き崩れる。  
美保、青の組織を必ず倒すと心に誓う。  
同時に、謎の青のカケラを発見。  
白羽弥生、三千院伊澄初登場。  
ファイル31 - 刃、繭美、幹彦、健太と共に探検に参加。  
兄の書いた手紙を見つけ、その下に自分の名を書き加える。  
瑛祐がFBIの一員と発覚。  
赤の組織、名前で初登場。  
謎の『赤のカケラ』の存在が判明。  
ファイル32 - 松葉、時雨山大学院で鈴也達の補習の講師をする。  
黄の組織、名前で初登場。  
謎の『黄のカケラ』の所有者が松葉と判明。  
佐々木メトロ、柳生清兵衛、風魔雷蔵、宮本フレア初登場。  
何かの作戦を企む。  
ファイル33 - 36 - コナン、女装して哀と共に紅百合女学院に潜入。  
途中、コナンこと愛子、ストーカー達に誘拐され、大ピンチに。  
愛子と哀、殺人事件を解決。

青の組織が事件に関わっていた。

ファイル37～40 - 美保、仲間達と九州旅行に行く。

美保、殺人の容疑者にされたり、元介護ロボに捕まったりで大ピンチに。

銀一、殺人事件を解決。

謎の組織が事件に関わっていた(どの組織かは不明)。

怪盗キッドが美保と出会う。

ファイル41 - 作者とコナン達の生対談

ファイル42 - コナン達青年探偵団、ペンデュラムアッド打倒を誓う。

ファイル43 - ペンデュラムアッドの5大組織幹部の存在が発覚。

ファイル44～45 - 劇の練習の小道具に使うアクセサリーが原因でコナンが誘拐される。

少年探偵団が犯人を逮捕。

ファイル46～48 - 美保、バーチャルウェディングの花嫁役をする。

その夜に殺人事件発生。

事件を解決するが、途中で美保が拉致される。

ファイル49～50 - 松葉が鈴也や仲間達と肝試しをする。

ファイル51 - コナンにそっくりな男の子、コナー王子が初登場。

ファイル52 - 本堂瑛祐が姉の生存の可能性を見いだす。

ファイル53～54 - 美保が大学院受験生の家に家庭教師に行く。

訪問先の家にいた受験生の父親を殺害した男を逮捕。

ファイル55～56 - 刃、繭美達浪花の少年探偵団と共にプールに行く。

プールで出会った麻薬の取り引き男並びに、暴力団2組を逮捕。

ファイル57～70 - スペシャル版・呪われたクルージングツアー！  
ツアー後、園子にコナンの正体がバレる。

ファイル71 - 坂本たくまと東尾マリアにコナンと哀の正体がバレる。

ファイル72 - 刃、大阪で和葉や繭美達に正体がバレる。  
ファイル73～74 - 刃、怪盗の中風雷達を捕まえるために標的の女の子と入れ替わるが、自分が誘拐されて大ピンチに。  
平次と和葉が中風雷達を逮捕。  
ファイル75 - 哀がコナンを、コナンが哀を名前で呼ぶ。  
ファイル76～77 - 黒の組織のコンニク並びに亜戸川愛理と戦う。  
ファイル78～79 - 刃が瑛祐と密会。  
コナンと哀、刃にハメられる。  
ペンデュラムアッドの1人、ドレイクの標的が刃と発覚。  
ファイル80 - コナンが誘拐される。  
哀と小五郎が元銀行強盗を逮捕。  
ペンデュラムアッドの1人、トード登場。  
ファイル81 - コナンと哀、怪盗キッドと怪盗レディーを撃退する。  
ファイル82 - コナンと哀、危険なファン達から逃避行を決行（笑）  
ファイル83 - 哀達転校生の1年B組編入の秘密が明かされる。  
ファイル84～85 - 怪しげな転校生、如月風月が転校してくる。  
ファイル86 - 金田一ユリがクリス・ヴィンヤードではなく、その妹リリースである事が判明。  
ファイル87～89 - 仲間達の束の間の休息（美保、銀一、松葉編）  
。ファイル90 - 黒の組織で不穏な動きが起こる。  
ファイル91 - ドッペルゲンガー騒動勃発（笑）。  
ファイル92 - 束の間の休息の隆太編。  
隆太に恋人ができる。  
宝極真初登場。  
ファイル93～95 - 播磨紅子の過去が明かされる。  
ファイル96～98 - コナン達の休息。  
運動会を大いに楽しむ。  
帰り道、ジンに密かに写真を撮られる。  
ファイル99～110 - スペシャル版・天空上の恋愛劇。  
ラブアース

コナンと哀の精神が一時入れ替わる。  
ジンと和解。  
ジン、部下達と共に組織を脱退。  
ファイル111 - 第1章、完結。  
ファイル112 ～ 113 - 第2章、始動。  
ファイル114 ～ 116 - 刃、銀行強盗と遭遇。  
単独で犯人を逮捕。  
犬に襲われ、全治1ヶ月の重傷に。  
ファイル117 ～ 119 - 山王学園演劇部の劇に、刃がゲスト出演。  
途中、刃が誘拐される。  
美保、自分に恨みを抱く男、近藤を逮捕する。  
ファイル120 ～ 123 - コナンと紅子、姫川啓作の同窓会に参加。  
啓作、同級生の殺人犯を逮捕する。  
ファイル124 ～ 127 - コナンと哀、コナー王子と再会。  
気が強い哀似の女の子、アイ王女初登場。  
ちよつとした騒動に巻き込まれる。  
ファイル128 ～ 139 - スペシャル版・伝説の蝶彦。  
ファイル140 - 謎の少女、イズナ初登場。  
ファイル141 - コナンと哀、イズナと出会う。  
緑の組織の刺客、女郎花初登場。  
ファイル142 - コナン、越水七槻と再会。  
ファイル143 - イズナに100兆円の賞金がかけられる。  
コナンと哀、盗賊に襲われる。  
ファイル144 ～ 146 - コナンと哀、新たな刺客のキュラソー・シャルトリューズと対峙する。  
ファイル147 ～ 149 - ユリ、怪しい男達に誘拐される。  
ユリ、事件がきっかけで元太に恋心を抱くようになる。  
事件の裏に緑の組織の葛が関わっていた。  
ファイル150 - 番外編・紅百合女学院潜入捜査の後日談。  
ファイル151 ～ 152 - 美保とエル、緑の組織の刺客の薄・桔梗



の襲撃にあつ。

ファイル153 - 今までの事件のおさらい

ファイル154 ～ 167 - スペシャル版・6500万年前の亡霊

ファントム・オブ・ダイナソー

ファイル168 ～ 172 - 伊豆で宝探しをする。

途中、逃走中の銀行強盗にコナンとユリが捕まる。

ファイル173 - 番外編のコナン笑点。

ファイル174 - FBIの中に裏切り者がいる事が発覚。

ファイル175 ～ 179 - コナン達それぞれのバレンタイン。

風月のバレンタイン嫌いが判明。

ファイル180 ～ 183 - 姿なき誘拐犯に風月と友達である真希が

さらわれ、危機に。

ファイル184 ～ 185 - ユリにそっくりな少女がいる事が判明。

ファイル186 - 風月に恋人がいた事が判明。

ファイル187 ～ 190 - ホワイトデーの一騒動が起きる。

ファイル191 ～ 192 - イズナが覚醒する。

ファイル193 ～ 195 - キュラソーの襲撃、再び。

ファイル196 ～ 219 - スペシャル版・友情と愛の鼓動

ハートビート

ファイル220 - スネイク、ゴーゴンの粛正を受け死亡。

ファイル221 - 黒羽兄妹、盗一と盗華と再会。

パンドラを破壊する。

ファイル222 - 赤と青、2大組織が動き出す。

第2章、完結。

ファイル223 ～ 225 - 第3章、始動。

浅井成美が生きていた事が判明。

成美、赤の組織から脱出する。

同時に性転換手術を受けていた事、記憶喪失が発覚。

ファイル226 ～ 刃と暁が知り合いであった事が判明。

ファイル227 ～ 230 - 大阪遊園地で殺人事件が起きる。

少年探偵団が事件を解決・・・というより、真希が犯人を1人で倒す。

途中、風月が犯人によって拉致される。  
ファイル231〜232 - 謎の怪盗が出現。  
ファイル233〜235 - 刃、平次と共に実業家殺人事件を解決。  
途中、被害者によって刃が監禁される。  
ファイル236 - 今までの事件のおさらい2  
ファイル237〜250 - スペシャル版・地球の神秘と陰謀  
ファイル251〜254 - 温泉旅行中に事件が発生。  
真希、火影によって操られ少年探偵団を裏切る。  
ファイル255： - さらなる悲劇につながる可能性が発覚。  
ファイル256〜257 - 美保が顔なき殺し屋を追跡、逮捕。  
ファイル258 - エルの短髪がワケが発覚。  
ファイル259 - 月島弓雁のデートの話。  
ファイル260〜264 - 10年前にリアンと平次が初代怪盗レディーに会っていた事が発覚。  
ファイル265〜266 - 小五郎と英理がコ哀の正体に気づく。  
ファイル267〜269 - リリーが里帰り中に悪人エスパイを逮捕。  
ファイル270〜272 - リアンとバリーのちよつとしたケンカ。  
ファイル273〜275 - 美保と内海がレストランで殺人未遂事件を解決。  
ファイル276〜278 - ユリと風月が悪徳商売人達を逮捕。  
ファイル279 - 遠蘭鈴がエイプリルフルにコ哀にイタズラをする。  
ファイル280〜281 - 花見中に大騒動が勃発。  
ファイル282 - 秋の七草の7人兄弟のその後。  
ファイル283 - 蜂野鈴也の過去話。  
ファイル284〜285 - 内海が人気アイドル殺人事件を解決。  
美保が犯人に誘拐される。  
ファイル286〜287 - コナンの裏切り疑惑の話。  
ファイル288〜289 - 瑛祐とジンが面会。  
キールの真実が語られる。

ファイル290～291 - 時津潤哉の弟・潤治が初登場。

越水七槻と良い感じに。

ファイル292 - バリーが『世界を滅ぼそうとする者』の存在を語る。

ファイル293～332 - スペシャル版・業火の中の断末魔<sup>クローバー</sup>

突然現れたエスパー『ファミリア・ファウナ』に、仲間が次々と消されていく。

刃が最強の能力『リドルレディー』を修得し、ファミリアを倒す。同時に真希を奪還。

ファイル333 - 越水七槻が旅に出発する。

第3章、完結。

ファイル334～335 - 第4章、始動。

越水七槻が青の組織の構成員達と遭遇する。

ファイル336～337 - 越水七槻がディテイクタイプマスターの1人、金泉躑躅と対決。

ウコンが不審な動き。

風蘭がそれを監視する。

ファイル338～342 - コナンが人形師の呪いによって女装させられ、苦悩の1日を過ごす。

ファイル343 - コ哀が動画研究部を訪問、入部する。

初代創設者が銀一の母愛子で、目的は琴葉のクワイイ画像を残しておくためだった事が判明。

ファイル344～348 - 大会社の令嬢と元太のお見合い疑惑により、ユリと元太が別れの危機に。

少年探偵団、相手の悪徳会社社長と一味を逮捕。

元太とユリの関係が少し進展。

『ハヤテのごとく!』の綾崎ハヤテがユリの後輩だった事が判明。

ファイル350：ユリと深海の王女（プリンセス）セーラ『1・序章』

潜水艦

ゴウン、ゴウン、ゴウン・・・

フック・アダナウス『海賊軍団頭領』

「世の中には2種類の男がいる・・・果てしない野望を持つ男と、野望を持たない男だ！」

カツ、カツ・・・

フック

「これが・・・オレ様の野望を叶えてくれる！！グフフフフ・・・  
待っている、深海の王冠！！」

ヒョイ！

フック

「キ、キサマ何を！？」

「コレを野望の道具に・・・使われちゃ困るのよねえ！！」

スッ！

フック

「捕まえる！！」

ダダダダダ・・・

フック

「待て！裏切り者っ！！！」

「裏切ったりなんかしてないよ、アタシは・・・」

ババツ！！

「最初から仲間じゃないわ！！！」

ダンツ！！

ゴオオオオオ・・・

トツ！

チャツ！

ジュディ・ホワイト

「こちら、ジュディ・ホワイト！目的の物は確保した！」

「了解！後は脱出だね、気をつけて！」

フック

「甲板に出たか・・・周りは海だ、もう逃げられんぞ！」

ジユデイ

「それはどうかしら？」

チャツ！

サツ！

ジユデイ

「ハンマーヘッド、発見！」

バシャツ！

ジユデイ

「キャプチャー・・・オンツ！！」

ヒュンツ！！

シユルルルル・・・

バツ！

『キュー・・・』

ザバアツ！！

カツ！！

フック

「うわっ！！」

シーン・・・

ギリッ・・・

フツク

「ハンマーヘッドが持つ『怪音波』だ！！クソッ、あの小娘は・・・  
アニマルレンジャーだったのか！！！」

コポコポ・・・

ザザア・・・

『名探偵コナン・ユリと深海の王女セーラ』  
プリンセス

私は元黒の組織の構成員、リリス・ヴィンヤード。

私は黒の組織の一員だったんだけど、お姉ちゃんを組織に殺され、  
組織を裏切る決意をしたの。

ガス室に閉じ込められてしまった私は、亡霊となった明美さんにA  
PTXを飲ませてもらい、幼児化して脱出したの。

私が生きているとわかったら、また命を狙われ、周りの人にも危害  
が及ぶ・・・

阿笠邸に向かった私は、偽名を作って帝丹小学校に通う事になり・・・

そこで、私と同じように幼児化した宮野志保ちゃん、工藤新一君と出会ったわ。

ではここで、私の頼もしい仲間達を紹介しましょう。

最愛のコンビ、江戸川コナン君と灰原哀ちゃん。

お互いに守り合う、私の理想のカップルよ。

少年探偵団の初期メンバーの吉田歩美ちゃん、円谷光彦君

いざという時には、スゴい力を発揮するの。

途中から仲間に加わった、東尾マリアちゃんと坂本たくま君。

世界一の漫才コンビね。

FBI捜査官の剣野刃ちゃんは、私の大切な親友でもあるの。

元黒の組織の如月風月ちゃんと常盤暁君。

この2人も強いカップルだわ。

新たに仲間となった、片桐真希ちゃん。

能力の強さを狙われ、一時赤の組織に洗脳された時もあったのよ。

そしてもう1人、小嶋元太君。

別れの危機もあったけど、無事またカップルとして過ごしている。

もう少し進展できればいいのになぁ・・・

そして今、深海に眠る神秘が私達を待っている！！

小さくなくても、頭脳は同じ！

迷宮なしの女名探偵！！

真実は、いつも1つ！！！！



コナン

「この道で合ってるはずなんだけどなあ・・・」

哀

「え〜？迷ったあ〜!？」

暁

「やっぱりオレ達だけでキャンプに来るのはマズかったのかなあ・・・」

「」

歩美

「お水ちょうだい!!」

元太

「もう入ってないみたいだよ・・・」

マリア

「マジで〜!?!？」

風月

「ん?」「」

ピクッ・・・

フワフワ・・・

ユリ

「水のボール!？」

コナン

「行ってみよう!」

タツ!

バシヤツ!

パシヤツ!

たくま

「これは!？」

光彦

「お姉さん!！」

「!あなた達は？」

光彦

「お水飲ませて下さい!」

「良いけど・・・」

光彦

「フウ、生き返る!」

ニユツ!

光彦

「わっ！」

刃

「ガーディアンのはサクライトね！」

真希

「どうして、水が空中に？」

コナン

「あ！あそこにいるのはチャーリムだ！」

哀

「『サイコネシス』で水を操っていたのね！」

歩美

「あ！どこかで見たとと思ったら、この人達水中ガーディアンショーのマリーナー座よ！確かあなたは、花形スターのカスミさんですね！」

カスミ

「え、ええ……」

キョウ

「祖父のキョウじゃ。」

マチス

「父のマチスです。」

ナツメ

「母のナツメです。」

カスミ

「家族でシヨールをやってるのよ！」

キヨウ

「そうか、キャンプ中に道に迷って……」

コナン

「本当に助かりました！」

光彦

「グイゼルだあ！」

グイゼル『グイツ！』

ペロペロ！

光彦

「くすぐつたいよ！」

グイゼル『グイ〜』

ピョン！

カチツ！

パア・・・

シャツ！

マチス

「失礼！！」

ユリ

「・・・？」

コナン

「水中ガードイアンショーって、見てみたいなあ・・・」

キョウ

「よし！見せてやろう、次の町で！！」

フワワ・・・

コナン・光彦・元太・たくま・暁

「わっ！！」

哀・歩美・ユリ・マリア・風月・刃・真希

「キャッ！！」

ポヨヨーン・・・

ヴェゼル『ヴィヴイ』

ヨロヨロ・・・

ユリ

「危ない!!」

ダッ!

カチッ!

パアアアア・・・

ユリ

「あ、これさっきの・・・何だろう・・・?」

ヒョイ!

タタタ・・・

ユリ

「・・・?」

ピョコン！

ゴソゴソ・・・

カチツ！

ヴェゼル『ヴィ・・・？』

ポウ・・・

ユリ

「ううん・・・」

パアアアア・・・

ユリ『！？』

パチツ！

ユリ『わぁ』

スイ〜・・・

ユリ『何かしら、あれ？』

ユラア〜・・・

ユリ『何か来る！？』

『セラア〜ツ！』

スイ〜・・・

ユリ『』

スイツ！

『セラセラ セラツ！』

サツ！

スィィィィィ

ユリ『あつ、待って！』

ユリ

「待ってよ！ハツ！？」

カスミ

「おはようございしたの？」

ユリ

「あつ……おはようございます……あねは何だったのかしら……」



ユリ

「昨日、夢を見たんです。不思議な生き物が深海の神殿に……」

ナツメ

「深海の神殿!？」

カスミ

「ねえユリちゃん、『蒼海<sup>ソウカイ</sup>の民』って知ってる？」

ナツメ

「私達は、その末裔なのよ。」

キョウ

「今ではすっかり……」

マチス

「少なくなってしまったがね。」

カスミ

「『蒼海の民』は、海沿いを旅しながら動物達と暮らしてきたの。そして……海の恵みや水の生き物達への感謝を込めて、彼らと交流するために神殿を作ったのよ。ユリちゃんが夢で見たのは、きっとその神殿ね。神殿を『蒼海の民』は夢に見るの。」

コナン

「ユリちゃんも『蒼海の民』の末裔……?」

キヨウ

「そうかもしれん。ん？」

ジユディ

「異常なし・・・イーグルス、助かったよ！」

ヒユン！

カチツ！

光彦

「それって、ディメンション：RING『キャプチャー・スタイラ  
ー』でしよう？」「

ジユディ

「ええ！」

コナン

「それじゃ、あなたは？」

ジユディ

「アニマルレンジャーのジユディ・ホワイトよ！」

ジユディ

「これはセーラという人魚のタマゴなの。マリナー座の皆さんの協力で、タマゴが無事に孵化<sup>フカ</sup>して深海の神殿アクアリウスにたどり着くの見届けるのが今回の任務よ。」

コナン  
「へえっ!」

ユリ  
「夢に見たあの子がセーラ!」

ホワワン

風月  
「む!?!あれは!?!」

バラバラバラ・・・

ジュディ  
「しまったっ、ヤツらに見つかったか!」

キョウ  
「イカン、トレーラーに戻れ!」

コナン  
「何だっ!?!」

ダッ!

フック  
「世の中には2種類の人間がいる!追われる者と追いかける者だ!  
!また会ったな、アニマルレンジャー!」

ジュディ  
「しっこいヤツね!」

フック

「ソイツをよこせ！」

バツ！

ジユデイ

「フフツ・・・欲しけりゃくれてやるわよ！」

サツ！

バシツ！

フック

「ぐっ！おのれっ・・・許さるん！」

ドッ！

ヒョイツ！

フック

「ぐおおおおっ！！」

ググツ！

ジユデイ

「キャツ！？」

グラグラ・・・

グバアッ!!

ジユディ

「なんて怪力なの!!」

タタッ!

ザッ!

「小僧っ、観念しろ!」

コナン

「これは渡さないぞ!こっち!」

ダッ!

「へドロボム!!」

ドゴッ!!

コナン

「うわ!くっ・・・」

ブンッ!

コナン

「ユリちゃんっ、頼む!!それを持ってトレーラーに急げ!!」

パシッ!

ユリ

「わかったわ！」

タタタ・・・

パアアアア・・・

ユリ

「タマゴが・・・!?!」

ザッ!

フック

「それを渡してもらおうか!」

ユリ

「これは誰の物でもないわ!」

フック

「だったらオレ様の物だ!!グハハハハッ!!」

ギムムッ!!

フック

「あがつ!!」

元太

「ユリちゃん逃げて!!」

ググ・・・

フック

「よ〜こ〜せ〜っ!〜!」

ユリ

「キャアッ!〜!」

バツ!

カパッ!

ヒュルルルル・・・

ユリ

「!」

バツ!

パシッ!

ズザザザザッ・・・

パアアアアア!

ユリ

「!」

ジュディ

「ユリちゃんっ、それをアタシに!〜!」

ダツ！

フック

「させるか！！」

ガシツ！

パアツ！！

キラキラキラキラキラ・・・

ユリ

「・・・」

パチツ！

『ウエエエエン！！』

ユリ

「あゝ、よしよし・・・」

ジユデイ

「生まれた・・・」

フック

「そ・・・そんな・・・オレ様の手で孵化させる予定が・・・」

ボクゼン・・・

キヨウ



「みんな無事かつ!？」

ドルルルル・・・

コナン

「今のうちだ!！」

タタタ・・・

ユリ

「やっと落ち着いたわ。」

ナツメ

「ユリちゃん、代わるわ。」

セーラ『フニユ……セラセラッ！』

ピエーン！

ナツメ

「あらら……やっぱりユリちゃんがいいのかしら？」

ユリ

「セーラ？よしよし……」

セーラ『セラッ』

たくま

「スゴい！泣き止んだ！」

カスミ

「ユリちゃんの事ママだと思ってるのね。」

暁

「そつえば聞いた事がある。孵化して最初に見た相手を母親だと思い込む……そんな人魚がいるって……」

スヤスヤ・・・

セーラ『セラ』

コナン

「大変だな、ママも！」

ユリ

「何言ってるのよおっ!!！」

ジユディ

「・・・」

マチス

「確かこの辺りに・・・」

ドルルルル・・・

マチス

「見えたぞっ!!！」

タタタ・・・

カツン・・・

コナン

「行き止まりだ・・・」

シャラン!

ポウウ・・・

パアツ!

ゴゴゴゴゴゴ・・・

コナン

「隠し扉!?!」

コツコツコツコツ・・・

「行き止まり!?!」

フック

「イヤ!」

ポウ・・・

パアッ！

ゴゴゴゴゴゴ……

フック

「やはりヤツらは『蒼海の民』の生き残り……フム……少し様子を見るか？」

キヨウ

「着いたぞ！」

ザパッ！

ユリ

「この天井の絵は……夢で見たのと同じかも……」

キヨウ

「深海の神殿アクアリウスじゃ。そこには深海の王冠と呼ばれる秘宝がある！！その秘宝を狙って、多くの盗賊が現れた。そこで蒼海の民は秘宝を守るため、ある仕掛けを施した……」

マチス

「神殿を海の色に同化させ、人の目から隠した……その上神殿は絶えず海中を漂流していて、決して見つける事はできないのだ。」

キヨウ

「ただし皆既月食の時だけ、人の目で見る事ができる。」

たくま

「見えないんじゃない。たどり着けない。」

カスミ

「セーラは行けるの。」

コナン

「え!?!」

カスミ

「蒼海の民は、元々セーラが住んでいた海域に深海の神殿を造ったのよ。タマゴからかえったセーラは、本能によって必ず神殿にたどり着くの。」

マチス

「ヤツらの狙いは深海の王冠!」

キヨウ

「セーラがいれば神殿にたどり着ける……」

マリア

「そやからセーラを……」

コナン

「アイツ、何者なんです?」

ジュディ

「海賊フック・アダナウス！それがヤツの名前よ！！」

バラバラバラ・・・

フック

「ヤツらは必ず海に出る！！深海の王冠はそこでいただこう・・・  
フッフッフ・・・」

ジユデイ

「もうすぐ海よ。だけど海に出たら・・・お別れよ！」

コナン・哀・歩美・光彦・ユリ・元太・マリア・たくま・風月・暁・  
刃・真希

「え！？」

ジユデイ

「これ以上あなた達を、巻き込むワケにはいかない・・・これは、  
アニマルレンジャーのミッションなのよ！！」

カスミ

「よく寝てる。」

ユリ

「はしゃぎすぎたのね。」

たくま

「まだ生まれたばかりなのになあ。」

スヤスヤ・・・

キヨウ

「来たぞ！ワシの船、セルリアンラグーン号じゃ！」

ポーッ・・・

「キヨウ船長！」

キヨウ

「また船を使うぞ。」

「しっ無事で！」

キヨウ

「行ってくる！」

コツコツ・・・



ユリ

「セーラ……」

コナン

「くやしいなあ、見送るだけだなんて……」

ヒック……

セーラ『セエラ〜ッ!〜!』

ジユディ

「キャッ!?!」

セーラ『セエラ〜ッ!〜!』

ユリ

「セーラ……」

「若さとは……」

「冒険を躊躇ためらわない気持ちの事じゃぞ! 若者達よ!〜!」

コクン……

コナン

「オレ達も乗せてくれえ!〜!」

ダダッ!

ユリ

「セーラー!」

ビッ!

ジユディ

「!」

ビシュッ!

バババババ...

コナン

「!?!?こ、これはっ!?!」

ジユディ

「な...何だあ!?!」

コナン

「おーい!アタシはこっちよ、船を止めてっ!?!」

ジユディ

「君がやったのか?セーラー!」

セーラ『セラ』

ニコッ!

コナン

「『ハート・スワップ』!？」

ジューディ

「セーラの危機回避能力の1つよ。」

キョウ

「時間が経つと元に戻るんじゃない。」

カスミ

「さすが、深海の王女ね！」

コナン

「深海の王女？」

キョウ

「セーラはそう呼ばれておるんじゃないよ。」

ユリ

「私と離れたくなかったからあんな呪文を？ちょっと嬉しいかも」

ギョウ

セーラ『カモカモ!』

ユリ

「セーラがしゃべった!？」

コナン

「ええっ、本当？コナンって言うてみて？」

セーラ『カモツ！』

コナン

「ダメかぁ・・・」

ジユデイ

「・・・」

マチス

「ユリちゃん、セーラを海に放してくれ！」

ユリ

「えっ？」

ジユデイ

「アタシ達にできるのは、見守ってあげる事だけよ。」

ユリ

「・・・海に入りたい？セーラ！」

セーラ『セラッ』

ピョン！

ユリ

「あっ！！」

パシャッ！

コナン

「セーラ楽しそうだよ。」

キョウ

「よし！さあ出発だ！！ここからはセーラが自分で道を決める！」

ガチャッ！

キョウ

「ささっ、ズズツと奥へ・・・」

シューウウウウン・・・

ユリ

「わぁ」

たくま

「スゴい設備だ！」

ユリ

「水族館みたい！」

セーラ『セラア〜』

ベチツ！

ユリ

「キャツ、セーラ！！」

セーラ『フェ〜ン・・・』

ユリ

「痛くない痛くない！」

ナデナデ・・・

ニコツ！

セーラ『セラセラ』

ポツ！

キヨウ

「セーラが移動を始めたぞ！」

スイ〜ツ！

キヨウ

「セーラはたった1匹で海を回遊し、深海の神殿アクアリウスに戻

「つて行く。」

コナン

「たった1匹でああ……」

光彦

「どうして神殿の位置がわかるんだろう？不思議だなあ……」

パシヤンツ！

マチス

「もうすぐ皆既月食の日……うまくすれば私達も、深海の神殿を見る事ができるかもしれないな。海に祝福されて……」

キヨウ

「ああ……かつての『蒼海の民』のようにな……」

カツ！

ジュディ

「こちらジュディ・ホワイト。航海は順調は順調！追跡者も見えず……」

「了解！ジユディ、バカンスはミッションが終わってからだよ！」

又ッ！

セーラ『セラッ』

ピコーン、ピコーン！

ナツメ

「まあっ、あれは！」

コナン

「ホエルンにホエルアーだ！」

カスミ

「あんなに大群で！」

キョウ

「まさに壮観じゃな！」

ザザザザ・・・

真希

「見て、ユリちゃん！」

ザザザザ・・・



セーラ『カモカモ』

光彦

「セーラがホエルアーの背中に!!」

セーラ『セラッ!』

ピョン!

ユリ

「キャッ!」

キャッチ!

ユリ

「やっぱり嬉しいかも」

セーラ『カモカモ』

ピッ、ピッ!

チャッ!

ジュディ

「・・・」

「ここは海の上。」

今光彦やユリ達は、ヴェゼルやセーラと海で泳いでいる。

そんな中、まだ海に入っていなかったコナンと哀がジユデイに問いかけた。

コナン

「ジユデイさん！」

ジユデイ

「ん？」

哀

「どうしてアニマルレンジャーになっただんですか？」

ジユデイ

「子供の頃、動物達に命を救われた事があるのよ。冬の山で、突然の吹雪に巻き込まれたアタシは・・・凍り付きそうな体で、何とか洞穴を見つけたの。そこには、森の生き物や鳥達が身を寄せ合っていたのよ。あの時、動物達に助けてもらっていなかったら今のアタシはいない・・・ちょうど、コナン君や哀ちゃんぐらいの年の頃の話よ。」

コナン・哀

「そうなんですか！」

コナンと哀は、少しだけ沈黙した。

なぜならコナンや哀は、実年齢が17と18歳。

本当はジユディとそれほど変わらない年齢だったからだ（後でわかった事だが、ジユディは19歳であった。）。

コナン・哀

「江戸川コナンと灰原哀！行っきまーす！」

コナンと哀も、海の中へと飛び込んでいった。

ザッパーン！！

ユリはハンモックのベッドにセーラを連れ込み、一緒に寝ていた。

ユリ

「セーラ、私あなたが好きよ。」

セーラ『ス・・・キ・・・？』

ユリ

「そう、好き。」

セーラ『セーラ、カモ、スキ！』

ユリはセーラを抱き絞めた。

ギュッ！

セーラ『セラ！』

ザザザッ・・・

ジュディ

「・・・」

コッコシ・・・

ユリ

「？」

ジュディはコナンと哀を下の部屋に呼び出していた。

コナン

「何ですか、ジュディさん？」

ジュディ

「コナン君、哀ちゃん、あなた達にも手伝ってほしいの。」

ジユディはコ哀に説明をした。

哀

「ユリちゃんとセーラを引き離す?」

ジユディ

「でないと、別れが辛くなるからね・・・」

ユリ

「!!!」

ジユディ

「もうすぐセーラは深海の神殿に戻る・・・」

コツ・・・

ユリ

「私なら、大丈夫です。」

ジユディ

「あなたが大丈夫でも、セーラはどうかしら?セーラの気持ちも考えてほしい。」

セーラ『セラ!カモ!』

ユリ

「セーラ、ゴメンね!!!」

ダッ!!

コナン・哀

「ユリちゃん……」

ユリ

「そうよね……セーラは深海の王女だもの……」

コツ……

ユリ

「カスミさん？」

カスミ

「話は……聞いたわ……」

ユリ

「うわぁくん!!!」

ユリはカスミに泣きついた。

「我々がつけているのに気がついていません。」

フック

「神殿に着くまでは、まだ手を出すな・・・」

セーラ『ルル・・・ルルル・・・』

ユリ

「セーラが歌ってる・・・」

カスミ

「深海の王女ね・・・ユリちゃん、これを受け取って！」

カスミは何かをユリに手渡した。

ユリ

「これは？」

カスミ

「蒼海の民の証よ。持っていて・・・」

セーラ『カモ？』

キョロキョロ・・・

光彦

「ユリちゃんを捜してるの?」

ユリ

「・・・」

サツ!

フワツ!

ユリ

「あっ! バンダナが・・・」

フワツ・・・

セーラ『カモ!?!』

スーツ・・・

セーラ『セラ?』

コナン

「え!?! セーラが帰って来ない?」



「セーラが・・・？」  
ユリ

コナン

「え？セーラーが帰って来ない？」

ユリ

「セーラーが・・・？」

ユリは、1人困惑していた。

キョウ

「この潜水艦を使いなさい。ムチャはするなよ！」

カスミ

「はいっ！」

コナン達は、潜水艦へと乗り込んだ。

カスミ

「発進！！」

潜水艦は、ゆっくりと動き出した。

ユリはまだ困惑している。

もしかしたら、自分のせいではないのかと・・・

ユリ

「セーラ・・・私が冷たくしたせいかしら・・・」

意気消沈になるユリの声。

カスミ

「バカね、そんなワケないでしょ！」

そんなユリを、カスミが一喝した。

コナン達の潜水艦の後ろを、フックの潜水艦がゆっくりと追いついて来た。フックの潜水艦がゆっくりと追いついて来た。フックの潜水艦がゆっくりと追いついて来た。

フック

「潜水艦が出て来たか・・・よし、後はオレ様が1人で行こう。もうすぐ・・・深海の王冠が手に入る!!!」

そう言うと、フックはほくそ笑んだ。

ユリはまだ、落ち込んだままだった。

ユリ

「セーラ……私はここよ……早く戻って来て……」

コナン

「ユリちゃん……」

哀

「ん？コナン君、あれ！」

コナン

「セーラー!!」

ユリはそこで、セーラが何かを持っている事に気づいた。

セーラが持っていたのは、ユリの緑色のバンダナだ。

このバンダナは、ユリが元太とのデートの時に彼に買ってもらった物である。

ユリはこのバンダナを、とても大切にしていた。

ユリ

「セーラ……私のバンダナを探してくれてたの？」

セーラ『セーラ!』

ユリ

「ありがとう……」

たくま

「よかつたな。」

カスミ

「セーラを発見！これから帰るわ。」

キヨウ

「晩ゴハンまでには戻れそうじゃな。」

そのとき、突然潜水艦が大きく揺れた。

ガクン！！

コナン・哀・刃・真希

「!?!」

光彦・元太・たくま・暁

「わあっ!!!!」

歩美・ユリ・マリア・風月

「キャッ!!!!」

カスミ

「くっ・・・!!!!」

キヨウ

「どうした!?!」

カスミ

「海流に流されてるわ！コントロールできない・・・!!!!」

そうこうしている内に、潜水艦は完全に流された。

スツ・・・

キヨウ

「カスミ！？・・・ケーブルが切れたか！」

ガタタツ・・・

その時、セーラが動き出した。

ユリ

「セーラ！？」

セーラ『セラセラ！』

ユリ

「カスミさん、セーラの後を追って！出口を教えようとしているわ  
！！」

カスミ

「わかった！」

セーラの先導通りに進むと、潜水艦は海流から抜け出す事ができた。

カスミ

「こちらカスミ、今海流を抜けたわ。セーラのおかげね。」

その時は、ゆっくりと近づいていた。

マチス

「皆既月食が始まったぞ！」

その時、リーダーに何かが映った。

マチス・ナツメ・キョウ

「深海の神殿！！」

深海の神殿出現に喜ぶナツメ達。

しかし、喜んでばかりもいられない。

悪党の魔の手が、すぐそこまで迫っていたからだ。

フック

「フッフ・・・そのままオレ様を、神殿へと連れて行け！！」

すぐにリーダーにそれが映る。

ジユデイ

「この後ろの船は！？」

キョウ

「まさか・・・フック・アダナウス！！！！」

コナン達は、深海の神殿へとたどり着いた。

コナン

「スゴい・・・」

哀

「これが深海の神殿!？」

刃

「海の中なのに空気があるわ。」

ユリ

「セーラ!」

ユリが叫ぶと、セーラがスイーツと現れた。

セーラ『カモ!!!』

そのままセーラは、ユリの腕へと飛び込んだ。

ユリ

「セーラ!」

ギュッ!

ユリ

「これのために・・・ありがとう、セーラ・・・」



ユリはセーラを抱きしめた。

セーラ『セラ！ルル〜 ルルル〜ル〜』

セーラが歌を歌い始める。

それと同時に、カスミの首とユリの右手首にある蒼海の民の証が光り始めた。

パアアアアア・・・

すると、目の前にある滝が左右に割れた。

ザアアアアア・・・

セーラ『セラ！』

ピョン！

カスミ

「蒼海の民を迎えてくれてるんだわ。」

セーラは水の中に飛び込んだ。

セーラはそのまま、奥へと泳ぎ出す。

コナン達も急いで後を追って行った。

しかし、急いでいたためかコナン達は気づかなかった。

すぐ後ろに、フックの潜水艦がきていた事に・・・

ザパアッ！

フック

「フハハハハ！ついに見つけたぞ！深海の王冠がオレ様を待っているっ！」

フックはコナン達の後を追った。

一方その頃ジュディは、海の中を泳いでいた。

ジュディ

「（あ！ネモアーン！キャプチャー・・・オン！）」

シュルルル・・・

ジュディは巨大チョウチンアンコウのネモアーンをキャプチャーすると、背中に飛び乗った。

ジュディ

「みんな、無事でいて・・・」

コナン達は、奥の部屋へとやって来た。

そこには、深海の王冠の印が刻まれた石版があった。

そこには文字が刻まれている。

カスミ

「深海の王冠の印だわ。」

暁

「石版には何て書いてあるんだろう?」

刃

「たくさんの言語を知ってるアタシでも、読めそうにないわ・・・」

カスミ

「うーん・・・おじいちゃんなら読めるかも・・・」

フック

「教えてやるうか?」

コナン・哀・刃・ユリ・元太・歩美・光彦・マリア・たくま・風月・  
暁・真希・カスミ

「え!!!?」

コナン達が振り向くと、そこにはフックが立っていた。

コナン

「フックー!!」

カスミ

「ここは蒼海の民の神殿よ! 蒼海の民でなければ、何もできないわ!」

フック

「フフフ・・・その心配はない。」

そう言うと、フックは文字をスラスラと読み始めた。

フック

「『深海の王冠をいだきし者・・・真の帝王とならん』・・・と。」

刃

「アタシでさえ読めない古代文字をスラスラと読んだ!？」

フック

「そして、王冠への道はこれが開けてくれるのさ・・・」

シャラン!

カスミ

「それは・・・蒼海の民の印!？」

ポウ・・・

ガガガ・・・

フック

「開いた！ファンタスティック！！」

ダツ！

コナン・哀・刃・ユリ・元太・歩美・光彦・マリア・たくま・風月・  
暁・真希・カスミ

「待て！！」

タタタ・・・

フック

「おおっ、これが深海の王冠！！世の中には、2種類の男がいる・  
・宝の似合う男と、似合わない男だ！この王冠は、オレ様にこそふ  
さわしい！ガハハハッ！！」

そう言つて、フックは宝石を抜こうとし始める。

グッ！！

すると、突然セーラが止めに入った。

セーラ『セラ〜！！』

グググッ・・・

フック

「フン！」

フックはセーラを投げ飛ばした。

セーラ『セラー!!』

ユリ

「セラー!!」

ユリはセーラを受け止める。

コナン

「セーラに何するんだ!!」

フック

「この宝石は、オレ様の物だ!!」

その時、突然周りの景色が歪み始めた。

ユラアツ・・・

フック

「ん？」

ドパアツ!!

そして次の瞬間には、四方八方から水が流れ込み始めたのだ。

ザパアツ!!

真希

「キヤアツ!!」

ユリ

「水？」

セーラ『セラァ〜ツ・・・』

カスミ

「神殿に穴が開いたんだわ！」

ジュディはその光景を、遠く離れた所から見つけた。

ジュディ

「神殿に水が入っている！？急がないと！！」

ザザザザアアアアツ・・・

コナン

「ダメだ！どんどんヒドくなる！！」

光彦

「ボク達、どうなるんでしょう？」

カスミ

「・・・脱出しましょう。」

暁

「カスミさん・・・」

カスミ

「さあ、急いでー!」

コナン達は走り出した。

神殿中に響き渡る笑い声の主、フック・アダナウスを残して・・・

コナン達がしばらく走っていると、前からジユデイが走って来た。

ジユデイ

「みんな、無事?」

カスミ

「ジユデイさん!フックが宝石を抜いたら、急に水が出て・・・」

ジユデイ

「!みんなは早く脱出を!神殿は今沈んでいる!」

コナン・哀・刃・ユリ・元太・歩美・光彦・マリア・たくま・風月・  
暁・真希

「し、沈んでる!」

カスミ

「ジユデイさんは!」

ジユデイ



「大丈夫、後で必ず追いつく・・・アタシには、アニマルレンジャ  
ーとしての役目があるからね!!」

そう言うと、ジュディは奥へと走って行った。

フックは宝石をせっせと袋に詰めていた。

ジュディ

「よく働くわね！」

フック

「？」

ジュディ

「海賊にしてはマジメで感心だわ。」

フック

「アニマルレンジャー！？」

ジュディは近づくと、フックから宝石を奪って台座に戻し始めた。

フック

「キサマ、何をする！！」

ズズズ・・・

フックはジュディの腕をつかんだ。

ガッ！

フック

「アニマルレンジャーの小娘、ゲットだぜ！」

ジュディ

「宝石を戻しなさい！神殿が沈むわよ！！」

フック

「バカな。」

フックがほくそ笑んだ瞬間、水が思いっきり流れ込んだ。

フック

「うわあっ!？」

フックはゆっくり泳ぐ。

しかし、上がった瞬間柱に激突し、宝石を落つことした。

ズルッ!

フック

「しまった!」

宝石はゆっくり流れ出した。

ユリ

「ジュディさん、大丈夫かしら・・・」

その時、セーラがユリの手を離れた。

セーラ『・・・セラ!』

パシヤッ!

ユリ

「セーラ!」

コナン

「どこ行くんた、セーラ!」

ダッ!

ユリ

「どこななのセーラッ!」

コナン

「あそこだ!」

コナンが指差した先には、宝石を引っ張っているセーラの姿があった。

セーラ『!!!』

コナン

「宝石を!? そうか、宝石を戻せば水が止まるんだ!」

ユリ

「私達も手伝うわ！」

ガコン！

宝石を戻したのに、水は止まらない。

コナン

「1本足りない。フックが持ってたんだ……」

ユリ

「どうしたらいいの……？」

コナンとユリが途方に暮れていると、2人の足下に水が溜まり始めた。

チャポ！

ユリ

「キャ！」

コナン

「水が止まらない！」

フック

「神殿ごと沈んじまうのか……」

フックは潜水艦に戻って来た。

だがフックが潜水艦に乗ろうとしたその時、波に揺られてフックは落ちた。

フック

「わっ！」

バシヤッ！

ジユデイ

「カスミさんの船、脱出したわね！それじゃあたしも……」

ヒョイツ！

スタツ！

ジユデイは潜水艦に飛び移った。

フック

「あっ！それはオレ様の船だぞ！！」

ジユデイは無視して潜水艦に乗り込んだ。

ギュルルル……

フック

「チツ！まさか潜水艦を奪われるとはな！だが世の中には2種類の人間がいる……運の良い者と、運の悪い者だ！潜水艦には小型ポ

ツドが取り付けてあるのさ。」

そう言うと、フックはポッドに乗り、後を追った。

その頃、カスミの潜水艦は海流に流されていた。

カスミ

「ダメだわ！海流で神殿に戻れない！コナン君・・・ユリちゃん・・・」

コナンとユリは、迫り来る大波から逃げていた。

コナン・ユリ

「わあああっ！」

タタタ・・・

その時、水に流された宝石が落ちて来た。

コナンは宝石をキャッチした。

コナン

「最後の1本だ！後は、これを戻せば・・・」

しかし、水はどんどんその水かさを増している。

コナン

「もうここまで水が来てる・・・」

チャプツ、チャポツ・・・

その時、何かが流れて来た。

コナン

「これは・・・フックの救命ポッドだ・・・ユリちゃん！」

コナンはユリを引っ張り、ポッドに入れた。

コナン

「これで助かるよ。」

ユリ

「えっ？」

バタン！

ユリ

「ちょっと、コナン君！？」

コナン

「オレはこれに戻して来る。ユリちゃん達はここで待っていてくれ！」



ユリ

「ちょっと！」「ナン君！！」

コナンは宝石を抱え、必死で走った。

タッタツ・・・

コナン

「よし！この宝石をあそこに戻せば、水が止まるはずだ！」

コナンは水の中に飛び込んだ。

コナン

「・・・」

ゴボツ！

コナン

「うっ！息が・・・続かない・・・」

思わず宝石を放してしまった。

コナン

「しまった！」

ガコン！

コナンは一度水面上がると、再び水の中に飛び込んだ。

コナン

「よし、もう一度だ！」

コポツ・・・

ユリ

「コナン君・・・」

ザパアッ！

カパッ！

キヨウ

「ジュディ！カスミ達がまだ戻ってないんじゃないか！」

ジュディ

「何ですって！？」

コナン

「くっ・・・外れない！」

コナンは宝石を思いっきり引っ張った。

ガコン！

コナン

「やった！これを・・・戻せば・・・」

コナンの息が尽きてしまった・・・

ユリ

「コナン君・・・」

セーラ『セラ！』

ポワア！

ピピピ・・・

コナン君・・・

コナン君・・・

コナン君！！

コナン

「！！」

ユリの心の声で、コナンは我に返った。

コナン

「フウ・・・よし、今度こそ！」

コナンは宝石を手に取ると、台座まで泳いで行き、ついに宝石をはめ込んだ。

ガコン！

カツ！

コナン

「！これは・・・！？」

その瞬間、突然台座が輝き出した・・・

パアアアアア・・・

パアアアアアツ！！

台座から放たれた光は、神殿をキラリと包み込む。

光の1つが、ユリとセーラがいる救命ポッドの方にもやって来た。

シュルツ！

ユリ

「何？この光・・・」

セーラ『セラ！』

その頃、ジュディはカスミ達と合流していた。

ジュディ

「水の生き物達が集まっているわ。」

カスミ

「スゴい！」

又ツ・・・

その時、潜水艦の横に1つの巨大な影が現れた。

太古の巨大ザメのガーディアン：RING、カイオーガだ。

カスミ

「カイオーガ？」

ジュディ

「一体、何が起きるの！？」

何が起きるのか・・・！？

マチス

「カスミ達はどこへ・・・ん？」

ナツメ

「ミヤモメ？」

その時、ナツメ達の前に神秘の光景が現れた。

ザパアッ！

キョウ

「深海の神殿が・・・」

フックのポッドに入っていたユリは、ハッチを開けた。

ユリ

「水が引いてる・・・深海の神殿が浮上したの？」

目の前に広がった光景に、ユリは目を輝かせた。

ユリ

「・・・スゴいかも！そういうえば、コナン君は？」

その時、後ろからフックが上がって来た。

ザパアッ！

フック

「もらった!!」

ユリ

「セーラ!!」

フックはセーラを捕まえ、逃げ出した。

ユリ

「セーラッ!」

ギョルルルツ・・・

フック

「コイツがいれば、また神殿は見つけられる!ガハハハハッ!!」

フックが高笑いした時、真下を何かが通っていった。

フック

「ハ・・・?何だ!？」

バシユッ!

シユルルルツ・・・

それは、光に包まれたコナンだった。

ユリ



「コナン君！」

その時、ユリの足下にカスミの潜水艦が上がって来た。

ザパアッ！

ジユデイ

「ユリちゃん、乗って！」

ユリは潜水艦に飛び移った。

フック

「何だ？あの光は！？」

コナン

「フック！セーラを放すんだ！！」

フック

「やれるものなら、やってみろ！」

コナン

「よおし！」

コナンは一気にフックとの間合いを詰めた。

ザザッ！

カスミ

「コナン君……」

キヨウ

「あの光こそ、蒼海の民が水の生き物達と交流したという深海の王冠じゃ!」

フック

「クソツ!」

コナン

「逃がさないよ、フック!」

ブワツ!

フック

「水の生き物達が?」

続いて、巨大なサメが現れる。

又ツ!

フック

「カ・・・カイオーガ!!?」

ザパアツ!

カイオーガは帯びれでフックを弾き飛ばした。

フック

「わあっ!ヒエエツ!」

その一瞬のスキをついて、コナンはセーラを取り返した。

フック

「あっ！」

コナン

「いただきっ！」

フック

「わわわっ！」

ドッポーン！

コナン

「大丈夫か？セーラ。」

セーラ『セラ！』

ギョルルル・・・

たくま

「スゴいぞ、コナン君！」

フック

「ワハハッ・・・まだまだあ！」

コナン

「何？」

ザザザザザッ・・・

フック

「世の中の男には、2種類がある……簡単に倒される男と、倒されない男だ！」

ホア！

ゴン！

コナン

「海の生物達が？」

『生物達が攻撃してきます！』

フック

「生意気な……超怪音波砲発射！！」

『超怪音波砲……発射！！』

フォンフォン……

キヨウ

「フックめ、何をした！？」

ヴィゼル『ヴィ……』

キヨウ

「混乱しとるのか……」

セーラ『セラ……ッ！』

コナン

「どうした、セーラ！？この音波のせいか！？」

フックの超怪音波砲で、海の生物達の攻撃が止まる。

ユリ

「ヒドい・・・」

フック

「オレ様こそが！海の帝王だ！！ガハハハハッ！！！」

フック

「オレ様こそが！海の帝王だ！！ガハハハッ！！！」

フックは高笑いする。

セーラ『セラ〜！』

ギッ・・・

セーラ『セラ ル〜ル〜ルルル〜ルル〜ルル〜ルル〜』

ポウツ！

セーラの歌声により、生物達の容態が元に戻った。

ジユデイ

「スゴい、生物達が元に戻った！これがセーラの第2の呪文、  
「ハート・セラピース」なのね！！！」

セーラ『セラッ！〜！』

サツ！

『ミヤン〜』

『チー・・・』

ザザザザツ・・・

セーラ『セラツ!!!!!!』

『ガーツ!!!!!!』

セーラの指令を受けて、カイオーガが火炎砲を撃ち放つ。

カツ!!!!!!

ドゴオオオオオ!!!

カイオーガから放たれた火炎砲が、フツクの潜水艦を直撃した。

潜水艦の柱は折れ、これで終わったかに思われたが・・・

フツクはしぶとかった・・・

フツク

「世の中には・・・2種類の男がいる・・・人を叩きつぶす男と、叩きつぶされる男だ!ぬおおおおつ!!!!」

なんとフツクは、メガスーツという機械の服を体に着ていたのだった。

それによって、柱を持ち上げている。

たくま

「なんだ、メガスーツを着てたんだ・・・」

ジユデイ

「それであんなバカ力を……」

ユリ

「ちょっとズルイかも……」

フック

「オレ様は……叩きつぶされ……」

バチツ、バチツ！

フック

「うおっ！」

ズンツ！！

柱の重みに耐えきれなかったのか、フックは柱につぶされた。

シユルルルルツ！

サアアアアア……

暁

「神殿を眩い光が包んでいく……」

キヨウ

「見るがいい……あれが蒼海の民の宝物……深海の王冠じゃ！」



ジュディ

「こちらジュディ・ホワイト！神殿はまた海に戻っていく……ミッシヨン完了！」

「くろつさま！」

光彦

「また会えますよね？」

セーラ『セラ！』

ピヨン！

ユリ

「セラ！」

セーラ『カモ、スキーツ！』

ユリ

「セーラ！……セーラ？あなたは深海の女王<sup>プリンセス</sup>……海の仲間達を守ってあげてね。そして、私を忘れないで……」

セーラ『ユ……リ……』

ユリ

「さよなら、セーラ……」

セーラ『さよなら、リ・リ・ス・・・セラ!』

ピョンッ!

チャポン!

コナン

「行っちゃったな、セーラ・・・」

風月

「ユリちゃん、大丈夫?」

ユリ

「平気じゃないけど・・・もう、大丈夫!そうだよ、セーラ!」

こうして、フッカー味は逮捕された。

ジューディ・ホワイトは、また新たなミッションに挑んでいく。

コナン達はマリナー座と別れ、帰路に着いた。

そして、元太とユリの関係は・・・

元太はユリに小箱を手渡した。

ユリ

「え？これを私に？」

元太

「ああ！開けてみるよ！」

ユリ

「うん！」

ユリは小箱を開けてみる。

パカッ！

中に入っていたのは、小さな指輪だった。

ユリ

「こ、これって・・・もしかして・・・」

元太

「ああ・・・オマエへのプレゼントだよ・・・今はまだ、大きいのがあげられないけど・・・いつか必ず、婚約指輪もプレゼントしてやるからな。」

顔を赤らめながら言う元太。

ユリ

「元太・・・君・・・」

ユリの瞳が潤んでいく。

ユリ

「元太君っっ!!」

元太

「わっ!!」

コナン達の目の前で、ユリは元太に抱きつき、しばらく泣いた。

2人の関係、だいぶ進展した・・・

かな？

ファイル361：ユリと深海の王女（プリンセス）セーラ『12・セーラとの闘

『名探偵コナン・ユリと深海の王女セーラ』<sup>プリンセス</sup>

主題歌・少女の頃に帰ったみたいに

メインテーマ・名探偵コナンメインテーマ『<sup>ターゲット</sup>標的バージョン』

挿入歌・君がいれば

サウンド・名探偵コナン『<sup>ターゲット</sup>14番目の標的』オリジナル・サウンド  
トラック

ファイル362：越水七槻VS室鬨樹『前編』

コナン達が深海の王女セーラと出会っていた頃、越水七槻は大クジラのガーディアン・ホエルアーのアルルの背中に乗って九州の海を進んでいた。

七槻

「見えてきた！あれが佐賀県つたいね！何日もかかったけん、久しぶりに陸に上がれるのは嬉かね！アルル、疲れてなかと？」

ムズムズ・・・

アルル『オアアツクシヨオン！！』

七槻

「アハツ！！」

ザザザザツ・・・

七槻

「すさまじか〜。アルル！アンタのクシヤミで大津波が起きたとよ〜。・・・ん？アルル！ボクを上を噴き上げて！」

アルル『スウウウウ・・・』

バシユアアアッ！！

七槻

「たあああーっ!!」

その先には、浜辺の人達が見えていた。

七槻

「マ、マズか!!アルルのクシャミで起きた大津波が浜辺の人達を・  
・!!」

・大津波の先には、サーフボードの上でノンキに寝ている男がいた・

七槻

「危なああい!!」

しかし、その男は急に立ち上がると、大津波に向かっていった。

バババババ・・・

「フウ!ビッグ・ウェーブ!!」

ザザアッ!

ザン!

「へへッ。」

七槻

「お〜い!!」

「？」

七槻

「大丈夫やったとかっつ。」

バシャバシャ・・・

七槻

「スマンち！ボクが乗ってたアルルがクシャミばしたけん、あげな  
大津波がここへ・・・」

「おお〜！あのビッグ・ウェーブはホエルアーのクシャミだったの  
か！？それなら気にしないでくれ！サーフィンするなら、あれぐら  
いのビッグ・ウェーブじゃないとね！むしろ、乗り心地の良い波が  
来て、気持ちよかったさ。」

七槻

「良い波で・・・アンタ、スゴか男つたいね・・・」

「それに、コイツの訓練にもなったし。」

七槻

「この子、格闘系のガードイアンに見えるやけど・・・『波に乗る』  
訓練させとうつとか？」

「フフツ、訓練といっても、波に乗る事そのものを覚えさせようと  
してるわけじゃないのさ。君の言うように、コイツは格闘系のガー  
ディアン：RING。オレがコイツに教えようとしてるのは、波か  
ら学べる体術、『柔の奥義』さ。格闘には、大きく分けて2種類、  
『剛』と『柔』があるんだ！『剛』は己の力<sup>オノレ</sup>だけで相手を倒す戦い



方。『柔』は相手に逆らわず、逆に相手の力を利用して勝機を導き出す戦い方さ。寄せては返す波の如く、流れに逆らわずむしろそれに乗る体術。な、サーフィンに似てるだろ？」

七槻

「なるほど。」

「だから君も、このオレに挑戦しようというんなら、そこんトコを頭に入れといた方がよいよ。」

七槻

「挑戦つて事は、アンタが・・・!!」

ムロトウキ  
室鬪樹「佐賀県ディイクティブマスター」

「そう！オレが佐賀県の修練所を任されたディイクティブマスター、室鬪樹だ！金泉躑躅カナスミツツシから既に連絡は来てる。『私を倒した女子大生が、次はあなたの所に向かうでしょう』ってな！ガーディアンに乗って海を渡つて来る程の根性の持ち主だ、もちろんこのオレにも挑むつもりなんだろ？」

七槻

「うんうん！」

鬪樹

「だけど、オレは明日から格闘会の訓練遠征に参加するから、しばらくジムは休みにするつもりなんだ。だからもし挑戦するんなら、今晚から明日の朝までの間にしてくれ。」

七槻

「ええ!？」

闘樹

「じゃあな。」

越水七槻は訓練のために、佐賀市の外れにある洞窟に来ていた。

七槻

「さあ、ここでよかね！チャモ！リララ！これから特訓は始めるよ！」

その瞬間、コウモリ達が襲いかかる。

七槻

「チャモ！」

フレイムスパロウは強力な炎で、コウモリ達を焼き尽くした。

続いて、岩石のような生物が向かって来た。

七槻

「リララ！」

アイアンキャットも突撃で対抗する。

七槻

「まだまだ!!」

チャモトリララは、特訓を続けた。

七槻

「（佐賀のディテイクティブマスター・室闘樹！あん人の力は本物  
つたい!!ちよつぴり話しただけで・・・ものスゴくビリビリした  
スゴみ・・・闘樹という名前に恥じない闘気を感じたけん。しかも、  
こつちが挑戦者とわかつていながらあえて自分の手の内を明かして  
きよつた自信といい、ボクが今の実力で挑んでも・・・たぶん負け  
る・・・!!あん人の言葉通り、力で押していつても全ていなされ  
てしまうやるね。待てよ？今晚しか戦えない？もしかして・・・あ  
ん人・・・）」

七槻

「ハア、ハア・・・できた・・・よし!!」

『佐賀Detective・Gym』

七槻

「たのもおゝっ!!ディテイクティブマスター様はおるか!!?挑

戦しに来たったい!!」

ガガガガガ・・・

闘樹

「やっぱり来てくれたね。オツケー！相手をしよう。使用するガーディアンは2体ずつ。入れ替えは自由。でも、手持ちの中で1体でも戦闘不能が出たら、その時点でゲームセット！了解<sup>オイケ</sup>？」

七槻

「よかよ！」

ザッ！

闘樹

「ガーディアン：RING・ワンリキーソルジャー！」

カッ！

七槻

「ハッ!!」

カッ！

闘樹

「む!!」

ギユオオオオオ・・・

闘樹

「（素速い！！相手は何だ！？）」

七槻

「ドリルクチバシ”！！”」

ガガガガガ・・・

ズザア！

ギユオ！！

ドスツ！

闘樹

「スツゲースピード！やるじゃん！」

七槻

「隠しててもしょうがないけん、もう1体も見せるとよ！メタルシヤム鋼鉄猫と、スパイラルスバロウ若炎鳥！ボクはアンタに勝つために、力ば蓄えて来たけんね！そつちも早う主砲を出すとよか！！」

闘樹

「ホウ・・・コイツはなかなかのビッグ・ウェーブだ！」

チラツ・・・

闘樹

「（・・・よし、そろそろだな・・・）君のその意気込み・・・ワ  
ンリキーソルジャーで様子見ってワケにはいかないな。」

スツ・・・

七槻

「（来る！）」

鬨樹

「じゃあ、望み通り！オレの主砲のガーディアン、マクノハナが相手だ！！」

バシユツ！

七槻

「そうったい！実力の極まったガーディアンで見せてみいよ！！デ  
イティクティブマスター様の言う『柔の奥義』、その真骨頂は・・・  
リララ！！“メタル・クロウ”、“アイアン・クラッシュ”！！」

スス・・・

七槻

「！！！」

スススス・・・

ブン！

ゴロゴロゴロ・・・

鬨樹

「良いね良いね良いね！！そっだ！寄せては返す波のように、戦  
いの流れに逆らわず！相手の力に逆らわず！むしろそれに・・・乗

る！！」

ズドン！！

七槻

「リララ！！」

グ・・・

グラ・・・

スツ！

七槻

「クツ！！」

鬪樹

「ギリギリだったね！まさにギリツギリツ、戦闘不能寸前の寸前。君がわざわざガーディアンを鍛えて来たのは立派だけど、どれだけ攻撃力や速度を上げようと『柔の奥義』の前では無意味だ！！」

七槻

「チャモ！“ 火炎放射” ！！」

鬪樹

「組み手ではかなわないと見て、炎攻撃に切り換えたか！でも、それもどうか？オレのマクノハナ、特殊能力は『熱き脂肪』！！体を覆う分厚い皮下脂肪に守られて、炎の威力が半減する！！・・・そして、」

ズガシャツ!!

鬪樹

「決まったね。」

七槻

「ハア〜。やつぱりこんデイテイクティブマスター様も強か〜。『柔の奥義』、ホンにすばらしかよ。こっちの攻撃は全部受け流されて、これはこのままじゃかなわんたい。」

鬪樹

「ハハハ・・・ホメてもらってこりゃどうも。」

七槻

「でも実はそれだけじゃなかとでしょ? 『柔の奥義』にはまだ隠された秘密がある。ボクは野山で遊んでたけん、よう木登りばしよう。高い木にはツタば引っかけて登るとよ。」

ズルズル・・・

七槻

「そしてツタを投げる時には、ただ普通に投げても狙う所までなかなか届かん。やけん、こうして振り回してから投げるったい! 少しずつ、少しずつ・・・力は溜め込んでいくように、バラバラの力は1ヶ所に集めていくように・・・やっ!」

ヒュンヒュン・・・

シュパン!



七槻

「『柔の奥義』も同じじゃなかと？相手の攻撃を受けては流し、これを繰り返す事で少しずつエネルギーを溜め込み、体中の力を中心に集めていく。そうじゃなかと？」

鬨樹

「ヒュウツ、ご名答！スツゲエ読みだよ、大正解！！そこまでわかっているのなら、蓄えたエネルギーが何のためのものかも・・・へへ、気づいてるよね？相手の攻撃を受けながら体内に蓄積していたのは・・・そう！マクノハナがハリテマルにパワーアップするための、エネルギーだ！！！」

ギョオオオオオ！！！！

ファイル363：越水七槻VS室鬪樹『後編』

グオオオオオ!!!

七槻

「チャモ！最後の攻撃ったい!!」

鬪樹

「イヤ、ムダだね！マクノハナはハリテマルにパワーアップして、新しい力を手に入れた！君のスパイラルスパロウは壁から動けない！！これで決まりだ!!!」

七槻

「受け止めるったい!!」

ザッ！

鬪樹

「できるものならやってみな!!!これで・・・最後だ!!!」

ドシャ!!!

鬪樹

「ハリテマルの“仕返し”が決まったよ。終わったね。」

七槻

「そうやるか？ギリギリで攻め勝ったのは・・・ボクったい!!」

グラ・・・

ズズウウウウン！！

闘樹

「！！な、なぜだ！？」

ザツ！

闘樹

「！？打撃痕が・・・2ヶ所・・・！？」

七槻

「チャモの蹴りと、ハリテマルの張り手・・・普通にぶつかり合っていたら、ボクが負けてたやろうね。ハリテマルはチャモの蹴りをいなし、その勢いもプラスした“仕返し”の攻撃をする。何せ、そつちは『柔の奥義』の使い手やけんね。でも、もし・・・チャモの蹴りが“もう1発”あったとしたら？」

ズボツ・・・

闘樹

「“ダブルキック”・・・か。“仕返し”が決まる前に放たれていた隠された一撃・・・いわば、“仕返しの仕返し”技！！」

七槻

「そうったい！この1発を狙って、ボクはずっと時を待っていたけん！ただ一時、ディテイクテイブマスター様のガーディアンがパワーアップして、最大の攻撃ば仕掛けてくる瞬間を！！ボクが勝てるとしたら、そこしかなかったけんね。洞窟でも、この特訓だけしよったとね。」

闘樹

「でも、なぜわかったんだい？今日のこの試合で、オレがマクノハナをハリテマルに成長させようとしていたと・・・」

七槻

「エへへ、ディティクティブマスター様も、なかなか油断できんお人やる？口では親切そうに『挑戦するなら今夜しかない』と言うとつた。でもボクはそこに何か隠れた気持ちば感じたよ。ああ言えば、ボクが必ず今夜来ると思っつて誘つたとやる？それがキツカケつたい。今晚しかつてトコに意味があるかもしれんつて思い始めたんだよ。」

闘樹

「・・・イヤア、まいつたな。そんな事から君に伝わつちまつていたのか・・・使い手であれば、自分の手持ちのガーディアンがもうすぐ成長の瞬間を迎える事が何となくわかる。だが、どうせなら実戦の中で成長させたかつた。そうしたら君と浜辺で出会つたつてワケだ。まさか、負けるとは思わなかつた。不思議な娘だコな、君は・・・」

七槻

「エヘッ。」

「マズいのう・・・あの娘、どんどん力をつけておる・・・ワシらの計画の邪魔になる前に、始末しておかねばな・・・」

シュウウウ・・・ン・・・

ファイル364：ハヤテ達との出会い『前編・1』

ここは米花町。

コナン達が住んでいる、“少しだけ”平和な町である。

なぜ、“少しだけ”なのかというと、この町ではしょっちゅう何かの事件が起こるからなのだ。

殺人事件やら強盗事件やらが起き、何かと物騒な町なのである。

そして、今日もまた物騒な事件が起ころうとしていた・・・

米花公園

「オラオラ、サツサと金出しやがれ!!」

「出してくれたら帰るつつつてんだろ！」

「!!」

米花町に遊びに来ていたある3人組は、米花公園で不良2人に絡まれている子供達を発見した。

「あー、カツアゲですか・・・最近はああいう輩ヤカラが増えて困ります

ねー。」

「で？どないすんねん？」

「もちろん、あの子達を助けますよ。」

「よし、行って来いハヤテ。」

「はい。」

コナン

「いい加減にしろよ、この不良共が・・・」

哀

「こんな事してて、恥ずかしくないのかしらね？」

刃

「まったくだわ・・・」

「なんだとコラァ！」

「1回痛い目に遭わなきゃ、わかんねえようだな・・・」

不良は腕をボキボキと鳴らす。

しかし、不良達の行為は実行前に止められた。

「嫌がつてるでしょう？止めてあげたらどうですか？」

「ああ？」

2人組が振り向くと、そこには水色の髪をした少年がいた。

「ふざけんなよ、このガキ!!」

しかし、少年は無言のまま不良の首に一撃を入れた。

ペシ!

「何しやがる!」

そう叫んだ瞬間、不良の体は地面に崩れた。

「あ、あれ?体が動かな・・・」

「首の所に打撃を加えて、軽く脳震盪を起こさせただけですよ。でもまだ止めないというのなら・・・その首、使い物にならなくさせてあげましょうか?」

「ヒ、ヒイイイイ!!」

不良2人は、あわてて逃げて行った。

「大丈夫ですか?」

コナン

「は、はい・・・」

哀

「ありがとうございます。」

刃

「何か、カッコいいなあ・・・」

「そうですか？」

「コラコラ、私の執事をホメてくれるのは嬉しいが、惚れるのは止めてくれよ？何たってコイツは・・・私の幼なじみとつき合っているのだからな。」

哀

「ハア・・・」

刃

「ところで、あなた達は誰？」

さんぜんいんナギ  
三千院凧

「ああ、自己紹介が遅れたな。私の名前は三千院ナギ。練馬区に住んでいる、大富豪の娘だ。」

あやしきハヤテ  
綾崎颯

「ボクは綾崎ハヤテ。このナギお嬢様のお屋敷で執事の仕事をやらせてもらっている者です。」

あいざわ サクヤ  
愛沢咲夜

「ウチは愛沢咲夜。この女の子の親戚に当たる、関西人や。」

コナン・哀・刃

「へエ・・・」



咲夜

「そ、それにしてもナギ！そんな速攻でウチとハヤテが恋人同士なんをバラさんでもええやないかあ！！」

ナギ

「何だよ、オマエとハヤテがつき合っているのは本当の事だろう？別にしゃべったっていいじゃないか。」

ハヤテ・咲夜

「うう・・・」

ハヤテと咲夜は赤面した。

コナン

「それにしても、よく2人がつき合うの許したね？」

哀

「だってあなた、彼の事が好きなんですよ？」

ナギ

「確かに好きだったが、私だってハヤテが幸せになれるならそれでいいと思ってるんだ。っていうか、オマエ達よく知ってるな？」

刃

「ずっとサンデー読んでますから。」

ナギ

「そうか。まあここで知り合ったのも何かの縁だ、この町のデパートを案内してはくれないか？」

コナン

「じゃあ、オレが案内するよ。」

哀

「じゃあ、私も！」

ナギ

「ハッハーン・・・オマエ達も恋人同士だな？」

コナン・哀

「ギツクウ!!!」

ナギ

「私とコナン君を2人きりにしたら、私がコナン君に手を出すかもしれないと思っただろ？」

哀

「驚異的洞察力・・・」

ナギ

「安心しろ、私も実はつき合っている人がいる。私もハヤテも浮気性ではないのでな。」

コナン・哀

「ハ、ハア・・・」

ハヤテ

「じゃあ、ボクは咲夜とここに残りますよ。」

咲夜

「そやな。原作のマンガにおらんこの娘の事ももつと知りたいし。」

刃

「じゃあ3人共、行ってらっしゃい。」

ナギ

「では行って来るのだ。」

コナン

「行こうか、哀。」

哀

「うん。」

コナン達3人は、米花デパートへと向かった。

ハヤテ達3人はそれを見送る。

だがこの時、ナギを遠くから監視している不審者の存在があった事に、ハヤテと咲夜は気づいてはいなかった・・・

ファイル365：ハヤテ達との出会い『前編・2』

コナンと哀はナギを連れ、米花デパートに来ていた。

ナギ

「スゴいスゴい！いろんな物が置いてあるのだな、デパートは！」

コナン

「ナギちゃんはデパートに来た事があまりないの？」

ナギ

「ハヤテが前に携帯を買うのについてきた事はあるが、私は滅多にデパートには来ない。」

そう言うナギの視線が、ある場所に注がれた。

ナギ

「コナン君、哀ちゃん！あの店は何という店なのだ？」

哀

「ああ、あそこは1000円ショップよ。」

ナギ

「1000円ショップ？」

コナン

「いろいろ便利な物が、ほとんどの場合1000円で売られているんだよ。」

ナギ

「へエ・・・ちよつどいい、あそこで何か買おう！何かお腹も空いてきたし。」

コナン

「食事なら、この階にある喫茶店の方がいろいろあるよ。」

ナギ

「じゃあ、まずは1000円ショップを回ろう。2人共、案内してくれ。」

哀

「わかったわ。」

3人は、1000円ショップへと入っていった。

1000円ショップから出て来たナギは、やけに上機嫌であった。

なぜなら、欲しかった物が格安の値段で手に入ったからである。

ナギ

「イヤ、良い買い物をしたなあ。まさかこんな所でパソコンゲームのソフトが入るとは思わなかったぞ。」

コナン

「喜んでもらえて嬉しいよ。」

ナギ

「だが、なんで任天堂のゲームソフトとかはここに置いてないんだろっな？」

哀

「そりゃあ、それをやると儲からないからじゃあ？」

ナギ

「そっかー。今度また咲夜とハヤテを誘ってブックオフにでも行くかな？」

哀

「そっいえばナギちゃん、マンガの最新刊はどうやって買ってるの？」

ナギ

「ん？作者達とコネがあるから、発売日に家に届くようにしてる。たまに本屋に取りに行ったりするけどな。」

コナン

「へエ。」

ナギ

「それより、お腹が空いたよ。さっき言ってた喫茶店に行こう。」

コナン

「そっだね。」

哀

「行きましょう。」

コナン達3人は、喫茶店へと向かった。

一方、こちらは公園で待つ事になったハヤテと咲夜と刃。

2人は刃にいくつかの質問をしていた。

ハヤテ

「へー、刃さんはFBIでエスパーなんですか？」

刃

「ええ。それにしてもなぜさんづけなんですか？アタシ年下なのに・

・・・」

ハヤテ

「隠しててもわかりますよ。あなた、薬で体が縮んだ1人でしょう？」

刃

「ええ！！なんでその事を知ってるんですか！！」

咲夜

「そりゃそうや。ハヤテはその組織の一員なんやで。」

刃

「ええっ、マジ!？」

ハヤテ

「ウソですよ」

刃

「なんだ・・・ウソか・・・で、どうして知ってるの？」

ハヤテ

「それは、小説家になるためのサイトを閲覧してるからですよ。」

刃

「なるほどね・・・」

ハヤテ

「さて、そろそろお嬢様達を迎えに行きましょう。迷子になってたら困りますから。」

刃

「え!？ナギちゃん、13歳なのに迷子になるんですか？」

ハヤテ

「はい。恥ずかしながら・・・」

刃

「でも、アタシよりはマシですよ。アタシなんて、17歳の時に迷子になりましたから。しかも生まれ育った町で・・・」

咲夜

「あまり笑われへんな・・・」



刃

「恥ずかしいです・・・」

ハヤテ

「じゃあ、そろそろ行きましょうか。」

咲夜

「そやな。」

刃

「そうですね。」

3人はデパートに向かう。

その先で事件が起きるとも気づかずに・・・

一方、コナン達は喫茶店での食事もし終え、下の階へと降りて来ていた。

コナン

「さて、これからどうする?」

ナギ

「宝石店でも見に行くか?」

哀

「小学生3人が宝石店に行ったら怪しまれると思うよ……」

ナギ

「ほー、そうか……オマエ達には私が小学生に見えるのか……？」

ナギの背後にドス黒いオーラが流れる。

さしずめ、結界師の絶界のようだ。

コナン・哀

「え？ま、まさか……」

ナギ

「そつだ！私はこれでも13歳！高校1年生なのだぞ……！」

コナン

「ええ！？高校生だったの？」

哀

「だって……だって……」

コナン・哀

「……こんなにちっちゃいの？」

ナギ

「ちっちゃい言つな……！ならば、これを見よ！白皇学院の生徒証だ……！」

ナギから手渡された生徒証をマジマジと見つめるコ哀。

コナン・哀

「こ……これは……随分と無愛想な写真だね……」

ナギ

「突っ込むところはそこではない！も〜！！」

そんな事を話している間に、目的地である宝石店へと近づいていた。

ナギ

「ちなみに私はこの店のお得意様だ。だから、欲しい物ならいつでも注文できる。どうだ？オマエ達の欲しい物も注文してやってもいいぞ。もちろん、友達もな。」

コナン・哀

「いいの？」

ナギ

「ああ、お嬢様に2言はない。」

コナン・哀

「じゃあ、お願いしようかなあ……」

そんな事を言っていると、突然銃声が響いた。

バァン、バァン！！

ナギ

「な、なんだこの音は!？」

コナン

「宝石店の中だ!!」

哀

「行きましよう!!」

コナン達は、宝石店へと走っていった。

ファイル366：ハヤテ達との出会い『後編・1』

銃声を聞き、宝石店に駆け込んだコナン達。

そこで見たのは、覆面をかぶった1人の男と、彼に銃を突きつけられて宝石をバッグに詰め込んでいる店員の姿であった。

ちなみに、他の店員や客達は縛られて床に倒れている。

ナギ

「これは一体何事だ!?!」

「あ、ナギお嬢様……実は……」

「何? ナギお嬢様?」

男はナギの方を向いた。

「オマエ、三千院の令嬢か?」

ナギ

「そつだが、何だ?」

「今日についてる。ここの宝石をがっばりいただいて、しばらく遊んでから狙ってやろうと思っていたが……好都合だぜ。」

そう言うと、男は銃をナギに向けた。

「おとなしくしな、お嬢ちゃん?」

そのナギの前に、コナンが進み出る。

コナン

「下がってて、ナギちゃん！ハアツ！！」

コナンはボール射出ベルトからボールを出し、蹴り飛ばした。

しかし、すんでの所で銃で撃たれ破裂させられてしまった。

コナン

「な！？」

「バカめ・・・オマエ、少年探偵団の江戸川コナンだろう？オマエの武器はちゃんとテレビで調べてあるんだよ！もちろん、時計型麻酔銃の方もな！」

コナン

「バ、バカな・・・」

コナンは後ずさる。

その時、哀とナギの悲鳴が聞こえた。

哀・ナギ

「キャ〜ッ！！」

コナン

「哀！ナギちゃん！！」

コナンが悲鳴のした方を向くと、哀とナギが2人の男に抱えられ、銃を突きつけられていた。

「ガキにしては勇敢で感心だ。だが、それ以上は動くな。」

「動くよ、この2人の頭に風穴が空くぜ？」

哀・ナギ

「コ、コナン君・・・」

コナン

「ク、クソツ・・・」

「この2人を死なせたくなくや、おとなしく捕まれや。」

コナン

「わ、わかったよ・・・」

コナンはおとなしく両手を上げた・・・

それから数分後、ハヤテ達は米花デパートにたどり着いた。

咲夜

「何や？パトカーが多くて騒がしいなあ・・・」

ハヤテ

「何かあつたんでしょうか？」

刃

「あ、高木刑事！」

涉

「ああ、刃ちゃんじゃないか！」

美和子

「一緒にいる人は誰？」

刃

「愛沢咲夜さんと、綾崎ハヤテ君です。」

目暮

「何？ハヤテ君！？」

目暮警部もやって来た。

目暮

「久しぶりだなあ、ハヤテ君！君が捜査1課にいた頃はお世話になったよ！何せ、年齢を偽ってまで数多くの難事件を解決してくれたんだからなあ！」

ハヤテ

「ハ、ハハハ・・・」

刃

「それより、何があつたんですか？」



任三郎

「宝石強盗だよ。ついさつき宝石店に4人組の強盗が押し入り、宝石類が盗まれたんだ。」

由美

「幸いケガ人は出てないけど、子供が3人人質に取られて、現在逃走してるわ。」

刃

「そ、その3人の子供って?」

千葉

「1人目はメガネをかけた黒髪の男の子、2人目は緋色の髪をしたウェーブの女の子、3人目は金髪でツインテールの女の子だよ。」

刃

「そ、それってコナン君と哀ちゃんよ!!」

咲夜

「もう1人はナギや!!」

目暮

「やはりそうだったか・・・」

美和子

「相手はコナン君の事を調べ尽くしていたらしくて、コナン君の武器の対策もしていたみたいなの。オマケに、哀ちゃん達に銃を突きつけられて、従わざるを得なかったみたい・・・」

ハヤテ

「そうなんですか・・・」

刃

「（待ってて、3人共・・・アタシが必ず助け出してあげるからね！）」

一方その頃、コナン達3人は宝石強盗達が逃走用に用意した車の後部座席に座らされ、人質にされていた。

コナン達は手足を縄でキツく縛り上げられており、両側を2人の男に挟まれていた。

運転席と助手席・後部座席を合わせて、4人組の強盗である。

哀

「これからどうなるのかしら・・・」

ナギ

「まあ、私は誘拐され慣れているからこの後の展開がわかるが・・・大方、コイツらのアジトにでも連れて行かれて、家の電話番号を言わされるんだろうよ。」

コナン

「そういう事を普通にサラッと言うんだね、君は・・・」

コナンと哀は啞然としていた。

哀

「ナギちゃんは怖くないの？」

ナギ

「怖いさ。しかし私にはハヤテがいる。アイツの身体能力は伊達じゃない。咲夜もいるんだ、必ず私達を助けに来る。それになぜか、宝石店に行く途中にアイツがいたから、アイツもきつと・・・」

「はいはい、おしゃべりはそこまでだ。」

「しばらく黙っててくれよな。」

そう言うと、両脇にいた男2人がコナン達の口にガムテープを貼った。

ペタッ！

コナン・哀・ナギ

「んっ、んんんっ！！！！」

ファイル367：ハヤテ達との出会い『後編・2』

哀

「これからどうなるのかしら・・・」

ナギ

「まあ、私は誘拐され慣れているからこの後の展開がわかるが・・・大方、コイツらのアジトにでも連れて行かれて、家の電話番号を言わされるんだろうよ。」

コナン

「そういう事を普通にサラッと言うんだね、君は・・・」

コナンと哀は啞然としていた。

哀

「ナギちゃんは怖くないの？」

ナギ

「そりゃあ、私だって怖いさ。しかし私にはハヤテがいる。アイツの身体能力は伊達じゃない。それに咲夜もいるんだ、必ず私達を助けに来る。それになぜか、宝石店に行く途中に“アイツ”がいたから、アイツもきつと・・・」

コナン・哀

「アイツ・・・？」

「はいはい、おしゃべりはそこまでだ。」

コナン・哀・ナギ

「!!!」

「しばらく黙っててくれよな。」

そう言うと、両脇にいた男2人がコナン達の口にガムテープを貼った。

ペタッ!

コナン・哀・ナギ

「ん〜、んんん〜!!!」

車はそのまま、宝石強盗達のアジトに向かって走行を続けた・・・

その頃ハヤテ達は、その“アイツ”と合流していた。

ハヤテ

「伊澄さん・・・何でここにいるんですか?」

鷺之宮伊澄

「そ、それは・・・」

咲夜

「ハヤテ、聞くまでもあらへんよ。どうせまた迷子になってたんやろ。」

伊澄

「う……」

刃

「まあまあ、そんな事言ってる場合じゃないでしょ?」

ハヤテ

「そうですね。じゃあ早く助けに行きましょう。」

刃

「発信器の反応は、鳥屋町の倉庫からみたいよ。」

ハヤテ

「わかりました。じゃあ咲夜、伊澄さん、背中に乗ってください。」

ハヤテに言われ、咲夜と伊澄は背中に乗った。

ハヤテ

「行きますよ……疾風の……如く!!!!」

ハヤテは飛び出していった。

刃

「ハヤテさん、速っ……じゃあ、アタシも行きますか……」

刃は空へと飛び上がった。

刃

「ライトニングボルテッカー!!!!」

刃も飛び出していった。

その頃、コナン・哀・ナギの3人は宝石強盗達に周りを囲まれていた。

3人は柱に縛りつけられている。

コナン・哀・ナギ

「んゝ、んゝ……」

「さて、身代金を要求する電話を三軒院家にかけて事だし、後は待つだけだな……」

「なあ、コイツらちゃんと家に帰してやるんだよね？」

「モチロンさ。コイツらが見てるのは覆面をした顔……素顔は見えないからな。」

「まあ、解放する前に少しカワイがってはやるけどな……」

コナン・哀・ナギ

「んゝ、んんんゝ……」

「フフフ……」

そこまで言った時、ガレージの向こうから声がした。

刃

「ここみたいですな。」

伊澄

「じゃあ、私が開けます。八葉六式・・・『収束・撃破滅却』!!」

伊澄がお札をかざすと、一点に集中した光がガレージに突っ込んだ。

そのままガレージを貫通し、倉庫の奥の壁まで一直線に行った。

強盗達が驚いていると、ハヤテ達が駆け込んで来た。

「チッ！まさかこんなに早く見つかるとはな！だが、こっちには人質が・・・」

ハヤテ

「人質って、これの事ですか？」

男達が振り向くと、そこにはすでに“疾風の如く”でコナン達を救出したハヤテの姿があった。

咲夜

「でやっ!!」

ザンツ!!

咲夜が振り下ろしたハリセンが、コナン達の縄を叩き切った。



「バ、バカな！」

刃

「アタシの雷は……当たるわ。」

刃の放った電撃が、3人の男を直撃した。

「な、な、な……」

後ずさる男の前に、スーツと伊澄が近づいて来た。

伊澄

「滅されなくなければ……おとなしく自首してくださいね」

「は、はい……」

こうして、宝石強盗達はアツサリと逮捕された。

ハヤテと咲夜とナギは、この日ほど伊澄を怖く思った日はなかったという。

そして、コナン達とハヤテ達は事情聴取につき合った後、警視庁前で別れた。

マリア

「え？ハヤテ君達今日コナン君や哀ちゃんに会ったんですか？」

ハヤテ

「ええ、なかなかカワイかったですよ。」

マリア

「そうですか。」

その夜、マリアはどこかへ電話をかけていた。

マリア

「もしもーし、志保さんですか？」

哀

「はい、どうもですマリアさん！」

マリア

「今日、ハヤテ君に会ったんですよ？どうでした？」

哀

「コナン君に負けず劣らずの美少女顔でしたよー！」

マリア

「今度そっちに『女性化する薬』を作りに行ってもいいですか？」

哀

「ええ！私も楽しみですから！」

コナン・ハヤテ

「!!!」

ゾクウツ・・・

その夜、コナンとハヤテは妙な寒気を感じたという・・・

ファイル368：神からの贈り物（ギフト）『1』

バリー

「・・・では、次の質問。『ナメクジがカミソリの刃の上を這っている』。君はカミソリを使いたい。』『どうする？』。」「

真希

「私が？そんな事聞かれてもねえ・・・私、まだムダな毛を剃る必要ないし、カミソリなんか使わないでしょ？」

バリー

「超能力中枢の動きを調べるためのただの質問だ。いいから答えて。」

真希

「えっと・・・『何もしない』。そんなカミソリ、気持ち悪いし。」

ヴ・・・

ヴヴヴヴヴ・・・

ピーツ・・・

『レベル10』

バリー

「（スゲエ・・・全計器が計測不能になるほどのパワーだ・・・！）えー・・・『レベル2』です！特に問題ありません！」

真希

「わー、よかった」

今日コナン達は何をしているのかというと、超能力の検査をしているのだった。

男女別に分かれ、それぞれ担当が検査をする。

片桐真希と如月風月の検査が終わり、金田一ユリの検査も終わろうとしていた。

バリー

「はい、ユリちゃんも終わり！」

ユリ

「お疲れさま！」

バリー

「じゃ、次の人ー！」

刃

「はい。」

キュン・・・

刃

「じゃ、まずは最初の質問。『キースさんとは週5回デートしている』。」

バリ

「質問するのはオレだ!!!!」

刃

「別にアタシの検査なんか必要ないじゃない？アタシとユリ、風月ちゃんと暁君、真希ちゃんは『レベル10』って知ってるでしょ。」

バリ

「その秘密が漏れないように、わざわざオレ達FBIが検査に来たんだ。ついでだから比較サンプルとして『シスターズX』のデータも取っとけてさ。」

刃

「一斉検査って好きじゃないわね。まるで魔女狩り。人間を品定めして選んでるって感じ。」

バリ

「確かにな・・・幼児の時から強力だったオマエやリリーちゃんと違って、オレやキースがこっち側に来たのも、この検査がキツカケさ。」

刃

「・・・そうなんだ？」

秀一

「ロスゴート先生！ちょっと・・・」

刃

「シュー！」

バリ

「どした、『赤井先生』？」

秀一

「2年生の方、ちょっと代わってくれないか？気になる数値の子がいるんだ。」

バリ

「わかった。じゃ、こっちは頼むよ。」

コナン

「あーあ、オレの炎の能力も哀の水の能力も『レベル2』かぁ・・・オレらの能力、強くもならないし、消えもしないし、中途半端だよねえ。」

哀

「どうせなら、どっちなになりたいと思わない？」

ユリ

「コナン君達はどっちがいいの？」

コナン

「うーん・・・完全に普通だったら面倒がなくていいとは思っけど・・・」

哀

「いつそレベル9級クラスぐらいいまで成長しちゃって、シスターズやブラザーズの一員になれたら、それはそれで楽しいかもね。」

言い忘れていましたが、片桐真希・金田ユリ・剣野刃・如月風月・常盤暁は、FBI捜査官のチーム『シスターズ&ブラザーズ』の一員です。

ピピピ・・・

真希

「！ゴメン、コナン君、哀ちゃん。」

刃

「アタシ達、急用が・・・」

コナン・哀

「あ、うん、じゃあね？」

真希

「・・・あの子？」

秀一

「榎原敦志。君達の学校の2年生だ。」

バリー



「任務ってほどの事もないんだが・・・」

キース

「彼の監視を頼みたい。ボスの許可はもらってある。」

ユリ

「どうしてまた？あの子、何かやらかしたとか？」

秀一

「イヤ、別に問題があるわけじゃないんだ。ESP検査の結果が妙でね。数値が異常に高いのに、反応は陰性・・・要するに、『超能力が発動しないエスパー』の可能性がある。」

バリー

「ただし・・・潜在能力はレベル8以上。しかも波形が不安定で、いつ能力が発動するかわからない。」

真希

「それ、事故でよくあるケースよね。何らかのキツカケで爆発しちゃうのよ。」

キース

「ええ、子供にはよくある事だね。そのままエスパーになる子もいるし、パワー放出後、普通に戻る子もいる。」

秀一

「いずれにせよ、山場はこの数日だな。万一の暴発に備えて、しばらくついてほしい。できればコッソリね。」

真希・ユリ・刃・風月

「了解！」

秀一

「ようし、それじゃ……FBI捜査官チーム『ザ・シスターズX』  
、解禁！！」

キュイイイッ……

真希

「行くわよっ！！」

ヒュパッ！！

まきはのあつし  
榎原敦志『帝丹小学校2年』

「……再検査か……なんでボクが……」

ヒュパッ！

真希

「よっ！」

ユリ

「こんにちは！」

風月

「あなた、榎原敦志君でしょ？」

敦志

「だ、誰!？」

刃

「同じ学校の1年生よ。」

秀一

「コッソリつつつたのに……!!」

バリ

「ま……まあ、『できれば』だからな。それより……」

キース

「シユウ、あの子達に話しとかなくて良かったの?」

秀一

「え?」

バリ

「ファイル見てないのか?あの男の子……父親が反エスパー団体『普通の人々』の支援者だ。万一エスパーになったりしたら、ちょっと面倒な事になるかもしれんぞ。」

ファイル369：神からの贈り物（ギフト）』2」

バリ

「いいのか？ シュウ。あの子がエスパーになると、ちょっと面倒だぞ。」

キース

「何せ父親は、反エスパー団体の支援者なんだからね。」

敦志

「1年生・・・？ みんなエスパーなの！？」

真希

「そ、レベルは10・・・じゃなくて2。私・片桐真希と如月風月ちゃんは、それぞれ水と春夏秋冬の念道能力者<sup>キ・デンキ・ホノオ・コササコキ</sup>で、こっちは・・・  
雷の接触感応能力者・剣野刃ちゃん<sup>サイコメトラ</sup>と、雷の瞬間移動能力者<sup>テレポーター</sup>・金田一ユリちゃん。」

刃

「よろしくねっ！」

敦志

「・・・でも・・・別にオレ、エスパーだと決まってるじゃないし。先生に言われて話をしに来たって・・・その話、何かおかしくね？」

ユリ

「う！ そ・・・それは・・・」

刃

「尾行とか面倒くさいから？」

風月

「お……おかしいとかおかしくないとかじゃなくてっ……」

真希

「キレイでカワイイ女の子が4人も来たという段階で、とりあえず細かい事は忘れて喜びなさいよ!? おりゃーっ」

ユリ

「そうよ、考えちゃダメ! 楽しも!! ね!？」

風月

「1名様、「あんなーい御案内!！」

刃

「……アタシ達、ホッタクリ悪質バーの客引き要員みたいよ……?」

真希

「確かにエスパーになると面倒な事も多いけど……超能力を持つてみたくない人間はいないでしょ? もしエスパーになったらどんな感じか……話だけでもしてみたくない?」

敦志

「……それは……まあ……」

真希

「じゃあ、その辺ゆっくり……あなたん家で」

敦志

「え、来るの!？」

バリー

「いいのか、放つといて？」

秀一

「まあ、任せてみよう。案外うまくやるかもしれないぜ？」

刃

「両親共普通で共働き？」

敦志

「うん、それぞれ高校と大学で教えてる。」

真希

「敦志君はさ、もしエスパーになるんだとしたら……どんな能力が欲しいワケ？」

敦志

「うーん、わかんない。どんな能力があるの？」

真希

「大きく分けると、『超感覚』<sup>イーエスビー</sup>と『念道力』<sup>ピーケー</sup>ね。念道力の代表は、私や風月ちゃんの『サイキネシス』。精神で物体を動かす能力。

レベルが上がるほど重い物体を動かしたり、細かいコントロールもできるのよ。人によつては、重力や磁場・風や雷を操つたり物体を燃やしたり凍らせたりのいる・・・レベル6〜8あたりで、自分の体を持ち上げて空を飛ぶ事もできるわよ。かなりの才能と特訓がいるんだけどね。似たタイプには、植物や動物等を操る物体操作能力者がいるわ。」

刃

「アタシは超感覚系の『サイコメトラー』。触つた物からいろんな情報を読み取れるの。後、アタシは雷に撃たれて帯電体質になつたから、放電もできるのよ。」

敦志

「触らないとダメなの？」

刃

「アタシの場合はね。接触なしの能力だと・・・遠くや物陰を見透かす『遠隔透視能力』。未来予知ができる『予知能力』。思考を読んだり送つたりできる『精神感應能力』。人との駆け引き・戦いには圧倒的に有利よ。犯罪捜査にも力を発揮するわ。」

ユリ

「他には『合成能力』つていうのもあるわね。いろんな力が入り交じつて、1つの能力になるの。中でも私とかが持つ『テレポーター』は最強の能力の1つよ。一瞬で別の場所に移動したり、壁をすり抜けたり・・・」

敦志

「でもさあ、好きなの自分で選べないんだろ？」

ユリ

「普通はね。」

刃

「でもあなたの場合、もうすぐ急な目覚めが起きるかもしれないの。もしアタシ達はその瞬間に立ち会って、力の方向をコントロールすれば・・・脳がその使い方を覚えて、定着する可能性があるわ。」

真希

「つまり、今なら能力を選べるって事！」

風月

「オマケにレベル8以上なら、即、FBI入りは確実！」

ユリ

「レポートにしときなよ！私と仲間よ？」

刃

「サイコメトリーがいいわよね？アタシが教えてあげる。」

敦志

「・・・何でアンタ達に？レベル2じゃFBIなんか関係ないじゃん？」

真希

「うー！」

ユリ

「そ、そうだった。」



刃

「た、例えばの話よ?」

秀一

「アイツらの近くで、念度反応が上昇してる……」

バリ一

「フーン、なるほどね。本人をその気にさせて、アッサリ目覚めさせちゃおうってハラだな?」

秀一

「いいんじゃないか? アイツらなら多少の爆発も抑え込めるだろう。」

キース

「だけど、能力が定着するとは限らないのよ? その気になっても、すぐに力は消えてしまつかも……」

秀一

「……!」

バリ一

「どっつした?」

敦志

「あ……」

「……友達か？敦志。」

敦志

「お、お帰り、父さん。」

真希・風月・ユリ・刃

「おじやましてまあす」

「ESPリミッター……エスパーか。」

敦志

「う……うん。でも、あの……」

「別にかまわぬが、勉強があるんだから早めに切り上げるよ。」

コツコツ……

刃

「……」

キュン……

刃

「え……」

ドン。

『超能力が  
世界を破壊へ  
導く』

瀬名大学産業教育学科  
助教授

槇原敦盛・著』

真希

「『超能力とは従来の平和な社会を覆すものに他ならない。エスパ  
ーの増加は人間の生活に深刻な悪影響を及ぼす……』……って、  
敦志君の父親ってこの本の著者？」

ユリ

「アチャク、そりゃ困ったわね。」

真希

「私、一言文句を……」

刃

「やめなさいっ！……」

真希

「どっつして……？」

ユリ

「話がややこしくなるからっ！……」

真希

「だって、エスパーになっても親がこれじゃ……」

パンー!!

ガシャン!!

ユリ

「え?何!?!」

真希

「わ、私じゃないよ!?!」

風月

「って事は……」

敦志

「え……」

真希

「もう一回やってみて!今の感じで!」

敦志

「オ……オレ?でも……まさか……!?!」

刃

「やれるわ。超能力中枢が活動してきてる。』できる』って信じてみて。」

ユリ

「んで、こう……頭の上に穴が開いて、それがスーッと下に降り

て来て、体が中にくぐるイメージを……」

敦志

「スーッと……？」

ヒュウウウウン……

ギンツ！！

ヒュパツ！！

真希

「やった！！」

ヴーッ、ヴーッ……

秀一

「発動した……！！」

敦志

「わ……あああーっ！！（これが……オレの超能力……！！）」

ファイル370：神からの贈り物（ギフト）『3』

敦志

「（オレに・・・こんな能力が・・・）って、落ちるーっ！ー！ギヤ  
ーッ！ー！」

ゴオオオオオ・・・

真希『自分の体を持ち上げて、空を飛ぶ事もできるのよ。』

敦志

「・・・！止まれ！止まれ！止ま・・・ーっ！ー！」

キン！

ビタッ！

敦志

「や・・・やった！ー！」

ヒュッ！

バガッ！！

敦志

「ギャッ！ー！」

真希『かなりの才能と特訓がいるんだけどね。』

敦志

「ク・・・クク・・・クハハハハハ・・・！！スゲエや！！今日からエスパーだ！！アハハハハハッ！！！！」

秀一

「見失った！？お・・・おい！彼は無事なんだろうな！？」

刃

「ケガはないみたい。落下の直前に念力で体を浮かせてるわ。予想以上に爆発的な力が出てるみたいね。こっちの読みより遠くに飛んじゃって・・・」

風月

「オマケに、複数の能力まで・・・」

ユリ

「早いトコ保護した方がいいわね。」

秀一

「ど・・・どうしよう、バリー！？」

バリー

「・・・あの子達に任せるって言ったのはシュウだろ？何を今さら・・・しかし、『シスターズ』を出し抜くほどとはな・・・ま、あんなパワー後1時間も続かねえよ。逆に言えば、今が一番危険だが。」

キース

「でも、ある日突然強力なエスパーになった子供が、次にやる事なんか限られてるでしょ。」

秀一

「何だ？」

バリ

「考えてみ？」

秀一

「粗大ゴミの整理？それとも部屋の模様替え？」

キース

「ダメね、シュウ。」

真希

「……！！何となくわかるような気が……」

秀一

「え？」

真希

「遠くには行ってないよ！学校付近の公園や遊び場にいると思う！」

刃

「そっか……！！でもそれって、一番マズいんじゃない？」

風月

「ええ……」



ユリ

「だから、早く止めなきゃ！」

ヒュパッ！！

秀一

「どういう事だ？オレにはよく・・・」

バリー

「まあ、わからんならわからんでいいぞ。」

「いいモン持つてるじゃないかよ？生意気だぞ、オマエのクセに！」

「止めるよ、返してよー！」

「うるせえ！オマエの物はオレの物！オレの物もオレの物だ！！！」

「止める・・・！！！」

「ん？」

ヒュパッ！！

ザン！

敦志

「ク・・・クククク・・・ソイツを返せ。いつもいつもそんなマネしやがって・・・!!」

「あ〜ん？敦志じゃねえか！なんだ〜？やるのかあ〜!？」

グイツ！

「力づくでやってみるよ？オラ!!」

敦志

「ク・・・クククク。」

ググ・・・

バギィ!!

「イダツ!!イデデデデ!!テメエ・・・何を・・・!？」

敦志

「フン、いつでも・・・いつでもオマエがボスだったよなああつ!？だが、今日からは・・・もうキサマの指図は受けんつ!!」

ゴオオオオオ・・・

「え、何!？どしたの!？何かあからさまに戦闘力上がってる感じ!？」

敦志

「その通りだ!!ウハハハハ!!」

「ちよつ、ちよつと待て!!オマエ、何をする気……」

敦志

「くらえ!!ギタギタにしてや……」

カツ!!

真希

「調子に乗りすぎでしょ!!」

ドガツ!!

敦志

「ベツ、」

真希

「は……恥ずかしいマネするんじゃないっ!!」

敦志

「よ……よくもこのオレの高貴な顔にキズを!？」

ユリ

「うっわ、目覚めてものの5分でもう超<sup>スーパー</sup>サイヤ人並に増長してるわ。」

「

風月

「早っ!」

刃

「よくある事よ。強い力が急にになると、ハイになるのよね。」

「力って・・・超能力の事!？」

「え!？でもアイツのパパは・・・」

真希

「イヤ、まだそういうワケでもないんだけど。」

「エ、エスパー・・・!？」

敦志

「邪魔すんなよ!アイツ、いつも横暴でスツゲーヤなヤツなんだ!今だって・・・」

真希

「ちよつと来なさい!」

グイツ!

敦志

「でも、」

真希

「いいから!」

ユリ

「んじやつ、ゴメンね。」

刃

「後で謝らせるから！」

敦志

「何だよ！？何でオレが悪者なのさ！？」

真希

「当たり前でしょ！？」

風月

「子供のケンカに超能力なんか使う子は、」

ユリ

「嫌われて当然よっ！」

刃

「その場はスツとしても、後で居づらくなるわよ。」

敦志

「かまうもんか！FBIで働けばいいんだ！」

真希

「あなた今、精神状態が普通じゃないんだから、とりあえず落ち着きなさい！」

ユリ

「先輩の言う事は聞くものよ。」

敦志

「先輩！？オレより年下のクセに、レベル2ぐらいでエラそうにすんなよ！？オマエらにオレの気持ちなんかわからねえよ！！ガタガタ言つとやっちまうぞ！！」

カツ！！

バキイン！！

真希

「いい加減にしないと、私達怒るわよ！！」

敦志

「・・・！！レベル2なんかじゃない・・・！？アンタら一体・・・」

グワツ！

敦志

「フツ、おもしれえじゃん！！本気でやったらどこまで力が出るか・・・試してみようぜ！！！！」

ドゴオ！！

真希

「キヤ・・・！！」

ユリ

「真希ちゃんーっ！！」

真希

「この子・・・!」

秀一

「で？その連中、どっちに!？」

「あっち。」

ファイル371：神からの贈り物（ギフト）『4』

敦志

「フツ、おもしろえじゃん！！本気でやったらどこまで力が出るか・  
・試してみようぜー！ー！」

ドゴォー！ー！

真希

「キャ・・・！ー！」

ゴツ・・・！ー！

真希

「こ・・・この子・・・！ー！」

敦志

「アンタら、結構強いんだろ！？オレがどの程度のエスパーなのか、  
教えてくれよ！ー！？」

真希

「・・・わかつたわ。私達の本当の姿・・・見せてあげる！ー！ユリ  
ちゃん！変身よ！ー！」

ユリ

「え〜？本当にやるの〜？」

敦志

「へ・・・変身？」



真希

「FBIモード、トランスフォームッ!!」

ヒュパッ!

ユリ

「えーっと、キレイに並べてっど・っど」

モタモタ・・・

真希

「早くしてっ!!」

ユリ

「で、服だけをテレポート交換っ!!」

ヒュッ!

パパパパッ!

風月

「地球の未来は私達が変わえる!」

刃

「世界の平和はアタシ達が守る!」

ユリ

「戦う愛の美少女四人娘!!」  
フォース・ザ・ヒューディ

真希

「我ら、4人そろって!!」

真希・風月・ユリ・刃

「絶対可憐シスターズX!!!」

真希

「……って、ダメじゃん!これ、後ろ前!!後、某少女アニメヒロインみたいな変身シーンがないよ!？」

ユリ

「練習中なのに、難しい要求ばかり!」

刃

「プリキュアやパワパフZみたいな変身シーンが、どうしているワケ?」

敦志

「え……FBI……!!なるほど?そういつ事だったのか……!!」

真希

「フーン、ますますやる気って表情カオね?」

秀一

「いない……今度はどこ行ったんだ、アイツら?」

バリ

「ん？このハンカチ……」

スツ……

バリ

「もしかして、リアンちゃんのか？」

秀一

「ああ……そうか、置き手紙だ！透視してみてください！」

キュン……

バリ

「……フーン。どうやら、問題はなさそうだ。リアンちゃん達に任せたオレ達の判断は、間違っていないかったって事だな。」

キース

「それより、あの子の家に急いだ方がいいわ。行きましょ！」

敦志

「ここでもいいトコ見せれば、オレもFBIで働けるって事じゃねえの!？」

ユリ

「真希ちゃん、気をつけて！」

刃

「向こうは手加減するウデなんかないわよ。」

真希

「わかってる。あんなバカに、好きな事はさせないわよ。」

敦志

「なんだとー！！！！？」

ギョーンッ！！

バキン！！

敦志

「！！！！」

真希

「・・・たいしたものじゃない、あなたの力。でもね・・・イキがる相手が、ちがうのよっ！！！！」

バツ！！

敦志

「！！？何の話・・・」

ビタッ！

敦志

「!?!」

真希

「認めさせたい相手がちがうって言うてるの!あなたが『スゴい』  
って言うってほしいのは、本当に私達や友達・・・?どうしてそんな  
にムキになって、自分の能力アピールするのよ?」

敦志

「・・・!!そんな事・・・!!」

ゴキン!!

敦志・真希

「え!?!」

バキバキバキ・・・

ゴガガガ・・・

刃

「橋が・・・!?!」

真希

「ヤバい・・・橋が崩れる!?!」

敦志

「え・・・!?!」

真希

「橋は私が支える!?!ユリちゃん、今のうちに人を橋から移動して

「!!」

ユリ

「了解!!」

ヒュッ!!

刃

「あ……リリース、あれ!!」

ユリ

「!?!」

キキツ……

ガシヤアアアア!!

ユリ

「マズい!!オイルが……!!」

風月

「火がついたらおしまいよ!?!」

真希

「ダメだわ!橋の方で手一杯……」

ギュギュ……

真希

「敦志君!?!」

敦志

「ここはボクが支えてる！」

真希

「でも、あなたのパワー、いつまでもこんなには……」

敦志

「だから、早くっ!!！」

真希

「わかったわ、しばらく頼む！風月ちゃん!!！」

風月

「OK!!！」

ドンッ!!！」

真希・風月

「ハアアアアアツ……!!！」

ガバアアアツ!!！」

「！エスパーか!？」

ヒュパツ!

ユリ

「見てる場合じゃないよ！逃げるのよ!!！」

キキキツ・・・

敦盛

「あ・・・敦志・・・!？」

秀一

「緊急事態！事故が発生！！至急、応援を！！」

敦志

「ぐ、おおおお・・・っ！！！」



ファイル372：神からの贈り物（ギフト）『5』（前書き）

オリジナルキャラクター・ファイル34

まききはら あつし  
槇原敦志

コナン達を通う帝丹小学校の2年生で、少しプライドが高い男の子。帝丹小学校で一斉に行ったESP検査の結果、『数値が異常に高いのに、反応は陰性・・・要するに、『超能力が発動しないエスパー』の可能性があり、しかも潜在能力はレベル8以上。しかも波形が不安定で、いつ能力が発動するかわからない』という結果が出た。

そのため、万が一超能力が暴走した時のために、真希達が監視に付いていた。

その後、超能力が発動し、真希達を出し抜くほどの強大なエネルギーを発生。

いつもイジメをしていたガキ大将を懲らしめようとするも、真希達によって咎められる。

その後の騒動もあつたためか、超能力は最終的に念動力サイコキネシスに絞られ、レベルも4〜6の間に落ち着いた。

父親の敦盛あつもりはエスパーの存在に警鐘を鳴らす著書も執筆した大学産業教育学科助教授で、反エスパー組織『普通の人々』の支援者だった。

ところが、敦志がエスパーになってからは逆にエスパーの立場から警鐘を鳴らす側に考えを変えた（要するに彼は単なる親バカだった）。

彼の情報で『普通の人々』北杯戸支部と南鳥矢支部、並びに西奥穂支部と東利善支部は壊滅した模様。

片桐真希の後輩となり、今後彼女に熱心な指導を受ける模様。

真希の事は微妙に意識している。

その後の真希の発言や態度から、本当につき合い始めた事が判明した。

ファイル372：神からの贈り物（ギフト）』5』

ピンポン！

敦盛

「どなた？」

秀一

「超能力支援研究局の者です。息子さんの事で、少しお話が・・・」

敦盛

「敦志の・・・!？」

カアアアン・・・

秀一

「・・・そんなワケで、ウチのエスパーと一緒にいます。彼女があなたを連れて来て欲しいと・・・」

敦盛

「バカな！息子がエスパーになどと・・・」

バリー

「気持ちはわかりますがね、普通の両親からもエスパーは生まれません。両親が不活性だったからといって、超能力の因子がないとは限

らないのですよ。ところが何かのキツカケでESPが顕在化すると、以後その状態が受け継がれるんです。」

敦盛

「じよ、冗談じゃないぞ！！この先、私の子孫はエスパーになると・  
・・そういうのかね!？」

バリ

「お気の毒です。」

キース

「気の毒ってこたないでしょ!？」

秀一

「こう考えていただけませんか？たとえあなたにとつて好ましいものであつてもなくても・・・敦志君の才能は、『ギフト神贈物』なんです。何か意味があつて、彼に与えられたのではないでしょう。祝福してやらねば、それに背く事になる・・・と。」

敦盛

「・・・」

秀一

「第一、超能力はそんな恐ろしい物じゃないですよ。家や車をぶん投げて破壊するようなパワーは滅多に・・・」

バリ

「!!お・・・おい、ありや何だあ!？」

キキーツ・・・

キース

「クレーンが橋に・・・」

バキバキ・・・

グワツ！！

真希

「サイキツクウ！！」

秀一

「ま・・・真希ちゃん！？君、何を・・・」

真希

「バックドロップ！！」

ブンツ！！

秀一

「投げたーっ！！」

ドガアアアアーン！！

秀一

「そして爆発したーっ！！」

ビシッ！

秀一

「衝撃で近隣の家が少し壊れたーっ!!」

敦盛

「・・・!!」

秀一

「イツ・・・イヤッ、ちがいます!! きっとこれには何か理由が!  
! たぶん!! 否、絶対!!」

刃

「当たり前でしょ、失礼ね!」

風月

「私達は事故の処理をしてただけよ!」

秀一

「リアン! 風月ちゃん!」

ヒュパッ!

ユリ

「赤井さん!? この人達を病院に! 他の人は軽傷よ!」

秀一

「リリース君!」

刃

「連れて来てくれたのね?」

秀一

「……それでよかったかどうか、今微妙な気分だけだな。」

敦盛

「……！敦志……！！」

敦志

「う……おお、おおおおーっ！！！！」

刃

「敦志君が橋を支えてくれてるおかげで、真希ちゃん達も救助活動に専念できたの。でなきゃ、もっと大変な事になってたわ。」

敦盛

「アイツが……！！」

フワツ……

真希

「よし、がんばったね！」

風月

「私達が代わるわ！」

敦志

「よかった……！！もう限界だったん……だ！？……！！と、  
父さん……！！！！」

## 第19面談室

バリ

「最終的に敦志君の能力は、サイコキネシス念動力に絞られたようです。レベルも4〜6の間に落ち着きました。」

キース

「これはESPリミッターを使えば生活に支障はなく、しかもFB I本部で訓練すればさらにのばす事もできるレベルです。」

秀一

「……なんで部屋の中に卓袱台チャブだいがあるんです?」

ジエイムズ

「お父さんが怒って暴れ出した時、安全にひっくり返せるようにだ。部屋の中の物全てが特殊素材でできているのだ。」

秀一

「税金つてスゴいな、おい……」

真希

「でも……もしあのオジサンが、あれをひっくり返すような事になったら……(子供の超能力を認めてくれないような父親だったら……私達……!!)」

敦盛

「……エスパーが増える事は誰にも止められない。社会学者とし



て、私はその事はわかっていっているつもりだ。だが、世の中は、急激な変化にはついていけない！エスパーは今の社会を混乱させ、必ず普通人間と対立する事になる……！！」

バン！！

真希・ユリ・風月・刃

「（あの本出た！！）」

秀一

「（ヤバい！！）」

敦盛

「私は普通人間の立場から、それに警鐘を鳴らし、家族と社会を守ろうとしてきたのだ！！それが……自分の息子がエスパーに……！！！！」

バリー

「イ……イヤ、しかし！それは誰のせいでもないですし、彼は……」

敦志

「（オレ……やっぱりもう家にはいられなくなる……）」

敦盛

「うがあああーっ！！！！」

バツシイッ！！

ジエイムズ

「卓袱台ではなく自分の本を投げたーっ!!」

秀一

「怒ってる!?!」

だむっ!!

グリグリグリーツ・・・

ジエイムズ

「そして踏みつけたーっ!!」

秀一

「これ何?怒ってる!?!何に對して!?!?」

敦盛

「こうなってしまったのなら、話は別だあ!」

敦志

「え?」

敦盛

「今後はエスパーの立場から警鐘を鳴らし、ノーマル普通人間共から家族を守るっ!!」

ギユウウウツ・・・

敦志

「と、父さん・・・!!」

敦盛

「世界一のエスパーになれ、敦志ーっ！ー！！」

真希・風月・刃・ユリ・秀一・ジエイムズ・バリー・キース

「（た・・・ただの親バカだったあーっ！ー！！）」

敦盛

「敦志をよろしくお願いします！こちらでコイツの力を伸ばしてやってください！！」

バリー

「ハ・・・ハア・・・」

敦盛

「後、憎むべき反エスパー団体の情報も提供しましょう！それで、北杯戸支部と南鳥矢支部、並びに西奥穂支部と東利善支部は壊滅するハズです。」

キース

「4つもある割には範囲狭いわね、それ！？」

敦盛

「『普通の人々』はどこにでもありますからね。組織の細胞は横のつながりを持っていないのですよ。」

真希

「よかった・・・認めてもらえて・・・！！」

こうして、榎原敦志君は真希の後輩になりました。

ファイル373：消えない傷跡（トラウマ） 『前編』

『ねえ、まだあの女来てるよ？』

『学校来なきやいいのにねー。』

『あの紫の瞳がムカツくのよ！』

『ちよつとイジメてやる！』

『や・・・やめて・・・やめてよ・・・やめ・・・やめてええええええ〜っ！〜！〜！』

刃

「ハアハアハアハア・・・」

ムクツ・・・

刃

「ハアハア、ハアハア・・・」

チラツ・・・

平次

「スー、スー・・・」

刃

「夢か・・・またこのイヤな夢・・・最近こんな夢ばかり・・・いつになったら消えてくれるの・・・？あの、忌まわしい夢は・・・」

コナンと哀は、いつもと同じように手をつないで登校して来た。

教室に入って来た2人に、早速歩美が声をかける。

歩美

「おっはよ！コナン君、哀ちゃん！」

コナン・哀

「おはよ！」

光彦

「朝から手をつないで、ラブラブですね〜！」

コナン・哀

「・・・」

2人は顔を赤らめる。

たくま

「ひょっとして、それ以上の事してるんじゃないの？」

コナン・哀

「な、何もしてないって！」

風月

「そうかなあ〜？この前私、コナン君達が保健室で仲良く添い寝してたの見ちゃったんだけどなあ〜？」

コナン・哀

「なっ!!」

ユリ

「あら？そついう風月ちゃんだって、体育の授業の間に暁君と・・・

」

風月

「わっ!!言わないでっ!!」

風月も顔が真っ赤になった。

暁

「そついえば、この前のESP検査で陰性だった子、どうなったんだ？」

暁が話をそらした。

真希

「超能力が無事発動。そんでもって私の後輩になったわ。」

マリア

「フーン。」

元太

「そついえば、刃ちゃんはどつした？」

コナン

「そついえば、まだ来てないね・・・」

哀

「変だなあ、いつもならとっくに来てる頃なのに・・・」

その時、教室の扉が静かに開いた。

ガラガラ・・・

刃

「・・・おは・・・よう・・・」

コナン

「や、刃ちゃん・・・!?!」

いつもの刃とは全くちがいで、明るい表情が消えている。

その表情はとても暗い。

哀

「ど、どうしたの・・・?」

刃

「なんでも・・・ないの・・・」

その刹那、刃は床にバタリと倒れた。

ドサツ・・・

コナン・哀・風月・歩美・マリア・真希・暁・たくま・元太・光彦  
「や、刃ちゃん!!!」

ユリが刃を抱き上げた。

ユリ

「刃ちゃんは私が保健室に連れて行くわ。」

コナン

「お願いね。」

ユリ

「ええ。」

ユリは刃を保健室へと運んで行った。

刃

「ん・・・」

ユリ

「あら、やっと起きたわね。リアン。」

刃

「リリース・・・あなたがアタシをここに？」

ユリ

「ええ。」

刃

「そっか・・・また助けられちゃったわね、リリースに。」



ユリ

「困った時はお互い様よ、リアン。」

ユリはクスリと微笑んだ。

刃もつられて笑う。

刃

「ねえ、リリース？あなたが初めて帝丹小学校に転校して来た時、アタシが話した話覚えてる？」

ユリ

「ええ、もちろん覚えてるわよ。あなたが私に打ち明けてくれた事・  
・あなたが帝丹小学校に転校する前寝屋川小学校にいた頃、その『紫の瞳』を理由にイジメられていた話をね・・・」

果たして、刃の消えない傷跡とは何なのだろうか・・・  
トラウマ

ファイル374：消えない傷跡（トラウマ） 『中編』

刃

「ねえ、リリース？あなたが初めて帝丹小学校に転校して来た時、アタシが話した話覚えてる？」

ユリ

「ええ、もちろん覚えてるわよ。あなたが私に打ち明けてくれた事・・・あなたが帝丹小学校に転校する前寝屋川小学校にいた頃、その『紫の瞳』を理由にイジメられていた話をね・・・」

果たして、刃の消えない傷跡トラウマとは何なのだろうか・・・？

回想・・・

寝屋川小学校

『今日から皆さんとお勉強する事になった、けんやいば剣野刃さんです。みんな、仲良くしてあげてくださいね。』  
『はい・・・』

休み時間になると、刃の周りに自然と男子が集まっていた。  
『なあ、剣野さんって生まれはどこなん？』

刃『お、大阪だよ・・・』

『ほな、オレらと同じで関西弁しゃべれるんやな？』

刃『でも、長い事外国にいたから、そんなにうまくは・・・』

『心配あらへんて！オレらが教えたるさかいな！』

刃『あ、ありがとう・・・』

クラスのほとんどの男子陣は、刃のそのポニーテールの髪型と、『紫の瞳』がカワイイと思っていた。

そのため、男子陣に囲まれている刃が、女子陣は面白くなかったのだ。

人気があるだけなら、まだいい方だろう。

ところが刃には、一部の女子陣の彼氏達までもが惹かれていったのだ。

その事で、余計に刃は女子陣に恨まれていたのだった。

そしてある日を境に、刃へのイジメが始まった・・・

刃の机に落書きをしたり、下駄箱の靴の中に画鋏を入れたり・・・そしてまたある時には、トイレに連れて行ってイジメるといふ事までされていた。

日を増すごとに、イジメはエスカレートしていった。

しかし、刃は何も言わなかった。

どうせ、後数ヶ月もすれば平次のついで別の学校に転校できる。

それまでは我慢しようと思っていたのだ。

しかしそんな刃の頑張りを、イジメていた女子陣は容赦なく踏みにじったのだ・・・

ある時、刃は校舎裏に呼び出され、女子陣にイジメられていた。

手足を縛り上げられた状態で、刃は殴る蹴るの暴行を受けていた。

刃『ケホッ、ケホッ！もう止めて！どうして、こんな事をするの！？』

『アンタがアタシ達の彼氏達まで奪ったからや！！』

刃『そんな・・・アタシ、知らないよ！』

「アンタにその気がなくても、男子らを誘ってるんや！その『紫の瞳』でな！！」

刃「そんなの・・・言いがかりだよ・・・」

「そやったら、もう学校に来れなくしてやる！！」

女子の1人が、竹刀を振り上げた。

刃「もう・・・止めて・・・」

「何しとるんや、アンタら！」

「ヤバツ！！学級委員の江坂と、副委員の八木、ほんで風紀の大沢や！！」

「逃げるで！！」

刃をいじめていた女子連中は、足早に逃げ去っていった。

バサツ・・・

江坂繭美「さあ、もう大丈夫やで。」

繭美達は、刃の手足の戒めを解いた。

刃「ありがとう・・・ねえ、どうしてあなた達はここまでしてくれるの？ただのクラスメイトなのに・・・」

八木幹彦「それはやな・・・ボクらが浪花の少年探偵団だから！」

刃「浪花の・・・少年探偵団・・・？」

大沢健太「そや！ワイらは学級の平和を守ると同時に、大阪の平和も守ってるんやで！」

刃「へエ・・・スゴいなあ・・・」

繭美「なあ、刃ちゃん。ウチらの仲間にならへんか？」

刃「アタシが・・・あなた達の仲間になっ？」

幹彦「そや。ボクらの仲間になったら、イジメられる事かてきつとなくなるで！」

刃「でも・・・いいの？アタシ、こんな憎たらしい瞳をしてるのに・・・」

健太「全然憎たらしくなんかあらへんよ！」

繭美「ウチは好きやで？アンタのその瞳がな。」

幹彦『まるで、スミレみたいでキレイやんか!』

刃『あ……ありがとう……』

こうして、刃は浪花の少年探偵団の仲間入りをした。

転校するまでに数多くの事件を解決し、イジメていた女子陣からも一目置かれるようになっていった。

そしてもう、彼女をイジめる者は1人としていなくなった。

幸せな気分のまま、刃は帝丹小学校に転校していったのだ……

回想終了

ユリ

「そうだったわね、そんな過去があったんだよね、リアンには……

」

刃

「うん……」

ユリ

「そんなに嬉しい事があったのに、どうして私にあんな話をしたのかな?」

刃

「だって、あんな思いをしたのは初めてだったから……」

ユリ

「小学生の女の子も、今はマせてきてるって事じゃないの？」

刃

「そうなのかなあ・・・」

ユリ

「そういう事だと思うよ。第一、この学校に来てから、そんなイジメは1度も受けていないんでしょっ？」

刃

「うん。」

ユリ

「だったら、もっと自分に自信を持たなきゃ。」

刃

「そつだね。じゃあ、今日はアタシもつ早退するよ。」

ユリ

「そつ。気をつけて帰ってね。」

刃

「うん。」

ユリが教室に戻って来ると、コナン達が刃の状態を聞いてきた。

コナン

「刃ちゃんは大丈夫だった？」

ユリ

「ええ、たぶん疲れてたんでしょうね。今日はもう早退するって言って、さっき出ていったわ。」

哀

「よかった、何ともなくて。」

ユリ

「うーん……」

歩美

「どうしたの、ユリちゃん？」

ユリ

「私今日学校に来る時、刃ちゃんと来たんだけど……何か、後ろから変な人が私達の事見てたんだよねえ……」

真希

「ヤダ、怖い。」

風月

「そついうのって、ストーカーっていうのよね？」

暁

「ああ、女性に男性がつきまとう悪質な犯罪……近年では、真逆

のケースもあるってニュースでやってるけどね・・・」

ユリ

「フーン、そうなんだ・・・（待てよ？もしあの男が、私かリアンの事を狙っていたんだとしたら・・・）ああっ！！」

ユリの顔が真っ青になった。

ユリ

「ヤ、ヤバい！！！」

そう叫ぶが早いか、ユリは走り出していた。

刃はゆっくりと路上を歩いていく。

その表情はどこか明るい。

刃

「フウ・・・リリースに話して良かった。何か、頭の中がスッキリした感じだ・・・もう、あの夢を見なくなればいいんだけどなあ・・・」

そんな事を思っている彼女が、気づくはずもなかった。

自分の横に、怪しい車が近づいてきている事など・・・



そして、次の瞬間・・・

ガバツ！！

刃

「キヤアツ！？」

刃は体をつかまれ、横付けしてきた車の中に引きずり込まれた。

刃

「な、何す・・・うぐっ！！」

刃を引きずり込んだその何者かは、彼女の口をハンカチで塞いだ。

刃

「うぐっ、うぐっ！！」

刃はしばらくもがいていたが、やがて目がトロンとなっていた。

刃

「うう・・・（ね、眠・・・い・・・）」

刃はそのまま気を失った。

『ん？何だこの時計みたいな物は？邪魔だな。』

バキッ。

ポイツ！

ブ  
オ  
オ  
オ  
オ  
・  
・  
・

ファイル375：消えない傷跡（トラウマ） 『後編』

それから、どのくらいの時間がたったのだろうか？

刃はようやく、目が覚めようとしていた。

刃

「ん・・・」

刃はゆっくりと目を覚ました。

刃

「（ここはどこ・・・？アタシ、一体・・・）！！」

刃は体を動かそうとしたが、体は動かなかった。

なぜなら、彼女の手足はロープでキツく縛られていたからだ。

刃

「（ど、どうなってるのこれ！？）ん、んんっ・・・！！！」

叫ぼうとした刃だったが、口に何か粘着性の物が貼りつけられているようで、声が出なかった。

刃

「ん、んんっ！！（こ、この粘着性はガムテープ・・・！！これのせいで声が出ないんだわ・・・ちよつと待って！手足が縛られていて、口も塞がれているって事は・・・まさか、アタシ・・・）」

「ん？お嬢ちゃんが起きたようだな。」

刃

「（えっ？）」

刃が前を見ると、助手席から1人の男が彼女を見ていた。

それと、運転席側からも男がチラチラ見ている。

どうやら刃は、車の後部座席に寝かされているようだ。

「お目覚めか？お嬢ちゃん。」

刃

「ん〜、ん〜！！（あなた達、何者よ！？）」

刃はもがいた。

「オレ達か？オレ達は、借金しちまった2人組さ。」

刃

「ん、んん！？（しゃ、借金・・・？じゃあ、まさかアタシは・・・）」

「察しがついたようだね。そうだよ。お嬢ちゃんはオレ達にさらわれたんだ。」

刃の予想は的中である。

刃

「ん、んん……!!!(や、やっぱり!!アタシ、この人達に誘拐されたんだわ……!!!)」

「しかし今回はうまくいきましたね、兄貴!」

「バカ野郎!オレ達はいつも一時は成功しているんだよ!運が少し悪いだけの事だ!」

実はこの2人組、『ハヤテのごとく!』でおなじみの誘拐犯コンビだった。

毎回一時は誘拐に成功するのだが、必ず毎回誰かに倒され逮捕されるのである。

そして、脱獄に成功しては性懲りもなくまた誘拐を実行しようとする……

要するに、学習能力が全くない2人組なのだ。

「とりあえず、アジトに着いたらお嬢ちゃんから親の電話番号を聞き出して、身代金の要求だ!」

「へい!」

刃

「ん、ん、ん!!!(だ……誰か助けて!!!)」

同じ頃、ユリは必死に走っていた。

ユリ

「ハアハア、ハアハア……」

ユリは懸命に走る。

大切な親友を救うために。

ユリ

「ハアハア……（急がなきゃ！リアンが危ない……）」

しばらく走ったユリは、路上に何かが落ちているのを見つけた。

ユリ

「ん？」

ユリはそれを拾い上げる。

ユリ

「こ、これって……リアンのESPリミッター……！じゃあ、リアンはここから誰かに連れ去られて……！？」

ユリは顔が真っ青になった。

ユリ

「急がなきゃ……！」

そう思って走り出した瞬間、ユリは誰かにぶつかった。

ドカツ!!

ユリ

「キヤツ!!」

「あっ・・・」

ユリ

「アイタタタ・・・すみません、前方不注意で・・・」

「いえいえ、こちらこそ・・・あら？ユリさん？」

ユリ

「その声は・・・伊澄さん!？」

そう、ユリにぶつかったのは、鷲之宮伊澄であった・・・

ちなみにユリは伊澄と面識がなかったが、伊澄はハヤテからユリの情報は得ており、ユリもハヤテから伊澄の事を聞いていたのである。

ユリ

「ここで何してるんですか、伊澄さん・・・？」

伊澄

「チヨウチヨを追いかけていたら、いつの間にかこの場所に・・・」

ユリ

「え・・・」

ユリは目が点になった。

ユリ

「きよ、驚異的方向音痴……って、それどころじゃなかった！実は、私の親友がさらわれてしまって……」

伊澄

「まあ、それは大変……では、私も協力いたします。行きましよう。」

そう言うと、伊澄はお札を取り出した。

伊澄

「八葉六式……絨毯召還。」  
カーペット

伊澄が唱えると、お札が大きなカーペットになった。

ポウン！！

伊澄

「さあ、乗ってください。」

ユリ

「あ、はい！」

伊澄とユリはカーペットに飛び乗った。

伊澄

「行きますよ！」



カーペットは急発進した。

伊澄とユリは、カーペットで空を飛んでいる。

ユリ

「スゴいですね、この術……どうやって覚えたんですか？」

伊澄

「大おばあ様に習いました。私がよく道に迷うので。ところで、さらわれた刃さんは今どこに？」

ユリは追跡メガネのスイッチを入れていた。

ユリ

「ここから南東の方角です！」

伊澄

「南東ですね……飛ばしますよ……！」

誘拐犯の2人組は、上機嫌状態であった。

縛られた刃は、まだもがいている。

刃

「ん、ん……」

その時、上空から声が聞こえた。

伊澄

「収束・撃破滅却!!」

集中したエネルギー波が、車のボンネットを貫いた。

ドス!!

「な、何だあ!？」

あわてふためいている2人組の目の前に、スッと伊澄が現れた。

スツ……

その手には木刀・正宗が握られている。

伊澄

「この私に斬り捨てられたくなければ……おとなしく投降してください」

「は、はい……」

こうして誘拐犯の2人組は逮捕され、刃も無事に助け出されたのでした……

ファイル376：江戸川コナン君の怖い物とは・・・？（前書き）

オリジナルキャラクター・ファイル35

はりま あかし  
播磨紅子

兵庫県警の警部で、刑事部長であるヒメガワケイサク姫川啓作の娘。

父親と名字がちがうのは、亡くなった母親の名字を忘れたくないから。

母親の名前はハリマ カスミ播磨香澄で、階級は警視正。

紅子が子供の頃強盗事件で殉職した。

コナンの正体である新一のお世話役で、学生の頃から幼い新一と仲が良い。

そのため、彼の正体も初登場の時点で知っていた。

新一の事を非常にカワイがっており、実の弟のように思っている。それゆえ、一緒に露天風呂に入る事も躊躇しない天然さんである（案の定、コナンは蘭と入った時と同じく鼻血を出してしまった）。

新一を弟のようにカワイがっているが、恋愛感情は少ししかない。

中学時代の同級生で、彼女のために犯罪に手を染めてしまったニイジマ タモツ新島保（彼女には彼の犯罪を止められなかった悔しさがある）に、10

年後感謝の気持ちと共に好意を寄せるようになる。

その彼は他の同級生と共に、今後登場する予定。

ファイル376：江戸川コナン君の怖い物とは……？

それはある日の工藤邸での事であった。

ふと、哀がこんな事を言い出したのだ。

哀

「ねえ、成美さん……」

成美

「はい？」

哀

「コナン君って、スゴい子ですよね……」

成美

「スゴすぎますよ。手先が器用でサッカーの才能があって、オマケに推理力は神的レベルで……」

哀

「弱点とか……ないのかしら？」

成美

「は？」

哀

「だから弱点ですよ弱点。ユリちゃんがへビ嫌いだったり、風月ちゃんやんがウサギを怖がりたりするアレ。何というか、コナン君ってスゴいけど……ちょっと困らせたくなるオーラが出てるじゃないで

すか!?!」

『女装させられたコナンの図』

コナン』もぐ、やめてよ哀ちゃん……』

成美

「ま……まあ、否定はしませんが……」

哀

「でしょ？だからコナン君には弱点って必要だと思っただけですよ。って事で、コナン君の弱点と予想される品を、ハテナBOX風に用意してみました!?!」

バン!

成美

「ハア……じゃ、じゃあハテナの『テ』を。」

哀

「オープン!?!」

バツ!

ゲコツ……

ガクガクガク……

成美

「……あの……哀ちゃん?」

哀

「そんな不気味な物を近づけないで!! 気持ち悪いじゃないですか!! とにかく、そんな物はサッサと下げてください!!」

成美

「ハア・・・(だったら、用意しなければいいのに・・・)」

ポイツ。

哀

「やはりハテナBOXなどに頼ろうとした私達がバカだったわ。」

成美

「イヤ、私達って・・・アタシは別に・・・」

哀

「やはり弱点は観察によって見つけなくちゃ。」

成美

「ハア・・・」

哀

「それにしてもコナン君、何をしているのかしら?」

コナン

「よし、これも正解と・・・フー、休みの合間によつやく古文の弱点を克服したよ・・・」

哀

「（ちいい、私達がモタモタしているから見なさい！コナン君の貴重な弱点が1つ克服されてしまったじゃないですか！！）」

成美

「（イヤ、別にいいんじゃないですか？それは・・・）」

哀

「ええい、まあいい。他に弱点とか苦手な物はないかじっくり観察よ！」

成美

「あ、でも見てください・・・」

コナン

「うーん・・・哀、サバ、このままだと食べないからなあ。少しミンチにして、血生臭い匂いはショウガで消して・・・シイタケやナスビも苦手だし、ワサビとか辛いのは絶対ダメだし・・・ピーマンも微塵<sup>ミジン</sup>切りにしないとなぜかハシが進まないし。あー、サケの皮も苦手だったな。」

哀

「う・・・」

成美

「弱点や苦手な物をじっくり観察されてますねー。」

コナン

「こんなに好き嫌いが多いから、健康が・・・」

哀

「うるさい、バカア!!」

ドガッ!!

哀

「まったく!コナン君は本当に・・・」

哀

「やはりこうなったら・・・定番の弱点で攻めるしかないわね。」

成美

「は?」

その夜・・・

哀が着ているのは、ハロウィン用に買って来たオバケの衣装。

哀

「ウフフ、どうですか成美さん。これはビックリでしょ?」

成美

「ええ。何かもういろんな意味でビックリです。」

哀



「夜暗い所でオバケが出て来たら、怖がらない子はいないからね。完璧ね、これは。」

成美

「(っっていうか、それはあなたの弱点なのでは?)」

哀

「よし!では行くわよー!」

成美

「はいはい。じゃあ電気は消しといてあげるから、1人で行ってらっしゃい。」

パチ。

パツ!

哀

「ん?イヤイヤ成美さん、まだ早い。まだ早いって。」

成美

「そうですかー?でも、これくらいしないと怖がってもらえませんかよ?」

クルツ!

ボワツ・・・

ブルブルブルブル・・・

哀  
「うう〜・・・」

成美  
「イヤイヤ・・・だから、この程度でそんなに怖がらなくても・・・」

コナン  
「あの・・・さっきから何をやっているの？」

哀  
「む！コナン君！！ええい！だったら単刀直入に聞いてやる！！！コナン君！！あなたの怖い物は一体何なの！！！」

コナン  
「えーっと・・・ここらで一杯、お茶が怖い・・・？」

哀・成美  
「・・・（江戸時代のオチーっ！！）」

意味がわからない人は、『饅頭<sup>まんじゅう</sup>怖い』という落語を見てね。

哀  
「ねえ。「このままじゃ面白くない。」

コナン  
「じゃあ、今回は2本立てって事で・・・」

刃とユリの場合

刃  
「え？怖い物？」

ユリ  
「そうよ。最強のエスパーであるリアンでも、怖い物とかあるのか  
な〜って……」

刃  
「えーっと……怖い物かあ……あ！あるわよ。」

ユリ  
「お！何なのそれは？」

刃  
「アタシ、芋虫イモムシが怖いだよ。」

ユリ  
「へ〜。な〜んだ、意外と普通のが怖いのね〜。」

刃  
「体長13メートル体重9トン。口から火を吹き糸は猛毒。触るだけで自然発火し、シベリアの約80パーセントを壊滅させ、後3分倒すのが遅れていたら地球が死の惑星と化していたかと思うと……」

ユリ  
「『怖い』の意味がちがうわよお！〜っていうかそれ芋虫じゃない  
し！〜！」

・・・お後はよろしかったでしょう？

## ファイル377：花鳥風月殺人事件『1』

それは、月明かりが美しいある日の夜に起こった。

その美しい月明かりの下で、1人の男性が絶命した。

その遺体のそばには、彼を殺害したと思われる謎の黒い影があった。

黒い影は、絶命した男性の遺体を眺めながら、ほくそ笑む。

『これは『花鳥風月』の『月』・・・これでやっと1人目だ・・・  
だが、これではまだ足りぬ・・・後3人・・・『花』『鳥』『風』  
を示すアイツらを死に至らしめなければ、私の復讐は完了しない・・・  
・だが、すぐに終わらせてやる・・・私が描く、『花鳥風月』の芸  
術をな・・・』

黒い影は高笑いしながら、遺体をどこかへと運んでいった・・・

コナン達少年探偵団は、3日前に起きた殺人事件について図書室で話し合っていた。

コナン

「『月明かりの下で男性の遺体発見』か・・・」

哀

「犯罪もどんどん謎めいてくるわね・・・」

刃

「『月明かりの下で殺された』っていうのに何か意味があるのかしら？」

ユリ

「そうだと思うわ。たぶん、犯人は見立て殺人みたいな事をしたんじゃないかしら？」

真希

「『月明かりの下』って事は、示す言葉は『月』か・・・」

マリア

「何なんやるな、一体・・・」

その時、教室の扉が静かに開いた。

ガララッ・・・

風月

「みんな・・・おはよう・・・」

風月が眠そうに目をこすりながら、教室に入って来た。

コナン

「おはよう、風月ちゃん！」

哀

「なんだか眠そうね・・・夜更かしでもしたの？」

マリア

「あるいは、ネットゲで徹夜したとか……」

暁

「ちがうよ。昨日花鳥さんが夜遅く帰って来て、叩き起こされたんだよオレと風月……」

眠そうにアクビをしながら、暁も教室に入ってきた。

たくま

「暁君！」

暁

「だいたい、愛妻の風月に夜更かしだなんてオレが普段させてないし。」

風月

「／／／／／暁……／／／／／」

真希

「ところで、どうしてそんな夜遅くになって風月ちゃんのお母さん帰って来たの？」

風月

「母さんね、母さんの姉の羽鳥さんと久しぶりに会って、喫茶店で談笑してたっていうの。その時羽鳥さんが、『良かったら来ない？』って言って、長野への旅行券をプレゼントしてくれたのよ。」

暁

「羽鳥さんは今、長野に住んでいるからね。」

風月

「どつする？みんな行く？」

コナン

「もちろん！」

哀

「私達も行くわ！」

風月

「じゃあ、明日の朝出発って事で・・・」

翌日、米花町のバス停に、コナン達が集まった。

花鳥

「よし、みんなそろったわね。」

風月

「じゃあ、出発しましょ！このバスは母さんの貸し切りだから。」



## ファイル378：花鳥風月殺人事件『2』

バス内で刃とユリは、カラオケで歌を熱唱していた。

刃・ユリ

「7つの海を渡る風のように〜碧い未来に夢描くよ〜 胸がつぶれ〜そんな程振り向くといつも〜君がいる〜熱く君がいる〜 強く君を〜感じ〜たい〜 7つの海を〜渡る風のように〜・・・」

刃とユリは、仲良く『7つの海を渡る風のように』を歌いきった。

もちろん、バス内からはコナン達の拍手が起こる。

真希

「2人共歌上手だね〜！」

元太

「この2人、休みの日しょっちゅうカラオケに行ってるんだよ。おかげでユリさんは毎月お金が減るって、嘆いてるんだぜ。」

歩美

「あらまあ・・・」

マリア

「ほな、次はウチやな！三枝夕夏の『かけがえのない想い君に届け』いつきま〜す〜！！」

その後も歌合戦は続き、コナンと哀以外のメンバーは名探偵コナンやその他諸々のアニメの主題歌を歌いまくった。

コナン

「じゃあ、最後はオレと哀だな。水平線上の陰謀ストラテジーより、『思い出達』を……」

歩美・刃・ユリ・風月・マリア・真希・光彦・元太・暁・たくま

「それは却下!!!」

コナン

「なんでだよ!!!」

歩美

「だってコナン君……」

マリア

「音痴やないか。」

コナン

「大丈夫だって!さ、歌うよ!哀!」

哀

「は〜い!」

歩美・刃・ユリ・風月・マリア・真希・光彦・元太・暁・たくま

「(み、耳栓つけなきゃ……)」

歩美達はそう思った。

しかし、コナンと哀が歌い出した瞬間、歩美達は耳栓を外してしまっただ。

なぜなら・・・

なんと江戸川コナンの音痴は、もう完全に直っていたのだから・・・  
!!!!

出発してから1時間後、コナン達を乗せたバスは目的地へと着いた。

ガチャツ・・・

トツ・・・

歩美

「それにしても驚いたわ・・・」

マリア

「まさかコナン君が、音痴が直っているどころかとてつもない美声で歌を歌えるようになっていたなんて・・・」

光彦

「一体、どんなスゴい家庭教師を雇ったんですか？」

コナン

「家庭教師というより・・・」

哀

「美保ちゃんに講師を頼んだのよ。いい加減コナン君には音痴を直してほしかったしね。」

これが、コナン美声化の謎の答えである。

つまり、作者の別小説『Changing Detective』との関係は全くない。

花鳥

「さて、羽鳥さんはどこにいるのかしら……」

「あ、来てくれたのね、花鳥！」

花鳥

「姉さん！」

たくま

「じゃあ、この人が……」

如月羽鳥きよひかり 八トリ

「皆さん、初めまして。花鳥の姉で風月の叔母の如月羽鳥です。よろしく！」

コナン・哀・歩美・刃・ユリ・マリア・真希・光彦・元太・たくま  
「よろしくお願いします！」

コナン達は羽鳥に挨拶した。

花鳥

「ところで、姉さん？こないだの事件の事だけど……平気？」

羽鳥

「ええ、もう落ち着いたわ・・・確かに夫が殺されたのは悲しいけれど、悲しみに暮れてばかりもいられないじゃない？」

コナン

「事件？」

哀

「何かあつたんですか？」

風月

「うん。実はこないだ・・・」

暁

「あ、ちよつ、歩美ちゃん達どこに行くんだよ!？」

歩美

「みんなでこの辺を散歩して来ようかと思って。」

羽鳥

「だったら、私が案内するわ。この町の一角にキレイなお花畑があるから、そこでお昼を食べましょう。」

コナン達は、羽鳥の案内でお花畑へと向かった

羽鳥

「着いたわ、ここよ。」

歩美

「わあ、キレイ！」

真希

「これは美しい光景ね・・・」

刃

「・・・ん？」

刃が地面に手を当てた。

ユリ

「どうしたの、刃？」

刃

「どこかからか血の匂いがしてる・・・」

刃は辺りを見回した。

刃

「！！あつちだわ！！」

刃は走り出した。

コナン

「あ、刃ちゃん！」

コナン達も、彼女の後を追っていく。

タタタタタ、タタタタタ・・・

コナン

「一体どうしたの？刃ちゃ・・・。！！！」

コナン・哀・歩美・刃・ユリ・マリア・真希・光彦・元太・たくま・  
風月・暁

「こ、これは・・・！！？」

コナン達の目の前にあったのは、お花畑の中で花に囲まれ息絶えて  
いる男性の遺体であった・・・

ファイル379：花鳥風月殺人事件『3』

コナン達の目の前に突然出た、1人の男性の遺体・・・

さながらそれは、お花畑の中で静かに眠る神のようであった。

といっても、まだコナン達はこの男性が死んだとは知らない。

しかし、刃がすぐにそれを気づかせた。

男性の脈を測る刃。

しばらくして、刃は口を開いた。

刃

「ダメね・・・もう手遅れだわ。亡くなってから約2日は経っている・・・」

コナン

「そうか・・・」

哀

「とりあえず、警察に電話しましょ。」

コナン達は、警察に通報した。



1時間ほど経って、警察が到着した。

「おやあ？確か君はコナン君じゃないか？」

コナン

「え！？」

コナンは声を出した人物をよく見てみた。

コナン

「ぐ、群馬県警のヘッポコけい……じゃなくて、山村刑事……」

そこに立っていたのは、群馬県警の山村刑事だった。

歩美

「あゝ、山さん！」

光彦

「お久しぶりですね。」

山村ミサオ

「久しぶりだね、少年探偵団の諸君。ちなみに私はもう刑事ではないよ。この間警部に昇進したのだよ！」

元太

「な、何だつて〜！？」

哀

「人は見かけによらないものね……」

ミサオ

「ところで……君達、しばらく見ない間に随分とメンバーが増えてないか？」

コナン

「ああ、ここ最近でメンバーが増えたんだ……」

刃

「剣野刃です。」

ユリ

「金田ーユリです。」

風月

「如月風月です。」

真希

「片桐真希です。」

マリア

「東尾マリアです。」

たくま

「坂本たくまです。」

暁

「常盤暁です。」

刃達は、順番に挨拶をした。

ミサオ

「随分人数が増えたんだねえ……まあ、そんな事はさておき……」

コナン

「そういえば、山村警部って群馬県警でしょ？ここ長野県だよ？何でいるの？」

ミサオ

「警察学校時代の後輩が長野県警に勤めていてね……この事件、自分達では手に負えそうにないから、ボクが呼ばれたってワケなんだよ。」

哀

「あまり変わらないと思うけど……うっ……！」

コナンがあわてて哀の口を塞いだ。

コナン

「哀、そんな事言っちゃダメだって……！」

哀

「モロモロ……」

ミサオ

「ん？哀？哀ちゃんの事を名前で呼んでるって事は、コナン君と哀ちゃんはずき合ってるのかい？」

歩美

「そうなの！お互いに名前で呼び合ってるし、も〜四六時中ラブ  
ブで・・・」

風月

「それを言うなら歩美ちゃんと光彦君だって・・・」

ユリ

「あらあ？風月ちゃんだって暁君と激ラブでしょ〜？」

刃

「ユリは元太君と親密な関係で〜・・・」

歩美達は言い合いを始めた。

マリア

「止めんかい！ドアホ！！」

マリアが歩美達を木刀で叩いた。

バシバシバシバシッ！！

歩美・刃・ユリ・風月

「イタ〜ッ・・・！！」

光彦

「・・・話がそれましたね・・・」

元太

「だな・・・」

暁

「山村警部、コイツらの事は放つといていいですから、事件の概要を説明してもらえますか？」

ミサオ

「あ、ああ。そうだね。」

山村警部は、コナン達に事件の概要の説明を始めた。

ミサオ

「まずは第1の事件からだね、柊木君！」

ひしひきかすゆま  
柊木和雪『長野県警刑事』

「はい。第1の犠牲者は、霧沢香月……月明かりの下で刺殺体で発見されました。職業は、政治家です。」

真希

「その人なら知ってるわ。お父さんがこの前逮捕した、悪徳政治家だもの……」

コナン

「悪徳政治家？」

真希

「『汚れた政治家』とか『悪魔の政治家』と言った方が正しいわね。とにかくたくさんの賄賂なんかを受け取って、私腹をこやしていた人よ。一度逮捕されたんだけど、法外な保釈金ですぐに釈放されちゃって……お父さんは、何とかして霧沢を再逮捕しようと思って

いたわ。でも、その矢先にこんな事になるなんて……」

ミサオ

「君のお父さんってもしかして、片桐正義さんじゃないかね？」

真希

「あ、はい。そうですね……」

ミサオ

「どおりでお父さんと瞳が似てると思ったよ。あの人の瞳は、まさしく刑事にふさわしく……」

マリア

「警部さん？そんな事くつちゃべってんと、早う第2の犠牲者の事話してくれへんか？」

ミサオ

「ああ、そうだったね……」

和雪

「第2の犠牲者は鷺尾梅花<sup>わしお ばいか</sup>。花畑の中に毒殺体で倒れていたのを、コナン君達が発見したワケです。職業は医者ですね。」

真希

「鷺尾梅花。金儲けしか考えていない最低の医者ね。金儲けのためなら、患者にワザとキズをつける事もいとわないのよ。」

マリア

「呆れた人間やなあ……」

コナン

「(香月に……梅花……?)」

哀

「どうしたの、コナン君？」

コナン

「あ、イヤ……なんか、この2人に共通点がある気がするんだよなあ……」

哀

「共通点ねえ……」

そんな事を言っていると、柊木刑事の携帯が鳴った。

和雪

「はい、こちら柊……え？竜巻が鋼町を襲ってる!？」

コナン

「何だって!？」

哀

「行きましょ、山村警部!！」

ミサオ

「ああ!！」

コナン達は、鋼町へと向かった。

鋼町に着くと、ものすごい竜巻が町を襲っていた。

ゴオオオオオ・・・

コナン

「な、なんて強力な竜巻だ!!」

哀

「このままじゃ、私達吹き飛ばされるわよ!!」

風月

「イヤ・・・あれは誰かが作った人工の竜巻よ。」

刃

「え?」

風月

「人工竜巻なら、私の力で消せる!ウインギコル・スプリイス!!」

風月が放った冷気の風が、あっという間に竜巻を凍らせた。

風月

「滅せよ!サマザケル・スプリイス!!」

続けて放った雷で、竜巻は爆発した。

風月



「さあ、これで大丈夫・・・!?」

竜巻が消えた場所には、1人の男性が息絶えていた・・・

『（あの娘、何者だ・・・？あの娘をこのままにはしておけん・・・  
何とかしなければ・・・クツクツク・・・）』

現場検証が始まった。

第3の犠牲者は菅原風雅。  
すがわら ふうが

山村警部や柊刑事と同じく、刑事である。

しかし、菅原は2人とは明らかにちがっていた。

昇進のためなら何であろうがする男。

それこそ、犯人を殺す事にも躊躇しない。

そんなワケで、彼を恨んでいる者は多かった。

ミサオ

「フォーム・・・この3人に共通する事といえば、3人共あまり評判  
が良くないと言う事だろうか？」

コナン

「それだけじゃないよ、山村警部！」

ミサオ

「どういう事だい？」

哀

「月明かりの下で刺殺された霧沢香月さんは……『月』!!」

刃

「花畑の中で毒殺されていた鷲尾梅花さんは……『花』!!」

ユリ

「人工の竜巻に吹き飛ばされ、即死した菅原風雅さんは……『風』!!」

ミサオ

「じゃあ、まさか……この殺人は……」

コナン

「ああ……3人共、ある有名な四字熟語になぞらえて殺されてるよ……天地自然の美しき景色……『花鳥風月』にね!!」

## ファイル380：花鳥風月殺人事件『4』

ミサオ

「花鳥風月？それになぞらえて、犯人は殺人を重ねているということか？」

コナン

「そうだよ、山村警部……」

コナンに続き、哀達が説明を始めた。

哀

「よく思い出してみて！立て続けに起こったこの3つの事件を……まずは霧沢香月さんが月明かりの下で刺殺された第1の事件……月明かりという事は月……つまり、『花鳥風月』の『月』よ！」

刃

「次に、花畑の中に鷺尾梅花さんを毒殺し置いた第2の事件……花畑の中に置いた事から、考えられるのは『花鳥風月』の『花』！」

ユリ

「そして、さつき鋼町で菅原風雅さんが人工の竜巻に吹き飛ばされ即死した第3の事件……竜巻が意味する言葉は風……」

ミサオ

「なるほど……『花鳥風月』の『風』ってワケか！」

コナン

「そうだよ！今確実にわかっている事は……花鳥風月にはまだ『

鳥』の字が残っていて・・・犯人は間違いなく、もう1人誰かの命を狙っているって事だけだ・・・」

ミサオ

「それで？次の標的が誰なのかはわかったのかい？」

コナン

「ううん・・・」

真希

「ねえ、コナン君・・・」

真希がコナンに話しかける。

コナン

「ん？」

真希

「もしかしたら、犯人は名前に花鳥風月の字が含まれている人を順番に殺してるんじゃないかしら・・・？」

哀

「という事は、次の標的は如月花鳥さんか羽鳥さんのどちらかって事？」

真希

「うん・・・2人共『鳥』の字が含まれているしね・・・」

風月

「じゃあ私、お母さんと羽鳥おばさんに気をつけるように言ってお

くわ・・・次はお母さん達のどちらかかもしれないってね・・・」

暁

「風月は大丈夫なのか？オマエの名前には・・・」

風月

「大丈夫よ、暁・・・『風』と『月』の殺人はもう終わったんだから、私が狙われる事はまずないわ。」

暁

「そうだな。」

和雪

「じゃあ、とりあえず2人の所に戻りましょうか？ボク達が急に走り出したから、心配しているかもしれないし・・・」

ミサオ

「そうだね。それじゃあ戻ろうか。」

コナン達が戻ると、最初に待っていたのは風月へのゲンコツだった。

ポカ！

風月

「イタッッ！」

花鳥

「風月！どこに行ってたの！心配したのよ！」

風月

「ごめんなさい……」

羽鳥

「それで、鋼町はどうなったの？」

羽鳥がコナンに聞いた。

コナン

「竜巻に巻き込まれて、菅原風雅さんが死んだよ。」

羽鳥

「そう……」

ミサオ

「とりあえず、あなた達はなるべく離れないようにしておいてください。特に如月さん姉妹はね……」

羽鳥

「……。もう昔のように名前で呼んでくれないの……  
ミサちゃん……」

ミサオ

「悪いが……今のあなたは幼なじみの羽鳥でも……ボクの部下  
だった如月でもない……被害者・霧沢香月の妻……容疑者の1  
人だよ……」

羽鳥

「……………」

刃

「（部下だったって事は…………）」

コナン

「（元は刑事…………）」

『ん？大きくなったらオレの嫁になるって？』

『うん！咎島巡査のお嫁さんにアタシなる！』

とがしましじどり  
咎島紫鳥 『ハハハ、それは勘弁してくれ羽鳥ちゃん…………それじゃ

オレがミサオに恨まれちまうよ…………』

羽鳥

「……………」

コナン

「え、咎島紫鳥巡査？」

ミサオ

「ああ・・・ボクや如月さん姉妹がよく遊んでもらってた、群馬県警の巡査だよ・・・1年前、不慮の事故で亡くなってしまったけどね・・・」

その時、カラスの鳴き声が辺りから聞こえてきた。

カーカーカーカーカー・・・

真希

「カラスの鳴き声か・・・」

コナン

「カラス・・・(カラス・・・鳥・・・!!まさか!?)」

何を思ったのか、突然コナンは走り出した。

哀

「あ、コナン君!？」

哀達も後を追っていく。

しばらく走り続けて、ようやくコナンは止まった。

哀

「もう、急に走り出してどうしたの・・・?あ!」



刃

「あ、あれは……」

風月

「羽鳥おばさん!」

なんと、飛び回るカラス達に囲まれるようにして羽鳥が倒れていた。

コナン

「(クソツ……『花鳥風月』の『鳥』かよ!?)」

一方、一番後ろにいた真希は、誰かに向けてメールを打っていた。

真希

「(『ターゲットは私の近くにいる……早急に私の所に来られたし、ファミリア・ファウナ』と……)フフツ……」

ファイル381：花鳥風月殺人事件『5』

コナン達の目の前に、如月羽鳥が倒れていた。

風月

「羽鳥おばさま!!」

風月が羽鳥に駆け寄る。

コナン

「これも連続殺人の1つって事になるのか？」

哀

「ええ・・・だけどそれは当然・・・羽鳥さんが絶命していたらの場合だけだね・・・」

哀の言葉と同時に、羽鳥が起き上がった。

羽鳥

「イタタタ・・・」

風月

「じっくりして、羽鳥おばさま!」

ユリ

「何があっただんですか？」

羽鳥

「森の中を歩いて帰っていたら、電話でここに呼び出されて・・・」

来てみたけど誰もいないんで途方に暮れていたら、突然後ろから誰かに薬を嗅がされて・・・」

刃

「今まで眠ってたってワケですね？」

羽鳥

「ええ・・・」

暁

「それにしても危なかったな・・・もしここで羽鳥さんが殺されていたら、花鳥風月の殺人がまんまと完成しちまうところだったよ・・・」

マリア

「そやね・・・羽鳥さんの名前には『鳥』の字が含まれているし、間一髪やったな・・・」

たくま

「気になるのは、なんで犯人が羽鳥さんにトドメを刺さずに立ち去ったか、だな・・・」

元太

「いざ殺そうって時になって、急に怖くなったんじゃないのか？」

歩美

「あるいは、誰かと間違えた事に気づいて逃げ出したとか・・・」

光彦

「どちらも考えられますね・・・」

コナン・哀

「……」

ミサオ

「とにかく、これで事件は一段落しました……。如月羽鳥さんには我々の元で休んでもらいます。また狙われたらいけませんからね……。皆さんには、鋼町の喫茶店に集まってもらいます。くれぐれも勝手な行動はとらないように！」

そう言うと、山村警部は羽鳥を連れて歩いて行った。

哀

「これで本当に終わったのかしら？」

コナン

「さあな……」

そんなコ哀の疑問を、1人の少女が打破する。

真希

「イヤ……。この事件、まだ終わってはいないわよ……」

真希はそうつぶさやき、歩いて行った。

コナン・哀

「真希……ちゃん？」

コナン

「霧沢香月さんが月で、鷺尾梅花さんが花・・・」

哀

「菅原風雅さんが風で、さっき殺されかけた如月羽鳥さんが鳥・・・」

「

刃

「本当にこれで終わったのかしら・・・？」

ユリ

「真希ちゃんは、『まだこの事件は終わってない』って言ってるけど・・・」

暁

「サツパリわからんなあ・・・」

その時、風月が声を上げた。

風月

「みんな・・・私、ちょっとトイレ行きたくなくなっちゃった・・・」

風月は手をモジモジさせながら言う。

暁

「なら、サツサと行って来いよ・・・」

風月

「うん．．．」

風月はトイレへと走って行った。

風月はトイレに駆け込み、カギを掛けた。

風月

「フウ．．．」

風月は電気を点ける。

パチ！

風月

「え！？」

風月の目の前には、覆面をかぶった人物がいた。

風月

「あ．．．あ．．．」

風月

「キヤッ！」

風月は悲鳴を上げた。

コナン・哀・刃・ユリ・元太・歩美・光彦・マリア・たくま・暁・  
真希

「!?!?」

悲鳴を聞きつけたコナン達は走り出す。

トイレのドアを開けて駆け込むと、風月の靴だけが落ちていた。

暁

「ふ、風月いっつ!?!」

暁は叫び声を上げた。

刃

「どうして、風月ちゃんが・・・?」

ユリ

「待って!もしかして、この事件の犯人って・・・」

コナン・哀

「!?!」

哀

「なるほどね・・・そういう事だったの・・・」

コナン

「どうやらこの事件・・・まだ終わっちゃいねえみたいだな・・・」

コナンと哀は、不敵な笑みを浮かべた。



## ファイル382：花鳥風月殺人事件『6』（前書き）

オリジナルキャラクター・ファイル36

如月花鳥きげひかり

如月風月の母親で、元黒の組織の一員。

風月と共にナイトに最も近いビショップクラス級の実力者で、『マラガ』のコードネームを持っており、最初はジンの命を受けて帝丹小学校に潜入していた。

しかし、第1章の『天空上の恋愛劇ラブアリス』の後ジン達と共に組織を裏切り、今はペンデュラムアッド壊滅のために日々努力している。

羽鳥という姉がおり、姉は山村警部と恋仲関係にある。

ちなみに花鳥は風月を授かってすぐに夫を病で亡くしたため、女手1つで風月を育ててきた苦労人であり、風月には何不自由なく過ごせるように努力してきたらしく、そのため風月を白皇学院に入れる事にも何の躊躇もしなかったんだとか（しかし当時風月が組織の事で悩んでいた事には気づけなかった）。

ベルモットなどと同じく変装術を得意とする。

かなりの天然ボケ。

ディテイクティブマスター達を統率する7天王の1人でもある（最近就任したらしい）。

橘ワタルのメイドであるサキとは親しく、彼女に頼んで特注のメイド服を作ってもらい家ではそれを着ている（メイド服にしたのは花鳥の趣味）。

花鳥には『ハヤテのごとく！』のマリアのように、呼べば瞬時にやって来る彼女直属の部下達がいる。

常盤暁の事は男の子として認めており、彼なら風月の事を任せられると思っ込んでいるせいか、任務で海外に行っている時は風月の世話を暁に任せている（要するに、ある意味放任主義）。

ファイル382：花鳥風月殺人事件『6』

喫茶店のトイレから、突然何者かに連れ去られてしまった風月。

コナン達はあわてていたが、唯一あわてていないのが真希であった。

なぜなら、彼女はもう応援を頼んでいたのだから・・・

謎の人物は風月を抱え、森の中を疾走していた。

風月はトイレで薬を嗅がされ眠らされたらしく、グッタリと気を失っている。

「風月をどこに連れていく気？犯人さん。」

「！」

謎の人物が前を見ると、そこには花鳥が立っていた。

謎の人物は無言のまま、風月を近くの木に寄りかからせた。

そして、花鳥をにらみつける。

花鳥

「そうでしょう？長野県警刑事・・・柊木和雪さん？」

謎の人物は、覆面を取り去った。

その下には、穏やかなあの刑事の面影はなかった。

和雪

「いつわかったんです？私がこの連続殺人の犯人だと・・・」

花鳥

「真相に気づいたのは、山村警部が言っていた事をコナン君に聞かされた時よ。『咎島紫鳥』という名前をね。そう・・・1年前に殉職した刑事・・・警察では事故死だと処理していたけど、実際にはちがっていた・・・あなたが咎島さんを手にかけたのよ・・・猟銃を使ってね！」

和雪

「その通り。私ともみ合いになった挙げ句猟銃が暴発し、咎島さんは谷底に落ちたんだよ・・・そのままいけば事故死で片づけられたのに、あの場にいたんだよねえ・・・その事故を見ちまっていた人達が・・・」

花鳥

「私と風月、香月さんと梅花さん、そして風雅さんの事ね・・・」

和雪

「そうさ。その内のあの3人が、警視庁に真犯人の事を告白しに行くなんでぬかしやがるから、口封じさせてもらったのよ・・・ちょうど連中の名前が咎島さんと私を含めて『花鳥風月雪月花』となる事に気づいたから、それになぞらえてね・・・」

花鳥

「じゃあ羽鳥姉さんを襲ったのは、私と後ろ姿が似ていたからまちがえたってワケ？」

和雪

「そうさ。まさか後ろ姿が似ていたとは思わなかったからねえ・・・  
咎島紫鳥が『鳥』、霧沢香月が『月』、鷺尾梅花が『花』、菅原風雅が『風』・・・アンタと風月ちゃんが『花』と『月』、そして私が『雪』・・・そう・・・真相に気づいたアンタと風月ちゃんは私と共に果てるのだよ・・・この鳥達に殺られてなあ！！」

和雪が笛を吹くと、何十羽という数の鳥が周りを取り囲んだ。

花鳥

「あなた、自分も死ぬつもりなワケ？」

和雪

「ああ・・・真相に気づいたアンタと風月ちゃんが私ともみ合いになり、この猟銃が暴発して死んだという筋書きにしてね・・・さて、おしゃべりはここまでだ・・・」

そう言うと、和雪は猟銃を花鳥に向けた。

花鳥

「クツ・・・」

その時、木の影から声が聞こえた。

「イルミリオ！！」

ボシユ!!

和雪

「な!?!」

和雪の猟銃が、跡形もなく消え失せる。

花鳥が驚いていると、木の影から2人の少女が現れた。

ザッザッ・・・

和雪

「お、おのれ・・・かくなる上は烏達で・・・」

「シン・ファミア・ジガディウス・ヴァレフェゾーラ!!!」

突然無数の光のムチが、烏達を食い尽くした。

和雪

「な・・・な・・・」

和雪が呆気にとられている間に、花鳥は和雪との間合いを一気に詰め、和雪に回し蹴りを喰らわせた。

ドガッ!!

和雪はそのまま気絶した。

こうして風月と花鳥は無事に保護され、柊木和雪は殺人の罪で長野県警に連行されて行った。

ミサオ

「じゃあコナン君！君達も後で事情聴取に来てもらおうよ！」

コナン

「うん……」

ミサオ

「アンタもだ！ちゃんと警察に来るんですよ!？」

羽鳥

「え、ええ……」

ミサオ

「じゃあ……」

羽鳥

「あ、わ、私……」

ミサオ

「ん？」

羽鳥

「私、この事件の犯人に早めから気づいてて……そ、それで私、犯人捕まえるために香月さんと……ゴメン……こんな事言ったら主人に悪いわね……彼が私の事を愛してくれていたのは確かだ」

し・・・」

ミサオ

「バーカ！今言っただろ？警察に來いって・・・しがらみが抜けて、気が落ち着いたら戻って來な！先輩方もボクも待つてるよ・・・オマエの入れてくれる、最高のコーヒーがまた飲めるのをな・・・」

羽鳥

「うん・・・」

刃

「あら？何だかあの2人・・・」

ユリ

「良い感じね！」

コナン

「じゃあ、事情聴取が終わったら聞かせてもらおうよ？」

哀

「どうしてあなたがここにいるのかをね・・・ファミリア・ファウナ・・・」

ファミリア

「ええ、もちろんよ・・・」

## ファイル383：ファミリアの真実と新たな誓い！！（前書き）

オリジナルキャラクター・ファイル37

ファミリア・ファウナノはやみ颯崎ファミ

真希の意思から生まれた、最強のエスパー。

しかし、最初に現れた彼女はウイズという黒幕が欲望で生んだプロトタイプで、ウイズの命令のままに暴れコナン達を襲っていた。

しかし、そのプロトタイプが刃によって倒された事によりウイズも敗北。

本当のファミリアが改めて真希の意思から生み出された。

消滅系（ただし今は光属性）の能力を操る超能力者だが、根はとても優しく、パートナーの綾崎新美を大切にしている。

人間達を守る事が、彼女本来の役目である。

コ哀と握手を交わし合い、コナン達と共にペンデュラムアッド打倒を心に誓う。

結構天然ボケ。

真希の事はコナン達がいる前では『真希ちゃん』と呼び、2人きりの時は『マスター』と呼ぶようにしているらしい。

だが最近は2人きりでも真希ちゃんと呼ぶ事が多いらしい。

どういうコネかは知らないが、蘭達の通う帝丹高校に通っている事から見て、年齢は17歳程度と考えられる。

なぜか片桐邸にいる時はメイド服を着ている（『ある人物』に着てと言われて着ているらしい）。

帝丹高校に通っている時の名前は、ハヤサキ颯崎ファミ。

兄にファミリアと双子の少年、デュリオアがいる。

昔真希と実希がデュリオアによってキズつけられたため、兄であるにもかかわらず『同じ血が流れているのも汚らわしい』とデュリオアを毛嫌いしている。



双子の兄であるデュリオアを探し出し殺すよう真希に指示を受けていたが、その後何の因果か6章で和解したらしい（しかし彼女自身はこの事が気に入らないのか、デュリオアを睨みつける描写がある）。

。実は彼女にはモデルの女性がいるが、ファミリアとは性格が真逆の不良である（後にその少女はファミリアによって懲らしめられた）。

## ファイル383：ファミリアの真実と新たな誓い！！

群馬県警での事情聴取を終えたコナンと哀は、工藤邸に帰って来ていた。

もちろん歩美達も一緒である。

そして、あのファミリア・ファウナも・・・

コナン

「じゃあ、そろそろ話してもらおうか？」

哀

「あなたがなぜ生きているかという事をね。」

ファミリア

「ええ、もちろん教えてあげるわ。だけど・・・正確に言うと、私は別の人間なのよね・・・」

刃

「え、それってどういう事？」

ファミリア

「私は確かにあの時、刃ちゃんに斬られて爆発した・・・でも、あの時の私は言わば、プロトタイプだったのよ・・・」

ユリ

「プロトタイプ？」

ファミリア

「そうよ。あの私は実験体というか何というか・・・とにかく、あの時の私は最強のエスパー『ファミリア・ファウナ』を完成させるための試作品だったってワケ。」

風月

「そうだったの。」

暁

「じゃあ、今のアンタはオレ達の味方なんだな？」

ファミリア

「ええ。というより、あの試作品の私はあのウィズが真希ちゃんの意味を読み取り、勝手に改造した個体だったのよ。」

マリア

「そやから、あのファミリアは勝手に暴れまくり、ウチらを消しまくったってワケやな？」

ファミリア

「ええ。確かに私は消滅系の能力を操る超能力者だけど、本来私は人間達を守るために生み出されたエスパー・・・勝手に世界を滅ぼそうとした試作品の私は、ウィズの欲望が生んだ魔女だったってワケよ。」

歩美

「良かった、ファミリアさんが敵でなくて。」

ファミリア

「ええ、私もコナン君達とお友達になれて嬉しいわ。」

コナン

「ところで、ウィズに乗り移られていたレイ・アヤミの事だけど・  
」

哀

「今はどうしてるの？まさか、まだ病院で入院中なの？」

ファミリア

「何言ってるの？あの子ならコナン君達の近くにいるわよ？」

コナン・哀・歩美・光彦・元太・ユリ・マリア・たくま・風月・暁・  
刃

「え？どこに？」

コナン達は辺りを見回す。

ファミリア

「ホラ、私の後ろに……」

コナン・哀・歩美・光彦・元太・ユリ・マリア・たくま・風月・暁・  
刃

「え！？」

コナン達がファミリアの後ろに目をやると、そこにはコナン達と同じく小学生の少女が顔をのぞかせていた。

「こ、こんにちは……」

ファミリア

「この子が、ウイズに乗り移られ、操られていたレイ・アヤミその子自身よ。」

コナン・哀・歩美・光彦・元太・ユリ・マリア・たくま・風月・暁・刃

「ええ!!?」

ファミリア

「この子、小学校からの帰り道に火影にさらわれ、行方不明になったの。きつとその時に、ウイズに乗り移られたのね。もちろんこの子、かすかには乗り移られていた記憶はあるけど、自分が何をしたのかまでは全く覚えていないのよ。」

ファミリアの説明に、コナン達は言葉を失った。

ファミリア

「この子の本当の名前は綾崎新美<sup>あやまき ニナミ</sup>・・・綾崎ハヤテ君の従姉妹<sup>イトコ</sup>よ。」

コナン・哀・歩美・光彦・元太・マリア・たくま・風月・暁・刃  
「イ、イトコ・・・?」

ユリ

「そういえば、ハヤテ君に聞いた事があるわ。彼の従姉妹に、とても頭の良い超天才少女がいるって・・・それがこの子だったのね。」

ファミリア

「ええ、そういう事。」

たくま

「それにしても、何てヤツらなんだ！赤の組織は・・・」

マリア

「こんな小さな子を連れ去り、手先にするやなんて！」

歩美

「ますます野放しにはしておけなくなつたわね・・・」

たくまとマリアと歩美が怒りの感情をのぞかせた。

コナン

「みんな、誓い合おう！オレ達は絶対に、ペンデュラムアッドを叩き潰す！！」

哀

「そつよ！人を平気で道具のように使う輩を許してはおけないわ！！」

刃

「みんな、異議はないわよね？」

歩美

「ええ！」

光彦

「もちろんです！」

元太

「絶対に許しちゃいけないんだ！」

たくま

「人の性別を変えたり、幼い子を平気で操るその性根……」

マリア

「断じて許せるもんやあらへんな！」

ユリ

「私は母や姉の仇を絶対にとる……」

風月

「今までペンデュラムアッドによって無惨に殺されてきた人達……」

「

暁

「その人達の無念を晴らすためにも……」

真希

「私達は絶対に負けられない！イヤ、負けちゃいけない！！」

ファミリア

「私も力になるわ！この子と共にね！！」

コナン

「ああ……」

哀

「これからもよろしく、ファミリア！！」

コ哀とファミリアは、堅い握手を交わした。

そして、コナン達はペンデュラムアッドを必ず打倒する約束を改めて強く誓い合ったのだった……!!



## ファイル384：ロープウェイの青い罫！！『前編』

熊本市の一角にある洞窟で、1人の少女が複数人の挑戦者達を相手にしていた。

彼女の名前は不炎明日奈。

熊本県担当のディテイクティブマスターだ。

不炎明日奈『熊本県ディテイクティブマスター』

「マグエスカルゴ！『火炎放射』！！」

ブオツ！！

彼女の猛火の前に、また1人挑戦者が敗れ去る。

その時、モニターに1人の女性の姿が写った。

沖縄のディテイクティブマスター・向日木凧だ。

向日木凧『沖縄県ディテイクティブマスター』

「素晴らしいよ、明日奈！新米ディテイクティブマスターながら、なかなか戦い方も様になってきたじゃないか！就任後299人目の挑戦者も退けて・・・これで先日の事も帳消しだな。」

実は明日奈、先日修行で修練所を放ったらかしすぎて凧に怒られたのである。

明日奈

「でも凧さん、聞いた話では・・・」

凧

「うん！長崎の金泉躑躅から始まって、佐賀の室鬪樹、大分の金雪鉄泉と続けざまにその実力を認められ、猛然と突き進む探偵少女がいるそうだね。名前は越水七槻！！やっぱり気になる？明日奈。」

明日奈

「あの人達が認めた娘だっというのなら、やっぱり気になりますよ。次に来るとしたら熊本だろうし・・・アタシ、ちよつと風に当たって来ます！」

そう言うと、明日奈は走って行った。

明日奈

「よおし、来るなら来てみるお！その挑戦、ぜくつたいに退けてみせるんだから！越水七槻とやらあ！！」

ザッ。

明日奈

「？」

滴

「越水七槻？」

泉美

「あなた今、越水七槻って言いましたよね？彼女を知っているんで

すね？」

滴

「だったら教えてくれませんか？」

滴・泉美

「彼女の事を！！」

ガバツ！！

明日奈

「え、わっ・・・キャアアアアッ！！」

それからしばらくして、七槻が熊本の近くにたどり着いた。

新しい仲間、ドルファンを連れて。

七槻

「フワッ、近くで見るとやっぱりスゴかねっ・・・阿蘇山。火山の熱で、この一帯もカッカしよう。この山越えれば熊本ったい！さあ、行くとよー！」

七槻が走り出すと、大きな機械が目に入った。

山の上まで続くロープウェイだ。

七槻

「お！へえ、山の上まで連れてってくれる機械ができたよね！地元九州に戻って来たんも久しぶりやし、知らんかったたい！でも動いてなか、宙ぶらりんで放ったらかしとよ。ま、ボクはよかたい。元々自分で登るつもりやったけんね！」

そう言つて七槻に登りだした瞬間、突然ロープウェイのゴンドラも動き出した。

ガタン！

七槻

「あれ？」

『逃げて！！』

七槻

「（え・・・？）」

ガラッ！

ゴンドラが開くと、その中には青の組織の潮と、縄で縛られ口をガムテープで塞がれた明日奈がいた。

潮

「来ましたね。良かった、聞いた通りだ。明日奈さん、あなたに挑戦するために七槻さんがこの熊本に来るとの情報、貴重でしたよ。あなたを捕まえてくれた滴さんと泉美さんにも感謝をしなければ。」

七槻

「アイツは……江古田の森の時の……!!」

明日奈

「ん、ん……んむう……(に、に……げて……)」

七槻

「そんな人の声が聞こえとうよ！また何かするつもりやろっ！だけどそれはボクが、許さんったいねええっ!!」

回転したドルファンを踏み台にし、七槻はゴンドラへと飛び移った。

七槻

「こん程度の高さ、ボクが届かんとでも思ったとか!？」

潮

「いいえ、むしろ来てほしかったんですよ。お久しぶりです、越水七槻さん。また会えて嬉しいですなあ。そして……もう2度と逃がしませんよ!!」

そう言うと、潮はゴンドラのドアを閉じた。

七槻は明日奈の方を見た。

よく見ると、彼女の顔には少しキズがついている。

七槻

「(縛られた後、ボクの事を聞き出すために尋問ばされたとか!……ひ、ひどか仕打ちを……)オマエ、ボクを誘き出すためだけに関係のない人を拷問したとか!!?2度と逃がさんっちゃ、こっちのセリフったい!!この距離でも手加減ばせんけえ!!チャモ!!」

ダンッ！

潮

「それはどうですかね？ ガーディアン・RING『ボスマリリ』！」

バシッ！

ドバツ！！

七槻

「うわっぷ！！」

ドザザザアア！！

ゴンドラの中に、水が溜まり始めた。

潮

「フフフ、まだまだ増えますよ。このゴンドラは完全密閉、動く密室。水は一切外には排出されず、内部に充満する。そして最後には、あなた達の呼吸を奪います。」

七槻

「でもそれは自分も・・・同じ・・・ガハッ！！」

しかし、潮の顔に空気風船がかぶさっていた。

潮

「ご心配なく、この通り私の呼吸は確保されるのです。ボスマリリは、所有者や味方が溺れると空気の風船で助けるのですよ。ご存知

でしたよね？おやつ？」

七槻・明日奈

「んぐぐぐぐぐ……！！！」

潮

「アハハハハハ！！ごめんなさい！話どころじゃあないですよね！そりゃそうだ！息ができないんですからね！アハハハハハハハハハハ！！さてと……サメハダジョーを出して。あなた方を気絶させた後、口封じのため本部に連行しましょう。それによって、私達の『幹部昇進』と我が組織の計画達成にも華が添えられる！！あなた方はこのまま、苦しみ果ててください！！アーツハハハハハ！！！」

果たして、七槻と明日奈の運命はいかに……！！？

このまま、潮達青の組織の手に落ちてしまつのか……！！！？

ファイル385：ロープウェイの青い罫!! 『後編』

ザババババ!!

明日奈

「むっ!!」

明日奈に迫るサメハダジョー。

七槻はとっさに明日奈をかばった。

ザクッ!!

七槻

「ぐむあっ!!ぐぼっ、がば・・・」

潮

「又ファハハハ!!まだ動けましたか。結構長く息続くんですね。もうあなた達が水中に完全に沈んで3・4分は経ったかな?まるで潜水の最長記録に挑戦する水泳選手の心境でしょう?」

明日奈

「・・・っ。」

七槻

「(・・・マズか!!しっかり!しっかり!!)」

明日奈

「むっむっ。」



七槻

「（悔しいけど、アイツの言う通りったい！戦う以前に何とか息を吸う方法を見つげんと、勝ち目はなか！せめて、こん人だけでも助けんと・・・！！）」

潮

「何だかかわいそうになってきたなあ。かわいそうだから・・・これで終わりにしてあげなさい。」

グアツ！！

七槻

「（もう1回あの牙を喰らったら終わりったい！！リララ、お願い！！）」

ガキン！

バキヤ！！

潮

「ほほう、『鉄壁防御』ですか、さすがですね。サメハダジョーの牙が全て折られてしまった。しかし、それで危機を回避した・・・つもりですかああ！？」

ズズアア！！

七槻

「！！！！」

潮

「驚きと絶望の淵に叩き落とされたでしょう!? サメハダジヨ―は、折られても瞬時に生え変わる牙を持っているのです!! あなたがいくらメタルシヤムの固い体でサメハダジヨ―を退けたとしても、何度でも牙は生え変わるのですよ!!」

七槻

「く・・・」

トツ・・・

ニイ・・・

潮

「勝った!」

滴

「フッフ、ゴンドラが動き出して4分。手筈通り進んでいるなら、そろそろ潮さんが小娘・・・江古田の森で我々の顔を見た、あの七槻さんを倒している頃でしょう。山頂担当の私の方も完璧。後は、泉美さんが首尾良く動いてくれれば・・・どうですか? 泉美さん。」

泉美

「ええ、順調です滴さん。隕石の回収に成功しました。今からそちらに向かいます。」

潮

「幹部昇進後の初仕事、完了ですね。フッフ・・・」

ジヨボボボ・・・

潮

「この音は!？」

大きな音がしたと同時に、七槻が明日奈を抱えて浮かび上がった。

プカッ!

七槻

「プアッ!」

バツ!

潮

「水位が下がっている!?!バカな!!!」

ジヨボボボ・・・

ピシ!

ドパン!!!

潮

「な、なぜだ!？」

七槻

「ハアハアハア・・・ボクのリララがサメハダジヨーのかみつきを  
受け止めた時、アンタは『ただの防御』って考えたのでしょうか。で  
もボクの目的は別にあつたとよ。折れて流れた牙をアンタに気づか  
れずにつかみ取り、コッソリ窓に穴を開けるっちゅう目的が!！」

潮

「おのれえ!!ボスマリリ、サメハダジヨー!!！」

ザババババ!!

七槻

「息さえできれば形勢逆転つたい!!リララ!!『アイアンヘッド』  
!!!!!」

ドギヤ!!

潮

「ぐわあああーっ!!！」

潮はボスマリリとサメハダジヨーもろとも外に飛ばされ、上のゴン  
ドラに激突した。

バン!

潮

「う・・・」

ガク・・・

七槻は明日奈を背中に背負い、ゴンドラから飛び降りた。

タツ！

ザッ。

七槻

「しっかりするったい。」

明日奈

「ゴボツ、ゴホゴホツ。ありがと・・・ハアハアハア・・・ゴメンね・・・アンタの事話しちゃって・・・でも、ウワサ通りだ。アンタはスゴい女の子だよ。・・・こうしちゃいられない。」

七槻

「な、何するつもりったい！」

明日奈

「頂上まで行くんだよ・・・思い出してみても・・・ヤツが言ったる？計画の達成がどうかって・・・きつと・・・阿蘇山に何かするつもりなんだ！！アタシもディテクティブマスターになったんだ！！アタシの守るアタシの町、アタシの住むこの場所で・・・勝手な事をさせてたまるか！！！」

七槻

「ディテイクタイプ・・・マスター!？」

明日奈

「アタシは不炎明日奈! 熊本を守るディテイクタイプマスターだ!  
!」

七槻

「あのまま倒れたアイツを乗せたゴンドラが頂上まで行ったら、そこで待ってる仲間が見て、言うやるね? 『越水七槻の始末に失敗したぞ!』 って! アイツらの狙いはボクったい! だからボクも行く!  
!」  
!と言つても、お互いボロボロやけん、今日は飛んで行くったい!

明日奈

「飛ぶってどうやって?」

七槻

「もちろんガーディアンで飛ぶとよ。」

明日奈

「アンタ、空飛べるガーディアンがいの?」

七槻

「ボクのじゃなか。母さんが空飛ぶ時使うとよかって、貸してくれ  
たとよ。普段は放し飼いにしとっ!」

明日奈

「ズンズン」

七槻

「コッパッ! ヲイイイッ!」

七槻が口笛を吹くと、草むらの中から大きな鳥が飛び出してきた。

ザザザザアッ!!

明日奈

「ガーディアン：RING・トロピノドンか!!」

ファイル386：阿蘇山活動完全停止！！『前編』

滴

「ご苦労様です、泉美さん。この『グラウンド・メテオ』があれば、火山活動が・・・」

ギギギ・・・

泉美

「ん？」

滴

「潮さん！！（クツ！七槻の始末に失敗したか！！）ヤツらはすぐにでもここに来る！！泉美さん、隕石からのエネルギー転化を完成させてください！！私が敵を足止めします！！」

泉美

「わかりました！！」

タタタ・・・

滴

「出でよ、ペリカノドン！！」

バサバサツ・・・

滴

「どこだ！？」





滴

「い、泉美さん！早く！！」

明日奈

「七槻！かまうこたないよ！ここまで押ししてるんだ、早く装置ごとブツタ斬ろう！！」

七槻

「さつきからやってる！！でもできんたい。」

明日奈

「え！？」

七槻

「何かがおかしい、この敵！防戦一方に見せかけて、でもギリギリのトコで装置に絶対近づけないよう完璧な攻撃ばしてきよう。苦しい戦いに見せかけているのは芝居やね！！どういつつもりか知らんけど・・・だったらこれったい！！」

ザッ！

七槻

「必ず当たるトルルの大技で！勝負！！」

ギユオオオ・・・

七槻

「『マジカル・ハープ』！！」

ズアッ！！

泉美

「できた！！！」

グオオオオオン！！

ドカツ！

七槻・明日奈

「マジカル・ハーブが弾かれた！？」

滴

「フフフ・・・さっき、芝居とっていましたよね？いかにも。今の攻防の目的はあなた達を制す事ではなく、あなた達を足止めし時間稼ぎをする事だったのでからね。おかげで装置は隕石のエネルギーをパワーに転化し、それによって今・・・阿蘇山の活動は完全に・・・停止した！！！」

ファイル387：阿蘇山活動完全停止！！『後編』

滴

「素晴らしい！グランド・メテオのパワー！！」

泉美

「エネルギーは十分ですね。」

滴

「キバナアスジョー！」

ブワッ！！

滴

「では、ごきげんよう。」

モウモウ・・・

七槻

「待て！！」

ズバッ！

グワァ！！

バツ！

明日奈

「わっ！！」

ドゥー!

明日奈

「……う。!? ヤ、ヤツらはどこに!? 七槻、どこ!? 七槻ーっ  
!」

七槻

「ここったい……」

明日奈

「地面の下!?」

七槻

「うん……前にも1度同じ事があったったい。これは『秘密のパ  
ワー』やけ。」

明日奈

「秘密のパワー!?」

七槻

「そうたい! 岩場や木の中に空間ば作りよう。ヤツらはまたそこに  
逃げ込んだとよ!」

明日奈

「アンタはそれを追って……で、敵は!?」

七槻

「わからん! この空間がどれだけあるのか……でもこれだけは確  
かつたい!!! ここに逃げ込んだヤツらを、絶対に逃がさん!!!」

ビビビ！！

七槻

「くあつ！！」

明日奈

「七槻！七槻！！阿蘇山が・・・死んだ・・・山の麓にある・・・熊本も・・・温泉も・・・」

ググツ・・・

明日奈

「七槻が1人で戦ってるんだ！！アタシも何かしなくちゃ！！アタシの町のために、何かしなくちゃ！！」

カツ！

明日奈

「マグエスカルゴ！火炎放射！！」

ゴオオオオ・・・

明日奈

「おおおお！！熱エネルギーを撃ち込んで、火山を・・・火山活動をもう1度・・・」

ジャリ・・・

焰ホムラ

「良い方法じゃねえか。だが・・・それじゃあまだまだパワー不足だぜ！つたく、ブルーのヤツら派手な事しやがったな！活火山の動きもスツカリ止まっちゃまったのか・・・」

明日奈

「オマエも阿蘇山を止めようとしたヤツらの仲間か!？」

焰

「逆だよ逆。オレ達は火山が活性化してくれないと困るんだ。ま、そういう意味では姉ちゃん、アンタの味方って事よ！」

ゴゴゴゴゴ...

七槻

「熱が戻ってきてる!? 明日奈が炎を撃ち込んだらどると? これはよか! 火山が反応しよう!! もっともっと! そうすれば火山は生き返るかもしれない!!」

明日奈

「七槻!・・・よおし!!」

焰

「いいか? 本気で炎をブチ込みたいのなら、こっやんだよ!!」

ヒュッ!

ボッ!!

ゴオオオオ!!

明日奈

「炎のガーディアン・セキダール!!」

焰

「オレのセキダール、普段は体内で石炭を燃やしているんだが、今日は特別に外で燃やしてやるぜ!!」

ズズズズズズ・・・

明日奈

「炎が大きくなっていく・・・」

焰

「何、あんぐりしてんだよ! 姉ちゃんも手伝いな!! 炎使いなんだから!?!」

明日奈

「う、うん!! マグエスカルゴ!」

グアアア!!

グオオオオオ・・・

焰

「よっしゃあ!! これくらいで十分だ!」

焰・明日奈

「いつけえええ!!」

ゴッ!!



ズガンッ！！



焰

「最大最強級に匹敵する火の玉をブチ込んでやったんだ！それでダメだってんのなら、そんな時はそんな時よ！だがオレ達レッドは、何が何でも大地を増やす必要があるんだ！！」

明日奈

「大地……」

焰

「そつだ……姉ちゃん、なかなかの炎だったぜ！」

バサバサバサツ……

明日奈

「！七槻！！七槻！！」

七槻

「ソーラービーム！！」

バツ！

ビュツ！

バシユツ！

七槻

「くうっ！！しぶとか敵つたい！！いい加減姿を見せたらどうね！

「？」

「どづね、どづね、どづね……」

七槻

「！？トルル！！いったん攻撃は止めて！！」

タタタ……

七槻

「……や、やられた！！ミラージュコート！！これでボクらの攻撃は跳ね返してただけやったと！？敵が本当に放ったのは、最初の一撃だけ！後は……鏡を相手に戦ってたとか！！その間に……ヤツらとはとつくに逃げ切ってしまったたい！！ぐ……クソツ！！クソツ！！」

明日奈

「七槻ー！！七槻ー！！」

七槻

「！！！！」

キラッ！

七槻

「！？？」

七槻

「スマンち・・・ヤツらと決着つける事できんかった。・・・そっちは？」

明日奈

「さつき見てもらった通りさ、できる限りの炎を火山に撃ち込んだんだけどね。ギリギリのトコでダメかも・・・」

七槻

「そっやったとか・・・」

明日奈

「・・・ここはね、阿蘇山から熊本へ降りる道、凹凸山道っていうんだ。本当だったら熊本をもっとちゃんと案内したかった。熊本自慢の温泉もじっくり味わってほしかったよ・・・本当にいいトコだったんだよ、アタシの町。日本中の人々が遊びに来るんだから・・・チクショウ！！アタシ、守れなかったんだね・・・デイトイクテイブマスターになったっていうのに・・・自分の町を守れなかったんだ！！・・・チクショウ！！」

ポコ・・・

ポコッ、ポコココ・・・

明日奈

「温泉だ！！」

七槻

「へー！これが。良い湯加減たい。」

明日奈

「さっき撃ち込んだ火球の力で、わずかだけど吹き出したんだ!!」

七槻

「!!ね、これ入ってもよかと!？」

明日奈

「え!？」

七槻

「今ボクに味わってほしいって言うたやろ?これもすぐ冷めてしま  
うかもしれない!入らんともったいなか!!」

明日奈

「ちょ、ちよつと七槻!」

七槻

「戦いの事はもう過ぎた事やけ、ゴチャゴチャ考えてもしかたなか  
よ!それより疲ればとろろ!!」

プツッ!

七槻

「はい!うまかとよ、食べり。」

明日奈

「あ、ありがとう。(・・・アタシの事、励まそうとしてくれてるん

だ……。)。……。七槻、お願いがあるんだ。」

七槻

「!」

明日奈

「……。今……。今、アタシと戦ってほしい!思いつきり戦って今日の事振り切つて、ディティクティブマスターとしての熱い心を取り戻したい!!」

七槻

「よか!こつちからお願いしたいくらいいたい!」

明日奈

「じゃあ……。試合開始!!」

七槻

「チャモ!!」

明日奈

「マグエスカルゴ!!」

ドカドカドカドカ……

七槻・明日奈

「火炎放射!!」

バシィッ!!

明日奈

「・・・フ。」

七槻

「フフフ。」

明日奈

「ウフフフ！」

七槻

「アハハハ！」

七槻

「冷めてしまったね。」

明日奈

「七槻！アタシのおばあちゃんはね、昔、7天王って呼ばれたスゴ腕の探偵だったんだよ。アタシはそんなおばあちゃんが大好きで・  
・自分も強い探偵になりたいって思ってた。だからディティクテイ  
ブマスターになった！おばあちゃんの名を汚さないために、こん  
なトコでヘコタせてなんかいられないんだ！！あんなヤツらを野放  
しにはしておけない！！！」

七槻

「そうったい！！アンタは立派なディティクテイブマスター様つた  
い！！ハクシヨン！」



明日奈

「アハハ、カゼ引くよ！アタシは今回の事を全てのディティクティブマスターに知ってもらったために、これから連絡をとる！！総力を結集させるよ！」

七槻

「ボクも次の戦いに備えて力を上げに行くけ。そして・・・アイツらを倒す！！！」

バサバサバサツ・・・

明日奈

「この先の山よりずっと向こうに、九州から離れた町・沖縄があるから！！ありがとう、七槻ー！！！」

七槻

「バイバイ、明日奈ー！！！」

ゴオオオオ・・・

ファイル389：ディテイクティブマスター達の集結

プルルルルル・・・

鬨樹

「もしもし！佐賀の鬨樹だ！」

躑躅

「ハイハイ、こちら長崎の躑躅ですわ。」

凧

「沖縄の凧だ。」

「福岡の・・・正宗。」

「大分の鉄泉でっせ。なぐんてな、ワツハハハ！」

明日奈

「皆さんもしもし！！熊本ディテイクティブジム・ディテイクティブマスターの明日奈です！！現在、ディテイクティブマスターズホットラインにより全てのディテイクティブジムに一斉コールしています！！若輩者のアタシが、このような連絡をする事をお許しください！！しかし・・・事態は急を要しています！！緊急レベル8！！よって、探偵協会規約第126条に基づき・・・今、ここに日本全ディテイクティブマスターの招集を要請いたします！！」

躑躅は、岩石のガーディアンに乗って来た。

明日奈は、エレベーターで管制塔まで進む。

鬨樹は、体1つだけで高い崖を登っていた。

ザッ！

鬨樹

「あらよっと！」

1人の男は、雷のガーディアンに乗って走って来た。

もう1人の男は、水上バイクに乗って来る。

ハヤテは、咲夜を背負って『疾風の如く』で飛んできた。

伊澄は、朝風理沙と共に絨毯に乗って来る。

理沙が一緒にいたため、さすがに今回は迷わなかった。

凧

「みんな、来たか・・・」

ザッ！！

キンセツテッセン  
金雪鉄泉 『大分ディテイクタイプマスター』

「やーやーみんな、お久しぶりっこマネっこダダッこ。な〜んてな。

」

ハヤテ 『千葉ディテイクタイプマスター』

「鉄泉さん、ダジャレを言うクセはいい加減に直してくれませんか。

・・・？」

咲夜 『奈良ディテイクタイプマスター』

「オマケにおもろないし・・・」

躑躅

「いち、に、さん、し・・・」

カキカキカキ・・・

『ディテイクタイプマスター』出席簿

北海道：雪風時音 × 大阪：月島弓雁

青森：愛川純 京都：瀬藤銀一 & 瀬藤金美 ×

岩手：氷室遊泳

秋田：竜牙隼人 奈良：愛沢咲夜

山形：灯火睦月

宮城：能代菊菜 和歌山：風魔雷薙

福島：猿崎鶏美 兵庫：天幕深雪

群馬：山村ミサオ × 山口：宮本フレア

栃木：狗山猪彦 広島：大河内雷牙 ×

茨城：水無月狐 島根：日向琴美

千葉：綾崎颯 鳥取：本堂瑛祐

埼玉：鈴木綾子 香川：朧屋陽 ×

神奈川：吉田歩美	徳島：如月風月
東京：黒澤陽羽×	高知：常盤暁
新潟：内谷朝美	愛媛：水島陽太×
富山：朝風理沙	福岡：時津正宗
石川：鷺之宮伊澄	長崎：金泉躑躅
福井：湯江あずみ×	佐賀：室鬪樹
山梨：栗栖野煉×	熊本：不炎明日奈
長野：如月羽鳥×	大分：金雪鉄泉
岐阜：卯月兔	宮崎：砥草根風蘭×
静岡：宝極真	鹿児島：流根三稜×
愛知：平尾隆太	沖縄：向日木凧
三重：鳳美香	

躑躅

「出席率が良くないです！全48人中集まったのが35人。13人も欠席ですか・・・緊急レベル8の名の元に集まったというのに、これじゃ・・・どういう事ですか？明日奈さん。」

明日奈

「ハ、ハイ。銀一さんと金美さん、あずみさん、煉さん、揚羽さん、ミサオさん、羽鳥さん、陽太さん、陽さん、雷牙さん、時音さん、風蘭さんの12人には連絡がつきませんでした。三稜さんは何かの調査でアメリカ方面に行かれてるそうなので、通信で会議に参加されるそうです。」

ブウウウ・・・ン・・・

流根<sup>ルネ</sup>三稜<sup>ミクリ</sup>『鹿兒島ディイクティブマスター』  
「やあ皆さん、こんな所から失礼。」

凧

「さあ、では説明してもらおうか、明日奈。」

明日奈

「はい。まずはこれを見てください!」

パツ!

明日奈

「一昨日、火山活動を停止した阿蘇山です。現場に居合わせたアタシは見ました!この火山活動停止は人為によるもので・・・これを企てた組織によって日本が蝕まれようとしている!アタシは全デイトイクティブマスターの力を結集させ、戦うべきだと考えています!」

伊澄『石川ディイクティブマスター』

「その組織というのは、ついこの間ファミリア・ファウナのプロトタイプを生み出し暴れ回させた張本人といわれる、赤ずくめの集団ですか?」

明日奈

「いいえ、アタシが戦った集団は、青ずくめの集団でした。赤装束の男には、むしろ助けられました。」

躑躅

「ど、どつどついう事ですの!??」

明日奈

「青装束の集団は、『母なる海のために活動している』らしく、『ブルー』と名乗っていたんです。一方で赤装束の男は『何が何でも大地を増やさねばならない』と語っていて、『レッド』と名乗っていました。アタシには、ブルーが悪で、レッドがそれを阻む味方のように見えました。」

鬨樹

「おいおい、逆じゃねえのかなあ。海のためにつてんなら、良い事じゃないの。サーフィンもいっぱいできらあ。なあ、三稜さん。アタも水のガーディアン使いだ、そう思うだろ？」

三稜

「・・・うむ・・・まあ。」

バン！！

鉄泉

「何を言つとるか！！大地の方が大事じゃわい！！ワシの町がどれだけ土地不足で苦労しているか・・・」

鬨樹

「ムッ！！」

真『静岡ディティクティブマスター』

「鉄泉さん、鬨樹さん！低レベルな争いは止めてください！！」

躑躅

「ね、明日奈さん。私、1つ確かめたいのですけど、ブルーという集団の中に、泉美という名前の人がいらっしやらなかった？」

明日奈

「……そういえば……はい、確かにいました!」

躑躅

「でしよう? 私、彼女とはお勉強仲間ですから以前から伺っております。泉さんがお世話になっている団体が『チーム・ブルー』という名である事。これでハッキリしましたわ。泉さんが悪の仲間であるハズがない。私は青を支持しますわ!」

凧

「……しかし、明日奈がウソをついているとも思えないしな……」

「

躑躅

「んまつ!」

凧

「むしろ私は、明日奈のありのままを見る目を信じたい。」

しばらく論議は続いた。

『赤を支持、青は悪

凧・明日奈・鉄泉・ハヤテ・咲夜・伊澄・理沙・隆太・真・瑛祐・  
琴美・フレア・雷薙・メトロ・深雪・清兵衛・美香・弓雁』

『青を支持、赤は悪

躑躅・鬨樹・三稜・猪彦・菊菜・鶏美・隼人・遊泳・純・朝美・歩  
美・綾子・兎・狐・風月・暁・睦月』



鉄泉

「ムムム、困ったのう。意見が真つ二つに別れてしまったじゃないか。正宗さん、アンタだけまだ何も言つとらん。他の12人がいない以上、アンタがどっちにつくかでこの場の採決としよう。」

ガタツ・・・

時津正宗トキツマサムネ『福岡ディティクティブマスター』

「私は、どちらにもつくつもりはない！！・・・失礼する！」

凧

「待つんだ！！この会議は、探偵協会の名の元に開かれた正式な招集、言うなれば協会の意志だ！！その話し合いの席を・・・あなたは放棄するのか！？」

正宗

「別に放棄などしていない。この問題に対しての私の意志は伝えた。『どちらにもつかない。』、これが私の意志だ。」

凧

「そ、それでは答えになつてない！我々はディティクティブマスターだ。有事には平和のために力を尽くす、探偵協会が選出した都道府県の代表者だ！あなただってそうだろう！？」

正宗

「探偵協会・・・か。」

ガーツ・・・

躑躅

「何ですの、あの態度は!?!」

鬨樹

「オレ達と話し合う事自体、意味がないとでも言いたげだな!?!」

風月『徳島ディティクティブマスター』

「この前も長くジムを開け、協会から注意を受けたみたいだし・・・」

「

暁『高知ディティクティブマスター』

「ディティクティブマスター不在時用のバーチャルシステムをつける事も頑なに拒否するような人だからなあ・・・」

躑躅

「勝手にすればいいんですわ、あんな人!?!」

鉄泉

「待ってください、正宗殿オツ!?!」

ダツ!?!

鉄泉

「待ってくれ、正宗殿!?!」

正宗

「!?!」

鉄泉

「アンタは間違いないく、日本のディティクティブマスター中最強のファイターじゃよ。」

正宗

「ホメすぎですよ、鉄泉さん。」

鉄泉

「イヤ、その実力は皆も心の奥底では認めておる。だからこそこういう危機の時は、アンタのその力を堂々と披露してくれてもいいんじゃないか？」

正宗

「・・・」

鉄泉

「彼らの態度や言葉が過ぎていたのならば、ワシが代表して詫びよう。しかし一方で皆、若い者もいるせいなのかアンタの過去はよう知らん。アンタと協会のわだかまりや、8年前に何があったのかを・・・」

明日奈

「どっつするっ。凧さん。」

凧

「うむ・・・今の状態では戦力不足は必至。」

明日奈

「アタシに考えがあるんだ。この際、一般人でも実力の高い人には

戦いに加わってもらえばよいのはって・・・例えば、アタシが阿蘇山で出会った女の子は強いし、信頼もできる！」

凧

「フム・・・」

躑躅

「冗談じゃありませんわ！！足手まといになるだけだっってわかりきってますでしょう！！」

凧

「わかった。一度話し合いを終えて、他のディティクティブマスター達を待とう。この場は協会に経過だけ報告しておく。」

凧

「もしもし、ボスですか？」

「私だ。」

凧

「12名をのぞく36名が会議に参加しましたが、今のところ意見はまとまっていません。そして福岡の時津氏は、会議の途中で話し合いを放棄しました。」

「そうか。・・・時津正宗。・・・また、あの男か・・・」

三稜

「凧、ちょっと。」

凧

「あ、少しお待ちください、ボス。どうした、三稜？」

三稜

「明日奈の言う通り、実際に火山停止の影響で日本全体のバランスが崩れつつある。私の市、鹿児島を中心にね。」

凧

「崩れと一口に言うが、どう崩れてるんだ？」

三稜

「当然海水位が上昇する事になるワケなのだが、細かいデータの理  
解は私でもムリだ。今アメリカに来てるのも、母校のラボで詳細な  
解析を依頼するためだ。」

凧

「そうか、何かわかったら知らせてくれ。」

三稜

「ああ。」

凧

「聞かれましたか？ボス。」

「ウム、恐れていた事がついに現実になってしまっ！超古代ガーデ  
イアン目覚めの時は近づいてきているのだ。多くの人間は、それを  
ただの伝説だと思っている。だが、しかし・・・」

凧

「本当に存在するのですか！？伝説の超古代ガーディアン・カイオ  
ーガとグラードンが！！」

「ああ、確実にいる！！そして、海水位の上昇という現実を考えれ  
ば、2体の内先に目覚めるのは・・・カイオーガだ！！」

バサバサ・・・

「ここには来ていないのか、『シン』のヤツ・・・まあいい。必ず  
見つけ出して、私が始末してやる・・・」

「じゃあ行くこうか？』」。

「そうだな、クラレット。」

スウウウウ・・・

夜の京都の町を、1台の車が疾走している。

車に乗っているのは、瀬藤銀一と白野美保の2人だ。

銀一

「パトカーナンバー511から京都府警へ！現在、逃走中の強盗犯2人組を追跡中！！」

愛子

「了解！車種・ナンバー・並びにマル被の人相を一報せよ！！」

銀一

「了解！車種は白のメルセデス・ベンツ！和泉36・ふ-6875！マル被の人相は・・・次元と五右衛門です！！」

愛子

「次元と五右衛門・・・？マル被は覆面してるの？銀一！」

銀一

「うん！」

愛子

「わかったわ！そのまま追跡を！！」

銀一

「はい！！！」

美保

「強盗の覆面に次元を使うだなんて・・・許せないわ!!」

そう言うと、美保はアクセルを強く踏み込んだ。

美保

「深雪、弓雁、美香ー！聞こえるー!?!」

少し離れた位置にいた深雪達は、美保からの電話を聞いた。

深雪

「ええ!」

美香

「もちろん!」

弓雁

「よう聞こえるで!」

美保

「マル被が逃走中よ！作戦Mを実行に移して!!」

深雪・弓雁・美香

「了解!!」

美香

「じゃあ、深雪！あれやって!!」



深雪

「はいよ！」

深雪がスイッチを押すと、車のハッチが開いた。

美香

「それじゃあ、行きますかあっ!!！」

美香は車から空中に飛び出すと、翼を広げた。

美香

「ハアアアアッ!!！」

美香は空を飛んで行った。

深雪

「それじゃ〜ま〜・・・」

弓雁

「ウチらも！」

弓雁がもう片方のスイッチを押すと、車のボディが吹っ飛び、2台のバイクが現れた。

深雪

「美保の改造もたいしたものね・・・」

弓雁

「ほな、行こかあ!!！」

深雪と弓雁もバイクを走らせた。

同じ頃、弥生と伊澄はカーペットで空を飛んでおり、エルと生徒会3人組は車で疾走していた。

銀一

「美保！このままじゃ逃げちゃうんじゃない？」

美保

「大丈夫！先回りよ！！」

美保は車を急発進させた。

美保の車の先には、逃走中の車が見えてきていた。

銀一

「み、美保！？ぶつかるとよ！？」

美保

「シッ、黙って！！」

美保は車を真っ直ぐに走らせる。

マル被の車は横にそれ、転倒した。

美保が車を止める。

美保

「まったく、自業自得ね……私の憧れの人を、覆面なんかを使うからよ……」

美保は振り向くと、追いついて来たエルに叫んだ。

美保

「エル、府警の応援と救急車を!!」

エル

「了解!!」

美保は運転手のマル被に近寄り、次元の覆面を外した。

「ぐ……うう……」

銀一

「美保……。五右衛門の方も軽傷だよ!」

美保

「そう!良かった。まったく……何だってこんなふざけた覆面かぶって、強盗なんかしたのよ?」

「な……ななみ……」

美保

「え?」

「七海……島……」

美保

「七海島？」

泉

「ハッハーン……」

波香

「さては、その島で遊ぶ金欲しさに……」

「ち……ちがう……」

美保

「じゃあ、動機は何なの？」

「ジョ、ジョリー……ジョリー・ロジャー……」

男はそのまま気絶した。

美保

「七海島……みんな、知ってる？」

エル達は首を横に振った……

今、私とコナン君と少年探偵団の面々は、七海島にいる。

ユーリさんが懸賞で40万の旅行券を当てたので、そのお祝いというか何というかで、私達は七海島に旅行をしに来たのだ。

でも、やっぱり私達にはハプニングがつきものみたいで・・・

ユーリ

「何ですって！？予約がいつぱいで部屋が取れない!？」

「ええ・・・」

たくま

「おいおい、マジかよ・・・」

光彦

「この島、亜熱帯地帯ですから、蚊とかもいっぱいいるでしょうし・・・」

歩美

「来なければ良かったかも・・・」

マリア

「まあ、何とかなるんじゃないの？ここは絶海の孤島とか、言葉が通じひん外国とはちやうんやから・・・」

元太

「大人だね、マリアちゃん……」

「あ、いたいた！ユーリさんですよね？」

ユーリ

「？」

ユーリが振り向くと、若い女の人が走って来た。

岩壺いわつぼ光海こうみ『七海島観光課長』

「私、観光課長の岩壺です！どうもこんにちは……は……！」

ドシャ！！

光海はコケた。

光海

「アイタタタ……FBIの中でもスゴ腕のご兄妹が来ると聞いたもので、私が宿をご用意させていたきました！」

ユーリ

「あ、こりゃどうも……」

光海

「では、まいりましょう。」

そう言う光海の背中に、誰かがぶつかった。

光海

「イタツ・・・」

「悪いな姉ちゃん・・・」

ぶつかった男は、2人の男と共にホテルを出て行った。

たくま

「誰だ？アイツら・・・」

コナン

「トレジャーハンターじゃないの？」

風月

「トレジャーハンターって？」

暁

「世界中で宝探しをして、それで生計を立ててる人達の事さ。」

歩美

「へえ〜。」

哀

「でもどうしてわかったの？彼らがトレジャーハンターだって。」

コナン

「あの人達、結構日焼けしてるけど、腕の辺りは日焼けの後が薄い  
だろ？あれはいつもウェットスーツを着てる証拠。それに髪の毛も  
海水で脱色してる。」

光彦

「でも、それだけだとただのダイバーかも。」

コナン

「確かにそうだけど、あんなポスターが貼ってあれば誰でもそう思うぜ?」

そう言うコナンの目線の先には、『七海島海賊の宝探しツアー』というポスターが壁に貼ってあった。

元太

「本当だ。」

哀

「きつと夢見てるんでしょね・・・海賊の未知なる財宝を・・・」

『名探偵コナン・七海島の海賊記』  
ジョリー・ロジャー

私は科学者の宮野志保。

え?

科学者には見えないって?

アハハ・・・



隣の彼は、私のクラスメートの江戸川コナン君。

コナン君と私は、私が開発したAPTX4869によって幼児化してしまい、今は偽名で帝丹小学校に通ってるの。

ではここで、私の頼もしい仲間達を紹介しましょう。

少年探偵団の初期メンバーの吉田歩美ちゃん、円谷光彦君、小嶋元太君。

いざという時には、スゴい力を発揮するのよ。

途中から仲間に加わった、東尾マリアちゃんと坂本たくま君。

世界一の漫才コンビね。

元黒の組織の如月風月ちゃんと常盤暁君。

この2人はとても強いカップルだわ。

コナン君の親友、平尾隆太君とその彼女、宝極真ちゃん。

真ちゃんは隆太君の事を心配してるけど、逆に彼に心配されてる事の方が多いかも・・・

京都から来た友、瀬藤銀一君と白野美保ちゃん、その他諸々。

大阪の忍者コンビ、桜野松葉ちゃんと蜂野鈴也君。

そして、最強の女コンビである剣野刃ことリアン・ハートネスちゃんと、金田一ユリことリリス・ヴィンヤードちゃん・・・

赤と青の組織の行方はまだつかめないけど、いつか必ず私が叩きつぶしてみせる！！

小さくなっても、頭脳は同じ！

迷宮なしの女名探偵！！

真実は、いつも1つ！！！！

コナン達は光海の運転する車に乗り、光海がとったという民宿に向かっていた。

リアン

「そういえば、さっきコナン君がトレジャーハンターっていったけど……」

ユーリ

「どうしてトレジャーハンターなんかが来てるんですか？」

光海

「実は、宝が見つかったんですよ。」

リアン

「じゃあ、海底宮殿で見つかったっていう金の食器って本物なんですか？」

光海

「どうもそのようで……ホラ、あそこに島が見えるでしょ？あれが伊予璃緒矢島……別名『海賊の島』と呼ばれている島です。」

そう言う光海が指差した方向には、少し大きな島が見えていた。

光海

「その周りがある6つの島はそれぞれ、日向島・光根島・手綱島・

ひなたしま

こうねしま

たづなしま

優雅島・静島・繭島ゆうがしま しずかしま まゆじまというんです。日向島の別名は『怪鳥の島』・・・  
・いろんな野生の鳥が住み着いてる島で、別名の通り怪鳥なんかも  
いるんですよ。」

歩美

「な、なんかもって・・・そんな事をサラッと・・・」

光海

「光根島の別名は『溶岩の島』・・・溶岩がグツグツと煮えたぎっ  
てるんです。あそこに観光に行くなら、飲料をたくさん持って行っ  
た方がいいですよ。」

マリア

「誰が好き好んで行くんや、そんなト」・・・」

光海

「手綱島は『難破の島』と呼ばれてましてね、大昔に沈んだ船なん  
かがたくさんあるんですよ。」

暁

「何だ、そっちの難破か・・・」

風月

「さ〜と〜し〜・・・?」

暁

「あ・・・」

風月

「暁のバカ〜ッ!〜!」

パン！

暁

「イデッ！」

風月

「ったく・・・」

光海

「優雅島は『娯楽の島』と呼ばれてましてね。あそこは娯楽施設があるんで観光客もよく行くんですよ。あ！ちゃんと子供でも楽しめるように、お金を賭ける決まりなんかはありませんから大丈夫ですよ！」

たくま

「当たり前だろうが・・・」

光海

「静島は別名『亡霊の島』といってね。あそこには結構幽霊とか亡霊とか・・・」

哀

「それ以上言わないでください・・・！！」

バタ！

コナン

「あ、哀っ！！」

歩美

「気絶しちゃったわね、哀ちゃん・・・」

光海

「最後の島、繭島の別名は『城壁の島』。各地にある城跡をこつち  
に持って来て展示したような場所だから、あまり観光客は行きませ  
んね。」

光彦

「歴史の勉強になるのに。もったいないですね。」

光海

「伊予璃緒矢島はその6つの島に囲まれる形である島なんだけど、  
なぜかあの島だけ他より少し大きいんですよ。その島のほぼ真下に  
海底宮殿が沈んでいるんですよ。海底宮殿が発見されたのが今から  
20年ほど前です。何人もの学者達が来て調査していましたが、  
人工によるものかはたまた自然のイタズラか・・・まだハッキリと  
はわかってないんです。伊予璃緒矢島も昔はもう少し大きかったら  
しいんですが、地盤沈下によって今の形になったらしいですよ。  
あの島の下にはメタンハイドレート層というのがあって、そ  
れが原因だと言われているんですよ。」

元太

「コナン君、そのメタンハイドレートって何なんだ？」

コナン

「ああ、それは・・・」

コナンはメタンハイドレートについての説明をした。

元太

「へえ、そうなんだ。」

風月

「ホラ、バーミューダ・トライアングルで場所で船や飛行機が消えるっていうのがかつて話題になったでしょ？あれもそのメタンハイドレートが関わっているって言われているのよ。」

たくま

「どんな風に関わっているんだ？」

風月

「メタンハイドレート層は、崩れると大量のメタンガスを放出するの。その時上を船が通ると、メタンガスが船の機能をおかしくしちゃうから、船が海中に引きずり込まれちゃうワケなのよ。ちなみに飛行機も同じで、空中に上がったメタンガスが飛行機のエンジンに引火し、飛行機が墜落しちゃうってワケ。」

歩美

「そうなんだ・・・」

光海

「さあ、着きましたよ。」

哀

「う、うん。」

コナン

「哀、大丈夫？」

哀

「うん……あら、あそ」に「いるのって……」

コナン

「り、隆太君と真ちゃん!？」

リアン

「美保ちゃんと銀一君と仲間も!」

哀

「松葉ちゃんと鈴也君まで……」

風月

「な、何で……!？」

七海島に旅行にやって来たコナン達。

そこで彼らは、なぜか美保達と再会して・・・

コナン

「で？何で美保ちゃん達が七海島に来てるワケ？」

銀一

「実はね、先日捕まえた強盗が・・・ぐげえっ!？」

ドカッ!!

美保

「みんなで修学旅行に来たら、旅行先が『たまたま』七海島だったのよ」

哀

「ハ、ハア・・・」

美保

「（銀一いゝ？私達が捜査のためにここに来てる事は、例えコナン君達でもバラさない約束だったわよねえ〜？）」

銀一

「（はうっ・・・ゴメンナサイゴメンナサイ・・・）」



リアン

「でもその割に、メンバーがいつものメンバーやんな？」

美保

「（ギクツ・・・）そ、それは・・・」

弓雁

「班ごとに泊まる宿がちがうんよ。ホラ、ウチらの学校って山王学園やん？」

コナン

「ああ、そういえば・・・」

風月

「（相変わらず、常識離れた金の使い方してるわね・・・私が高等部に通ってた3年前から変わってないし・・・）」

リリス

「それで、松葉ちゃんと鈴也君はどうしてここに？」

松葉

「アタシ達も休みを利用しての旅行よ。やっとこの前夏休みになったから・・・」

鈴也

「オレらの大学院は夏休み始まるの遅い分、期間も長いからねえ・・・」

隆太

「オレと真ちゃんは避暑に来たんだよ」

歩美

「そうなんだ！」

哀

「ねえ、さつきから思ってたんだけど……ここ、民宿の割には大きくない？まるでホテルみたい……」

美保

「この民宿の主の美澤さんは、大富豪の娘なのよ……母さんの高校時代の同級生だしね……」

そんな話を話していると、話の対象になった女性が現れた。

光海

「あ、美澤さん！いたんですね？」

美澤郁美『美澤旅館主』

「さつきから家にずっといたけど？客がたくさん来るっていつから、早めに食事の準備してたし……料金は大人が1泊3食付きで5000円、子供は1泊3食付きで3500円よ。」

そう言うと、郁美は家へと入って行った。

光海

「えーっと、明日からの宝探しゲームに参加される方は？」

コナン達は迷わず手を上げる。

隆太と真、松葉と鈴也も手を上げた。

光海

「お2人はダイビングでしたよね？」

リアン・リリス

「はい。」

光海

「後でご案内いたします。ユーリさんは？」

ユーリ

「旅館で少しゆっくりして、それから考えますよ。」

コナン

「じゃあ、今日は観光館にでも行ってみる？」

コナンの提案に、哀達は賛成した。

光海

「じゃあ、リアンちゃん達を目的地まで送りますか。」

光海は美保達と松葉達とユーリをその場に残し、コナン達を車に乗せてそれぞれの目的地まで運んだ。

鬼怒川千秋きぬがわ ちあき『ダイビングショップ『ZOROTTO』オーナー』  
「リアン・ハートネスさんとリリス・ヴィンヤードさんね。承つて  
るわ。1式レンタルで良かったのよね？澄美子！」

峰岸澄美子みねがし すみこ『ダイビングインストラクター』  
「サイズはMサイズで良かったかな？」

リアン・リリス  
「はい！」

澄美子  
「ウチの店、あまりサイズの種類少ないのよね・・・」  
リリス  
「そんな事ありませんよ！」

リアン  
「素敵なウエットスーツですよ！」

千秋  
「ありがとう。」

ガチャ！  
百舌山太郎ももぢやま たろう『トレジャーハンター』  
「邪魔したな。」

澄美子

「あなた達？ちゃんと片づけていきなさいよ！」

田沼宏悦たぬまひろよし『トレジャーハンター』

「フツ、また来る。」

ガチャ！

リアン

「今の人達、トレジャーハンターですよね？」

リリス

「一緒に潜るんですか？」

澄美子

「イヤ、ヤツらにはエア・コンプレッサーを貸していただけよ。」

千秋

「最近、あの手合が増えて困ってるのよね。」

リアン

「どうして、トレジャーハンターが来てるんですか？」

澄美子

「これよー！」

澄美子は一枚のポスターを指差した。

七海島観光館

『300年前の江戸享保年館。海底宮殿が水面に出ていたという説があります。その根拠となっているのが、海底宮殿から引き上げられた2つの宝、カッタラスという刀とフリントロック式のピストルです。調査の結果、この2つの宝は刻み込まれたイニシャルなどから、1700年代に実在した2人の女海賊、アリア・ハートネスとマリナ・ヴィンヤードの物であると判明しました。2人は、ビヤツク・ラカム船長率いる・・・』

リアン

「え？」

リリス

「女海賊・・・ですか？」

澄美子

「そう！アリア・ハートネスとマリナ・ヴィンヤード！2人は、ビヤツク・ラカムっていう船長の部下だったの。でも、スペインの軍船と戦闘になった時、他の男達が船倉に隠れていたのにも関わらず、アリアとマリナは2人だけで多数の兵士達を相手に勇敢に戦ったの！」

千秋

「お互いに背後の敵は相棒に任せ、自分は前方の敵だけに集中する・  
・信頼し合っているからこそ、できる戦法ね。」

リアン・リリス

「へー・・・」

リリス

「リアン！私、自分の背中を任せられるのはリアンだけって決めるから！」

リアン

「リリス・・・」

リリス

「なんちゃって！」

リアン

「ったく・・・」

リリス

「でも、リアンは平次君なんだよね？」

リアン

「ちよっ、ちよー待ってよリリス！誰があんなドスケベ侍！！」

リリス

「ホントかなあ〜っ？」

リアン

「ホンマやっつてほめっつ」



『さあ、みんなもアリアとマリナの宝を探し出そう！！』

隆太

「本物なんだろうか、これ？」

コナン

「さあな。けどもし本物だったら大変な大発見だ。」

真

「島の宣伝のためのヤラセだったら？」

哀

「・・・それはそれで大変な事になるわね・・・」

隆太

「どつちみち大変なんだな。」

コナン達がそんな話をしていると、光海がやって来た。

光海

「みんな、お待たせ・・・キャアッ！！」

ドテッ！！

光海は豪快にコケた。

隆太・真

「・・・」

コナン・哀

「ハ、ハハハ・・・」

コナン達は七海島各地の地図をもらった。

この地図に、各島の宝箱の位置が記されているらしい。

コナン達は宝探しを明日の楽しみに控え、昼食用の食材を調達する事にした。

千秋

「それじゃ、澄美子の指示に従って楽しんで来てね！後、深い所には行かない事！」

澄美子

「大丈夫ですよ！私がついてるんだから！」

千秋

「それもそうね。」

リアンとリリスは澄美子の指示に従って、海の中へと潜っていく。

リアンとリリスは、しばらく魚達と戯れていた。

やがて、澄美子が指を差した。

澄美子

「（こっちこっち！）」

リアンとリリスは澄美子に従って、奥へと進む。

3人の目の前に、光海が説明していた海底宮殿が見えてきた。

リアン・リリス

「（おおっ・・・）」

リアンとリリスが少し進むと、澄美子が目の前で止めた。

澄美子

「（この先には進みすぎちゃダメ！）」

3人が少し下がると、何と目の前にサメが現れたのだ。

リアン・リリス

「（うわっ・・・！！）」

リアンとリリスは澄美子の指示に従って彼女について行き、窪みに隠れる。

窪みから3人が少しだけ下をのぞくと、3匹のサメが男3人を囲ん

で暴れている。

その3人の内の1人は、体から血を流していた。

澄美子は上を指差し、リアンとリリスはそれに従って上へと上がっていった。

一方、男達はエア・コンプレッサーを使ってサメを撃退すると、負傷した1人を抱えて上へと上がっていった。

ザパツ！！

千秋

「どうしたの？随分早かったわね・・・」

澄美子

「サメよ！！サメが現れたんです！！」

千秋

「な、何ですって!？」

一方コナン達は、昼食用の食料を調達していた。

暁

「たくさん捕れたな。」

風月

「みんな超能力で魚倒しまくってたからね。」

マリア

「次はこっちの方に行ってみよか？」

たくま

「そうだな・・・」

その時、真が何かを見つけた。

真

「ん？」

真は自ら出した光を望遠レンズに変え、微かに見えているものを見た。

真

「（・・・あれは!?!）」

コナンと哀は、仲良く魚を捕っていた。

コナン

「哀、順調じゃないか。」

哀

「うん、コナン君も一杯捕れてるよ。」

コナン

「オレ、オマエと旅行に来てよかった。」

哀

「コナン君……」

コナン

「哀……」

コナンと哀の唇が近づいていく。

真

「コナン君、哀ちゃん!!」

コナン・哀

「うっひゃあ!!」

コナンと哀は真の方を向いた。

真

「ごめんなさい!お邪魔だったみたいね……」

コナン・哀

「いえいえ……それより、どうしたの?」

真

「今さつき、ウェットスーツの人が血塗れで運ばれて行ったわ。リアンさん達かどうかは、わからないけど・・・」

コナン・哀

「・・・」

コナンと哀は真に他の子達を任せると、追跡メガネのスイッチを入れた。

コナン

「リアンちゃん!」

コナンと哀は、島の病院へと駆け込んで来た。

リアン

「あ、コナン君! 哀ちゃんも・・・」

哀

「2人共大丈夫?」

リリス

「うん、私達はね・・・」

その向こうで、澄美子と島の駐在が話していた。

澄美子

「本当にビックリしちゃったわよ、サメが人を襲ってるんだもの・・・  
しかも、3人もいたのに襲われたのは1人だけだなんて・・・」

太郎

「おい、どういう意味だ!」

澄美子

「さあ?」



コナンは控え室のような場所に入っていた。

哀

「どうしたの、コナン君？」

コナン

「澄美子さんの言っていた、『3人潜っていて襲われたのは1人だけ』ってというのがちょっと引っかかってな。」

哀

「偶然なんじゃないの？」

コナン

「アイツらもプロなら、サメの対処法ぐらい知ってるさ。」

コナンは被害にあった男の服を観察した。

コナン

「何かついてる・・・魚の血か・・・」

哀

「それが原因のようね。」

コナン

「ああ。魚の血をビニール袋に詰めて密封し、服の間に仕込む。水圧は水深が深くなるごとに気圧が増えていく。海底宮殿がある深さぐらいまで潜れば、こんなビニール袋の口なんかひとたまりもなく開いてしまう。サメは100倍に薄めた血の臭いを嗅ぎ分ける嗅覚を持つ上に、遠く離れた音も聞き分けられる・・・接近されたら、

人間なんかひとたまりもない……」

哀

「じゃあこれは殺人事件……？」

コナン

「まだ未遂だけだな。」

コナンと哀が戻って来た頃、医者が手術室から出て来た。

「手は尽くしたが、なにぶん出血が多すぎた……お気の毒です……」

513

みずもとかずし  
水本一志

「クソッ……」

千秋

「何て事なの……この島で死亡事故が起きるなんて……」

コナン

「これは事故じゃないよ。ね、ユーリさん。」

リアン

「ユーリ兄!？」

リアンの目の先に、ユーリがいた。

太郎

「どついう事だ、そりゃ!？」

ユーリ

「ビニール袋詰めめの魚の血。これを使って誰かがあなた達を襲わせたのです。コナン君達が見つ付けてくれました。それより、あなた方はトレジャーハンターだそうですね?色々と裏がありそうだ・・・」

一志・太郎

「チツ・・・」

コナンと哀はユーリにその場を任せ、リアン達と共に宿に帰った。

コナン達が宿に帰ると、郁美が魚を捌いていた。

その魚は、コナンと哀が元太達と共に捕った物だ。

郁美

「あら、帰って来たのね。」

元太

「遅いぞ、コナン君!!」

光彦

「何やってたんですか?」

歩美

「どうせ、何かの事件でもあったんでしょうけど・・・」

コナン

「ああ、実は・・・」

コナンと哀が元太達に事情を説明した。

コナン達は夕食を済ませ、それぞれの部屋に戻っていた。

それぞれの部屋割りは、

コナン・哀

歩美・光彦・元太

たくま・マリア

リアン・リリス

暁・風月

美保・銀一

深雪・弓雁・美香

泉・波香・祐美

伊澄・弥生・エル

松葉・鈴也

隆太・真

これでは普段とあまりメンバー変わらないような・・・

銀一

「んで？美保。オマエはどうするんだよ、明日？」

美保

「私？静島に行くつもりだけど？」

銀一

「オマエ、オバケ苦手じゃなかったか？」

美保

「あなたがついてくれば良いのよ。」

銀一

「やっぱりそうなるのか・・・」

暁

「オレが行くのは手綱島か。」

風月

「難破した船もたくさんあるそうね。」

マリア

「ウチらは光根島やな。」

たくま

「何であんな暑い所に行かなきゃいけねえんだよ・・・」

マリア

「冷たい飲み物をたくさん持って行った方がええかもな。」

たくま

「あんな暑い所に行ったら、冷たい飲み物も熱湯になるんじゃないか？」

マリア

「ゴチャゴチャ言つなドアホ〜ッ!！」

バシッ!!

たくま

「イデエ〜ッ!！」

隆太

「何か変な音しなかったか？」

真

「どうせまた、マリアちゃんがたくま君にメチャクチャな突っ込みしてるんでしょ……」

隆太

「止めに行かないのか？オレ達の部屋の真ん前だぞ。」

真

「とぼっちり喰らうのは私、イヤですから。」

隆太

「（真って、S属性なのかも・・・）」

真

「何か言いました？」

隆太

「イヤ、別に・・・」

そんなこんなで1日は終わる。

コナン達は朝食を終えた後、それぞれやりたい事をやるために出発した。

歩美達3人は日向島、マリアとたくまは光根島、風月と暁は手綱島、松葉と鈴也は優雅島、美保と銀一は静島、隆太と真は繭島だ。

深雪達は、しばらくショッピングしてから合流すると言い、自転車に乗って行った。

リアンとリリスは、磯遊びをするためにゾロットへと向かう。

残ったコナンと哀は、しばらく部屋で遊んでから行く場所を決める事にした。

ユーリ

「みんなバラバラに行っちゃいましたな。」

郁美

「そうね。」

ユーリ

「そういえば、トレジャーハンターが昨日サメに襲われましたが・  
・宝は本当にあるんでしょうか？」

郁美



「フンツ・・・ハイエナは獲物のない所には現れないわよ。狙い通りの獲物かどうかはわからぬがな・・・」

コナン・哀

「・・・」

コナンと哀は、そのやり取りをジッと見つめていた・・・

それから2時間後・・・

歩美達3人は、日向島の奥まで進んでいた。

歩美

「どうしてコナン君達来なかったのかな？」

光彦

「昨日の事件の事で、調べたい事があるみたいでしたよ。」

元太

「いいじゃねえか、事件の事はコナン君と灰原に任せて、オレ達は宝見つけちまえば・・・」

同じ頃、マリアとたくまは・・・

マリア

「アツツいなあ、ホンマ・・・」

たくま

「水くれ、マリア・・・」

マリア

「はいはい。」

マリアはたくまに水筒を渡した。

たくま

「もう、のどカラカラだよ・・・」

たくまは1口飲んだ。

グビ・・・

たくま

「アチッッ!!」

ブーッ・・・

マリア

「ぶわっ!?ウチに向かって水吹き出すな、ドアホッッ!!」

バシッ!!

たくま

「イデッ！！」

いつもの夫婦漫才であった。

同じ頃、風月と暁・・・

風月

「さ、暁い・・・何かここ、怖いよね・・・」

暁

「大丈夫だ、風月！何かあってもオレがオマエを守る！！」

風月

「暁・・・」

そんな事言ってる間に、敵出現。

『カッカッカッ・・・』

風月

「きゃッッ、コートのおバケッ！！」

さらにあちらこちらから・・・

風月

「あ……あ……」

暁

「風月、心配するな！オレがオマエを……」

風月

「オバケ怖い！！イヤッ！！」

風月が手当たり次第に撃ち出した術に、コートオバケは全員焼かれた。

風月

「オバケ……怖い……」

暁

「オマエの方が怖いわ……」

さて、話は歩美達に戻る。

歩美達はついに、宝箱を発見した。

歩美

「あつたよ、宝箱！」

光彦

「早く開けちゃいましょう。」

そう言って、手を伸ばす光彦。

元太

「ん？」

元太がふと空を見上げると、そこには鳥の大群が・・・

元太

「な、何だありゃあ!？」

『我の名はゾッキー・・・コイツらは我のカワイイ子分、ゼツキーだ。我の守る宝を狙う者よ・・・生きては帰さん・・・やれえ!!』

ゾッキーが命じると、ゼツキー達が歩美達に襲いかかってきた。

歩美

「2人共下がって!!ハアアアツ・・・」

歩美は手足から刃を出すと、ゼツキー達に斬りかかって行った。

歩美

「ヤアツ!!ゼエイツ!!」

歩美はゼツキー達を斬り倒して行く。

『おのれ・・・これでも喰らうがよいわ!!』

ゾッキーは口から大卵を発射した。

歩美

「キヤアツ!!」

歩美は吹っ飛んだ。

光彦が歩美を受け止める。

光彦

「大丈夫ですか、歩美ちゃん!」

歩美

「え、ええ・・・」

『これで終わりにしてくれるわ!!』

ゾッキーは大卵を発射する準備をした。

歩美

「クツ・・・」

「そこまでよ、妖怪!!」

その時、目の前に3人の女の子が現れた!

泉

「私は瀬川泉!!山王学園委員長パープル!!」

波香

「私は妹尾波香!!山王学園副委員長グリーン!!」

祐美

「そして私は長谷川祐美！！敵か味方が風紀委員オレンジ！！」

泉・波香・祐美

「3人そろって！山王学園戦隊・セイトカイヤクインジャー！！！！」

ドーン！！

祐美

「フツ！決まった・・・」

波香

「名前があまりにも長いがな・・・」

泉

「いいじゃん、ウケてるし」

歩美・光彦・元太

「・・・」

歩美達、啞然。

祐美

「さて、撃てるものなら撃ってこい！！」

『バカにしやがって！！』

ゾッキーは大卵を数個発射した。

祐美

「オマエこそ、私をナメてもらっては困る・・・長谷川流陰陽術！ハッ！！」

祐美は巨大バリアを繰り出した！！

波香

「泉！祐美を支えるのよ！」

泉

「了解なのだ」

祐美達3人の力が合わさり、大卵は跳ね返った。

そして、見事ゾッキーに直撃！！

『ゴギヤアアア・・・』

ゾッキーがヨロケた。

勝利を確信する祐美達。

しかし、まだ終わってはいない・・・

ゾッキーは亡霊化して復活した！！

祐美

「ウソ！！？」

歩美・光彦・元太

「ダメじゃん・・・」



はい、今度こそヤバイです。

祐美達はゾッキを倒したと思っていたが、ゾッキは亡霊化して復活してしまった。

『ゴギヤアアア！！』

祐美

「ウソでしょ！？倒したはずなのに・・・」

波香

「祐美、この後の策は考えてあるのか？」

祐美

「・・・考えてない・・・」

波香

「何だつてええ！？どうして何も考えてないのよ！！？」

祐美

「だ、だつて・・・私、今まで一撃で相手倒してきたから・・・倒し損ねた時の事なんて考えてなかったんだ・・・」

波香

「さすが、テストの答えをマークシートよろしく全て4と記入するだけはあるわね・・・」

泉

「なのだ」

祐美

「そんな事・・・言ってる場合じゃない・・・」

泉・波香

「あつ・・・」

泉達が振り向くと、そこにはブチギレたゾッキーが・・・

『完全にナメてやがる・・・サツサとつぶすか・・・』

ゾッキーは大卵を発射した。

祐美

「も、もうダメか・・・」

祐美が目を閉じかけた、その時だった。

突然現れた無数のお札が、盾状となって祐美達を守ったのは・・・

祐美

「こ、これは・・・」

伊澄

「みんな、無事？」

伊澄と弥生が、祐美達の元に駆けつけた。

弥生

「間一髪やったな。」

『キサマら、何者だ？』

弥生

「ウチらか？ウチらは……」

伊澄

「オマエに名乗る義務などない。その子分共率いてサッサと帰れ。」

泉・波香・祐美・弥生

「い、伊澄……さん？」

『ほう……この私に対してそのような口を聞くとは……どうやら、死にたいらしいな……よかろう。私が直々につぶしてくれるわ……』

ゾッキーは体勢を立て始めた。

伊澄

「弥生、歩美ちゃん達と泉達を連れて離れて。」

弥生

「りよ、了解や……」

弥生は歩美達を伊澄から引き離した。

伊澄

「さあ、かかってきなさい。」

『ナメやがって……死ねーっ！！！！』

ゾツキーは伊澄に突っ込んで行った。

だが・・・

伊澄

「死ぬのはオマエの方だ・・・九葉七式・・・砲丸・爆破滅却。」

伊澄が放り投げたお札が輪を形作り、その中央の穴から砲弾のような光が発射された。

その光に撃ち抜かれ、ゾツキーは一瞬動きが止まった。

『ガ・・・!?!?』

伊澄

「南無阿弥陀仏。」

伊澄はそう言いながら、お札を放った。

お札が当たった瞬間、ゾツキーは爆発した。

伊澄

「残りも迅速に片づける・・・拡散・撃破滅却。」

伊澄は子分共もあつという間に片づけた。

伊澄

「さあ、先に進みなさい。これがこの宝箱の中身よ。」

伊澄は中に入っていた小さなカギを手渡した。

歩美

「これが中身？一体何なのかしら？」

その頃、マリアとたくまは、光根島の奥に来ていた。

マリア

「それにしても・・・ホンマにこの島暑いなー・・・」

そう言いながら、マリアは服で少し扇ぐ。

たくま

「！！！」

ドキッ・・・

マリア

「ん？何赤くなってるんたくま。見たいん？」

たくま

「べっ！別に赤くなんかなってねえよ！！！」

マリア

「何や？人の事散々文句言うとして・・・やっぱりウチのこついうの見てドキドキしてるんか？おやあ？」

たくま

「ベ・・・別にマリアのそういうの見たって、ドキドキなんかしねえよー!!」

マリア

「(カッチーン!!)」

たくま

「だ・・・だいたい、つき合い始めた時にも言ったけど・・・マリアは少し無防備すぎなんだよ!!マリアのそういうの見たても何ともないオレだからいいようなもの・・・他のヤツの前では、もう少し恥じらいとおとなしさを持たねえと・・・そんな軽い事じゃ・・・何されたって文句は・・・」

マリア

「ええよ。」

たくま

「え?」

マリア

「たくまになら・・・何されても・・・」

たくま

「え・・・あ・・・マ・・・マリア・・・さん?」

マリア

「なーんて冗談言っと、アンタは間に受けるんか?」

たくま

「なっ！！」

ピキッ！！

マリア

「今後注意するわ。たくま以外の男には。（勝った）」

マリア、ご機嫌。

そんな事をやっている内に、宝箱がある場所までやって来た。

マリア

「おっ、宝箱や！」

たくま

「早く取るっぜ。」

そう言った時、宝箱の目の前にある地面から何かが飛び出して来た。

『待テエ！！』

たくま

「わぁ！！」

マリア

「何や、アンタは？」



『私ノ名ハ』へヴィー・モール』。コノ光根島ニ放タレタ刺客ダ！』

マリア

「フーン。それにしても・・・弱そうなメカやなあ。」

『何ダト・・・！？』

マリア

「こないな弱そうなメカ、相手にするだけ体力のムダや。サッサと宝箱の中身開けよ。ホラ、アンタそこ退いて！」

『オ、オウ・・・ッテ、ソナ簡単に通スカア！！ココヲ通りタイノナラ、私ヲ倒シテイクガイイ！！』

へヴィー・モールは叫んだ。

マリア

「ハアー、めんどくさ。ええよ。かかってき。」

『私ヲ努ラセタ事、死ンデ後悔スルガイイ！！』

へヴィー・モールはマリアに飛びかかった。

たくま

「マリアア！！」

たくまは叫んだ。

だが、マリアは平然としている。

マリア

「恨むんやったら、ウチに出会ってしもたアンタの運命を恨みいや・  
」

そう言うと、マリアは腰に刺していた木刀に手をかけた。

『死ネエーッ!!』

マリア

「スウウウウ・・・」

タンッ!!

マリア

「東尾流・八文字斬りはちもろじぎいいいつ!!!!」

ズバシユッ!!

マリアは一瞬の内に、ヘヴィー・モールを8等分に斬り裂いた。

『バ・・・バカ・・・ナ!!!?!』

ヘヴィー・モールは大爆発した。

たくま

「マリア!大丈夫・・・か・・・!?!」

たくまが駆け寄ると、マリアは地面にへたり込んだ。

マリア

「あゝ、怖かった〜・・・」

たくま

「（オレはマリアの方が怖かった・・・）」

マリアとたくまは、無事宝箱の中身を回収した。

マリアとたくまがヘヴィー・モールを倒して宝箱の中身を手に入れた頃、風月と暁も手綱島の奥へと入っていた。

風月

「キヤ〜！キヤ〜！！キヤ〜！！！」

風月はさつきから、コートオバケを見るたびに悲鳴を上げていた。

暁はそれに困ってるようだ。

暁

「風月・・・オマエ最初にコートオバケの軍団倒しただろ？平気なんじゃないのか？」

風月

「さつきは10体ぐらいしかいなかったから大丈夫だったの！！」

暁

「そうなんだ・・・」

そんな事を言い合いながら歩いていると、目の前に宝箱が見えてきた。

暁  
「おっ、宝箱だ。」

風月

「さ、暁・・・早く中身取って帰ろつよ・・・」

暁

「そうすつか・・・」

暁が宝箱に近づいた、その時だった。

上から何かが降ってきたのは。

ドンッ！！

『ちょーっと待ったあ！！このオレ様に断りもしねえで宝箱の中身を取るうとは、ちとダメなんじゃねえのかい？』

暁

「誰だ？オマエは・・・」

『オレ様はクレイジー・ラビッツ！！この手綱島を守る者よ！！』

暁

「どうでもいいが、オマエ言葉遣いが荒いな。」

『ああ、オレ様はこつという性格なんでね。』

風月

「ねえ、ウサギさん。」

『何だ、小娘？』

風月

「ヒイツ！わ、私達、その宝箱の中身が欲しいんです。ください！」

『フフン、勇気がある小娘だな。まあいい。くれてやらんでもないぞ。』

風月

「本当ですか？」

『ただし、条件がある。』

風月

「条件？」

『オレ様に勝ってみろ！そうすれば渡してやる。』

風月

「やっぱりそうなるんですね・・・」

風月はハアッとため息をついた。

暁

「なら、オレが相手に・・・」

風月

「暁、ここは私に任せて・・・」

暁

「風月!?!」

風月

「私は最近、暁に助けられてばかりだったわ。だから、今度は私が暁を助ける!?!」

『勢いだけではオレ様には勝てんぞ!?!』

そう言うと、ラビッツは空中に飛び上がり、ボールを数個投げつけてきた。

風月

「ウエポン：RING『ホームランバット』!」

風月はバットを手に持つと、ボールをラビッツめがけて打ち返した。

『なかなかやるじゃないか。』

風月

「私だつて、だてにディテクティブマスターの1人をやってるんじゃないのよ!?!ハアアアアツ!?!」

『うおっ!?!スゴい気迫だな。だが・・・これならどうだ?』

ラビッツは爆弾を投げてきた。

『これなら例え打つてもそちらにダメージが・・・え!?!』

風月はそこにはいなかった。

風月

「私はこっちよー!」

『!?!?!いつの間にも後ろに……』

風月

「くらいなさい!」

風月はバットでラビッツを殴り飛ばした。

『ぐはっ……我が奥義を使う間もなくやられるとは……』

ラビッツは空中で爆発した。

その頃、博物館からカットラスとピストルが盗まれていた……



風月と暁が宝箱の中身を手に入れた頃、松葉と鈴也は優雅島でスロツトをやっていた。

もちろん、ただ遊んでいるというワケではない。

この優雅島では、一定数以上のチップを稼がないと上の階に行く階段が出現しないようになっているのだ。

もちろん、その人達が登り終わるとすぐに閉まってしまったため、ズルは全くできないのだ（一定数以上持つてないと感電して戻される）。

そのため、イヤが応でもチップを稼がなければならないのである。

544

鈴也

「あゝあ、何でこんな事しなきゃならないのかね・・・」

松葉

「仕方ないでしょ、鈴也？優雅島のルールなんだから・・・ホラ、3階に行くために必要な数のチップが集まったわ。行きましょ。」

鈴也

「あ、ああ・・・」

松葉と鈴也は、3階へと上がった。

松葉と鈴也は、螺旋階段を上がっている。

鈴也

「あゝあ、他のみんなはもっと楽に手に入れてるんだろうな。」

松葉

「鈴也、また『あゝあ』？」

鈴也

「だってよく、つまんねんだもん……え!？」

鈴也がハツとすると、松葉が瞳を潤ませていた。

松葉

「鈴也……つまらないの？アタシと遊ぶの……アタシの事、嫌いになっただ……」

松葉はエンエン泣いている。

鈴也

「イ、イヤッ！そうじゃないってば……断じてちがうよ……!」

松葉

「じゃあ、イヤじゃないって証明してくれる？」

鈴也

「ああ……」

鈴也は松葉を抱き寄せると、顔を近づけた。

徐々に縮まっていく距離。

「あ、松葉ちゃん！何してるん？」

不意に後ろから誰かの声がした。

松葉・鈴也

「ヒャアアアッ！！？」

松葉と鈴也はあわてて離れた。

松葉

「そ、その声は……弓雁ちゃん……？」

弓雁

「そー！ウチや。」

鈴也

「なぜここに……？」

深雪

「買い物終わってヒマだったから、遊びに来たんだよ。」

美香

「そしたら、偶然2人を見かけたものでね……」

松葉

「そ、それじゃあ……アタシと鈴也のやり取りも……」

弓雁

「うん、全部見とったで？」

松葉

「え〜っ!〜!」

松葉は顔が真っ赤になった。

松葉

「あうう〜……恥ずかしくて倒れそう……」

鈴也

「……仕方ねえな。」

鈴也はそう言つと、松葉を背中に担いだ。

松葉

「キヤアツ!〜?」

深雪・美香・弓雁

「おお……」

松葉

「ちよっ、鈴也降ろして!〜!弓雁ちゃん達に見られてるのよ!〜!」

鈴也

「大丈夫だつて。この事バラしたらオレがぶっ飛ばすから。」

深雪・美香・弓雁

「怖っ!!」

そんなこんなあつて、松葉と鈴也はようやく最上階までたどり着いた。

松葉

「鈴也、あそこ!宝箱よ!」

鈴也

「んじゃ、とつと回収しますか・・・ん?何だ、あの八手の巢は・・・?」

鈴也がそう言うと、巢から1匹の女王バチが出て来た。

『キィーツ、キィーツ・・・我らの巢を汚そうとする者・・・許さ  
ん!!覚悟お!!』

女王バチは叫んだ。

松葉・鈴也

「問答無用!?!」

『キィーツ!!』

女王バチは巨大化した。

『私はキラール・ビークイン……この八千の巣を守る女王バチ……この宝箱を狙う者の事はご主人様から聞いていた……欲しければ、この私に勝ってみよ!!』

松葉

「容赦は……しないからね？桜流蝶忍法・火炎砲!!」

松葉は炎を吹き出した。

『キーツ、ムダよ……私には正面からの攻撃は通じない!!』

松葉

「そんな……」

鈴也

「だったら、後ろからならどうだあ!!桜流蝶忍法・針マシンガン!!」

鈴也は針を連射した。

『ギーツ!!』

針はビークインのオシリの針を直撃した。

『イタタ……私の弱点を……許さん!!』

ビークインは四方八方に針を飛ばす。

松葉と鈴也はそれを避けた。

松葉

「火炎弾!!」

鈴也

二丁ドムパンチ  
「針撃!!」

『ギヤア!!』

松葉

「後もう少しや!!」

『イ、イカン……このままではやられてしまう……こうなった  
ら奥の手よ……分裂!!』

ピークインは9匹の子バチに分裂した。

『キキキ……我が分身が守っている。私に攻撃は届かんぞ!!』

松葉

「だったら数を、」

鈴也

「減らすまでだ!!」

松葉と鈴也は、協力して子バチを一掃した。

『お、おのれえ……こうなれば、我が奥義で叩き潰してくれる  
!!』

そう言うと、ビークインは高速回転を始めた。

『やれるものなら、やってみろ!』

ビークインは突っ込んでくる。

松葉

「鈴也。」

鈴也

「ああ。」

松葉と鈴也は、手をつないだ。

『何、それ?何かのおまじない?』

松葉

「ファミリアのプロトタイプに負けた時は、互いに離れていたからダメだった……」

鈴也

「だからオレは、もう2度と松葉の手を離さない……オレ達の邪魔をする者が、この世から消えるまで……」

松葉と鈴也は、互いに抱き寄せ合った。

松葉・鈴也

「桜流蝶忍法最終奥義!!炎水蝶蜂激流破!!!」

松葉と鈴也は抱き寄せ合ったまま、高速回転した。



『な、何い！？』

松葉・鈴也

「喰らえええええつ！！！」

松葉と鈴也の高速回転が、ビークインを突き破った。

『ま、負けた……この力は、愛の力……？互いに離れまいとする2人の想いが、私にもヒシヒシと伝わってくる……この想い……何とも、暖かいわ……』

ビークインは大爆発した。

その頃、リアンとリリスは……

澄美子

「じゃあ、準備するから、待っててね。」

リアン・リリス

「はい。」

ドスン！！

澄美子

「？」

太郎

「これも一緒に積んどいてくれねえか？」

澄美子

「ちょっと、あなた・・・」

リアン

「澄美子さん。」

一志

「オマエは動くな！！このお嬢ちゃんがどうなってもいいのかな？」

リアン

「・・・！！リリース！！」

リアンが振り向くと、リリースが一志にナイフを突きつけられていた。  
・  
・

美保と銀一は、静島にやって来ていた。

なぜかエルも一緒である。

美保

「エル、どうしてあなたまで一緒にいるのかしら？」

エル

「そ、それは・・・2人の熱い関係を激写・・・コホン！2人が心配だからよ！」

銀一

「何か今、さりげなく本音が聞こえたような・・・」

エル

「あゝ、またオバケ来たよー！！」

美保

「ハッ！！」

美保はオバケを瞬殺した。

エル

「やっぱり美保はやるね。」

美保

「なぜかしら？今、無性に腹が立ってるんだけど・・・」

エル

「（ヒイツ！こっちに怒りの矛先が向いたら困る！（や、やっぱりオバケがたくさんいるからじゃやないのかなあ）……」

美保

「そつなんだ。なら、サツサと行きましょう。」

美保はオバケをボコボコにしていた。

美保

「なぜなのかしら……まだ怒りが鎮まらないんだけど……」

エル

「（困ったな……このままじゃマズいよ……）あ！あの宝箱のせいじゃない？」

美保

「そつなのかしら？じゃあ、サツサと開けて帰ろう……」

『待て！！』

美保

「ん？」

美保の前に、小さな猫が現れた。

よく見ると、羽が生えて空を飛んでいる。

エル

「カワイ〜!」

エルは猫を抱こうとする。

美保

「エル、危ない!!」

美保は猫を攻撃した。

エル

「へ・・・?」

『チエ〜、バレちゃったか〜・・・よくわかったね〜。』

美保

「幼少の頃から伊澄の妖怪退治に巻き込まれていたから・・・妖怪とかを見分けるのは得意。で、アンタ誰?」

『ボクの名はバルーン・キャバット。この静島で宝箱を守・・・』

ドガッ!!

美保はキャバットを殴った。

『イタ〜ッ・・・何で殴るんだよ〜・・・』

美保

「自己紹介聞くのめんどくさいから。というワケでそこどきなさい。」

『そうはいかないんだよね。もう4体もガーディアン倒されちゃってるから、ボクが負けるワケにはいかないんだよ。って言うても、最後の1体は最強だからね。たぶん今頃勝負してる子達負けてるかもね。グハツ!!』

ゴスツ!!

美保

「じゃあ、サツサとあなたブツ倒してその子達助けに行けばいいって事よね？たぶん最後の島に行ってるの隆太君達だし。」

『フーン、君みたいに華奢な子がボクを倒すって？笑っちゃうね。』

美保

「私に2回も殴られてよくそんな事言えるわね。さて、お話はここまでにして・・・そろそろ勝負しましょうか。」

『そう簡単には勝たせないよ ピーッ!』

キャバットの子分が現れた。

美保

「銀一、エル。援護を頼む。」

銀一

「ああ。」

エル

「任せて。」

美保

「俊足の氷河!!!」

ドンツ!!!

『なかなか速いね。』

美保

「あなたも速いじゃない。でもね・・・私には速さなんて通用しない!!!拘束の冷光線!!!」

『うおっ!?!?』

美保

「臨・兵・闘・者・皆・陣・列・在・前・・・全身凍り付きなさい・・・絶対零度!!!」

ピキキキキ・・・

カキイイイン!!!

美保

「凍らせたわ・・・後はお願い、銀一。」

銀一

「ああ、任せる。ハアアアツ・・・ハツ!!」

凍らせたキャバットに風撃が当たり、キャバットは爆発した。

エル

「ナイス、連係プレー」

美保

「そういえば、どうして私今日ずーっと腹立ってたんだろう・・・」

エル

「（ギクツ!!）ホ、ホラ、さっきのオバケ達のせいじゃない？」

美保

「もう倒したし・・・」

エル

「じゃ、じゃあ、さっきのデカイコウモリ猫は・・・」

美保

「それもさっき倒した・・・あ、そうか！わかった！」

エル

「え？」

美保

「今日私が機嫌悪かったのって・・・あなたにからかわれてたからだったのね」

エル



「（ヤ、ヤバい！美保の背中にダークオーラが……ってか、絶界が！）ぎ、銀一君、助けてくれない？」

銀一

「イヤ、オレも何か機嫌悪いし……」

エル

「ウソオ！！」

銀一

「っていうワケで……」

美保

「お仕置きの間ね」

エル

「イヤッ！！！！」

この後エルがどうなったかは、ご想像にお任せします……

その頃、リアン達は……

ポンベを下に運んでいた。

リリースは首にナイフを突きつけられている。

下まで着くと、大きなボートが目に入った。

それは、澄美子の働いている店のボートだった。

澄美子

「どうして、ウチのボートが・・・？」

一志

「昨日店のオーナーに言って借りておいたんだ。金を払ってな。」

澄美子

「そ、そんな・・・」

一志

「オマエの役目はここまでだ。」

そう言うと、一志は澄美子を気絶させた。

澄美子

「うつ・・・」

ドサッ。

リアン

「澄美子さん！！」

太郎

「オ、オマエは動くな！このお嬢ちゃんがどうなってもいいのか？」

一志

「早く乗れ。」

リアン

「クッ……」

リアン達は、ボートに乗り込んだ……

平尾隆太と宝極真は、繭島に来ていた。

隆太

「真ちゃん、また来るよ！」

真

「しつこい敵ですね・・・いい加減にしなさい！！セルリアン・プロテクション！！」

真はバリアで八千達を弾き飛ばした。

真

「フウ・・・次から次へと湧いてくるわね・・・何だっけこうもたくさん敵がいるのよ・・・」

隆太

「ホラ、ここ城壁の島だっけ岩壺さんが言っただら？城は王族の砦だからな。選ばれた者以外は容易く登れないようになってるんだろ。この城内でたくさんの敵が番兵として控えているようにね。」

真

「そうなの。それにしてもキツイわ・・・」

隆太

「まあまあ。みんながんばってるんだし、オレ達もがんばろう！」

真

「そうね。」

隆太と真は、奥へと進んで行った。

隆太

「これでだいぶ登ったな。」

真

「そろそろでしょうか・・・あ！隆ちゃんあそこ！宝箱があるわ！」

隆太

「よし、早く回収しよう。」

『待て、侵入者よ・・・』

隆太

「ん？真ちゃん、何か言った？」

真

「いえ、私は何も言ってないけど・・・」

隆太

「じゃあ、どこから声が・・・」

『まだわからぬのか・・・オマエ達のすぐ後ろだ・・・』

隆太・真

「すぐ、後ろ・・・？」

隆太と真は後ろを向いた。

隆太

「巨大な棺桶だ・・・」

真

「まさか、この中に？」

真は棺桶に触れてみた。

触れた瞬間、棺桶が光り出した。

隆太・真

「うわっ！！」

棺桶のフタが開き、中から巨大な骸骨が出て来た。

『よく棺桶から出してくれた、若き冒険者よ・・・私の名前はドク  
ロゾン・・・この棺桶に長い間封印されていた番人だ・・・』

隆太

「封印って？」

『私はこの城の宝箱を守るためにここに置かれたのだが、あまりに危なすぎるとい理由で封印されたのだ・・・おかげで、長い間骨

になりそんな相手と戦えなくてな・・・』

真

「っていうか、今はあなた自身が骨なのは・・・？」

『ハツハツハツ、まあそうだな。何せ、300年も封印されていたものだから体の芯まで骨になってしまったよ、ワハハハハ！まあ安心せい。まだ私は衰えてはおらぬわ。それに、元々私は部下に侵入者の排除を頼んでいたのな。しかし、今までここにやって来るのは柔な冒険者ばかりだった・・・お主らはどうだ？私が本気を出しても大丈夫だと、嬉しいのだが・・・』

隆太

「望むところだ！やるよ、真ちゃん！」

真

「はい、隆ちゃん！」

『そうこなくてはな・・・まずは、私の部下達が相手をするぞ！ゆけい、へヴィー・モールJr！！』

隆太

「サンライト・ナツクル！！」

真

「セルリアン・ガトリンガー！！」

隆太と真は、へヴィー・モールJr4体を瞬殺した。

『ワハハハハ！久しぶりに骨のある冒険者と戦えるわい！どれ、私

が直々に相手をしてやるう！ゆくぞ！！ハアアアツ！！』

ドクロゾーンは口から火を吐いた。

隆太

「わわっ！！」

真

「いきなりですか！？」

『言ったはずだ。本気を出しても大丈夫だと嬉しいのだがと・・・  
休みはないぞ！！』

真

「しょうがないですね・・・セルリアン・バズーカ！！」

ドン！！

『グホア！！ワハハハハ、やりおるわ！！いいぞ！もっともっと楽しんで  
ませてくれ！！』

隆太達とドクロゾーンの戦いはしばらく続き、やっと決着がついた。

『ハア、ハア、ハア・・・ここまで久しぶりに熱くなれたのは初めてだ・・・礼を言うぞ、冒険者よ！お主らの勝ちだ！約束通り、宝箱の中身を授けよう！』



隆太

「ありがとうございます。あの、さっきから聞きたかったんですけど……」

「ん？」

真

「このカギって、何に使うんですか？」

『何だ、知らなかったのか？私の島を含めて7つの島のカギ穴を一度に開けると、海底宮殿への道が開けるのだよ。』

隆太・真

「ええ〜っ!!」

『その様子だと、本当に知らなかったようだな……まあいいわ。さあ、奥へ進むがよい。カギ穴はこの奥にあるぞ。』

隆太

「ありがとうございます。」

隆太と真は、奥へと進んで行った。

その頃、コナンと哀は民宿へと戻って来ていた。

美澤に聞きたい事があつたからだ。

コナン

「美澤さん、どこですか？」

郁美

「ここよ。」

コナンと哀が声のする方に行くと、郁美は薪を切っていた。

郁美

「どうしたの？宝探しは飽きたとか？」

コナン

「イヤ、そうじゃないんだよ。」

哀

「美澤さんに確かめたい事があつたの。美澤さん、もしかして昔トレジャーハンターだったんじゃない？」

郁美

「・・・！！！」

郁美は手を止めた。

郁美

「なぜそんな事を聞く？」

コナン

「だって美澤さん、ユーリさんが宝の事を聞いた時、『ハイエナは

獲物のない所には集まらない』って言ったよね？あれって、隠されてる宝が何なのかわかってるって事じゃないの？」

郁美

「……ついて来なさい。」

郁美

「観光課長の岩壺は、この古地図を元にして宝探しの地図を作ったのよ。まだ誰一人謎を解き明かした者はいない……だけど、手掛かりはあるわ。ジョリー・ロジャーよ。」

哀

「ジョリー・ロジャー……」

コナン

「地図に描かれたドクロの事だね。直訳すると海賊旗だ……」

哀

「ねえ、このジョリー・ロジャーの歯……文字に見えない？」

コナン

「ホントだ。DOS DIOSAS……」

哀

「ロス・ディオサス……スペイン語で2人の女神ね……」

その時、民宿の扉が開いて、ふらついた澄美子が入って来た。

郁美

「澄美子ちゃん！どうしたの！？」

澄美子

「リアンちゃんとリリスちゃんが水本達にさらわれて、ボートで・  
」

コナン・哀

「ええ！？」

コナン

「哀。」

哀

「ええ、行きましょ。伊予璃緒矢島に！！」

太郎

「オマエ達は2人で1本のボンベを使いな。」

リアン

「ここまで来れば、アタシらに用はないやろ？」

一志

「もつちよつと働いてもらうんだよ。」

リアン

「！（そういえば、この人達・・・片足に大ケガをしてる・・・）」

その時、リリスが悲鳴を上げた。

リリス

「キャアツ！！」

リアン

「リリス！！」

リリスは右腕に切り傷を入れられた。

リアン

「アタシらをどないするつもりなん？」

一志

「ちよつと働いてもらうんだよ。さあ、水の中に入れ。」

リアン達は、水の中へと飛び込んだ。

しばらく進むと、リリスの肩から血がにじみ出てきた。

それを嗅ぎつけ、サメがやって来る。

すると、突然一志がリリスの体を引っ張った。

リリスの体がエア―から外れた。

リアン

「!!!」

リリス

「ゴボツ・・・」

リアン

「リリスウ!!!」

リアン

「リリースウー!!」

リアンはリリースの所に泳いでいくと、リリースを引き寄せた。

サメが容赦なく向かってくる。

リアン

「ラージア・リース!!」

リアンは電撃でサメ達を追い払った。

リアン

「(・・・エアーが切れそうや・・・)」

リアンとリリースが海の中に入ったのと同じ頃・・・

コナンと哀は走っていた。

伊予璃緒矢島に向かうために。

哀は途中で、歩美達に探偵バッジで連絡を取っていた。

それぞれの島の奥地に向かうようにと。

そこには、カギ穴があるハズだと・・・

歩美達は連絡を受けると、それぞれの島の奥地に1人ずつで向かった。

日向島は歩美。

光根島はマリア。

手綱島は風月。

優雅島は松葉。

静島は美保。

繭島は真。

そして、伊予璃緒矢島にはコナンと哀だ。

歩美

「コナン君、準備できたよ！」

マリア

「ウチもオツケーやで！」

風月



「準備完了・・・」

松葉

「哀ちゃん達はたどり着いた？」

美保

「早くおっ始めましようよ！」

真

「2人を助けるために！」

コナン

「ほんじゃーまー・・・」

哀

「やりますか。」

コナン達は、一斉にカギ穴にカギを差し込んだ。

その時、コナンと哀の目の前が揺れだし、階段が出現した。

コナン

「哀はみんなと合流して、戻ってて。」

哀

「わかった。気をつけてね。」

コナンは奥へと進んでいった。

リアンはリリスを連れ、何とか岩の裂け目に飛び込んだ。

そこから海底宮殿の中へと入って行く。

そのまましばらく進み、リアン達は浮上した。

リアン・リリス

「プハッ！」

太郎

「へッ、生きてたか。」

一志

「よし、そのボンベを持ってついて来い。」

リアンとリリスは奥へと進んだ。

リアン達は、やっと奥地にたどり着いた。

目の前には扉がある。

一志

「このカッターラスとピストルを使えば、お宝が手に入るんだ……」

一志はカットラスとピストルを左上と右上に差し込んだ。

一志

「オマエ、開けてみる。」

リリス

「わ、私!?!」

リアン

「アタシが開けるわ。」

リアンは扉に手をかける。

リアン

「フンググググ・・・」

その時、棒のような物が飛んできた。

リアン

「キヤアツ!!」

リアンは肩をかすった。

一志

「差し込む場所が違うのか・・・?そうか、思い出したぞ。アリアとマリナは、互いに背中合わせて戦ったと聞く。つまり・・・こういう事だ!!」

一志はカットラスを左上に、ピストルを右下に差し込んだ。

差し込んだ瞬間、扉が大きな音を立てて開いた。

一志

「つにやったぞ!!」

2人は喜び勇んで奥へと入って行く。

リアンとリリスは後を追った。

太郎

「どついう事だ!宝がまったく見つからねえ!」

一志

「先に入ったヤツがいて、根刮ぎ持って行ったって事か・・・仕方ない、サツサとずらかるとするか・・・不要物を始末してな・・・」

リリス

「リアン、後ろ任せたよ!」

リアン

「リリスも気をつけて!」

リアンとリリスは、背中合わせになった。

2人のバックに、アリアとマリナの影が出る。

リアン

「アアアアア・・・ハアツ!!!」

リアンは強力な雷を放った。

リリース

「スウウウウ・・・ハッ!!!」

リリースも居合いの要領でナイフを斬る。

太郎

「クツソ、この女達強いぞ!!!」

一志

「確かに強いが・・・コイツには勝てねえだろうよ!」

そう言うと、一志はピストルを取り出した。

一志

「切り札は、最後に・・・ってな。」

リアン・リリース

「クツ・・・」

その時・・・

「2人共、頭を下げろ!!!」

リアン・リリース

「!!!」

突然の叫び声に、2人は頭を下げる。

次の瞬間に飛んできたサッカーボールが、一志と太郎を直撃した。

コナン

「2人共、大丈夫？」

リアン

「コナン君！大丈夫やで！」

リリス

「よくやったわ！」

コナン達はトレジャーハンターの2人を縄でマストに縛り付けた。

コナン

「それで、お宝は？」

リアン

「ううん、全然・・・」

リリス

「先に来たヤツに全部取られたって嘆いてたわ。」

コナン

「フーン。・・・だってさ！残念だったね、宝がなくて・・・」

リアン・リリス

「え？」

コナン

「ボクの後をコッソリつけて来たんでしょ？七海島観光課長・・・  
岩壺光海さん？」

コナン

「残念だったね、宝がなくて……ボクの後をコツソリとつけて来たんでしょ？七海島観光課長……岩壺光海さん？」

スツ……

光海

「イ、イヤねコナン君……私はただ、さらわれたっていう2人を助けよう……」

コナン

「じゃあ、どうして銃なんか持って来たの？」

光海

「それは、トレジャーハンター達が危険だから……」

コナン

「その銃、岩壺さんの先祖の形見なんでしょ？」

光海

「！」

コナン

「そう、アリアとマリナには、彼女達を慕っていた仲間がいた……その名は、ジャック・ゴールドディア！岩壺さんの先祖なんだね？」

光海



「そうよ・・・私はジャックの子孫・・・私の一族は先祖代々アリアとマリナの宝を守り続けてきた・・・私利私欲のために宝を狙う輩を、私は許せなかったのよ・・・」

コナン

「美澤さんに見せてもらった地図には、ジョリー・ロジャーのドクロにヒントがあったんだ。ドス・ディオサス・・・スペイン語で2人の女神というね・・・そして、7つのカギ穴を同時に開けた時、初めて海底宮殿に入れるという事もね・・・」

光海

「そうか・・・最初からミスってたのね、私は・・・」

コナン

「ガーディアン達を各島に解き放ったのも、トレジャーハンターのウェットスーツに細工したのも、トレジャーハンター達を狙撃したのも岩壺さんだね？」

光海

「子供に解かれるなんて、情けないわ・・・」

コナン

「ボクじゃないよ。これは全てユーリさんの推理なんだ。」

光海

「ハハツ・・・さすがは最強のFBIの1人ね・・・」

そう言った時、突然洞窟が揺れ出した。

コナン

「洞窟が揺れてる・・・」

壁にヒビが入り始めた。

コナン

「このままじゃ海水が入り込んで洞窟が水没する！リアンちゃん、リリスちゃん！船の中にあのトレジャーハンター達を運んで！岩壺さんも手伝って！！」

3人は言う通りにし、光海も船内に入った。

コナン

「2人共、よく聞いて・・・今からボクがそこにある鎖のカケラを蹴り上げて、洞窟の天井にぶつける。うまくいけば天井が壊れて、船は浮上できる。ただ、天井を壊したら酸素が一気に減るだろうから・・・2人にこれ。」

リリス

「これは？」

コナン

「哀が作った小型の酸素ボンベだよ。15分くらい空気が吸えるんだ。」

リアン

「コナン君の分は？」

コナン

「大丈夫！ボクの分はちゃんとここにあるから・・・」

リアン  
「……………!!」

コナン  
「いっけえええ!!」

ドンッ!!

ドッゴオオン!!

タタタ……

リアン  
「コナン君、早く!!」

ダンッ!!

コナン・リアン  
「うわっ!!」

ザバアアア……

コナン  
「(ダメだ、息が……)」

スウ……

コナン

「・・・？」

リアン

「・・・」

コナン

「！！」

同じ頃、ユーリは美保達を連れて救助に来ていた。

ユーリ

「もうすぐ伊予璃緒矢島だ・・・」

祐美

「ちよ、ちよつと・・・何、アレ！？」

ザッパアアアン！！

波香

「か、海賊船だ・・・」

泉

「あ、上にリアンちゃん達が！」

ユーリ

「リアーン！大丈夫か〜！？」

リアン

「アタシは大丈夫や、ユーリ兄〜！」

ゴゴゴゴゴゴ・・・

コナン

「！！マズい！船が沈み始めてる！！！」

美保

「飛び込んでえ！！！」

ザッパアアアアン！！

ブクブクブクブク・・・

伊澄

「間一髪だったわね。」

弥生

「そやな。」

ユーリ

「それで、宝はあったのか？」

リアン

「ううん、何も。」

リリス

「あつたのはあの海賊船だけ。」

コナン

「あの海賊船が宝だったんじゃないの？つていうか、アリアが残したあの地図、ホントは宝の地図じゃなくて、マリナに宛てたメッセージだったんじゃないかなあ？」

ユーリ

「まあた適当な事を・・・」

郁美

「イヤ、あながちまちがつてはいないかもしれないわ。あの海賊船は、後から脱獄して来るマリナと2人で再び航海に出るのを夢見たアリアが建造した船だったんでしよう。ところがマリナは獄中で病に倒れ息を引き取り、アリアもマリナを待ち続けたまま亡くなってしまった。そして残されたあの海賊船は航海に出る時が来るのを海底の墓場のようなあの洞窟で待ち続け、300年後の今日最初で最後の航海に出てあなた達を海面まで送り届け、2人の主人を追うように姿を消した・・・！ガラにもない事を言ってしまったわね。忘れて・・・」

ユーリ

「まあ300年も経った今じゃ、それが本当かどうかはわからないがな！」

コナン

「（イヤ、アリアがマリナを待っていたのは本当だ・・・その証拠に、ジョリー・ロジャーのドクロの下に描かれているだろ？アリアとマリナの、ピストルとカッタラスがな・・・）」

コナン

「ところでリアンちゃん、どうしてボクが予備のボンベを持ってな  
いってわかったの？」

リアン

「ああ、その事？中学1年生の時、突然雨が降った日があつてね。  
その時アタシ、カサを持って来てなかつたの……で、その時……

」

リアン「困つたなあ……アタシ、カサ持って来とらへんし……」

平次「ほい、カサ！貸したるわ！」

リアン「え？そやけど平次は？」

平次「アホ！オレは探偵やで？こつなる事予想して、ちゃんともう  
1本持つて来とるんや！ホラ、早う行け！待ち合わせしてるんやろ  
？」

リアン「おおきに平次！明日返すから！」

リアン

「そやけど平次な、ホンマはカサなんか持つとらへんかつたんよ。  
結局ズブ濡れでカゼ引いてしもて……で、あの時のアイツによ  
う似とつたつてワケ！ヤセ我慢してるアホなアイツとな！」

コナン

「(悪かったな、似とって・・・)」



ファイル403：七海島の海賊記（ジョリー・ロジャー）『14・浮上する海賊

『名探偵コナン・七海島の海賊記』ジョリー・ロジャー

主題歌：7つの海を渡る風のように

メインテーマ：名探偵コナンメインテーマ『紺碧バージョン』

サウンド：名探偵コナン『紺碧の棺』ジョリー・ロジャー オリジナル・サウンドトラック

ファイル404：越水七槻VS向日木凧『前編』

江古田の森に続き、阿蘇山でも青の組織の陰謀を目にした越水七槻。その事により彼女の胸には今、全探偵修練所制覇以上の目標が生まれていた。

すなわち、『打倒青の組織』という決意である！

・・・不炎明日奈と別れた後、数日にわたる1人きりの特訓を行った七槻。

彼女が向かう先は・・・

七槻

「もつと強く！もつと強く！！なるけんね、ボク！！！」

日本中のディティクティブマスター達が緊急招集された、リゾート・アイランド遊園島の町。

沖縄！！！！

七槻

「リゾート地が立ち並んどる。あれが沖縄ったいね。」

ミシ！

七槻

「！！」

ギシギシ・・・

ズルツ・・・

七槻

「あつ、マズか！！」

ヒュンヒュン・・・

バッ！

七槻

「たああああ！！！」

ザアツ！！

七槻

「トルル！！『マジカル・リーフ』ったい！！！」

バッ！！

ズバ！！

ザシッ！！

七槻

「フワッ、ヒヤッとしたったいね。大丈夫やったと？」

「あ、ありがとうお姉ちゃん。」

七槻

「なしてあげな枝先にいたとね。危なかるーが。」

「それが、この子具合が悪かったみたいで・・・」

七槻

「なら、これを食べさせるといいとよ。」

「ありがとう・・・あ！もしかして、ウワサの越水七槻！」

七槻

「？なして知つとると？」

「やっぱり！急いで凧さんに知らせないと！凧さ・・・」

「大声を出さずとも私はここにいる、ハルナ！待っていたよ、越水七槻。カイオーガが目覚める前に、君と会いたかった！！」

七槻

「だ、誰ね！？」

凧 「私の名前は向日本凧、沖縄を守るディテイクティブマスターだ。待っていたんだよ、七槻！君が来る事はわかっていた。だから町のみんなにも、それらしい者を見た時にはすぐに知らせるようにつておいたんだ。」

七槻

「ディテイクティブマスター……様……!!」

凧

「警戒しているようだね。よし、いいだろう！ガーディアン・チルタシユロン!!」

バサツ！

ザアア!!

凧

「まずは、細かい事抜きに一試合といこうじゃないか。君の実力も見てみたいし。」

七槻

「……よかよ!!」

凧

「ハルナ！私の飛行服を!!」  
エア・スーツ

ハルナ

「ハ、ハイ！」

スツ・・・

凧

「さあ・・・いざー!!」

七槻

「勝負!!」

バサアツ!!

凧

「ドラゴ・ブレイズ!!」

ドシュ!!

バババツ!

凧

「木々の中に逃げ込んだか!フッフ、戦い方をよく知ってるな。そう!この沖繩は南の島の町!!縦横に広がる木々の空間全てがバトルフィールド!!空の雲、その雲さえ突き破る大樹!立体的で幻想的なバトルが楽しめるだろう?」

七槻

「チャモ!影分身!!」

バババババババ・・・

ドガツ！！

凧

「なかなかやるな。飛行系のトロピノドンを持っていながら、なぜ空中戦に持ち込まないかと思ったが・・・なるほど、格闘で押し切るこの展開を待っていたのか。」

七槻

「うん！そしてそれだけじゃなかと！ボクとこのスパイラルスパロウ・・・チャモは、この町に来る前集中的に戦いの訓練ばしてきたと。もう一段上の力ば手に入れるために・・・ね！！だからボクにはわかる！チャモがもうすぐ、この戦いによって新しい姿ば手に入る・・・そういう事が！！」

凧

「まさか・・・パワーアップ！！！！」

メキメキメキメキ・・・

七槻

「ボルケーノ・キック！！」

ズアツ！！

ドッコオオオオン！！

七槻

「勝った！！」

ファイル404：越水七槻VS向日木凧『前編』（後書き）

予告

哀「名探偵コナンスペシャル版もおかげさまで10作目到達！そして気になる最新作第10作目は……」

「ついに目覚めてしまった……グラードンとカイオーガが……！」

ユウリ「（オレがこの戦いによって命を落とすかもしれないからだ……）」

躑躅「絶対に止めますわ……！」

松房・青桐「これが究極の結論だ……」

潤治「父さああああん……！」

三稜「ユウリイイイイ……！」

名探偵コナン・陸海空の交響歌<sup>シンフォニア</sup>



世界の運命は・・・

2人の男女にゆだねられた・・・

ファイル405：越水七槻VS向日木凧『後編』

七槻

「ボルケーノ・キック!!」

ズアッ!!

ドッコオオオオン!!

七槻

「勝った!!火傷も負わせる蹴り!強烈やったとやる!?!あ、あれ?」

シーン・・・

七槻

「マズか!相手のチルタシユロンはどこ行ったと!?!?!雲!そうつたい!あの綿雲のような翼で、本物の雲の中に紛れ込んでしまったつたい!!」

凧

「ご名答!すばらしい観察力と推理力だ。バニシングドライブ!!」

バッ!!

ズドッ!!

七槻

「チャモオオオオツ!!」

七槻

「たっは〜!!すがすがしく負けたったい!!」

凧

「パワーアップさせた瞬間と、『相手を火傷させた!』と思った瞬間、併せて2度油断したね。でもチルタシユロンには、リフレッシユという自分で治癒する術がある。オマケに特殊能力が『自然回復』だからね、火傷なんかに頼る戦い方は避けた方がいい。」

七槻

「最後は龍の舞で攻撃と速度を上げて、バニシングドライブでトドメ・・・まいりました!!」

凧

「スジはスゴくよかった!数日間であれば、コーチしてもいいよ。」

七槻

「本当やかか!?弟子にしてくれるという事やね!?嬉か〜!!お願いします、先生!!」

凧

「ディティクティブマスターと会うのは、私で何人目だったのかな?」

七槻

「え〜っと、5人目みたい！みんな強くて、すばらしか人達だったよ〜！」

凧

「フッフ、そうか。お〜い、みんなあ〜！全員強くて、すばらしい人達だそうだ〜！」

七槻

「へ・・・？」

鬨樹

「見てたぜ！勝負〜！」

躑躅

「まあまあの攻防でしたわ〜！」

鉄泉

「しかし凧にはなぎ倒されちゃったの。な〜んてな、ウワッハッハッ〜！」

明日奈

「また・・・寒いよ、鉄泉さん〜！」

七槻

「ああ〜！！ボクがこれまで戦ってきたディティクティブマスター様達・・・！」

凧

「そうだ。実を言うと、緊急会議のためにディティクティブマスターのほとんどがこの沖繩に召集されている。」

七槻

「緊急・・・会議？そういえばさっき、『カイオーガが目覚める前に』とか言っただけ、もしかしてそれと関係あると?。」

凧

「聞いてたとおりカンがいいね、正解だ！カイオーガっていうのは・・・ガーディアンだよ。伝説に伝えられる超古代の！その超古代ガーディアンがエネルギーバランスの崩壊によって目覚めようとしている。我々ディティクティブマスターは、その対策を立てるためにこうして集まった！これから、とても大きな戦いが必ず起こる！！君の力も是非貸してほしい。これが『君を待っていた』と言った理由だ。」

七槻

「ボ、ボクの力は・・・」

凧

「私以外の者達からも出た提案なんだ。急な頼みという事はわかっている。あわてて決めてくれなくてもいい。この町にいる間に返事をしてくれ。まだ到着していないディティクティブマスター達もこれから集まって来るから、彼らにも会うといい。そろそろ他の者も来る頃だ・・・」

ファイル406：ディティクティブマスター達の不協和音

凧

「遅れていた者達がやっと来たか。」

ザツ！

凧

「紹介しよう、七槻。雪風時音、大河内雷牙、朧屋陽、水島陽太、湯江あずみ、砥草根風蘭だ。」

七槻

「よ、よろしく・・・」

雪風時音  
ユキカゼ トキネ

「そんなにかまえなくていいですよ。私達は優しいですから。ね？」

大河内雷牙  
オオコウチ ライガ

「まあ、確かにそうだが・・・」

朧屋陽  
オボロセヒナタ

「それより凧、正気か？」

凧

「何がだ？」

水島陽太  
ミスシマ ヨウタ

「人員不足だからといって、こんな子供に手伝いをさせるなどと考

えるとは……」

湯江あずみユエ

「まあ、そこが風らしいっちゃ風らしいけどな。」

砥草根風蘭トクサネ フウラン

「そっね……あ、風！」

風

「何だ、風蘭？」

風蘭

「ちょっと。」

タタタ……

風

「何だ？」

風蘭

「来ていきなりで悪いんだけど、私は早退するわ。ちょっとかかりきりの仕事があっただね……」

風

「『あの男』の事か？」

風蘭

「ええ。だからもう行くわ。」

風

「ムリは・・・するなよ。」

風蘭

「わかってるよ。私を誰だと思ってるの？フロンティアの一員、ジ  
ンダイとつき合ってる女よ？」

凧

「それもそうだな。」

風蘭

「ガーディアン・ドンカラス！！」

バサバサツ・・・

凧

「風蘭・・・」

しばらく七槻は特訓をしていたが、1時間ほどして急に地震が起  
った。

七槻

「わっ！！」

ドサツ・・・

七槻



「(な・・・何が起つてると?)」

凧

「さっきはスゴい地震だったな。大丈夫だったかい？」

鬨樹

「大丈夫だったかだって？へッ！地震どころじゃないって。」

躑躅

「そうですね！さっきのは何ですか!？」

凧

「話の意図が見えないな。」

躑躅

「いくら私達に勝ったといっても、あんな子供を戦力にだなんて！しかも、いかにも私達全員が賛成してるような言い草でしたけど、そう考えているのはあなたと明日奈さん、そして彼女を知ってる一部のだけですね！まあ、金美さんと銀一さんが到着すればハッキリしますわ！どちらの主張が正しいのか、が!!！」

凧

「・・・(瀬藤銀一と瀬藤金美、2人は今どこに・・・)」

ファイル407：双子の姉弟・金美と銀一 『前編』（前書き）

オリジナルキャラクター・ファイル38

せどつ かなみ  
瀬藤金美

瀬藤銀一の双子の姉で、銀一と同じ学校に通う女子高生。

頭髪の色や髪型、瞳の色まで同じなため、知り合いでもなかなか2人がどちらか見分ける事は難しい。

銀一と2人そろって京都のディティクティブマスターを務めており、『2人で1人のディティクティブマスター』という特殊条件で就任している。

京都1の神秘のコンビネーションを持ち、『ダブルバトル』という分野では無敵。

金美は銀一と美保の仲をからかうのが好きで、エルや深雪達と同じくよく美保に怒られているようだ。

双子の弟の銀一や、妹弟の銅香や鉄斗の事がカワイくてカワイくてしょうがない（ただし銅香のセクハラ行為には困っている）。

意外に料理が下手で、銀一の代わりに見よう見まねでシチューを作ろうとして鍋を焦がしてしまった事がある。

ファイル407：双子の姉弟・金美と銀一 『前編』

凧

「（銀一と金美・・・2人は今、どこに・・・？）」

ザッ！

嵐山奥地 別名『送り火山』

銀一

「確かなんだね？金美。」

瀬藤セドウ金美カナミ 『17』 『銀一の双子の姉』

「うん、まちがいないと思うわ、銀一。見て。」

スウ・・・

金美

「ソルマージがここに迫ってくる邪気を感じしているもの！！」

銀一

「ソルマージは相手の心を読みとるガーディアンだといわれている。そのソルマージがこんなに反応してる・・・何者かがこの嵐山に押し入って来る事は確実だね！」

金美

「・・・うん。アタシ達の仕事を果たす時だわ。」

銀一

「でもそのせいでディティクティブマスター招集に参加できなくなつてしまったのはマズかったね。せめて、ここにいる事だけでもみんなに伝えられたら・・・」

金美

「ダメよ銀一。アタシ達がこの仕事についている事は、他のディティクティブマスターにだって秘密なんだから。それにこの仕事を果たすっていう条件で特殊な就任の仕方させてもらってるのよ、忘れたワケじゃないでしょ？」

銀一

「・・・ああ、『2人で1人のディティクティブマスター』っていうね。」

ギョーン・・・

銀一

「こつちだ、金美!!」

ダーツ・・・

金美

「2体共、山内部こから邪気を感じたみたい。」

銀一

「うん、それにしても熱いな・・・」

ポオツ！！

「熱い？熱いのは当然だ。そもそも『送り火』とは死者をあの世へ送り出す火。だから山の内部をくり抜いて墓地にしたこの奥地は『送り火山』っていわれてるんだろ？人間や動物達の魂の眠る場所・・・」

金美

「姿を見せなさい！！」

カッ！

バツ！

「いただきに来たぜ。クリーバーとブレイバー。グラードンとカイオーガを自由にできるという2つの：RINGをな。」

金美

「感知していた邪気はあなた達のものだったのね。それに：RINGの名前と力まで知ってるなんておっどろき！」

「ずいぶんカワイイ番人だな。チビツ子が2人。」

「サツサと片づけてやろうか！！」

グアツ！！

トンツ！

ゴオツ・・・

バツ！！

トツ！

トツ！

金美

「この程度でアタシ達を倒すつもり？」

銀一

「もっと全力で来たらどう？」

金美

「京都神秘のコンビネーション、銀一と金美。」

銀一

「オレ達のもっとも得意な戦闘形式・・・」

銀一・金美

「2VS2の・・・ダブルバトル！！！！」

ファイル408：双子の姉弟・金美と銀一『後編』

超古代。

果てなき戦いを繰り広げたと伝説に伝えられる2匹。

カイオーガとグラードン！！

しかし、その激しい戦いを終わりへと導いた、2つの：RINGがあつた・・・

藍色の剣『ブレイバー』と、紅色の剣『クリーバー』・・・！！

嵐山山頂

「お・・・おお・・・」

「どうした？」

「山に侵入者がありました。そして今、銀一と金美が戦っています。」

「なんと・・・年老いて役目を果たせなくなったワシらの代わりに、  
高校生の2人が・・・」

「ええ。しかし・・・2つの：RINGはどんな事があっても守り  
きらなければなりません。この2つの：RINGだけは・・・！」

銀一

「いくよ、ソルマージ!!！」

金美

「いくわよ、ルナマージ!!！」

銀一・金美

「コスモパワー!!!!！」

ギュイイイイン!!!!！」

グワツ!!！」

バシツ!!！」

銀一

「効かないよ！エスパー属性の補助系の術『コスモパワー』で2体  
の特殊防御が極限まで高まつてるんだ!!！」

金美

「もつとも、ルナマージとソルマージは岩属性を持つてるから、元  
々の属性相性も勝ってるわ!!！でも手加減はしないわよ!!！この場  
所に邪念を持って入って来る人達に!!！ルナマージ、岩雪崩!!！」



ゴバツ!!

ドドドドドドドド!!

金美

「岩雪崩は2体の相手に同時にダメージを与える事ができるわ!!」

銀一

「そしてルナマジジが2体の動きを封じている間に、ソルマジジは次の攻防の準備をする!!これもダブルバトルの極意が1つ!ソルマジジ!瞑想!!」

ギユイイイイイン・・・

銀一

「極限まで高まれ!!特殊攻撃の力!!」

「クツ!!溶けるで・・・」

銀一

「逃がすか!!サイコ・ウェーブ!!」

ギユバン!!

ドツ!!

金美

「フウ・・・久しぶりに汗かいた。どう?これでもカワイイチビツ子の番人だなんて呼べる?」

「……」

金美

「呼べないわよね。わかったらサッサと出て……」

グニャ〜……

金美

「う……」

ヨロツ……

銀一

「どうした、金美!？」

金美

「ゴメン、銀一、少し目眩がしただけ……ずっと炎の中にいたからかな。」

銀一

「!?!」

ズ……

ズズズズズ……

銀一・金美

「!?!」

「フフフフ。」

ズズズズズズ……

「フフフフフ……」

「ハハハハハ……」

銀一

「クソツ、まだやる気か！！仕方ないな！！もう1度、オレ達のコンビネーションで、ダブルバトルの力で……コイツらをやっつけるんだ！！」

金美

「アタシ達ならできるわ！！」

ドドドドドド……

火影

「フフフフフ。そうだろうな、できるだろうよ。……ただし、本当の2VS2だったら……の話だ。」

銀一

「クッ！オレ達の攻撃は確実に当たってるのに……」

金美

「どうして技が通じないの！？」

火影

「フフフ……当たり前だ。初めからダブルバトルなんて行われち

やいねえ。オマエ達が相手にしてるのは、このオレ、火影が作り出した炎の幻影さ。墓地の中に灯っていた送り火に混じって、オレのマグツムリの炎が少しずつ少しずつオマエ達を取り囲んでいった事に気づかなかったようだな。そのまま一生幻影相手に戦ってる。さてと・・・この分だと：RINGがあるのは・・・山頂か。」

「!!!」

ガッ!!

「う、く・・・」

ドサッ・・・

火影

「フフフフ。確かにいただいたぜ。2つの：RING!」

## ファイル409：凧と三稜の不協和音

沖縄

越水七槻は、異様な気迫で修行を続けていた。

七槻

「うおおおお！！チャモ！！」

ババツ！！

七槻

「火の粉！トリプルキック！！ボルケーノキック！！おおおお！！」

チャモもそれに答えるように、強烈な攻撃で沖縄の野生ガーディアンを叩きのめした。

七槻

「まだ、まだあー！！」

七槻は一目散に凧の所へ向かった。

七槻

「先生！！稽古ばつけてほしかー！！」

凧

「な、七槻！・・・その気迫は・・・」

七槻

「先生！稽古ば早く〜！！」

凧

「ど、どうしたっていうんだ？」

七槻

「どうもせんです！！ただ、鍛えてほしかとです！！」

凧

「わ、わかったよ！ドクモース！！キーアゲハ！！チルルツト！！」

七槻

「リララ！トルル！ルドド！！」

七槻

「そりゃあ！せいっ！！」

七槻の気迫は、凧にも伝わる。

凧

「（スゴい・・・何という気迫だ！！）何をやってる！応戦するんだ！！ドクモース、痺れ粉！！チルルツト、乱れ突き！！キーアゲハ、吹き飛ばし！！」

七槻

「おおおお！！リララ、トルル！燕返し！！ルドド・・・岩石封じ！！」

強力な技により、凧のガーディアンは全員倒れた。

凧

「スゴいな・・・何か激しい思いのたけを戦いにぶつけているかのようだったよ。それだけのバトルを見せてくれたという事は・・・」

七槻はうなずいた。

凧

「そうか・・・ありがとう。我々ディティクティブマスターと共に、この緊急時に働く戦力として力を貸してくれるんだね？これからよろしく頼む！」

七槻

「はい！」

凧

「私はバリアリーフ・タワーにいるから、今夜は宿泊塔で休むといい。」

鬨樹・躑躅

「・・・」

バリアリーフ・タワーで、アメリカから帰って来た三稜と凧が会っていた。

三稜

「凧。」

凧

「三稜! どうした?」

三稜

「大気中の湿度の高低を調べて来た。やはり阿蘇山停止の影響は、いろいろな所に出ているようだ。」

凧

「そうか。」

三稜

「・・・」

凧

「な、何だ?」

三稜

「お節介なようだが、この危機的状況にあつて、ディティクティブマスター達のまとまりの悪い事が気になっている。」

凧

「!! 私リーダーシップに問題があると言いたいのか!?!」

三稜



「ちがう！ 凧はがんばっている。ただ・・・47人と数が多く、ここまでそれぞれ個性の強い面々をまとめるのは、本当に大変だろうと思うだけだ。だからこそ、ムリして1人で背負い込まず、頼れる事は誰かに頼っていても良いんじゃないか？」

三稜は凧の方に手を置いた。

しかし、凧をその手をはねのける。

凧

「私は探偵協会から、まとめ役を言いつかっているんだ！ その役目をまっとうするだけだ！！ 立場を越えて、必要以上の発言をする事は控えてくれ！！・・・もう・・・私達はそういう関係ではないのだから・・・」

三稜

「・・・」

三稜は沈黙した。

## ファイル410：真希とファミリアの意思

片桐邸の1室で、1人の少女が勉強をしていた。

真希

「フウ・・・これで問9も正解と・・・」

「マスター・・・いますか？」

真希

「ファミリアね？入りなさい。」

ファミリア

「はい。」

真希

「随分遅かったわね。って・・・え!!!？」

真希は絶句した。

ファミリアの姿は、メイド姿だったからだ。

真希

「ファミリア・・・何？そのカッコ・・・似合ってはいるけど・・・」

「

ファミリア

「え、えつと……ちょっとこれ着てみないかと言われて仕方なく……」

真希

「そういう事なら良いわ。どうせまた『あの子』に着ろって言われたんでしょ？」

ファミリア

「は、はい……」

真希

「まったく、あの子は……ファミリアは着せ替え人形じゃないつてのー！まあ、その事は向こうに置いて……どう？高校生活は……」

ファミリア

「はい、おかげさまで楽しめています！制服も結構カワイイですし、授業もやりがいがあってよいですし……あの、マスター……」

真希

「何？」

ファミリア

「どうして私の編入先が帝丹高校なんですか？」

真希

「そりゃ、園子さんや瑛祐君達を守るためよ。あの学校、前にタチの悪いバカによって爆弾が仕掛けられた事があるってコナン君が言ってたからね。」

ファミリア

「ハ、ハア・・・爆弾ですか・・・物騒ですね・・・」

真希

「それで？『アイツ』は見つかりそうなの？」

ファミリア

「はい。もう少しかかるかと思いますが、必ず居場所を見つけ出します・・・」

真希

「頼むわよ。アイツは双子の妹のあなたとちがって、ウィズが私の意思をいじくって悪い心だけを注ぎ込んで作り出した、いわば『悪のファウナ』・・・野放しにはしておけないわ・・・」

ファミリア

「そうですね・・・」

真希

「アイツを見つけ出したら、アイツも最期よ・・・ファミリア・ファウナ・・・アイツを・・・あなたの双子の兄を絶対に・・・破壊しなさい。」

ファミリア

「・・・はい・・・マスター・・・」

## ファイル411：コナンと哀の1泊旅行

コナンと哀は、ちょっとした旅行に来ていた。

南杯戸町の旅館がリニューアルしたからだ。

哀

「コナン君、私、2人きりで旅行に行くのなんて初めてだよ・・・」

コナン

「大丈夫だって！田舎じゃねえんだから、普通に楽しくやれば。」

哀

「そだね。楽しもうね、コナン君！」

コナン

「ああ。」

南杯戸旅館『霞亭』

コナンと哀が旅館に着くと、着物を着た女性が2人を出迎えた。

「ご予約の方ですね？お待ちしておりました。」

コナン

「江戸川コナンです。」

哀

「灰原哀です。」

「初めまして。私、<sup>ワタクシ</sup>この旅館の女将を『勝手に』務めております色葉と申します。」

ペコッ・・・

お辞儀をした瞬間、色葉の顔がポロリと取れた。

コナン

「うおおおおお！？」

哀

「キヤアアアア！？」

色葉

「あ、驚かせてすみません・・・私、カラクリ人形なもので・・・」

哀

「そ、それってアンドロイドだって事ですか？」

色葉

「ロボットとも言いますね。鉄腕アトムのようなものです。」

哀

「ハ、ハア・・・ところで、さっき言ってた勝手についていうのは？」

色葉

「この旅館、元々あまり客が入ってなくて寂れていたんですよ。そこに現れた救世主が私・・・と言ったら正しいのでしょうか？私が目覚めた時には、この旅館内にいたものですから・・・それからがんばって旅館を建て直し、今に至るといってワケです。」

コナン

「そういえば、この前新聞で騒いでたなあ・・・『南杯戸旅館』霞亭『リニユール！謎の美人女将登場！』って・・・」

色葉

「まあ立ち話も何ですから、旅館内にご案内いたします。」

コナン・哀

「あ、はい。」

哀

「おいしい！！こんなおいしい温泉饅頭、私初めて食べましたよ！」

色葉

「ウフフ、気に入っていただけて何よりですわ。コナンさんはどう

です？おうどんのお味は。」

コナン

「おいしいですよ。コシがあつて。」

色葉

「ありがとうございます。そろそろ温泉にでも入って来てはどうですか？」

哀

「はい。コナン君、行こ！」

コナン

「ああ。」

コナンと哀が温泉から上がって広間に戻って来ると、色葉が何やら困っていた。

コナン

「どうしたんですか？色葉さん。」

色葉

「このお客さんが酒に酔われて・・・お客さんに絡み始めたので、止めてる所なんです。」

「オレは酔っちゃいねえっつうのー・・・ヒック！それより姉ちゃ



んよお、オレと遊ぼうぜえ〜。」

男が色葉の腕をつかんだ。

色葉

「あ……。」

哀

「コナン君。」

コナン

「ああ、麻酔銃で……。」

色葉

「お客さんに迷惑をかけるあなたの醜態……あなたを敵と見なし……排除します!!！」

コナン・哀

「え!?!」

その瞬間、色葉の体中から武器が……

コナン・哀

「ええ〜っ!!?!」

色葉の集中砲火を受け、男は逃げ出した。

色葉

「逃がしません……。」

色葉は入口の部分を撃ち落とし、男を下敷きにした。

コナン・哀

「(こ……怖……)」

何だかんだあって、コナンと哀は旅行から帰って来た。

哀

「凄まじかったね、あの色葉さん……」

コナン

「そつだな。今度来る時はみんなも誘って行くか……ん？」

哀

「どうしたの？」

コナン

「郵便受けに手紙が入ってる。」

哀

「ホントだ。誰からだろ？」

コナン

「どれどれ……『江戸川コナン様へ 時津正宗』……誰だろ？  
時津正宗って……」

## ファイル412：2大組織の策略

七槻が凧達との共闘を承諾したその頃。

突如、大津波が発生した！！

大地を飲み込むほどの巨大な波が・・・

某市某所『青の組織アジト』

『阿蘇山停止による海水位上昇・・・順調、順調・・・現在、山口の40パーセント、兵庫、佐賀の20パーセントが水没中！』

青桐

「すばらしい！」

その時、水の中から音が聞こえた。

青桐

「・・・む、来たか・・・」

松房

「待たせたな、青桐。」

潮  
「……い、いよいよですね、……総帥……海底洞窟に足を踏み入れる瞬間……」

滴に支えられながら、潮が来た。

青桐

「潮さん、まさかあなた、自分も作戦に参加できるとでも？」

潮

「あ……体の事でしょうか？それならだいぶ治って……」

その時、潮を青桐のガードイアンが殴り飛ばした。

青桐

「そんな事を言っているではありません。私は、あなたが阿蘇山で犯した失敗の事を言っているのです。失敗者であるあなたの処分は、追って指示をしましょう。海底洞窟には、滴さんを連れて行きます。」

焰

「ヒュ、怖い怖い。」

松房・青桐

「海底洞窟に向けて……発進！！」

その頃三稜は、山口に来ていた。

三稜

「こ、これは何という事だ！町の大半が水の中に・・・昨日はこのような異変は報じられていなかった・・・原因はやはり、阿蘇山停止！熱エネルギーの低下！！しかし、一夜でここまでの状況に！？事態は、我々が思っているよりはるかに速く進行しているのか・・・」

海底洞窟

青桐

「おお！ここが・・・」

松房

「海底洞窟！！」

青桐

「すばらしい！人間の力だけでは到達し得ない未知の場所に、我々は足を踏み入れたのだ！」

松房

「・・・そして、今ここにいるだけでも感じるぜ！！大地のエネルギー、灼熱の鼓動！！」

青桐

「大海のエネルギー、豪雨の鼓動！！」

青桐

「進路も二手に分かれている。」

松房

「ここでお別れだな。」

青桐

「次に会う時には、どちらが正しいか答えは出てるはずだ。」

松房

「どんな答えでも好きなだけほざけよ。ただし、テメエの口がまだ開ける状態だったらな。」

青桐と松房はしばらく進み、奥地へとたどり着いた。

青桐

「おお！！見つけたぞ！！」

松房

「おお！！見つけたぜ！！」

青桐

「目覚めよ、カイオーガ！！！！」

松房

「目覚めよ、グラードン！！！！」

### ファイル413：超古代ガーディアンの復活

滴

「おおおお！！」

ペリカノドンの猛攻により、ついにカイオーガの目が開いた。

カツ！！

モノスゴい勢いで、カイオーガは封印を突き破り、泳いで行った。

青桐

「やつ・・・たぞ！カイオーガを目覚めさせたぞ！！・・・しかも赤の組織がグラードンを起こすより先に！！フッフ、赤の組織もグラードン復活に手を尽くしていた。ここ最近頻発していた地震も、ヤツらが近くを刺激し意図的に起こしていたのだろう。だが！！阿蘇山を止める事まで成功した我々にはかなわなかったな！！ついに海のエネルギーが陸のエネルギーを上回った！！伝説の通り2体の力が全くの互角ならば！わずかでも先に目覚めた方が有利！！我らの勝利だ！！！！」

青桐は高笑いした。

沖縄



凧 「……な、こ、これは……！」

鬨樹

「さ、佐賀が……」

躑躅

「山口……兵庫も……」

凧

「突然の大津波……！日本の町々が水没、緊急レベル9だ……！」

明日奈

「突然じゃないよ、凧さん！これも阿蘇山が止まったせいだよ……！」

鉄泉

「そして……津波の予兆はまだ残っている。いつ、また同じ大きさのものが来てもおかしくないぞ！」

凧

「三稜はどうした……？」

明日奈

「いないんだ！さっきから探してるんだけど……」

その時、画面に何かが映った。

「私だ。」

凧

「ボス！ご指示をお願いします！この水害に対し、我らディティクティブマスターが各地に分かれ、救出活動に当たろうかと思うのですが……！！」

「……よく聞いてくれ、事態はそれ以上のものとなった！今、本部のコンピュータが、すさまじい強さの生体エネルギーを観測した！それは猛スピードで海中を移動している！！大津波はあくまで、それが起きる前触れにすぎなかったようだ……」

「ボス！海上に姿を現しました！！」

「諸君、聞いた通りだ。緊急レベル10！！凧！全ての町へアナウンスを！！」

凧

「はい！」

『探偵協会より通達！四国地方ポイントR59地点、洋上より伝説の超古代ガーディアン、カイオーガ出現！！！進路の特定は不能！！日本各市町は十分なる警戒を要す！！』

カイオーガはしばらく暴れ回った。

同じ頃……

焰

「おらおらおらあ！もう一丁だけ、おらあっ！！」

セキダールの猛攻により、ついにグラードンが目を覚ました。

カツ！！

『オオオオオオオン！！！！』

グラードンは封印を突き破り、地中へと潜った。

松房

「よくやったぞ、焰！！」

焰

「頭領、いいのかよ！せっかく目覚めさせたのに、また潜っちゃったぜ！！」

松房

「いいんだよ。グラードンのヤツが、大暴れできるような広い場所を求めている証拠よ。ほどほどに地上に顔を出すだろう。最初にこんにちはするのはどの町か・・・フッフ、楽しみだぜ。カイオーガの目覚めの方がグラードンよりも早かったようだから、きつと青桐の野郎思ってるぜ、自分達が阿蘇山を停止させたんで大地よりも海のエネルギーの方が強い。さらに先に目覚めた。よって青の組織の勝利・・・と。確かに理屈上はそうだ、だが・・・オレ達の手元にアレがあると知ったらどうかな？焰！火影が嵐山で奪って来たアレ

を出せ！」

焰

「おう！！」

松房

「クリーバーとブレイバー！！超古代ガーディアンを自由にできる  
2つの：RINGだ！！コイツがこっちにある限り、地上がどうな  
ろうが関係ねえ！！カイオーガもグラードンも、オレの意のままだ  
！！この海底洞窟からな！！！！」

## ファイル413：超古代ガーディアンズの復活（後書き）

予告

哀「名探偵コナンスペシャル版もおかげさまで10作目到達！そして気になる最新作第10作目のキーワードは・・・2つの：R I N G・・・3体の超古代ガーディアン・・・そして、越水七槻と時津潤治！！！」

超古代ガーディアンを永い眠りから解き放つため、赤の組織と青の組織の2大組織がついに動き出す・・・

松房「すばらしい！これがグラードン・・・」

青桐「ついに会えたぞ！これがカイオーガ・・・」

2人の男の欲望は、何の罪もない人達を巻き込んでいく・・・  
そして・・・

「ついに目覚めてしまった・・・グラードンとカイオーガが！！！！」  
激突する大海の女王と、大陸の女帝！！  
世界は崩壊への危機を迎える・・・

日本を守るため、ついに全国のディティクティブマスター達と7天王が立ち上がる!!

ユーリ「(三稜・・・オマエにこのマントを託したのは・・・オレがこの戦いによって、命を落とすかもしれないからだ・・・)」  
躑躅「もうこれ以上は侵攻させない!!私、絶対に止めますわ!!」

そして、この戦いで犠牲者が・・・!?

潤治「小生も君が好きだったからさ。小さな頃からずっと・・・想ってた。」

七槻「アンタが・・・潤治君が・・・昔ボクば守ってくれた男の子・・・」

篝「潤治君に届けるんだ・・・アタシが見て来た・・・炎の記憶を・・・」

潤治「目を開けてよ・・・父さああああん!!!!」

三稜「動け・・・ユーリイイイ!!」

松房・青桐「2人だけになった世界で最後に頂上決戦をする・・・これが究極の結論だ・・・」

潤治「本当の美しさは心の美しさなんだ!!」

潤治「だけど・・・ずっと持っていた・・・6体目!!!!」

果たして、この物語の結末は・・・?

そして、新たなる伏線が・・・

コナン「に、兄さん・・・!!!?!」

???「久しぶりだな・・・シン・・・」

名探偵コナンスペシャル・10 作目記念超大作!!  
名探偵コナン・陸海空の交響歌<sup>シンフォニア</sup>!!!  
世界は・・・  
絶対に滅ぼさせない!!!

ファイル414：陸海空の交響歌（シンフォニア）『1・序章』

沖繩

七槻

「暑か〜。急に暑くなりおって、おかしな陽気ったい。」

その時、七槻の周りが蒸発した。

七槻

「葉っぱが・・・木が・・・蒸発していく!? 足下から熱が!? こりゃ先生に知らせんと!!・・・!!」

見ると、沖繩全体に蒸発の熱が及んでいた。

七槻

「な、何が起こったと!? 森や川が干上がっていつとる!!」

鬨樹

「伝説の超古代ガーディアンだと!? クソ! オレの佐賀も水の中だ! 急いで食い止めないと!!」



「待つんだ、鬨樹!!」

鬨樹

「なぜ止めるんです、ボス。」

「指示はまだ終わっていない!! 観測された生体エネルギーは、1つではないのだ!!」

鉄泉

「何ですと!!」

明日奈

「う! 凧さん! 外が・・・」

凧

「これは・・・!!」

躑躅

「強烈な熱波!! 大地から上がってくる熱で植物が・・・水分を失い葉ごと蒸発していきますわ!!」

凧

「バカな! 昨日までは阿蘇山停止の影響でむしろ湿っぽいくらいだと三稜のデータには出ていたのに!!」

「海のカイオーガとは別に、大地の下ですさまじい生体エネルギーが移動しているのだ!! このまま行くと、沖縄の真下に到達する! 炎熱の支配する範囲も、水に覆われていく範囲も、どんどん広がっているようだ!!」

凧

「・・・では、ボス・・・!!!」

「今、異なる2種類の災害が日本を真つ2つにしつつある・・・という事だ!!そしてやがてそれらは中央でぶつかり合うだろう!!」

明日奈

「何て事・・・」

「ゆえに、ディティクティブマスター諸君!これより果たしてもらおうミッションは以下の通り!!鬨樹、躑躅は炎熱の支配する範囲に、鉄泉、明日奈は津波が支配する範囲にそれぞれ向かってもらう!!各地で災害に遭い苦しんでいる住民を安全な場所に誘導しつつ、エネルギー体の移動を食い止めるのだ!!」

躑躅

「安全な場所!??」

鬨樹

「どこにそんな場所が!??」

「鉄泉!」

鉄泉

「ウム、この状況下で災害から避難できる唯一の場所、それは・・・我が大分が地下に持つもう1つの都市、ニュー・オオイタ!!」

「いかにも!元々遊興施設として地下深く何層にも作られたニュー・オオイタは、巨大な地下シェルターとしても機能してくれるだろう

！！鬪樹！君の町が気がかりなのはわかる。だがここは、日本全体のディティクティブマスターとしてこの災害にのぞんでほしい！」

鬪樹

「わかりました。」

「メトロ、フレア、狐、兎、雷牙、隼人、陽、陽太、雷薙、清兵衛、歩美、朝美、風月、暁、真、隆太、瑛祐、琴美、深雪、弓雁、美香、綾子、ミサオ、羽鳥、伊澄、理沙、ハヤテ、咲夜は別行動！ユーリ達と合流してくれ！その他の者は、災害救助に当たる事！現在単独で動いているという三稜も、連絡がつき次第そちらに向かわせる！」

凧

「ボス、私は！？」

「凧、君は司令塔だ！！2つの災害が衝突するであろう日本の中心地で状況を見極めつつ、両方面に指示を出す！全員、画像送受信可能な携帯、そして、正式任務中である事を示すスーパードライアを使用する事！！健闘を祈る！！！」

「了解！！！！」  
リジャー

明日奈

「七槻、行って来る！！！」

七槻

「え〜！う、うん！！！」

凧

「さあ、七槻、私達も出発しよう。」

七槻

「は、はい！」

壮大な戦いの幕が・・・

上がる・・・！！

『名探偵コナン・陸海空の交響歌』  
シンフォニア

私は元黒の組織の科学者、宮野志保。

私は黒の組織で薬の研究をしていたんだけど、お姉ちゃんをジンに殺され、薬の研究を中断したの。

その結果、私はガス室に閉じ込められてしまったの。

どうせ殺されるのならば、私は隠し持っていた薬を自ら飲み・・・  
なんと体が縮んでしまったの・・・

私が生きているとわかったら、また命を狙われ、周りの人にも危害  
が及ぶ・・・

阿笠博士に助けられた私は、帝丹小学校に通う事になり・・・  
そこで、私の薬で幼児化した工藤新一君と出会ったわ。

ではここで、私の頼もしい仲間達を紹介しましょう。

私の最愛の人、江戸川コナン君。

私がピンチの時には、いつも私を守ってくれる……

少年探偵団の初期メンバーの吉田歩美ちゃん、円谷光彦君、小嶋元太君。

いざという時には、スゴい力を発揮するのよ。

途中から仲間に加わった、東尾マリアちゃんと坂本たくま君。

世界一の漫才コンビね。

FBI捜査官の剣野刃ちゃんと、西の高校生探偵服部平次君。

刃ちゃんにはリアン・ハートネスという本名があつて、他にもたくさん仲間がいるの。

ペンデュラムアッドを倒すと誓った、金田一ユリちゃんと如月風月ちゃん、常盤暁君。

ユリちゃんは小嶋君と恋仲で、風月ちゃんは暁君とラブラブね。

コナン君の大親友、平尾隆太君とその彼女の宝極真ちゃん。

この2人はスゴいわよ……

片桐真希ちゃんはエスパーの1人で、正義のエスパーファミリア・ファウナの生みの親なの。

京都から来た友、白野美保ちゃんと瀬藤銀一君、以下多数。

大阪のくノ一、桜野松葉ちゃん。

赤と青の組織がついに動き出し、世界を崩壊させようとしている……

でも、そんな事は絶対にさせない！！

必ずあなた達を叩き潰してやる！！

今、伝説の物語が幕を開ける……

小さくなくても、頭脳は同じ！

迷宮なしの女名探偵！！

真実は、いつも1つ！！！！

ファイル415：陸海空の交響歌（シンフォニア）『2・被災地へ・・・真に止

ディテイクタイプマスター達は、それぞれの目的地へと向かった。

そして、凧と七槻も動き出した。

『探偵協会より各市町に避難報告！！緊急レベル10依然継続中につき、各市町住民はできる限り速やかにニュー・オオイタに移動せよ！』

凧と七槻は、鳥取の辺りを飛んでいた。

凧

「事態は予想をはるかに超えるスピードで進行している！」

七槻

「先生、おかしな天気ったい。つい今まで地面からの熱で暑ってたまらんやったとに・・・急に寒くなってきたとよ。オマケに、雨まで降って来よう！」

凧  
「ボスのおっしやった通りだ。ここは淡路島の上空・・・2つの災害がぶつかり合う、境界線だ!!」

その時、七槻の方に波が・・・

凧

「気をつける！津波だ!!」

七槻

「うわった!!」

七槻は津波をすんでの所でかわした。

七槻に避けられた波は、瞬く間に蒸発した。

七槻

「スゴか〜、波がすぐ蒸発してサウナのごとる。!!イカンち!!打ち上げられた野生のガーディアンが！トルル!!」

ザッ！

七槻

「すぐ海に戻してあげるけんね。」

凧

「七槻、津波に気をつける!!」

七槻

「ホラ、アンタもしっかり！」

『ゼー、ゼー……』

七槻

「ひどかケガつたい！ホラ、これば食べり！」

凧

「初めて見るガーディアンだな。かなり深海に生息していそうな外見だが、それが打ち上げられるほどの海の荒れ方なのか……」

ゴゴゴ……

凧

「！！！」

ゴアッ！！

七槻

「な！？モノスゴく大きな津波つたい！！！」

凧

「逃げ切れない！！ドクモース！！！」

カツ！

凧

「波を吹き飛ばせ！！虹色の風！！！」

『……』





チラツ・・・

七槻

「うん！ジララー！ジララがよかねー！」

ピリリリリ・・・

凧

「！こちら凧！」

鉄泉

「おお凧！ワシじゃ、鉄泉じゃー！」

凧

「鉄泉さん、どうですか！？様子はー！」

鉄泉

「いやはや、どうもこうもない！現在、破壊された船でカイオーガと交戦中じゃが・・・！全く歯が立たんー！悪夢のようじゃー！！この海の暴女に対抗する術があるなら教えてほしいわい！！！」

明日奈

「鉄泉さん、来たー！」

鉄泉

「うむあ・・・」

明日奈

「く・・・あ・・・」

凧

「鉄泉さん!!明日奈!!」

鉄泉

「だ、大丈夫!まだまだ踏ん張れるわい!」

凧

「お願いします、何とか、押し止めてください!!」

七槻

「先生、ちょっと!!」

凧

「どうした?」

七槻

「ここは2つの災害がぶつかり合う境界線やる?でも・・・気のせいやるか?何かさつきよりも陸地が増えたらん?日照りと大雨、日照りの方がだんだん強うなってるようつたい。」

凧

「!!・・・確かに・・・さつきまで降っていた雨も止んでいる!まさか・・・!!躑躅!鬨樹!聞こえるか!?凧だ!応答を・・・頼む!!」

鬨樹

「凧さんか!全くドンピシャなタイミングで連絡くれるじゃないか!!さつきから熱がどんどん上昇してきやがると思ったら・・・お出ませ!!オレ達の足下・・・地中を移動していたヤツが・・・」

今!!」

ボゴツ!!

『オオオオオオオオオン!!』

ズン!!

凧

「躑躅!闘樹!!……ついに姿を現したんだな……グラードンも!!何とか……何とか押し止めてくれ!明日奈、鉄泉さん!闘樹、躑躅!ディティクティブマスターとして持てる全ての力を出して……2体の超古代ガーディアンの上陸上侵攻を!海上侵攻を!」

『イヤ!!それだけではダメだ!!』

凧

「何!?!」

七槻

「先生!今のは……!?!」

『それでは根本的な解決にはならん!!!本当の戦いの場所は……奥深き……場所!!』

フオオオオオ……

ガクガク……

フツ!

パツ！

凧

「！！イカン！！」

七槻

「トルル！！」

落ちて来た2人を、トロピノドンが受け止めた。

七槻

「ケガはなかと？」

「ああ・・・スマンの・・・命からがら逃げて来たが、ここまで来て力尽きてしまった。」

凧

「先ほどのテレパシーですか？エスパーガーディアンの能力で私達の心に直接語りかけた・・・」

「そうじゃ。沖縄のディティクテイブマスター、凧さんじゃな。」

「ワシらは嵐山でかつて、2つの：RINGを守っていた者じゃ。」

凧

「嵐山の2つの：RING？」

「ああ、プレイヤーとクリーバー。カイオーガとグラードン、2体の超古代ガーディアンを自由に操れる：RINGじゃ！老いたワシ

らに代わって、銀一と金美が守ってくれておったのじゃが……」

凧

「ま、待ってください!!銀一と金美が召集に応じずにいた理由は、2つの：RINGの守護……すると……まさか!!」

「そうじゃ、2つの：RINGは奪われ、銀一と金美は行方不明!」

「だから誰かに真実を伝達しようと、……こうして山を下りて来たのじゃ。」

「もう1度言う!グラードンとカイオーガに直接、ぶつかり合っても無意味じゃ!!」

「2体は地の奥深くから操られている!2つの：RINGを奪った者達の手によってな!!」

「真に止めるべき相手は……海底洞窟にいる!!!!」

七槻

「真に止めるべき相手は・・・海底洞窟にいる！！トルル！！」

凧

「七槻！！どうするつもりだ！？」

七槻

「日本中は飲み込むこの日照りと大雨、海底洞窟におるヤツらば倒せば止まるんやろ！？やるべき事がわかったら、もうジツとしてられんけえ。海に出て海底は目指す！！アルルーツ！！」

カツ！

トツ！

七槻

「先生！海底洞窟はどの辺り！？」

凧

「今、淡路島を越えて太平洋側の海に出たところだから・・・このまま四国方面に行けばその先だが・・・それにしたって・・・海底までどうやって潜る！？人間の力では行く事が不可能だという、海底洞窟へ！！」

その頃、躑躅と鬪樹は・・・

『ゴギヤアアアア！！』

ゴガガガガ！！

鬪樹

「クソ！！岩石封じで行く手を阻む気だな！！」

躑躅

「今のが！？強すぎて、全く別の術みたいですね！！まるで私達のガーディアンをあざ笑うかのよう！！」

鬪樹

「ナメやがって、クソウ！！ホウリキー、気合い鉄拳！！」

ゴオツ！！

『！』

ブオツ！！

ドザアアアア！！

鬪樹

「つわあああ！！！！」



躑躅

「こちらの攻撃が届く前に吹き飛ばされてしまいましたわ！！パワー  
ーうんぬんの問題じゃない！！かする事すらできないなんて！！」

鉄泉と明日奈・・・

鉄泉

「ぬおおおお、何のおおお！！属性の相性ではこちらが勝っている  
ハズじゃない！マンボルト！充電じゃ！！」

『ギイイ・・・』

ジジジジジ・・・

鉄泉

「周囲の大气から雷をかき集め身体に溜め込み、次の攻撃で一気に  
放出せい！！雷撃破！！！！」

シュドンツ！！

バシユツ！！

明日奈

「当たった！！」

鉄泉

「命中精度が自慢の術じゃい！どうじゃっ！！」

『二ツ・・・』

明日奈

「！？鉄泉さん！アイツ全然平気そうだよ！！」

鉄泉

「何じゃとお！？」

コオオオオオ・・・

明日奈

「瞑想だよ！！ヤツは瞑想をしてたんだ！！特殊防御力が極限まで高まっている！！アイツも闇雲に暴れてるんじゃない！！自分の弱点を攻められる事への予防策も本能的にとってるんだ！！」

その頃時津潤治は、賢防大学にいた。

幸いこちらには被害が来ていなかったなので、災害の事を知らなかったのだ。

潤治

「フウ・・・2時間目の講義も終了。それにしても、七槻ちゃんず

つと休学して、どうしたんだろう？何だか大学内もあわただしいし・・・」

その時、潤治の目に三稜の姿が写った。

潤治

「（あれは・・・吹奏学の三稜さん？当分の間休講だって掲示板に書いてあったのに・・・）」

三稜は電話をかけていた。

ちなみに、電話をすると相手の映像が表示されるようになっていた。

凧

「もしもし・・・こちら、凧！」

三稜

「三稜だ！！今山口にいる！単独行動をとってすまない！」

凧

「三稜！？山口にいたのか・・・こっちは四国方面上空だ。だが、そんな事はいい。大変な事になった！！伝説の超古代ガーディアン、カイオーガとグラードンが目覚めたんだ！！現在、鉄泉さんと明日奈、躑躅と鬨樹が二手に分かれて事に当たっている！」

三稜

「わかった！私もすぐにどちらかに合流しよう！！」

凧

「イヤ、待ってくれ三稜！！確かに2体の侵攻を食い止める戦力は

欲しい！！しかし・・・それでは根本的な解決にはならない事がわかった！！」

三稜

「と言つと!？」

凧

「2体は何者かに操られている！！そして、その何者かは海底洞窟にいるらしい！そこから2体をコントロールしているんだ！！」

潤治

「！（七槻ちゃんが写っている・・・新しいガーディアンと一緒に・・・初めて見る・・・イヤ、どこかで見たような・・・）」

『コイツの技によつて、人間の力では行く事のできない・・・深海まで行けたつて言うんだ！！』

潤治

「（そつだ！！あのガーディアンは・・・古生物学の先生が講義で言つていた、あのガーディアンだ！！あの会話の様子だと、誰もあのガーディアンの能力の事は知らないみたいだ。七槻ちゃんですえも・・・みんなが困つている。事態を打開するただ1つの道しるべを・・・小生だけが・・・知つている！！人や動植物を苦しめて平気なヤツらがいるみたいだ！自分達の野望のために、自然さえも覆そつとしてるヤツらが！！小生には、ヤツらに対抗しうる力がある・・・そして、今何をしなくちゃいけないかの方策までわかつている・・・どう・・・するんだ・・・！？）どうするかだつて？答えなんか最初つから出ているじゃないか！！」

考え込んでいる三稜の所に、潤治は近づいて行った。

七槻

「うおおおお！！こうなったら、体1つで潜るったい！！ボクなら10分、がんばれば20分は息が持つけん！！」

凧

「止めるんだ、七槻！！気持ちはわかるが、海底洞窟は想像を絶する深さだ！！ガーディアンですら、深海の生物ですら到達できない場所なんだ！！」

七槻

「でも・・・」

凧

「わかってる！！躑躅、鬪樹、明日奈、鉄泉さん、みんなが死力を尽くしてるのに、指をくわえて見ているしかない。私だって悔しい！！悔しいが・・・方法などないんだよ！！」

七槻

「・・・」

「方法なら・・・ありますよ！！」

凧

「！！君は！？」

七槻

「（潤治君……！何しに来たったい？）」

三稜の空中車両に乗ってやって来た潤治。

潤治は七槻達の上に降り立った。

潤治

「初めまして……小生は時津潤治。時津正宗の息子にして、探偵です！かつて、古生物学の教授から聞いた事があります。大昔の人が、ガーディアンのおかげによって深海に潜ったという話を……」

凧

「人を深海まで！？ガーディアンの力で！？」

潤治

「そうです！！今、七槻ちゃんが抱えているジールラヌスの力で、です！！ジールラヌスの術を使えば、潜水艇のような物の力を借りずとも海底洞窟まで行けるんです！！」

凧

「バ、バカな！！いくら何でも信じられない！ガーディアンで最深海まで行くなんて……！この非常時に聞いた事もないそんな昔話、アテにできるとでも……」

七槻

「待つて、先生！その話……ボクは……信じるけん……」

凧

「七槻！？」

七槻

「この・・・ジララ、さつき大津波に襲われた時、不思議な力が発したと！そんな時、一瞬やったけど水がボクらば避けたんよ。それ思いついたら、今の話も・・・！」

潤治

「人を深海へと連れて行く術、その名は・・・『ダイビング』！！」

ピリリ・・・

潤治

「あ、もしもし先生ですか？ええ、今話しました。何とか信じてもらえましたよ。え？ジーラヌの体長？え〜つと、85センチくらいですかね？少し小振りなんだなあ。・・・え？はい、そのくらいだと深海まで連れて行けるのは、せいぜい子供2人？そうですね、じゃあ・・・」

凧

「お、おい、まさか・・・海底洞窟に潜り、RINGを持つ何者かに挑むのは・・・」

三稜

「ああ、その通りだ凧。潤治君が自ら行くと言っている。ジーラヌの持ち主である七槻ちゃんと2人でね！！」

凧

「ムチャだ！！ただ潜るだけじゃない！！グラードンとカイオーガを操る者とも戦うのだぞ！！」

三稜

「凧！潤治君は私の講義の生徒だ。今は、彼を信じてみよつと思つ。

」

三稜

「頼むぞ！君達。海底洞窟への、ダイビング！！そして・・・2体を制止させるべく2つの：RINGを・・・！！」

潤治

「はい、行って来ます。」

カアアアア・・・

七槻・潤治

「せえのおつ！！！！」

タンツ！！

ザブンツ！！

ギユオオオオオオオ・・・！！！！



カアアアア・・・

七槻・潤治

「せえのおっ！！！！」

タンツ！！

ザブンツ！！

ギユオオオオオオオ・・・！！！！

三稜

「頼んだぞ、潤治君、七槻ちゃん。さあ、2人が深海に行っている間ただ待っているワケにはいかない。：RINGの奪還がなされるまでの間、少しでも被害を食い止めなければ。私は躑躅、鬨樹と合流する。凧、君はどうする？」

凧

「わ、私は・・・私はボスに命じられた司令塔としての役割がある。持ち場に戻り、責務を果たす。（本当は・・・共に出向いて戦いたいのだが・・・）まずは現状をボスに報告しなければ！」

びび、ガガガガガ・・・

三稜

「ム、天候の影響か？よくつながらないな。」

凧

「炎熱、日照りの被害は東京近辺まで及びつつある。協会本部でも異変が起きたのかもしれない！！・・・？どうした？三稜！」

三稜

「聞こえないか？何か近づいてくる！」

ゴォ、ゴォ・・・

三稜

「ム、見る！！巨大な物体が移動している！！」

ゴォン、ゴォン・・・

凧

「飛行・・・船！？」

三稜

「何と巨大な・・・！！」

ピリリリリ・・・

凧

「電話が通じた！！」

「私だ！！」

凧

「ボス!!!すると・・・まさか・・・!!!」

「そうだ！私は今、この巨大飛行船ジエ・グーンの中だ！！察しの通り、東京もグランドンの起こす日照りの影響下に入ってしまった！迫る炎熱被害で、もはや人のいられる状況ではない！そこで・・・有事のために用意していた移動システムを起動させたのだ！！探偵協会は、本部ごと空に舞い上がったのだ！！ここまでご苦労だった、凧！ここからの全体指示は私自らが上空から行う。」

凧

「では、私は・・・」

「行ってくれ！！すでに交戦中のディティクティブマスターに合流し、超古代ガーディアンの進撃阻止を命ず！！」

凧

「はい！！聞いての通りだ、三稜！！私は明日奈と鉄泉さんのいる山口側、カイオーガとの交戦に飛ぶ！！」

「おじいさんとおばあさんは飛行船に乗ってください。元々、銀一と金美に：RINGの守護を命じたのは私です。この天変地異の中闇雲に探し回るより、この飛行船で連絡を待った方がいいでしょう！！」

三稜

「凧・・・」

凧

「！」

三稜

「……」

凧

「……」

ギョツ！！

その頃、コナンと哀は……

小笠原にいた。

コナン

「手紙の主は、ここで待っていてくれと言っただけ……」

哀

「こんな所に本当に来るのかしらね……」

その時、右側から大津波が向かって来た。

哀

「キヤアツ！！」

コナン

「ガーディアン・フウちゃん!!オレ達を守って!!絶対防壁!!」

カッ!!

ドドドドドド!!

フレアマンの強固な防御力に、波は真つ2つに割れた。

コナン

「大丈夫か?哀。」

哀

「う、うん。」

「いいものを見せてもらった。やはり、私の予想は正しかった・・・

」

コナン・哀

「あ、あなたは?」

正宗

「私は時津正宗。福岡のディティクティブマスターにして、時津潤治の父親だよ。」

コナン

「あなたが・・・」

正宗

「私が君達をここに呼んだのは、君達に頼みたい事があったからだ。だが、こんな場所では満足に話もできん。ふさわしい場所に移動しよう。君達の修行のために……」

コナン・哀

「しゅ、修業つて一体……？」

正宗

「もちろん、ガーディアン使いとしてより高い技術を身につけるべく、鍛錬するという事だ。私の元でな。君達の力が必要だ。どうか、力を貸してくれ……！」

コナン・哀

「……わかりました。でもどこへ向かうんですか？日本全体が災害で大混乱してる中で、修練できる場所なんて……」

正宗

「なあに、ほんの近くさ。もう見えている。天空城だ……！」

コナン

「スカイヘブニー・キャッスル……！」

哀

「前に私達が、ジンと和解し合った場所……」

正宗

「私は最上階で待っている。まずはこの城をひたすら上へ上へ登ってくれ。」

コナン・哀

「はい。」

コナンと哀は、城を登り始めた。

コナンはフレアマン、哀はイズナ。

2体のガーディアンを使い、どんどん上へと登っていった。

ジンによって1室に閉じ込められていた時は気づかなかったが、この城には野生のガーディアンが生息していたのだ。

そもそもこの城は何年も前に家主を失い、ずっと無人だったのだ。

動植物等が栄えても不思議ではない。

コナンと哀はガーディアン達を退け、1時間ほどで最上階まで到達した。

正宗

「見事だ、2人共。次の特訓だ！」

コナン・哀

「はい!!」

正宗

「頼むぞ、コナン君、哀君。真の目的はこの最上階よりもさらに

上・・・城の頂なのだからな。」

江戸川コナンと灰原哀。

彼らもまた、潤治や七槻と同様、巨大な戦いに身を投じていく。

日照りと豪雨がぶつかり合い、最大の危機に瀕する日本。

その危機に、彼らとガーディアン達が背負う重大な使命が・・・

間もなく明かされようとしている・・・!!!!



青桐

「おかしい・・・これはどういう事ですか？滴さん。」

滴

「わかりません。」

青桐

「我々は阿蘇山を止め、大地のエネルギーを抑制し、海のエネルギーを増大させた！グラードンより半日以上も早くカイオーガを目覚めさせた、それなのに！！見なさい！カイオーガは大西洋側をウロウロしてるのみ！！一方でグラードンは日照りの範囲を広げている！！グラードンの方が活発な活動を続けている！！考えられる理由はただ1つ！松房が何かを仕組んだのだ！！おのれえ・・・！！滴さん！何をなすべきかわかりますね！？」

滴

「はい！早急に対処いたします！！」

松房

「お・・・おお・・・！！おおおお！！」

焰

「ウハ・・・ウハハハ、スゲエや！」

松房

「そうとも！2つの：RINGで2体は意のまま！見たか・・・青桐・・・このままカイオーガの動きは抑えつけ、グラードンだけを進撃させる！！勝のはオレ達だ！！・・・」

ストン！

焰

「頭領！！おい！頭領！！大丈夫か！？」

松房

「ハア、ハア・・・焰、イヤ、コイツは思った以上に精神力のいる仕事だぜ・・・2体に同時に命令を送る・・・少しでも気を抜くとこっちがおかしくなっちまいそうになる・・・焰よ。カイオーガに念を送る役・・・オマエが受け持つてくれねえか？」

焰

「お、おう！任せろ！！」

松房

「どうやら、RING同士近くに置いて念じていると反発のエネルギーを出すようだ。」

焰

「わかったぜ！オレは離れた場所でやればいいんだな！」

タタタ・・・

滴

「・・・」

焰

「ここでいいだろ。カイオーガ！その動き、しっかり抑えつけてやるぜ！！」

ポウ・・・

焰

「ムッ！！コイツは蛍火！！誰かいる！！セキダール、アクビしろ！！」

ホワッ！！

トサッ！

焰

「眠らせてやったぜ！隠れてるヤツ、出て来いや！！」

滴

「カイオーガとグライドンを操る：RING、そんな物があつたんですね。これはこれは、私達の勉強不足でした。」

焰

「テ・・・メエ・・・よし、セキダール、もう1発・・・」

滴

「ムダですよ。」

『ムグググ・・・』

焰

「・・・イチャモンをつけて、同じ技を連射できなくしやがったな！？テメエは、青の・・・！？」

滴

「下劣なあなたに名乗る名前など、ありませんね。攻め尽くせ、ホタルビー、バルビード！！信号光線！！」

焰

「ウワツタタ！！野郎！！熱風をくらええ！！」

ゴオツ！！

滴

「ぐわああ！！」

焰

「このスキに・・・」

パコ！

ザッ！

焰

「ハア、ハア・・・焼け焦げてろ！」

滴

「潜水艦に飛び込んで逃げ切ったつもりですか？」

ガシッ！

焰

「ググ・・・テメエ、正気か？手持ちを外に置いて自分だけ追いかけて来たのか？オレだけ押さえつけてどうするつもりだ！セキダールは今すぐにもオマエを攻撃できる状態なんだぜ？」

バシユ！

滴

「ム・・・かまいませんよ、ご存じの通り私の目的は・・・そのブレイバーを、いただく事なんですから！！」

焰

「ほざけ！！何ができる！！」

キユオオオ・・・

シュパン！！

焰

「な、何だ？何が起こった？攻撃を受けた様子はない・・・んなっ！？ブレイバーがモモの実にスリ替わってる！！テメ・・・おわっ！！」

滴

「フハハハ、やりました、総帥！相手と自分の持ち物を入れ替える術トリックで、ご指示に従いプレイヤーを手に入れました！！」

サッ！

青桐

「・・・これがプレイヤー・・・この輝きがカイオーガの動きを意のままにするのか・・・」

滴

「総帥青桐！手筈通り、そろそろ加勢に入っただけませんか？この大男を私1人で押さえるのは、もう・・・」

バタン！

ガクン！

ゴボ、ゴボ・・・

青桐

「本当にご苦労さまでした、滴さん。潜水艦は自動操縦に切り替えました。ゆっくり深海の散歩でも楽しんで来てください。ただし、起動部品は降りた時に外してあります。この深度では船体が水圧に耐えられないかもしれません。ウフフフ、これでようやく松房と互角！！ファイファイ・ファイファイカイオーガとグラードン、どちらが強者が決着をつけられる！！誰にも邪魔されずに！！」

キイイイイ・・・

ゴ  
オ  
オ  
オ  
・  
・  
・

キイイイイイ・・・

ザバアツ！！

タツ！

七槻

「ハア、ハア・・・着いた。」

潤治

「日本の最深海・・・」

七槻・潤治

「海底洞窟・・・！！」

七槻

「（飛び込んでからここに着くまでに、どのくらい経ったとやる？  
短時間で着いたような気もするし、何日もかかったような気もしよ  
る。）」

潤治

「（不気味な場所だ。そして・・・来る途中すれちがったのが・・・  
潜水艦！壊れながら浮上していった！どついう事だ？この海底に潜  
った人間が再び地上に戻ったのか？もうここには誰もいないってい  
うのか？・・・イヤ・・・）」

七槻



「（ちがうような気がする。この洞窟の中にまだ何か潜んでいると……ハッ！）あわわわ！！」

ブンブン！

潤治

「道が2つに分かれているな。」

七槻

「そ、そやね！じゃ、ボクが左に行くけん、潤治君は右に……」

グイッ！

七槻

「ちょ、ちょっと、なんばしよつと!？」

潤治

「それじゃダメなんだよ！離れないで小生と一緒にいるんだ!!小生のROROは何か感じ取っているんだよ!『奥には行くな!ここにいろ』と!小生のグラロエナは意地っ張りだからね、1度言い出したら聞かない。振り払おうとしてもムダだから。」

『!』

ザッ!

潤治

「ハッキリ気配を感じ取ったんだな?よし、RORO、嗅ぎ分ける!!!」

『ガウウウ・・・ガLLLL!!』

バツ!

メキメキ・・・

焰

「クツソオオ!!船体が崩れてきやがった!!おいテメエ、海水が入って来ないようにしっかり押さえてろ!!」

滴

「やっている!!」

焰

「こんな所で死んでたまつかよ!!後少しだ!!海面に届くまで・・・!!セキダール!!浮力の上がる軽い煙をもっと出せ!!」

バキツ!!

ゴボ、ゴボ・・・

ガシ!!

ビュオオオ・・・

火影

「・・・」

カツ！

ドボン！

火影

「驚いたぜ、海中からのSOS信号をキャッチして来てみれば、焔・・・一緒にいるコイツは青の幹部だな。焔の・・・記憶の炎。」

パチン。

シュボツ！

火影

「なるほど・・・ブレイバーが青の方に行っちゃったか・・・しようがねえな。・・・にしても、コイツ・・・親分に裏切られちゃったのか。ヘッ、気の毒なこった。ま、オレの知った事じゃねえ。後は自分の仲間アタタに何とかしてもらいな。おい起きろ、焔！もう1仕事しに行くぞ！」

焔

「う・・・ほ、火影・・・スマネエ・・・」

火影

「目覚めたか。詫びてるヒマがあったら、働きで取り戻せよ。」

焰

「……どこへ？」

火影

「太平洋側だ。折角グラードンさんが気分良く進撃している所に、デイテイクタイプマスターのヤツらが邪魔しに来たって連絡があつてな。1つ、お仕置きに行こうじゃねえか。篝にも、いい加減来てもらわねえとな。」

ピリリリリ……

篝

「はい、こちら篝……」

火影

「篝か、オレだ！」

篝

「……火影、見てたよ。グラードン、派手に暴れてるじゃない。」

火影

「だろ？戦況は完璧！……と言いてえ所だが……フツ。まだ刃向かって来るヤツらがいる。一気に叩き潰したいから、そろそろ合流してくれねえか？」

篝

「いいよ。」

火影

「今、どこだ？」

篝

「宮崎よ。宮崎の宇宙センター！」

松房

「騒がしい侵入者が2人、次々に構成員を退けている。」

青桐

「我々の動きを突き止め追って来たのは見上げたものだ。」

松房・青桐

「まあ、いい。邪魔をする者は・・・葬り去るのみ。」

七槻・潤治

「!!!!!!」

ズズズズズズ・・・!!!!!!

滴

「・・・うつ・・・むむ・・・ハッ！！」

滴は飛び起きた。

青桐『本当にご苦労さまでした、・・・滴さん。』

滴

「ほ、本当に・・・本当に裏切ったんですか？総帥青桐。私は本当  
にあなたから見捨てられたのですか・・・？イヤ！そんなハズはな  
い！あれは・・・あれは私の聞き間違い！何かの事故だ！！私の忠  
誠は変わらない・・・私はまだ働く！まだ戦う！！総帥のために！  
！海を増やすために！！」

そう言つと、滴はペリカノドンに乗って飛んで行った。

同じ頃、赤の組織の3人組も目的地へ向けて飛んでいた・・・

その頃、躑躅と鬪樹は・・・

『オオオオオン！！！！』

ギロツ！！

コオオオオ・・・

鬨樹

「何だ？あのエネルギー体は！？」

躑躅

「辺りの熱量が一気に増大していきますわ！！それを受けてグラードンもパワーアップしたような・・・」

ジジジジジ・・・

『オオオオオン！！！！』

グラードンの強烈な攻撃が、2人のガーディアンを襲った。

鬨樹

「ホウリキー！ホウリキー！！」

躑躅

「空气中の電気を収束させて落雷まで撃ち出すなんて！！」

鬨樹

「マヒしてる！しっかりしろ！！ハリテマル、着付け！！」

パシッ！

躑躅

「！！グラードンが・・・行かせてはいけません！！もうこれ以上の進撃を許してはいけません！！私、絶対に止めますわ！！！！」

カツ！

躑躅

「ギガノーズ！！通せん坊！！！」

ガキン！！

グラードンの動きが止まった。

躑躅

「メガトーン！！マグネ・ステルスプラスト！！！」

ガガガガガガガ！！

躑躅

「足止めた上での集中連続攻撃！！こんな乱暴な戦法わたくしのスタイルではないのですが、進撃を食い止めるにはこれしかないですわ！！！」

「その通りだ、躑躅！！トドグロー、アイス・ボール冷凍球！！グレイシア、氷河のつぶて！！！」

ドカツカカカ・・・

鬨樹

「あれは・・・！！！」

躑躅

「三稜さん！！！」



三稜

「これだけの相手だ、戦法もスタイルも、美意識も二の次！！ましてや、潤治君と七槻ちゃんが命を賭して海底へ向かった今、我々が形振りにかまっていたら示しが見つからないぞ！！」

三稜がエア・カーから飛び降りた。

「余計な事すんじゃないねえ！せっかく手間かけて目覚めさせたんだ。テメエらがグライダーを止めようって言うのなら、オレ達がテメエらを止めるぜ！！」

焰

「余計な事すんじゃねえ！せっかく手間かけて目覚めさせたんだ。テメエらがグラードンを止めようって言うのなら、オレ達がテメエらを止めるぜ！！」

三稜

「オマエ達は！！」

火影

「赤の組織、」

篝

「三頭火！！」

焰

「海を干上がらせ、大地を広げる！！」

火影

「そのためにはグラードンに思いっきり暴れてもらわなきゃなんねえからなあ！！」

篝

「ディティクティブマスター共！！邪魔はさせねえ！！」

焰は三稜を、火影は鬨樹を、篝は躑躅を捕まえた。

焰

「すぐそこは広島だ!!」

火影

ゴーストタウン  
「無人になった町ン中で、」

篝

「思う存分カワイがってやるよ!!」

火影は鬨樹を投げた。

鬨樹

「グッ!!……ここは、広島美術館!」

三稜

「広島デパート!」

躑躅

「民宿……マシロヒ!」

火影・焰・篝

「さあて、始めるか!」

同じ頃、鉄泉と明日奈の所にも、青の組織の刺客が迫っていた。

泉美

「フン！！カイオーガの動きを抑えようとする、忌々しいディテクティブマスター共め！！進撃の障害になる者は全て排除する！対策を講じなければ・・・おや？総帥と共に海底に向かった滴さんが、海上に戻っている。まもなくこちらに來ます！！」

潮

「これはいい！海底の任務が順調な証拠です。我らに合流してくれるでしょう！！3人そろった青の組織・SSSスリー・エスの力を持って、ディテクティブマスター共を退けるのです。カイオーガが十分に力を発揮できるようにすれば・・・」

ビイイイ！！

泉美

「着いたようですね。」

凧

「青龍の息吹！！」

泉美・潮

「！！！！」

ドシュツ！！

明日奈

「鉄泉さん!!あれ!!風さんだよ!風さんとあれは・・・青の組織だ!!風さんと青の組織が戦ってる!!」

風

「司令塔としての役目をボスに預け、1人のガーディアン使いに戻った今、この向日木風、もう戦う事に対し何の遠慮もしない!!テツカムド!金属音!!チルタシュロン、火炎放射!!」

ゴアツ!!

潮

「ぐああっ!!」

風

「テツカムド、エア・カッター!!」

明日奈

「風さん・・・スゴい!!」

泉美

「おのれえ!!」

鉄泉

「イカン!!明日奈、オマエは風を助太刀せい!!カイオーガはワシに任せろ!!」

明日奈

「わかった!!行くよ、ロビン!!鬼火!!」

バシユ！！

泉美

「ぐあっ！！」

凧

「ありがとう、明日奈！！」

明日奈

「えへっ！！」

泉美

「よくも邪魔を……！！」

明日奈

「オ、オマエは……！阿蘇山の時の……！！許さない！！オマエは絶対にアタシが倒す！！」

泉美

「ウフフフフ……本当にアタシが『あの時の泉美さん』とでもお思いですか？」

明日奈

「な、何！？」

睡蓮

「アタシはもう1人の青の組織幹部、睡蓮！他人に化けるのはお手の物です。」

明日奈

「どちらにしても、アタシはオマエを倒す!!」

睡蓮

「フツ、こしゃくな・・・」

鉄泉

「ぬぬぬ。一人で引き受けるとは言ったものの、カイオーガの力は相変わらず・・・イヤ、むしろさっきよりも激しい!!まるで、明確な攻撃の意思が備わったかのような気がするぞ!!」

滴

「気のせいではない。我らが総帥青桐の手に、ブレイバーが渡り、カイオーガに直接、命令を下せるようになったのですから!!」フフフフ・・・」

ザザザザザ・・・!!

山口

雪風時音『6』『北海道ディテイクティブマスター』

「逃げ遅れた人はいないですか?」フウ、どうやら住民全員ニコニコ。オオイタに移動しきったみたいね。もう誰もいるワケ・・・って、いたあゝっ!?!?ちよっ、ちよっ!あなた大丈夫!?!?」

バツ！

「わ！は、はい大丈夫です。これを読むのに夢中で気づいたら1人に・・・」

時音

「ノンキな子ねえ・・・ん？何それ？」

「発掘された古代の石版です。この凸凹が文字を表していて、こうやって指で触って読むんです。」

時音

「あなたスゴいわね！こんな珍しいの、どこで習ったの？」

「前に病院で一緒だった人から。でもスゴいんですよ、その人！自分の事をFBIだって言っていました！」

時音

「FBI・・・！？」

「ええ！6天王と選ばれしディティクティブマスター達という最強メンバーを引き連れた、最強のFBIだって！！」



ファイル422：陸海空の交響歌（シンフォニア）『9・もう1体いる』

依然、青の組織の3幹部と凧、鉄泉、明日奈の戦闘は続いている。

滴

「フフフフフ……」

鉄泉

「海から新手が生み出されてきおつた!!」

明日奈

「鉄泉さん!!ソイツも青の組織の幹部だ!!阿蘇山で作戦を指揮していたヤツだよ!!」

滴

「蓄えて、飲み込むと、蓄えて、吐き出す!!」

滴のガーディアンの攻撃が、鉄泉のマンボルトを直撃した。

鉄泉

「くうっ!!なかなかやりおるわい!!ガーディアン使いの数だけでいえば3VS3、抑えられない事はないだろうが……!!問題  
は、カイオーガの進撃を許してしまう事じゃ!!」

滴

「余所見をしていて、良いのですか?」

鉄泉

「何の、行けっ!!」

シュドン！！

鉄泉

「水&飛行VS電気&炎！属性の相性はこっちが有利じゃ！！そのペリカノドンはもはや戦闘不能！！さあ！次は何で戦う？」

滴

「さて、どうしたのか。他の手持ちは全て海底洞窟に置いて来てしまったものでね。」

鉄泉

「な、何じゃと！？」

睡蓮

「滴さん！ならばこれを！！！」

シャツ！！

滴

「ありがとう、睡蓮さん！おお！最高の1体だ！出でよ、シタヅミニン！！！」

鉄泉

「むむっ！！マンボルト、行けっ！！！」

ドロッシー！！

鉄泉

「な、何じゃ？拍子抜けじゃな。コイツが最後の1体とは・・・吼



「おわわわっ！！何というすさまじいスピードじゃ！！攻撃が一切見えん！！なるほど、このパワーアップを見越しての『最高』・・・というワケか！！」

滴

「フッフ、シタヅミニンがパワーアップによって姿を変えしテツカニン！！その特殊能力は『加速』！！元々の素早さに加え、攻撃を繰り返す事にスピードはさらに速くなる！！」

ギョオツ！！

フツ！！

ベシツ！！

鉄泉

「スピードにはスピード！！」影分身『じゃ！！そして、この極限状況にあつてワシは我が身を守ろうなどと思わぬ！！」

滴

「！！まさか！！」

鉄泉

「そのまさかよ！！散らば諸共！！マンボルト！！落雷！！」

ズツガン！！！

シュウウウ・・・

ドツ！！！

滴

「テツカニンを押さえつけたまま放った落雷を、自ら避雷針となって受けるとは……」

鉄泉

「ど……どうじゃ？マンボルトはもはや戦えぬが、オマエも唯一の手持ちを失った。ワシにはまだ手持ちがいる！！ワシの勝ちじゃな！」

その時……

ドスッ！！

鉄泉

「も……もう1体……なぜ。」

滴

「さすが最年長ディテイクタイプマスター、戯けた中にも覚悟の座った堂々たる戦い方でした。しかし油断しましたね。シタヅミニンはパワーアップする時、2体のガーディアンになる。忍びの蟬・テツカニンと、抜け殻の亡霊・ヌケニンの2体にね。あなたはそれを知らなかった。だから、負けた。」

凧

「鉄泉さん！！」

明日奈

「負け……た、鉄泉さん……が！？鉄泉さん！！」

明日奈の首を、ルンルッパがつかみ上げた。

明日奈

「ぐぐつ……」

睡蓮

「行かせませんよ。あなたの相手はアタシ……」

鉄泉

「カ……イオー……ガ、止め……る……日本……守……」

ズルッ!!

ザブン!!

睡蓮

「……まずは、」

滴

「……1人。」

明日奈

「鉄泉さああん!!!」

ファイル423：陸海空の交響歌（シンフォニア）『10・幻を打ち破れ』

明日奈

「鉄泉さああん！！！」

ゴボゴボゴボ・・・

凧

「助けに行くぞ！！・・・？チルタシユロン！！おい、聞こえないのか！？・・・！！サメハダジヨ―に挑発されている！！チルタシユロン！チルタシユロン！！クツ！！それで私の指示が耳に届いていないのか！！私をこの場から動かさないために・・・！！敵はいえ、何というチームワーク！！何というコンビネーション！！」

睡蓮

「そうですとも・・・すなわち、Subleaders Of Sea Scheme！『蒼海の組織の統率者達』とは、我々の事！！！」

明日奈

「・・・よくも・・・よくもおお！！！」

『オオオオオン！！』

睡蓮

「青の組織幹部の地位を誇る我々に、勢いだけで勝てるとても？」

ドシャ！！！！

明日奈

「はうっ！！外部からの攻撃！？」

睡蓮

「そこだけではありませんよ。」

シュババツ！！

明日奈

「ああ！！クッ！！」

ブワッ！！

明日奈

「うわっ！！ゴホッゴホッ・・・」

睡蓮

「フッフ、驚かれましたか？ルンルッパの術、自然のパワーです。」

┌

明日奈

「自然のパワー？」

睡蓮

「そう。どんな自然に働きかけるか・・・で、発動する内容がちがうのです。水辺で行えば水圧砲や波乗り、草むらで行えば葉っぱカッターやシビレ粉。その他、場所によって地震になったり幽霊球になったり・・・ね？自然の力って本当にすばらしいでしょう？その『自然の力』全ての源たるのが、海。生命の母たる海イソチなのです。だから、もっともつと海を広げなければならぬのです。我々は崇高



なる目的の元、行動しているのです。そのためには、多少の犠牲も仕方ないのです。あなた達ディティクティブマスターも、あの泉美というバカな娘も。フッフ。すばらしい未来のため散り去った者として、永く語り継いであげましょう。勝者となる我々が・・・ね！  
」

広島市 広島美術館

闘樹

「ムウ・・・何だ、この不気味な炎は・・・！クソ！！相手の姿も・・・よく見えねえ！！」

ドコッ！！

闘樹

「チクシヨウ！火傷を負っちゃった！！根性見せるよ、ホウリキ！！今、受けた攻撃に・・・リベンジだあ！！」

ドギヤ！！

闘樹

「どうだ！？火傷をバネに見せた特殊能力根性、それにリベンジをプラスしてダメージ倍返しだぜ！！もう、戦う力残ってねえんじやねえか！？」

フツ・・・

鬪樹

「消えた！！クソツ！！幻覚だったのか！！」

ズ・・・

ズズズ・・・

鬪樹

「う、うわぁ！！うおおお！！お、落ち着けホウリキー！！これは幻だ！！」

クラ・・・

鬪樹

「！？」

グニャ・・・

火影

「フツ、あきらめな。精神に直接働きかけるオレの幻影攻撃は、そう簡単には抜け出せねえぜ！！なあに、そんなに長い間じゃねえ。グライドンを進撃させる間だけ、おとなしくしてくれりゃあいんだ。」

鬪樹

「・・・フザケるな・・・それをさせちゃあなんねえから・・・みんなで踏ん張ってんだろぅが。オレの極めた格闘体術の『柔の奥義』

は、相手の攻撃に逆らわずむしろそれを利用する戦い方だ……だが、それは相手も真つ向勝負で挑んで来る場合の事……」

火影

「？」

鬪樹

「オマエのように直接のぶつかり合いを避けるような相手には、オレもそれなりの対応をさせてもらう……それは……」

ジャキイ！！

ヒュンヒュン……

鬪樹

「この騒動の直前、オレは格闘の訓練遠征に行き、旧知の親友に再会した。これはその男より受け継いだ、『柔の奥義』と対をなすもう一つの……『剛の奥義』！！ハリテマル、猫騙し！！」

パン！！

ブワツ！！

ビクッ！！

火影

「怯むな……！！」

鬪樹

「おおおおお……！数珠繋ぎ突っ張り……！！」



闘樹

「覇アアアアーツ！！！」

ドガガガガ！！！！

火影

「ぐうう・・・！！！」

ドオオオン！！

躑躅

「！闘樹さんの術が炸裂したのですわ！！！」

箒

「おいおい、余所見をしてる場合かよ！！！」

バツ！！

躑躅

「受け止めなさい！！！」

カツ！

ガシッ！

躑躅

「いいですわユリイドル！！そのままのいで……！！！」

篝

「少しはやるな。」

躑躅

「狙いはわかっていますわ！今、グラードンは私のギガノーズがかけた通せん坊の影響下にある。グラードンを進撃させたいあなた達は、ギガノーズを討ち通せん坊を解かせたい！」

篝

「その通りだよ！！押し合いでこのアタシが負けるとでも思っている！！？踏ん張りが効かないように、全ての体力を奪っちゃまいな！！」

ジュウウウウウ・・・

クラクラ・・・

ヨロツ・・・

ドズン！！

篝

「！！！」

シャキン！！

バチィ！！

篝

「体力が・・・回復している！？」

躑躅

「ここが畳敷きの民宿でよかったですね。ホテルみたいにコンクリートや大理石の床だと、こうはいかなかったですもの。」

箒

「何をしている!？」

ブワッ!

箒

「根を張っていたのか・・・おのれえ・・・!!！」

躑躅

「不利な状況を覆すのは戦略と知識!!これが私の戦い方!!！」

ガタガタガタ・・・

躑躅

「!!!(まだ人が残っていた!?)」

ビッ!!

ジュウウウウウ!!

躑躅

「さ、3人も!!逃げて・・・!!！」

ダッ!!

篝

「おっと！さっきのはワカツボミとウツボンとウツポッドの体液を合成して作った特殊な溶解液だ。コイツらに浴びせたら、このフスマのように一瞬で溶けちまうぜ！動くな！コイツらがどうなってもいいなら別だけど、ね。」

躑躅

「くー！」

篝

「フフツ、形勢逆転だな！！！」

ガガツガガ！！

ドッ！！

躑躅

「ギガノーズ……」

篝

「ククク。グラードン！！解放オオオオ！！！」

ズズズズズ……

青桐

「我が名は青桐。」



松房

「我が名は松房。」

七槻・潤治

「・・・」

潤治・七槻・松房・青桐

「オオオオオオオオオオオオ！！！！」

潤治

「RORO、遠吠え！！」

七槻

「ルドド、空元気！！」

潤治

「片桐真希ちゃんをさらい、ファミリアのプロトタイプを操り暴れ回った赤の組織。コイツが、その、」

七槻

「江古田の森、阿蘇山で戦った青の組織。コイツが、その、」

潤治

「頭領か！！」

七槻

「総帥か！！」

潤治・七槻

「だったら、あの手の中にあるのが!!」

潤治

「グラードンを操るクリーバー!!」

七槻

「カイオーガを操るプレイヤー!!でも、何か様子が変わった!!」

潤治

「うん!こうして2人のガーディアン使い同士のマルチバトルの格好になってるのに、一切協力する様子がない。・・・イヤ、むしろ・・・お互いの存在が・・・目に入っていないみたいだ!!・・・よし!それなら・・・!!小生がメインで攻撃するから、七槻ちゃんをサポートに入ってくれ!」

七槻

「わ、わかったたい!!チャモ!!」

ザザザザザ・・・

潤治

「素早いネットワークで相手の注意を引きつけ、そのスキに・・・  
GUGU!濁流!!2体同時攻撃!!」

ドバァ!!

七槻

「やったったい!!」

潤治

「よし、相手が足を取られている内に次の攻撃を・・・」

青桐

「ナメるな!!」

松房

「ガキ共!!」

青桐

「絶対零度!!」  
ゼットアイレイド

コアアアア・・・

松房

「業熱熱風!!」  
オーバーヒート

ブオオオオオ・・・

七槻

「トルル!リララ、ルドド!!」

潤治

「RERE、COCO、RORO!!」

松房・青桐

「ようやくここまで来たのだ!!邪魔されてなるものか!!」

潤治

「・・・ここまで来て黙って帰るワケにいかないのは、こっちも同じなんですがね。RERE!!」

ガガガガガガ！

バラララララ！

青桐・松房

「ぬおう！！」

七槻

「トドゼルバの絶対零度でできた氷柱を利用した霞！！」

潤治

「そうだ！そして・・・」

パシィイイン！！

潤治

ウェザー・ボール

「天気光球！！」

ドゴオオオ！！

潤治

「少し、荒っぽかったかな。・・・まあいいや。さて、ここに来た目的をサッサと達成させよう。2つの・RINGの奪還だったよね。うんっ・・・と。あ、あれえ？」

七槻

「潤治君、どぎゃんしたと？」

潤治

「取れない！！この2人の手に・RINGがくっついてしまってる  
！！」

「お・・・おお。」

「こ・・・これは・・・」

「超古代の強大な力に魅入られし者達が・・・」

「：RINGを通じて逆に・・・」

「その暴走に・・・取り込まれ始めおった！！」

青桐

「お・・・こ。」

松房

「ぐ・・・がが。」

青桐・松房

「ぐ・・・クカカカカッ！！！！」

松房・青桐

「うおオ・・・おおオオ!!!」

潤治

「：RINGが・・・2つの：RINGがヤツらの手の中に・・・  
！！完全に入りきったら取り戻せなくなる！！COCO、欲しがる  
だ!!!」

ダッ!

チヨイチヨイ・・・

バシイ!!!

潤治

「COCO!!!」

七槻

「あ、あれ、見るったい!!!」

ゴゴゴゴゴ・・・

松房・青桐

「オオオオオオオオオ!!!」

潤治

「あの影は・・・カイオーガとグラードン!!!」

七槻

「ボクの目の錯覚やないとやね!？」

潤治

「：RINGを通して2体の力が、ヤツら自身に乗り移りつつあるんだ!！」

松房・青桐

「かあああ!！」

ドンッ!!

潤治

「COCO、猫の手!！」

グッ・・・

ガキン!!

潤治

「七槻ちゃんのメタルシヤム、疲れてたみたいだったから、代わりにCOCOが鉄壁を使わせてもらったよ!猫の手も借りたい状況なんだね・・・」

七槻

「う、うん!それにしても何てすさまじい威力!まさにカイオーガとグラードンの力そのものったい!」

潤治

「逆転してしまっただ！ヤツらは：RINGを通じて超古代ガイ  
ディアンを操ろうとした。でも今は、：RINGを通じてヤツら自  
身が操られている！！2体に精神を乗っ取られつつあるんだ！！」

青桐

「ウオオオオオオオオ！！」

グアッ！！

潤治

「危ない！！GUGU、彼女を守るんだ！！泥遊び！！」

ダッ！

ババッ！！

青桐

「ぬおっ！！」

七槻

「（何やるっ、この感じ・・・随分前にもこんな事があつたような・  
・・・ハッ！！思い出をたどっている場合じゃなか！！）」

青桐

「ガアア！！」

ガッ！

七槻

「あぁっ！！！！」





今、グラードンとカイオーガはただ1つの場所を目指していた。

かつてぶつかり合った、伝説の場所を！！

『グラードンは広島を通過！いよいよ海へさしかかるうとうとくる！！グラードンの踏み出す足下からはさらに高温の炎が沸き、上空は日照り！強烈な日差しは、眼前に広がる海をも蒸発させる勢い！！炎の灼熱地獄を、自ら驍進！！一方、カイオーガも明確に進路を特定！カイオーガの雨降らしが雨雲を呼び込み、さらなる大津波と豪雨を発生させながら、一点を見すえ邁進する！！！！』

山口

成美

「さあ、飛行艇が来たわ！合流しましょう！」

友和

「いえ、成美先生、まだ残りましょう！感じませんか？ずっとアイツの気配がするのを・・・」

成美

「アイツ？」

タツ！

友和

「！いた！！」

成美

「アブソウル！！災いのガーディアン、アブソウルだわ！！」

友和

「そうです、2つの組織が行っていた犯罪、そのどれのニュース記事にも、ある影が入っていたんです！今にして思えば、コイツだっただんだ！それにホラ、アイツの体についていたこれは阿蘇山の火山灰ですよ！！さてはオマエ、阿蘇山の火山停止事件の現場にもいたんだな！？事件が起こる場所にたびたびオマエが現れている！！青・赤両組織の暗躍の影にはオマエがいるんじゃないか！？イヤ！そもそもオマエが災いを呼び寄せているんじゃないか！？」

『・・・』

友和

「待って、永井君！ねえ、昔から人間はこのアブソウルの一族に対して、思いちがいをしていたんじゃないかしら？確かに災いが起こるたび、そこにはアウルやアブソル、アブソウルの姿があったかもしれない。でも、その場にいたからって、災いを起こす原因だつて決めつける理由にはならないわ。むしろ彼らは災いを事前に察知し、それを教えようとしてやって来たんじゃない？私達人間に！！」

『・・・』

スツ・・・

成美

「背中に乗れ・・・そういう事？」

『・・・』

コクツ・・・

成美

「ねえ、永井君。この先起こる最大の災いって何かしら？これ以上の悪い事態って何だと思う？」

友和

「・・・！！太古の伝説のようにカイオーガとグラードンがぶつかり合ったら・・・きっと日本全体が滅びるような状況になる・・・！！」

成美

「そう！！それこそが最大の災い！！教えて、アブソウル！！2体はやっぱり対決する事になるの！？その場所はどこ！？」

『・・・』

スツ・・・

ダンッ！！

ゴゴゴゴゴゴ

七槻

「スゴか力で昇って行きよう!!」

潤治

「やっぱりグラードンとカイオーガに引っ張られてるんだ!!」

松房・青桐

「クカカカカカ!!」

グググ

潤治・七槻

「!!!(離れ離れになる!!)」

七槻

「潤治くううん!!!!」

潤治

「七槻ちゃああん!!!!」

成美

「スゴいスピード!!脇目もふらず一直線に進んで行くわ!!永井君!アブソウルがどこに向かっているか予測できる!?!」

友和

「もうちよつとでできます!!」

ドバツ!!

成美・友和

「あれは・・・!?!」

友和

「時津さんの息子、潤治君!?!」

成美

「七槻ちゃん!?!」

成美

「あの2つのエネルギー体も、アブソウルと同じ方向に向かってる!?!」

友和

「成美先生、わかりました!!アブソウルの目指す場所、それは・・・歴史が眠る神秘の島、北海道です!!!!」

成美

「あの2つのエネルギー体も、アブソウルと同じ方向に向かってる！」

友和

「成美先生、わかりました！！アブソウルの目指す場所、それは・  
・歴史が眠る神秘の島、北海道です！！！」

ギユオオオオオ・・・

友和

「北海道は今、炎熱と豪雨の2つの境界線上に位置している唯一の場所です！！」

成美

「じゃあ、やっぱり！！超古代の2体が激突する場所に間違いないのね！？潤治君と七槻ちゃんを捕らえた2つのエネルギー体も北海道に向かっている！！2人が危ないわ！！永井君！急いでジェ・グーンに！！他の人達に報告を・・・！」

「激突！？カイオーガとグラードンの激突だって！？」

「おおお、恐れていた事がついに現実になってしまった！」

「眠りについた超古代ガーディアンが目覚めじゃ!!」

「しかしご老人方、カイオーガとグラードンはすでに目覚めて活動しておりますぞ。」

「それは第1段階。これから起こらんとしているのは第2の目覚めじゃ!!」

「海底洞窟での目覚めを肉体の目覚めとするならば、第2の目覚めは精神の目覚め! 2体が北海道へ向かうのは、目覚めの祠で精神の目覚めを行うためじゃ!!」

「嵐山と目覚めの祠には深い関係がある! おそらく嵐山で守っておった2つの：RINGも2体に引き寄せられているハズ!」

「そして・・・肉体・精神共に完全に目覚めた2体が行う事はただ1つ!!」

ゴゴゴゴゴ

ズガアアアア

『オオオオオン!!』

『ガアアアア!!』

「互いの全てをぶつけ合う超決戦じゃ!! ついに出会ってしまった!! 太古の戦いに、決着をつけるべく!!」



広島

ズイズイ・・・

鬪樹

「叩き落とす!!」

バシイ!!

カシャァン!

鬪樹

「!?!?これは・・・!!銀一と金美が髪に刺していた・・・カンザシ簪だ・・・!!オマエだったんだな、銀一と金美をやったのは!!」

火影

「そつだ、・・・フフ。嵐山でRINGを奪う時、邪魔だったんでな。」

鬪樹

「言え!!2人は今、どこにいる!!」

火影

「おっと、ムリはすんなよ。全ての炎を吹き飛ばす最大級の力の放出、もう戦う力など残ってない事は自分でもわかっているだろう？ フツ。それはオレも・・・同じだが・・・な。だがいい。オレ達の目的はグラードンの進撃、これだけは果たせた。すでにヤツは精神の目覚めの地、北海道まで到着している事だろう、フフフ。正直恐れ入ったぜ、オマエの剛奥義。オレの幻影攻撃を力尽くで破ったのは、・・・オマエが初めてだ・・・」

フウツ・・・

鬨樹

「ま・・・、待・・・て・・・」

篝

「じゃあね。」

フウツ・・・

ポツ、ポツ・・・

躑躅

「うつ・・・う・・・許してしまった・・・グラードンの進撃を・・・  
「！！」」

睡蓮

「自然のパワー!!」

ガガガガガ・・・

明日奈

「ロビーン!!」

睡蓮

「ついに瀕死状態。勝負ありましたね。カイオーガを無事進撃させるに至った今となっては、あなたとの小競り合いに意味はないのですが・・・明確な力の差というものを示すために、最後の一撃を浴びせるというのも・・・悪くないですね。」

凧

「（明日奈・・・）どけえ!!」

ドカツ!

ザッ!!

睡蓮

「相手が2人になっても同じ事ですよ。私の戦い方に死角はありません。自然のパワー!!」

シーン・・・

睡蓮

「な、なぜ術が出ないのです！？ルンルラツパ！！」

明日奈

「気づかなかった？ロビンが最初にあげた雄叫び・・・あれが怨念だって事に・・・」

睡蓮

「お、怨念・・・！！自分を倒した術を封じる術か！！」

明日奈

「そうだ！！だからオマエのルンラツパはもう自然のパワーは使えない！！アタシのロビンが身を賭して封じ込めたんだ！！」

睡蓮

「だからどうした！！我々の勝利はすでに揺るぎないものとなっている！！もうこの場に用はない！！」

潮

「ガハツ！す、睡蓮さん私も連れて・・・」

睡蓮

「潮さん、自分の事は自分で何とかしてください！！」

明日奈

「逃げるな、卑怯者！！」

凧

「明日奈、待て！！我々はカイオーガの進撃を許してしまった上、鉄泉さんも失ってしまったんだぞ！！私はこれ以上犠牲者を増やしたくない！！」



凧

「何だ、どこから飛んで来た？」

明日奈

「何なの？凧さん。」

凧

「壊れてはいるが・・・これは船の航行を記録する計器だ。データは生きているようだな。『広島沖を出発・・・』これは、潜水艦の航行記録だ！！」

明日奈

「ええ！？待って凧さん、スタート地点は広島沖だと言ったよね？もしかするとそこが・・・青の組織の・・・」

凧

「基地である可能性は高いな！！」

明日奈

「行ってみよう、凧さん！！もう1人の構成員泉美さんもそこにいるかもしれない！！」

滴

「（後は任せますよ・・・ディティクティブマスターのお2人さん・・・）」



「がああ!!」

ガッ!

ブンッ!!

ドガッ!!

三稜

「……う……どうなってるんだ?この男は。」

「おそらく海底洞窟で：RINGに触れたのだろう。わずかであったも：RINGを介して超古代ガーディアンに命令を送ろうとした者は、その影響を身に受ける。」

焔

「うっうっう。」

三稜

「オマエは……!!」

焔

「おおおお!!」

「メタグロス!!流星鉄拳!!」  
コメット・パンチ

ドコッ!!

三稜

「待ちかねたぞ……ユーリ。」



ユ  
ー  
リ

「すまなかつた・・・さっそくだが三稜、オマエに頼みがある。」

登場人物のおさらい

江戸川コナン：本編の準主人公。元々は迷宮無しの名探偵。灰原哀と恋仲。本名は工藤新一。現在、正宗の特訓を受けていて・・・

灰原哀：本編の準ヒロイン。元組織の科学者で、女探偵の名が板に付いてきている。江戸川コナンと恋仲。本名は宮野志保。現在、正宗の特訓を受けていて・・・

剣野刃：本編の主人公にしてヒロイン。FBI捜査官。7天王の1人。本名はリアン・服部・ハートネス。

金田一ユリ：元組織の構成員で、3代目のベルモット。小嶋元太と恋仲。本名はリリス・ヴィンヤード。

如月風月：元組織の構成員で、ディテイクティブマスターの1人。常盤暁と恋仲。

常盤暁：元組織の構成員で、ディテイクティブマスターの1人。如月風月と恋仲。

吉田歩美：少年探偵団の1人にして、ディテイクティブマスターの1人。昔はコナンを好きだったが、今は円谷光彦と恋仲に。

円谷光彦：少年探偵団の1人で、頭脳明晰。昔は歩美と哀両方に好意があっただが、今は吉田歩美の方と恋仲。

小嶋元太：少年探偵団の1人で、大食らい。昔は歩美を好きだったが、ある事件以来金田一ユリと恋仲になった。

東尾マリア：少年探偵団の1人で、ツンデレ浪花っ娘。坂本たくまと恋仲で、普段の2人の関係はほぼ夫婦漫才に近い。妖木刀「村正」の持ち主。『ハヤテのごとく!』の鷺之宮伊澄と同じく霊が見える。

坂本たくま：少年探偵団の1人で、硬派な少年。東尾マリアと恋仲で、彼女の尻に敷かれている。

片桐真希：少年探偵団の1人で、ファミリア・ファウナの生みの親。FBI捜査官の1人。

ファミリア・ファウナ：真希が生み出した最強のエスパー。正義感が強くて、心優しい。真希のメイド!?

イズナ：哀の所有するしゃべるガーディアン。

平尾隆太：青年探偵団の1人で、コナンの大親友。宝極真と恋仲。デイトイクティブマスターの1人。

宝極真：青年探偵団の1人で、礼儀正しい子。平尾隆太と恋仲。デイトイクティブマスターの1人。

白野美保：青年探偵団の1人で、京都の女名探偵。瀬藤銀一と恋仲。7天王の1人。

瀬藤銀一：青年探偵団の1人で、泣き虫な少年。白野美保と恋仲で、デイトイクティブマスターの1人。双子の姉がいる。現在行方不明。

瀬藤金美：銀一の双子の姉で、2人で1人のディティクティブマスター。現在行方不明。

天幕深雪：美保の友人の1人で、お調子者。チエスが大好き。ディティクティブマスターの1人。

鳳美香：美保の友人の1人で、くノ一。心優しい。ディティクティブマスターの1人。

月島弓雁：美保の友人の1人で、浪花っ娘。ディティクティブマスターの1人。

エル・シーバス：美保の友人の1人で、シスター。美保をからかうのが好き。7天王の1人。

白羽弥生：美保の幼なじみで、勝ち気な浪花っ娘。ハリセンを愛用する。黒羽快斗の親戚に当たる。

三千院伊澄：美保の幼なじみで、最強の巫女。ハヤテのごとく!のキャラクターである三千院ナギの親戚に当たる。

瀬川泉：美保の友人の1人で、生徒会委員長パープル。いつもニコニコ笑っている。ハヤテのごとく!の瀬川泉とは無関係（髪型や性格は似ている）。

妹尾波香：美保の友人の1人で、生徒会副委員長グリーン。エルや美保を困らせるのが趣味。

長谷川祐美：美保の友人の1人で、生徒会風紀委員オレンジ。何を考えてるのかわからない。巫女さん。

桜野松葉：青年探偵団の1人で、くノ一。料理上手な女将さん。恋人の蜂野鈴也は7天王の1人。

蜂野鈴也：青年探偵団の1人で、忍者。松葉の恋人だが、なかなか関係が進展しない。7天王の1人。

綾崎ハヤテ：ハヤテのごとく!のキャラクターで、不死身の執事。愛沢咲夜と恋仲。デイトイクティブマスターの1人。

愛沢咲夜：ハヤテのごとく!のキャラクターで、浪花っ娘。綾崎ハヤテと恋仲。デイトイクティブマスターの1人。

鷲之宮伊澄：ハヤテのごとく!のキャラクターで、最強の巫女。デイトイクティブマスターの1人。

朝風理沙：ハヤテのごとく!のキャラクターで、巫女さん。デイトイクティブマスターの1人。第5章にて、伊澄の専属メイドになる事に。メイドの時はメガネを着用。

ユーリ・服部・ハートネス：FBI捜査官の1人で、7天王の長。リアンの兄。生き別れになった双子の弟がいる。

ジヨデイ・スターリング：FBI捜査官の1人で、7天王の1人。ユーリの妻。

如月花鳥：風月の母親で、7天王の1人。娘を暁に押しつけている、天然で放任主義な人。

本堂瑛祐：FBI捜査官の1人で、礼儀正しい少年。デイトイクテ

イブマスターの1人。日向琴美と恋仲。

日向琴美：FBI捜査官の1人で、勝ち気な少女。ディテイクティブマスターの1人。本堂瑛祐と恋仲。

越水七槻：1度は犯罪に手を染めた、哀しみの南の名探偵。今はFBI捜査官として日本を旅中。最近潤治といい感じに……？

時津潤治：七槻の友人を自殺に追い込み、七槻に殺された時津潤哉の双子の弟。あまり自分から戦いをする事はしないようだが、七槻への気持ちの変化と共にそれも変わりつつある。

金泉躑躅：長崎のディテイクティブマスター。勉強家で、相性の悪さを戦略と知識で補う。青の組織の泉美とは勉強仲間。篝と対決するも、後一步のところ……

室鬪樹：佐賀のディテイクティブマスター。相手の力を逆に利用する柔の奥義の使い手。火影と対決し苦戦を強いられるが、遠征で再会した修行仲間の魚塚から受け継いだ剛の奥義で逆転勝ちする。

金雪鉄泉：大分のディテイクティブマスター。ダジャレオヤジだが、時には最年長らしく覚悟の座った戦い方をする。滴と戦い敗れ海に落ちるも、助かった。

不炎明日奈：熊本のディテイクティブマスター。温泉大好き。青の組織と接戦を繰り広げた。焰に少し惹かれている様子？

時津正宗：福岡のディテイクティブマスター。探偵協会と何かしらのわだかまりがあるらしい。現在、コナンと哀を特訓中。

向日木凧：沖縄のディティクティブマスター。ディティクティブマスター達をまとめ上げる司令塔。三稜とはドライな関係だが、実は・

砥草根風蘭：宮崎のディティクティブマスター。冷静な人。現在は別行動をとる。

流音三稜：鹿児島県のディティクティブマスター。芸術を愛する。焔との戦闘中、ユーリと再会する。凧とはドライな関係だが、実は・

雪風時音：北海道のディティクティブマスター。幼いが、しっかりした考え方を持つ。災害救助中に目の見えない少女と遭遇する。

焔：赤の組織の幹部。戦略家。RINGに少し触れた事で影響を受ける。

篝：赤の組織の幹部。紅一点。何かを隠している・・・

火影：赤の組織の幹部。幻影を操る。闘樹を追い詰めるも、新奥義の前に敗れる。

滴：青の組織の幹部。総帥には絶対服従だったが、反旗を・・・

泉美：青の組織の幹部。阿蘇山で明日奈を襲った事あり。現在行方不明。

潮：青の組織の幹部。慢心する悪いクセがあり、噛ませ犬キャラ。

睡蓮：青の組織の幹部。変装術が得意。明日奈を追い詰めた。

松房：赤の組織の頭領。グラードンに操られる。

青桐：青の組織の総帥。カイオーガに操られる。

??：シンという人物を追う謎の人物。



「この石版の凸凹文字の読み方を私に教えてくれたのが、7天王の長なんです。」

時音

「でも、ここに来て雨足も強くなってきたし、協会の飛行船もアタシ達に気づかずに行っちゃったし。あなたを見つけ出したのはいいけど、身動きとれなくなっちゃったわね。」

「いいんです。私、ここから離れるワケにはいきませんから。」

時音

「え!？」

「この石版はとても大事な物だ。いずれ取りに来るまで預かってくれ』って言われてるんです。FBI捜査官、ユーリ・服部・ハートネスさんとの・・・約束なんです。」

三稜

「リアン、鈴也、花鳥、ジヨデイ、美保、エル。フフ・・・7人おそろいとはな。随分久しぶりにこの光景を見た。そして・・・メトロ、フレア、清兵衛、雷薙、狐、兎、雷牙、隼人、陽、陽太、歩美、朝美、風月、暁、真、隆太、瑛祐、琴美、深雪、弓雁、美香、綾子、ミサオ、羽鳥、伊澄、理沙、ハヤテ、咲夜。ディティクティブマス

ターの中でも実力者である28人もいるとはな。」

リアン

「アタシ達、任務以外はみんなちりぢり、どこにいようと自由だかんね。」

鈴也

「へへ、だからオレも呼び出された時は何事かと思っただぜ、ユーリさん。」

ユーリ

「探し出すのに他の国まで足を運び、苦勞したぞ、6人共・・・しかし・・・共に戦うメンバーが欲しいとなった時、やはりこのメンバー以外考えられなかった。」

ジヨディ

「これだけの有事、しかもユーリの呼びかけとなったら駆けつけないワケにはいきません。」

エル

「ええ、そうですね。そしてそれはあなたも同じでしょう、三稜さん？」

ユーリ

「さあ、34人共。手筈は説明した通りだ。ここから先はそれぞれの持ち場に・・・頼む！」

リアン・鈴也・花鳥・ジヨディ・美保・エル・メトロ・フレア・清兵衛・雷薙・狐・兎・雷牙・隼人・陽・陽太・歩美・朝美・風月・暁・真・隆太・瑛祐・琴美・深雪・弓雁・美香・綾子・ミサオ・羽

鳥・伊澄・理沙・ハヤテ・咲夜

「了解！！！」

ギユオオオオオ・・・

三稜

「持ち場？何をしようとしているんだ！？」

ユーリ

「これが答えだ。」

パチン！

バツ！

ユーリ

「オマエと共に戦うにあたり、・・・これを託したい。オマエならわかるだろう、この意味が。」

三稜

「長のマント・・・」

ユーリ

「そうだ、何も意外な事はない。本来つくべき役目に戻るというだけだ。オマエはかつて、探偵協会主催のリーグで優勝し、長となった男。本来なら、今、このマントを着ているべき人間なのだから・・・」

3年前

『おめでとう、ここに新たな長が誕生した。三稜君。これからは長としてその責務にあたってくれ。あー、また今回のチャンピオン誕生によりランキングも変化したハズだな。となると・・・上位入賞者のランクでトップのユーリ君以下上から6名が三稜君につぐ6天王という事に・・・』

三稜『ちよつと待つてください、ボス。私は・・・辞退したいと考えています。』

『な、何だつて!?!どうしてだ!?!』

三稜『私の父であり、師でもあるディティクティブマスター我暖<sup>アダン</sup>。私は父の後を継いで鹿児島を守っていきたい、以前からそう考えていたのです。』

ユーリ

「ディティクティブマスターと長は兼任できない。そう言ってオマエは長の立場につく事を辞退し、ランキングで次の位置だったオレがこのマントを着る事となった。」

三稜

「ほとんど実力差はなかった。」

ユーリ

「オマエらしいコメントだな、でもオレは知っている。辞退のもう1つの理由・・・父親である我暖さんの後を継ぎたいというのもウソではなかっただろう。・・・でも本当は・・・あの頃、沖縄の修練所に風が就任したからだ。同じディテクティブマスターの職に就いて彼女のそばにいたかった・・・そうだろう？」

三稜

「・・・バれていたのか。どちらにせよ、ユーリ、オマエが適任だった事は間違いない。頂点に立つなら人間的に整っている事が重要だからな。事実オマエは立派にその責任を果たしていった。頂点に立ち、その実力で挑戦者を退けてきた。だからなおの事聞きたい・・・なぜ今さらこのマントを渡そうとするのか。」

ユーリ

「それは・・・」

ガバア！！

焰

「うがあああ！！！」

ズバツ！！

ユーリ

「メタグロス！！！」

ガキキキキ・・・

ユーリ

「今なお、：RINGの影響下にあるのか！！僅かに触れただけであるう、この男すらこれほどならば、実際に海底洞窟で念じていた連中はどうなってしまったのか・・・！！」

三稜

「それを確かめるには、グラードンを追うしかない！！・・・！！  
いない！？な、なぜだ！！躑躅が通せん坊で足止めしていたハズだ  
が・・・！！」

ユーリ

「それはすなわち、通せん坊をかけていた者が敗れた・・・という  
事！！グラードンは北海道に到達し、心までもが完全に、覚醒して  
しまった・・・！！その証拠に、時間を確認してみる！！」

三稜

「時間！？ああ！！」

『24：30』

ユーリ

「戦っていて気づかなかつたんだろうが・・・今は真夜中！本物の  
太陽はとっくに沈んでる！！」

三稜

「バカな！！じゃあ、この昼間のような照りつける光は！？」

ユーリ

「グラードンが心の覚醒をしたため自ら甦り始めた、光と熱のエネ  
ルギーだ！！彼の指示の実行を急がねば！！」



ズズズズ・・・

「あっ！」

時音

「うわ！！すっかり捕まってなさい！！」

「ハ、ハイ！！」

時音

「しょうがないわね。それにしても・・・溜まった雨水や浸水で建物が潰れ始めたわ！もうここに居続けるのはヤバイ！」

「でも約束が・・・！！」

時音

「バカ！死んじゃったら約束も何も・・・ん？」

メキメキ・・・

時音

「うああ！こっちもか！！」

「リマ・チャージル・リアフォドン！！」

ドシャー！！



時音

「！」

リアン

「大丈夫かー！？アタシが助けに来たからー！あなたやろー！？ユ  
ーリ兄から石版預かってる子ってー！？」

「あなたは？」

リアン

「7天王・リアンや。さ、こっちへ！あ、ユーリ兄？うまい事会え  
たで、彼女と。」

ユーリ

「そうか、よくやってくれた。」

「電話の向こうにいるのはユーリさん？」

リアン

「そやでー。」

ユーリ

「リアン、彼女に石版の文字を読み上げるよう伝えてくれ。」

三稜

「ユーリ！一体何をしようとしているー！ー！」

ユーリ

「三稜・・・すでに2体は戦い始めているのだ。北海道へ向かって  
くれ。すぐに行く。オレを信じてくれ・・・頼む。」

三稜

「・・・わかった・・・」

ダッ！

ユーリ

「久しぶりだね。石版は手元にあるかい？」

「ハイ!!」

ユーリ

「そうか。これまで預かってくれてありがとう。解読は進んだかい？」

「ハイ!!」

ユーリ

「自信を持ってくれて良い。君は視力を失ってはいるが、その指先の感覚の鋭さはオレを凌いでいる。オレが教えた法則通り読んでくれば、きっと石版の内容をつかめると思っていたよ。これで目覚めさせる事ができるんだ。2体の激突を止める切り札、18体のガーディアンを・・・!!さあ、読んでみてくれ。」

「ハイ。ワタシたちワ、コノアナデクラシセイカツシ、ソシテイキテキタ。スベテワガーディアンノオカゲダ。ダガワタシたちワ、アノガーディアンヲトジコメタ。コワカツタノダ。ユウキアルモノヨ、キボウニミチタモノヨ。トビラヲアケヨ、ソコニエイエンノガーディアンガイル。サ・・・」

ユーリ

「どうした？」

「ダメです。『サイシヨニホ』・・・『サイゴニジ』・・・ごめんなさい！！この石版が欠けていて、ここまでしか読めないんです！」

ユーリ

「・・・（あの子の繊細な指先ならば、欠けた部分に残ったわずかな凹凸からも何かを読み取れると思ったのだが・・・どうする・・・！？）」

明日奈

「凧さん、間違いないよ！！青の組織のアジトだ！！」

凧

「だが・・・全くの無人だ・・・」

明日奈

「うん、カイオーガも目覚めて用無しになったのかな？」

キイ・・・

明日奈

「！！泉美さん！！」

そこには、縄で縛られた泉美の姿があった。

ビリ……

泉美

「あ、あなた確か阿蘇山で……」

明日奈

「ええ、よかった、無事で!!」

泉美

「ごめんなさい……だまされていたとはいえ、何て事をしてしまったの、私は……」

凧

「さあ、明日奈も鉄泉さんと一緒にジェ・グリーンで手当を受けるんだ。」

明日奈

「え？凧さんは？」

凧

「私は……カイオーガ・グラードン対決の地、北海道へ向かう。」

明日奈

「だったら、アタシも……」

凧 「ダメだ！！傷つき疲れ切った体を休める事も、戦いの上では重要な事だ。ディティクティブマスターを束ねる者としての・・・命令だ・・・」

凧 「ボス、こちら凧です！通達に従い、北海道に向かいます。ただし明日奈、鉄泉さんは満身創痍、私の判断で戦いより退くよう命じました。」

「何と！三稜からも躑躅、鬨樹両名が力尽きたとの報告が入っている！戦力となりえるのは凧、三稜と別任務に当たっているディティクティブマスター達以外のみか！しかし、自体は緊急レベルマックス！！誰でも良い、総力を結集させるのだ！！」

三稜 「総力か・・・駆けつけられる者が・・・何名・・・いるだろう・・・」

凧 「だが・・・たとえただ1人であろうと・・・向かうのみ・・・！」

凧・三稜 「最終決戦の地へ！！」

青桐

「おおおお!!カイオーガア!!」

松房

「おおおお!!グラードオオン!!」

ブワッ!!

潤治

「うわ!!」

七槻

「くう!!」

青桐

「クカカカ・・・日本中を暴れ回った末・・・ついに、北海道まで戻ったか!!」

松房

「後は久遠の仇敵を・・・倒すのみ!!」

七槻

「ハア・・・ハア・・・カイオーガとグラードンの激突・・・」

潤治

「必ず・・・食い止める!!」

七槻

「チャモー!!」

潤治

「GUGU!!」

青桐・松房

「邪魔を、するな!!」

バン!!

青桐・松房

「オマエ達は傍観者<sup>ギャフラー</sup>として見ている!!そして幸運に思うが良い。歴史に刻まれるこの瞬間に立ち会える事を!!」

ドガツ!!

タツ!

成美

「ああ!!これが、超古代にも行われたという伝説の戦い!!何てすさまじい!!2体のぶつかり合う衝撃で、海も大地も吹き飛ばされてる!!いた、潤治君と七槻ちゃん!!対決の場所をはさんで、2人が対岸に・・・何とかならないのかしら?お願いアブソウル、何とかしてえ!!」

『!!』

シュババ!!

パキッ！

キイン！！

成美

「マジックボード！！ありがとうアブソウル！やっぱりあなた味方なのね！？だったらどんどんやっちゃって！スゴい技を出してこの戦いを止めて！！」

『・・・』

成美

「アブソウル！？」

友和

「ちがいますよ、成美先生。助けはくれたけど、この子は誰の味方でもない。もし、さつき先生が言った考えが正しいとしたら、きっとこの子は災いが起きるのを知らせるだけの存在・・・自然の代表として、この戦いの行く末を見守る審判者・・・」

「私も・・・そう思う。」

フオオオオ・・・

成美

「三稜さん！！」

三稜

「この災いを起こしたのは人間だ。解決を自然に委ねるワケにはい



かない。潤治君と共に、この激突を止めてみせる!!」

「そうとも!!」

バサバサツ・・・

凧

「ディティクティブマスターとして・・・解決はこの手で!!」

成美

「凧さん!!」

凧

「七槻!!」

ザツ!

カッーン・・・

凧

「!!!!」

潤治

「・・・う・・・先生・・・来てくれたんですね?すみません・・・  
RING、奪還できませんでした・・・使い手と超古代ガーディ  
アンがRINGを通じて同調<sup>シンクロ</sup>してしまった・・・もうアイツらの  
パワーには・・・勝てません!!」

七槻

「・・・せ、先生。・・・すまんち・・・ボクらでは力が足りんや

ったと。・・・あのすさまじい力、とても破れんたい。先生、先に逃げて!!」

三稜

「あきらめるな!! きっと方法はある!!」

凧

「あきらめるな! こんな所で散ってどうする!？」

三稜・凧

「君は未来ある子供だ!! 友と過トキごす時代を、世界を、このまま奪われて良いのか!?! 大切な人を失っても良いのか!?!？」

潤治・七槻

「・・・」

潤治

「先生・・・ただ1人・・・どうしても会っておきたい・・・人がいます。会って・・・伝えておきたい事が・・・ある!!」

七槻

「・・・イヤ・・・どうしてももう1度会わんといけん・・・あの人に・・・会って・・・伝えておきたい事が・・・あると!!」

潤治

「もうずいぶん昔・・・ずっと小さい頃の思い出の中の人です。名前も顔も覚えていない・・・その人は父の親友の娘で、ディティクティブマスター試験を受ける父の応援のために来ていた・・・一緒に遊んだのはほんの数日間でしたけど、その時以上に楽しかった事はなかった。」

七槻

「と、言うてもちっちゃかった頃の思い出の中の人たい。名前も顔も覚えてなかとよ・・・そんな人は父ちゃんの親友の息子で、父ちゃんと一緒にそんな人の所へ行つたたい・・・たつた何日間しか一緒に過ごさんかつたけど、その時以上に楽しかった事はなかつたとよ。」

「

潤治

「信じられないでしょうけど・・・その頃の小生は・・・やんちゃで、勝負が大好きな子供だったんです。」

七槻

「ウソやと思うやろうけど・・・そんな頃のボクは・・・おとなしくて、木登りも勝負もようせん子供やったと。」

回想・・・

8年前・・・

『いよいよ今日ね、あなたがディテイクタイプマスターになる日！ずっと目指していた夢が叶うんだわ！！』

『まゝだわかりませんぞお。試験は今からなんですからな。なぐんで失礼！正宗にかぎって不合格なんてまず考えられないですな。気が早いけど、合格後の就任地区がどこになるのかの方が気になるでしょうっ。』

『いいえ。この人と一緒ならどこへでも！』

『おゝ、この幸せ者め！正宗よ、せゝひ、我が福岡に來い！』

『フツ。潤治はどうした？』

『向こうで遊んでたわ。ウフフ、見るもの全部珍しいみたい。』

『うちの娘も一緒かな。』

『もちろん！ずーっと一緒よ。とても会ったばかりとは思えないくらい仲良しよ。』

潤治

「彼女はお淑やかでキレイ好きで・・・スゴクカワイかった。」

七槻

「彼は身軽で力強くて・・・とてもカッコよかった。」

潤治

「夢中で過ごした夢のような時間・・・」

七槻

「でも・・・そこであの事件が・・・」

ガサツ！

『野生のボーマンジャー！！』

クワツ！

『キヤアア！！』

『危ない！！』

ガキン！！

『ここにいる！！ROROO！COCOO！LILLI！！』

ガガガガ・・・

『この子を守らなきゃ！！ボーマンジャめ、絶対に倒してやる！！』  
ザクツ！！

「キヤアア!!」

「ドラゴンクローか!!何の!父さんから教わった勝負の腕前を見るおおお!!」

メキツ!

「カハツ・・・」

ドスドス・・・

「勝ったよ!もう・・・大丈夫!!ボーマンジャは追っ払ったから!」

「・・・う・・・ヒック・・・グズ・・・こ、怖いよ・・・」

潤治・七槻

「怖い・・・」

潤治

「彼女はボーマンジャよりも、小生の戦う姿に恐怖してたんです。そしてその日以来、父が家を空ける事が多くなりました・・・試験に落ちたと言っていたので、再挑戦のために修業に明け暮れていたでしょう。勝負のせいで・・・急に1人ぼっちになってしまった・・・」

七槻

「助けてくれた彼に、そげんヒドか言葉言つてしもたと・・・そしてその日以来父ちゃんの研究も忙しくなつて、ボクも父ちゃんの手伝いでいるんなガージェイアンに触れるうちにわかってきたと。ボクが自分で戦えない弱が存在やから・・・彼ばキズつけた・・・」

潤治

「美しかったあの子の心を汚してしまった。」

七槻

「彼の強さは否定してしまった。」

潤治・七槻

「だから・・・その時・・・決めた。」

潤治

「これからは強さよりも、夢だった探偵の道を極めよう、自分の戦う姿は、もう2度と人前にさらすまい!!」

七槻

「これからは夢やった探偵の道は極めると共に、強さは身につけよう、自身ば守り誰かも助ける強き力ば!!」

潤治・七槻

「今度会う時には、こんなに変わった自分を見てもらえるように・・・」

ゴゴゴゴゴ

三稜

「むっ、足場が崩れてきたな!!」

凧

「七槻、来るんだ!!」

潤治

「すみません・・・もう最後だと思ったら、つい話しすぎてしまっ  
て・・・」

七槻

「ゴメン・・・先生・・・ボク。」

三稜

「最後？バカな事を言うな！今話を聞いたら、なおさらここで果てるワケにはいかないじゃないか！」

凧

「しつかりしろ！対岸の三稜と合流するぞ！！それほどの思いで変わった自分を、相手に見せぬまま終わってどうする！」

潤治

「そう・・・ですね、先生！」

七槻

「そうつたいね、先生！」

ザアッ！

ドシューウウ・・・

三稜

「さあ！気持ちが高まったところで・・・どうするか!？」

潤治

「先生！2体の戦いの本能を止める方法はただ1つ！：RINGの力を消し去る事だと思っんです。小生達が海底洞窟で奪還に失敗した：RINGは今、彼らの体内にあります！だからあの2人の暴走を封じる事で、2体の超古代ガーディアンを制する事ができると思っんです!!！」

三稜

「理屈はわかるが、どうやって行う？」

凧

「ガーディアンの方で外側から働きかけたのでは、あの2人の命を奪いかねないぞ・・・む？」

三稜

「どうした、凧？」

凧

「イ、イヤ。さっき七槻のポーチから落ちたこの石・・・熱を発生してる・・・」

三稜

「！！それは・・・隕石グラウンド・メテオのカケラじゃないか！！七槻ちゃん！君はどこでこれを見つけた？」

七槻

「あ、阿蘇山つたい。たぶん、青の組織の連中が落としていったところ」

三稜

「むう！これさえあれば、ヤツらを封鎖する事ができるかもしれない！！」

潤治

「どういふ事ですか、先生？」

三稜



「私の知り合いによれば、この隕石には自然のエネルギーを打ち消す力があるという・・・そのパワーは、活火山、阿蘇山の噴煙すら完全停止させた事です。すでに実証済みだ。だから・・・それをヤツらの：RING目掛けて照射すれば、2人の暴走を止められるかも！」

凧

「どこを狙ったらいい!？」

潤治

「・・・最初に：RINGが手の平に吸い込まれた時、手の甲に紋が現れました。そして紋は腕から肩、肩から額に移動し、2体と2人の同調が進んだように見えました。：RINGの力が漏れ出るようにあの紋が浮かび出たのだとすると、今、：RINGは・・・額にある!!ここからだとかかなりの距離、グランド・メテオの力を両岸にあるマジックボード目掛けて同時に射ち出し、反射角を調節して狙い撃ちます!!！」

三稜

「あの足場でそれをなすには私のエア・カーと、」

凧

「私のチルタシユロンが必要だな。グランド・メテオのカケラはこれだけ、チャンスは1度しかない。・・・頼んだぞ！」

グツ・・・

潤治

「行くよ!!!今度こそ小生達の力で・・・」

七槻

「うん！あの2体は止めるったい！！」

潤治・七槻

「1、2、3、GO！！！」

ズバツ！！

カッ！

カッ！

バシツ！！

ゴゴゴゴゴゴ……

ユーリ

「む！？北海道の方角から巨大な衝撃が……大きな力がぶつかり、……弾けた！三稜達が2体を止めたのか！？……イヤ、ちがう！衝撃は……周囲へ拡散して……！！解析を急がねば！！」サイヨニホ……『サイゴニジ……』そこまでは読み取れたんだね？」

「ハイ！」

ユーリ

「ただし一番肝心な部分だけが欠けていて、解読できていない。ホ……ジ……一体何を表しているんだろう……」

778

鈴也

「どうだ！？ユーリさん！こっちは腕をふるう来満々で準備<sup>スタンバ</sup>ってるぜ！！早いトコ教えてくれよ！！レジ18体を、引っ張り出す方法をよお！！」

ハヤテ

「オオオオオ！！疾風の如く・フルバーストオオオ！！」

ガガガガガ……

咲夜

「ダイヤモンド・ハリセンチョーッブツ！！」

バツシイイイ！！

伊澄

「収束・撃破滅却フルパワー！！」

ドガガガガ！！

理沙

「くう！固いなあ！！やっぱ、ただ攻撃するだけじゃダメだな。」

風月

「リアンちゃんは何してるの？」

リアン

「ユーリ兄から借りた、このスコープで何か手がかりがないか探ってみるからね。まずは赤外線・・・最初に」 『最後に』 っていうからには、2つ以上の何かの順番とか並び方を表していると思うな。」

ユーリ

「イヤ、もう限界だ。みんな・・・作戦を一部変更する！レジ18体をともない全員で決戦の地へという、当初の計画を遂行するには時間がない！！身1つの突入となるが・・・このユーリ、一足先に向かおう。北海道から周囲に拡散するエネルギーを放っておいたら、日本全体がその力に飲み込まれてしまう！！メトロ、フレア、狐、兎、雷牙、隼人、陽、陽太、雷薙、清兵衛、歩美、朝美、風月、暁、真、隆太、瑛祐、琴美、深雪、弓雁、美香、綾子、ミサオ、羽鳥、伊澄、理沙、ハヤテ、咲夜、鈴也、花鳥、ジヨディ、美保、エ

ルは・・・それぞれのアタックを続けてくれ！リアンは石版を持ってオレに合流！いいな！？」

リアン

「わかった。大丈夫！後少しなんや。アンタがここまで読み解いてくれたがんばり・・・絶対、ムダにしないかね！！」

ギユウウウン・・・

ドシュウウウ・・・

ゴゴゴゴゴ・・・

キィィン・・・

ユーリ

「むう！！何とすさまじいエネルギー！！北海道までまだ、これだけの距離があるというのに・・・！！どんだん広がっていく！！2体がぶつかり合った衝撃と熱が、周囲の海や大地をも吹き飛ばしているんだ！！こらえて近づけ！！リフレクター！！！」

ガガガガガ・・・

ユーリ

「むおお!!!……!?イカン!!!この衝撃に巻き込まれている人が……メタグロス、助けるぞ!!!」

ガシッ!

ユーリ

「しっかりしろ……!!!このユーリが来たからには、ただの1人も犠牲者は出させん!!!」

七槻

「え?……今、何て言いよったと?……『このユーリが来たからには』……って、言いよったね?」

ユーリ

「あ、ああ。」

七槻

「な、何て事つたい……日本中巡って海底洞窟まで行って……最後の最後でようやっと……アンタがユーリさんやね!江古田美術館の館長からアンタ宛に預かった手紙つたい!!!」

ユーリ

「!!!叔父からの手紙だつて!?!」

スッ……

ユーリ

「む……石版と同じく、指先で読む文字!しかも敵には解読でき

ない古代の文字！！『サイシヨニホエルアー』、『サイゴニジール  
又ス』・・・石版の欠けていた部分と結びつくメッセージ！！叔父  
は解析に成功していたんだ！そうか、これはレジ１８体を呼び出す  
時に必要な・・・隊列だ！！』

ファイル430：陸海空の交響歌（シンフォニア）『17・刻まれし隊列』

ユーリ

「『ホエルアー』に『ジーラヌス』・・・」

リアン

「ユーリ兄いいいい！！」

ユーリ

「リアン！！」

リアン

「これえ！！」

パシツ！

ユーリ

「・・・まちがない！！欠けていた部分にこの手紙を合わせれば、書き表されていたのは隊列・・・レジ18体呼び出すために必要なガーディアンの隊列だ！！」

リアン

「やっぱり！じゃあホエルアーとジーラヌスさえいれば、2体の激突を抑えられるんやね！」

ユーリ

「ウム！」

七槻



「な・・・何て事つたい・・・ユーリさん・・・ボク、今ほど運命は感じた事はなか・・・アルルウツ！！ジララアツ！！」

ズザバア！！

ユーリ

「ホエルアーとジララス！？まさか・・・君の手持ち！？手紙を届けてくれた君自身が、必要な2体を持っていた・・・確かに、何という運命！よし！早速オレの手持ちを加えて隊列を作ろう！！」

カッ！！

リアン

「ユーリ兄！石版が・・・！！」

ビビビビビ

ユーリ

「・・・ユウキアルモノヨ、キボウニミチタモノヨ。トビラヲアケヨ、ソコニエイエンノガーディアンガイル。サイシヨニホエルアー、サイゴニジララス。ソシテスベテガ、ヒラカレル！！！！」

ドンツ！！！！

グワアアア・・・

ズバン！！

シュバツ！！

ギン！！

バキヤツ！！

七槻

「ユーリさん！」

ユーリ

「大丈夫だ！石版は役目を終えたから砕け散った！レジ18体を呼び起こす事ができたんだ！！石版を通してハッキリわかった！！」

七槻

「成功したとやね？」

ユーリ

「ああ！ありがとう！！これで、2体が発する衝撃波を抑え込む事ができる！！」

七槻

「よかつ・・・」

グワツ！！

潤治

「・・・う・・・う・・・ん。小生・・・は？海底洞窟から上がって来て・・・北海道で戦っていたハズなのに・・・そうだ。カイオ

「ガとグラードンの激突に巻き込まれて……。！！七槻ちゃん！  
お、おいしっかり！」

七槻

「ん……。ん？ア、アンタ……。あれ？ユーリさんは？ここは？」

潤治

「わからない……。あの激しい戦い、日本中の大混乱とは一切関係  
ないかのような……。美しく、穏やかな場所。」

ザッ！

「お目覚めになりましたか？随分長いお休みでしたが……」

潤治・七槻

「！！！」

「ボンジュール、ご両人。ようこそ、この最終特訓の地へ。」

潤治 「あ、あなたは誰です！？それにここはどこなんですか！？」

七槻 「ボクらは日本の大混乱、あの激戦の中にいたとやのに・・・どうなつとると！？」

「ノン、ノン！質問は1つずつしなくてはいけませんよ。時津潤治君、越水七槻ちゃん。」

潤治・七槻 「!？」

ルネ アダン  
流音我暖 「まず1つ目の質問に答えましょう。私の名は流音我暖。三菱の父であり、師でもある。彼の頼みでこのたび、鹿児島県のダイテイクテイブマスターに復帰した者です。」

潤治 「せ、先生の・・・師匠!？」

我暖 「次に2つ目の質問の答え。ここがどこか・・・というところ・・・幻フタ惑島ントまじま!!そう呼ぶ方が多いですね。正式な名称は私も知りません。日本にある1つの島ですが、ある種、隔絶された不思議な場所です。」

七槻

「幻惑島・・・」

我暖

「ウイ！そして君達がもつとも気にしている3つ目の質問・・・日本  
の現状について。」

パチン！

カツ！

我暖

「クインドラが作り出す、水のスクリーンをよくご覧なさい。」

シャアアア・・・

七槻

「・・・あ。」

潤治

「あ・・・あ！！カイオーガとグラードンが！やはりまだ激突して  
いる！！！」

我暖

「その通り。グランド・メテオを利用した君達の攻撃で一瞬は2体  
の動きが止まったかのように見えたが、青・赤の組織の両リ  
ーダーから：RINGを追い出し、暴走から解放するのがやっとだっ  
たようです。逆にその時の衝撃で吹き飛ばされた君達を、私がここ  
に連れて来ました。恐ろしい事に2体の力はここに来て完全に互角  
！こうやってぶつかり合った状態のまま、押す事も引く事もせず一

見、活動停止したかに見えます。だが、行き場を失った破壊エネルギーはどんどん蓄積され、周囲に広がっていく有様です。超古代伝説にある日本を襲った大災厄とは・・・まさにこの状況だったのでしよう・・・しかし、安心してください。この破壊エネルギーの拡張を周囲から押し留めるべく今、力を尽くしている者達もいます。」

潤治・七槻

「!? 周囲から押し留める!?!」

我暖

「ウイ! 馬鹿力で強引にね。日本でもトップクラスの腕を持つ、彼らだからできる荒技です。新・旧Wの長・三稜、ユーリと6天王、そしてユーリ君が選り抜いた28人のディテクティブマスター! ! 彼ら36人が操る伝説のガーディアン! ! レジフレア! レジリーフ! レジバブル! レジエレン! レジゴース! レジソウル! レジエアロ! レジマージ! レジポイズ! レジサンド! レジドラゴ! レジダーク! レジロツク! レジアイス! レジスチル! レジライト、レジセクト、レジガス! ! 七槻ちゃん、君の協力で18体を呼び出す事にギリギリ間に合ったのですよ。」

潤治

「三稜・・・ユーリ!?!」

我暖

「んんん? この激戦の中で過ある覚悟を決めたユーリ君が、長の座を三稜に渡したという事ですが、何か? そんな事はどうでもよろしい。大切な事は1つだけです! 彼らが力を尽くしても、結局は時間稼ぎにしかならないという事です! ! カイオーガ、グラードンと決着を詰める運命にある潤治君と七槻ちゃん。君達2人が特訓する間の時間稼ぎにしか・・・ね。銀一、金美。」

銀一・金美

「はい、我暖さん！バネブー、神通力！！」

ギュラツ！！

潤治

「うわっ！！RERE！！」

七槻

「たっ！！リララ！！」

ガキン！

七槻

「いきなり何ばすつとね！？」

我暖

「君達に残された課題を、今すぐここで修得したまえ。」

七槻

「な・・・」

潤治

「RERE、天候光弾！！」

ドンッ！！

我暖

「水の、波動！！」

バシ！

潤治

「同じだ・・・先生の裁き方と。先生の父であり師匠という話がウソではない事だけはわかりますね。・・・そして・・・先生の師となれば、我が先生も同然！！隔絶された不思議な島、他の人達が時間稼ぎをしている間に小生らが特訓をする、突拍子もない話ばかりだけど。カイオーガ、グラードンの激突を止める残された手段がこの島での小生らの最終特訓にあるというのなら・・・その特訓受けましょう！！大先生！！！」

我暖

「トレビアン！！すばらしい！さすが三稜の選んだ生徒だ！！では時間もないので、早速課題に取りかかりましょうか。課題は2つあります。まず1つ目、ダブルバトル。この2人、銀一と金美は京都のディテイクティブマスターです。彼らも赤の組織との戦いで絶命の危機にあったところを私が助け出したのですが・・・まずは2人から高度なコンビネーションについて学んでください。さあ、急ぐう、時間がない。何せ、幻惑島（まぼろしじま）にいるだけで時間が過ぎていってしまうのだからな。」

潤治

「どつという意味ですか？」

我暖

「ム・・・そうか、一番肝心な事を言い忘れていた。ここは時間の流れが外界と異なるのだ。君達は3日ほど意識を失っていたのだが、実は外の世界では9倍のスピードで時が流れ、すでに27日が過ぎている。」



潤治

「……」

七槻

「そげんバカなこと信じられんと!!」

銀一

「我暖さん、お取込み中すみません。金美が何かに気づいたみたいなんです。」

金美

「ええ、気配がいくつかするんです。何だかアタシ達以外に、この島に入り込んだガーディアンか人がいるような……」

ファイル432：陸海空の交響歌（シンフォニア）『19・2人の大特訓』

時津潤治と越水七槻、2人の最後の特訓が始まった。

指導するのは我暖。

・・・そして、銀一と金美の2人のディティクティブマスター。

彼らが特訓するこの幻惑島は、外界とは時間の流れが異なる不思議な場所であった。

潤治と七槻がここ3日ほど気を失っていた間に、外界では27日が過ぎていたという。

だが幻惑島の時間の流れはただ速くなっているだけではなく、常に変化していた。

潮の満ち引きのように・・・

現在は幻惑島で9日間特訓しても外界では1日しか経過していないという、意識を失っていた間とは真逆の状態になっていたのである。

時間の流れが極端に速くなったり遅くなったりを交互に繰り返す幻惑島。その流れが外界の時間の流れとピタリと重なったその瞬間に幻惑島は姿を現し、出入りが可能になるのだ！！

この事実は、潤治と七槻を驚かせた。

そして、2人を驚かせた事がもう1つ・・・

潤治

「よしっ！行け、プラズマ！！」

七槻

「行きたい、マイナズマ！！」

潤治

「プラズマ、ウソ泣き！」

ビエエ・・・

シューーン！

潤治

「特殊防御力が下がった！！」

七槻

「今つたい、マイナズマ！！雷撃破！！」

バツシイ！！

シューウウ・・・

銀一

「OK！片方が能力変化を仕掛け、もう片方がそれに合わせた攻撃をする、今のコンビネーションはなかなか良かったよ。なあ、金美。」

「

金美

「そうね、銀一。2人共上手になってきたわ、ダブルバトル。さ、疲れすぎないように小休止しましょ。」

潤治

「プラズマ・マイナズマで戦う場合のコンビネーションは今のを基本パターンとして・・・次はGUGUとチャモが組む時のパターンを確認しておかなくちゃ・・・海底洞窟では、濁流がワンテンポ遅れて・・・チャモが飛翔鉄拳を修得したと仮定して、こっ撃ち込んでいる間に・・・GUGUはこっ回り込んで・・・」

七槻

「・・・(そうたい。気ばゆるめる瞬間なんてなか。こっしてる間にも、カイオーガとグラードンの激突ば抑えている人がある!!) 待つて待つて!ボクもやるったい!スカイ・アッパーやる?もうすぐ覚えさせられそうやけんね!!」

我暖

「銀一、金美、あの2人はどうかね?」

銀一

「かなり良いです。特訓を始めてから少しも休まず、こっちが与えた課題以上の事をこなし続けています。」

金美

「手持ちのガーディアンも、急激にパワーアップしています。ホラ・・・七槻さんのメタルシャムが、ボスペルシャに・・・」

メキメキメキ!!

金美

「何よりも、2人の息が良く合っています。」

我暖

「トレビアン！さすが三稜が言っていただけの事はある。・・・そして、潤治君と七槻ちゃん。君達が日本の未来を背負い、カイオーガ、グラードンと戦う運命にある事は間違いないようだ。とはいえ、2人の成長が嬉しい一方で・・・時間がないという事もまた事実。砂粒の落ちる速度が少しずつ速くなっている。極端に遅い時間の流れが極端に早い時間の流れに変化するまで、・・・あと、わずか・・・」

七槻

「そこ！！一気に拳ば振り抜くつたい！！」

ズシヤアアア！！

タッ！

七槻

「ハア・・・ハア・・・できたけ・・・スカイ・アッパー。ボクだつて・・・コンビで戦う以上は、アンタの足引っ張る事はしたくないけんね！」

潤治

「・・・」

我暖

「よし、2人共！次は私の受け持つ授業だ。場所を移して、第2の課題。精神の特訓だ。」

我暖

「手持ちのガーディアン達全員と一緒に、ジツとこの泉を見つめてごらん。ダブルバトルの特訓で高まった心と体を静かに・・・落ちて着けて・・・落ち着けて・・・ゆっくり・・・水の波紋を見ながら、心を空っぽにするんだ・・・その状態で・・・まずは潤治君。私の右手か左手、どちらかにコインが入っている。入ってる方を直感で選んでみたまえ。」

潤治

「・・・左。」

我暖

「ハズレ。もう1度。」

潤治

「右。」

我暖

「正解、もう1度。」

潤治

「右。」

我暖

「ハズレ、もう1度。」

潤治

「左。」

我暖

「ハズレ、もう1度。」

我暖

「6回やって2問正解。次は七槻ちゃんだ。」

七槻

「右。」

我暖

「正解。」

七槻

「左。」

我暖

「正解。」

七槻

「右。」

我暖

「正解。うん、良いぞ。直感力は断然七槻ちゃんの方が良いみたいだな。」

七槻

「あ、あの、この訓練は何のためにしとると？」

我暖

「簡単な事。心を研ぎ澄ますためだ。戦いの中では瞬間的な判断をしなければならぬ事が多い。理屈ではなく、『これだ』と感じて行動する必要がある。とはいえ、感情に左右されてパニックになっ  
てしまう事も避けなければならない。私はこの訓練で、君達のハート  
を強く鍛えてあげたいのだ。」

うつらうつら・・・

我暖

「・・・オホン！」

七槻

「・・・ハッ！！す、すまんち！！何か急に眠たくなってしまった  
と！」

我暖

「この泉の水は精神をリラックスさせる効果があるから、その影響  
かもしれないな。ムリする事はない。少し休みたまえ。」

七槻

「は、はい。」



七槻

「スピ〜・・・」

潤治

「大先生。」

我暖

「ん？」

潤治

「あなたの言葉には説得力があつて、1つ1つにうなずけます。ここであなたや銀一君、金美ちゃんから受ける特訓で自分の実力が高まつていくのもわかります。何よりも・・・先生の師匠というだけで小生には無条件に尊敬できる人です。・・・ただ！！」

我暖

「ただ？」

潤治

「1つだけ腹立たしく思つてる事があります。」

我暖

「ホウ！何かね？言つてみたまえ。」

潤治

「知っているのに、あえて小生ら2人には秘密にしてる事がありますよね。」

スポツ・・・

潤治

「2つの：RINGが、小生と七槻ちゃんの体内にある事を!!!  
松房、青桐の中から追い出された：RINGは今、小生達の体の中  
に入ってるんですよ!!!?」

ドクン、ドクン、ドクン、ドクン・・・!!!

潤治

「あるんでしょう！？松房と青桐の中から追い出された2つの：RINGが・・・！！今、小生と彼女なつきちゃんの中に！！」

我暖

「・・・なぜ、そう思うのかね。」

潤治

「これです。プラズマとマイナズマが持っていた日記帳です。読んでみると、2体の主人の日記で、その人は『探知の：RING』の開発者の子孫だった。クリーバーとブレイバーの在処を捜し当てる探知の：RINGの・・・！！おそらく彼も、：RINGを研究し：RINGを求めてきた一族だったのでしよう。日記の中には、彼の一族が調べた多くの事実が書かれていました。『：RINGには超古代ガーディアンカイオーガとグラードンを活性化させたり沈静化させたりする力がある事。』『その力を発動するには命ずる人間が必要な事。』『：RINGと命ずる人間が一体化してしまう事。』・・・そして、『：RINGの方が命ずる人間を選ぶ場合もある事』・・・！！」

我暖

「・・・」

潤治

「小生達の最大の攻撃で2つの：RINGが松房・青桐の体外に出たと大先生はおっしゃいましたよね？でも、その後どうなったかは教えてくれなかった。だから日記を読んで小生は考えたんです。外

に出た：RINGはそこで次の『命ずる人間』を求めたんじゃないか・・・と。それは一番手近にいた・・・小生ら2人だったんじゃないかって。予想は当たりました。この幻惑島で特訓している中でゆっくりと浮かび上がってきた手の甲の紋・・・！海底洞窟で松房・青桐の体に浮かんでいたのと同じ紋だ！！」

我暖

「ブラボー！！君の考えはほとんど正しい！すばらしい論理的思考だ！！」

潤治

「ふ、ふざけてごまかさないでください、大先生！！」

我暖

「別にふざけてなどいない。そこまで自分で気づいたのならわかるだろう？私が君達に指導している精神の特訓の意味もね。さ、では特訓の続きを始めるか。」

我暖

「今、ここで：RINGを対外に出す事を強く思いたまえ。GUGU、RORO、COCO、REREも潤治君と気持ち合わせ共に念じてみるんだ。」

潤治

「・・・っう！くああ・・・う・・・ぐ！」

ドクン、ドクン・・・

我暖

「いいぞ！！もうすぐ：RINGを完全に支配できる！！」

潤治

「くあ！！！」

ドクン！！

潤治の手の中から：RINGが飛び出した。

潤治

「ハア・・・ハア・・・大先生・・・！！」

我暖

「よくやったぞ！これがこの島での特訓の真の意味だよ、潤治君！特訓に使える猶予は、この島の時間の流れで残り1日ほど。その後を訪れる『外界と時間の流れが同調する瞬間』を狙い、北海道に戻る。戻ったら、君が行う事はただ1つ。七槻ちゃんと2人で：RINGを持ち、カイオーガ・グライドンにこう命ずる。制止せよ、と。それだけだ。ただし！ここで気持ちの弱い者は、：RINGを通して流れ込んでくるカイオーガ・グライドンの力に飲み込まれてしまう。松房や青桐のように・・・」

潤治

「・・・そうですね。」

我暖

「・・・潤治君。君は、たまたま近くにいたから：RINGが自分達に入ったと言ったが、果たしてそうだろうか？偶然ではなく必然だった。私はそう考えている。君も七槻ちゃんもガーディアン使い・

探偵として、日本最強というワケではない。強さだけなら、君達よりもデイトイクティブマスターの方が強い！6天王はさらに強い！さらに6天王よりも強い新旧の長があの場合にいたのに、：RING Gは君達を選んだのだ。要するに、君達がこの役目を果たすのにふさわしい者だから、選ばれたのだよ！黙っていた事は詫びよう。だが、初めから話してしまっていたら『：RINGを対外に出す』、その思いばかりが心を支配してしまう。そうになると、かえってうまくいかなくなるものなのだ、こういう事はな。少し休憩して、また始めるぞ。君も、少しでも休みたまえ。」

我暖は潤治から離れながら、次のようにつぶやいた。

我暖

「（）．．．それにしても、ショッキングな内容を聞かせないように彼女が寝入ったのを見計らって話し始めるとは．．．見た目以上に女性を気づかう紳士的な優しさも持ち合わせているじゃないか。（）」

七槻

「．．．」

潤治

「起きてる、．．．よね？」

七槻

「．．．」

ギクツとした七槻は、起き上がった。

七槻

「タハハ、バレてたと？」

潤治

「どこから聞いてた？」

七槻

「・・・実は・・・ほとんど全部ったい。何かえらく真剣に話したっけ・・・何となく聞き耳立ててしまったとよ。まさか・・・ね。」

そう言つて、七槻は自分の右手を見た。

七槻

「あ、でも気にせんでね！どのみちわかる事やったやろっし・・・！！」

潤治

「・・・うん。まあこうなつた以上、現実を受け入れていくしかないワケだし・・・ガーディアン達の術にももつと磨きをかけて・・・あれ？何だかこの島に来てから調子悪いな、・・・RING凶鑑？」

潤治が振り向くと、七槻がジーツと見ていた。

ジュー・・・

潤治

「何？ハ！」

潤治は慌てて、自分の帽子をかぶりなおした。

七槻

「……」

我暖

「さあ、最後の特訓だ!!」

その後も特訓は続き、ついに潤治と七槻両者が：RINGを対外に出せるようになった。

銀一・金美

「来ました、我暖さん!!」

我暖

「ウム、雨交じりの風も吹いてきたな。時間の流れのスピードが逆転しつつある！極端に遅い時間の流れが、極端に速い時間の流れに移ろうとしている。外界と同調する瞬間だ!!さて、出発はタイミングが大事だ。私達は島の中心部へ行き時間を計る。外部と完全に同調したら、クインドラが水花火を打ち上げる。それが島を出る合図だ。しっかりな!」

金美

「がんばって!」

潤治

「いよいよだな。」

七槻



「ねえ。」

潤治

「？」

七槻

「ここは発つ前に・・・話してきた事があるけん。・・・ボク、  
アンタの事・・・」

潤治と七槻が幻惑島より飛び立とうとしているのと同じ頃、スカイ  
へブニー・キャッスルではコ哀と正宗の修業がまだ続いていた・  
・！

コナン

「ドクレオン、驚かす!!」

くわっ!!

ギョギョ!

哀

「怯んだ!今よコナン君!!」

コナン

「ああ!ミラーディ、砂地獄!!」

コナンのガーディアンの強烈な攻撃が、正宗のガーディアンを襲う。

正宗

「むおっ!!」

コナン

「正宗さんの手持ちで一番の強敵はケックイン!!でも、その唯一  
の弱点は特殊能力の『なまけ』!一度攻撃した後は怠けてしまう!

「！」

哀

「そのスキをつけば私達だって・・・」

正宗

「・・・それはどうかな？ブチパーチ、スキル・スワップ！」

トットットツ・・・

バシユツ！！

『オオオオン！！』

正宗

「吹雪！！」

ゴオツ！！

コナン・哀

「ど、どうして!?!」

正宗

「ブチパーチの術、スキル・スワップ！この術によってブチパーチとケックインの特殊能力が入れ替わったのだ！すなわちケックインはマイペースに、ブチパーチはなまけになった！これによって君達が狙ったケックインの攻撃の谷間はなくなった！」

コナン・哀

「ま、まだまだ！まだ負けたワケじゃ・・・」

正宗

「ムダだ。ブチパーチが戦闘直後に踊っていたフラフラダンスで、そろそろ君達のガーディアンも混乱する頃だ。」

クラクラ・・・

コナン・哀

「ま、まいりました!!」

コナン

「なかなかかなわないなあ。」

正宗

「イヤ、そんな事はない。手を抜いていない私に対してここまでの攻防ができるようになったのは、むしろ驚くべき事。」

哀

「時津さん・・・」

正宗

「何だ？」

哀

「私達に・・・何かをさせようとしているんじゃないですか？」

コナン

「今、2体の超古代ガーディアンが暴れて日本中の人々が苦しんでるんでしょ？それにきつと歩美ちゃん達もがんばってる・・・オレと哀だけ、ここでのんきに修業だなんて・・・」

哀

「・・・だから、何か理由があると思ったんです!!おそろく・・・私とコナン君をこの状況の中に置いておく何らかの理由が!!」

正宗

「カンが良いな、君達は。いいだろう。君達との修業・・・その本  
当の目的は・・・」

ドン!!

その時、突然建物が揺れ始めた。

コナン・哀

「わっ・・・わわわ!!」

正宗

「とうとう2体の力の影響がここまで及んだか!!」

ジュジュ

その時、正宗の電話が鳴った。

「やあ!私よ私!元気?」

正宗

「コリアンか・・・」

コリアン・ベイリーフ

「何よ、その言い方」。阿笠博士から『正宗が連絡取りたがって』  
正宗が連絡取りたがって

る』っていうからわざわざかけたのよ！で、どんな様子？スカイヘブニー・キャッスルにいるんでしょ？」

正宗

「受け答えで察してくれ！」

コーアン

「だよね。カイオーガとグラードンの大激突によって、日本は大混乱！自然界全体のバランスが崩れてる。スカイヘブニー・キャッスルだって例外じゃないわよね！」

正宗

「そついう事だ！オマエに紹介したい素質ある若者2人が・・・」

コーアン

「ちょくつと待った！そつちの話は後ね！実はこつちも伝えたい事があつてね！協会本部に入り込んでいろいろ調べたのよ！」

正宗

「何をだ？」

コーアン

「決まってるじゃない！ぶつちやけ今の戦況！！アンタや別任務に選ばれたヤツ以外のディティクティブマスター達、彼らは探偵協会の指示でカイオーガとグラードンの食い止めに当たったが・・・結局青・赤両組織との戦いで2体の北海道への進撃を許しちゃった。

北海道で激突する2体を制御する事は、RINGを持つた青・赤両ボスにもできなかつたらしくてね。今となつては両ボスに代わつて：RINGに選ばれた『新たな2人』に、希望が委ねられてる状況よ。その2人って誰だと思う？越水さんの愛娘七槻ちゃんど、

アンの息子、潤治君よ！！しかし相手は強敵、期待通りにいくとは思えないけどねえ。だからさあ、正宗！サッサと起こしちやいなさいよ、第3の超古代ガーディアンを！！バツハハ〜イ！」

そう言うと、コーアンは飛行艇から脱出した。

コナン

「ま、正宗さん！今の話は・・・！？」

正宗

「『真実ですか？』と聞きたいのか？素質ある若者を求めてどこへでも現れ、知らぬ間に去って行く・・・それゆえ並大抵ではない情報量を持つ女・・・あのコーアン・ベイリーフが言った事だ。全て真実に決まっている。」

コナン

「じゃ、じゃあ・・・」

哀

「第3の超古代ガーディアンって・・・」

正宗

「そつだ！それこそまさしくさつき君達が質問した、この修業の真の目的！！さあ、その円の中に立つんだ。」

ジャラ・・・

コナンと哀は円の中に立った。

正宗

「ぬおおお!!」

ギリギリギリ……

ズズズ……

コナン・哀

「え……わ!!」

コナンと哀の体が浮かび上がる。

イズナ

「ゲホツ、ゲホツ……」

哀

「イズナちゃん、どうしたの!？」

正宗

「急いでイズナをしまった方が良く。その光はガーディアンの術やガーディアンのものを拒絶する。」

パシユ!

コナン

「ここは……!？」

正宗

「入口を無事通り抜けたようだ。コナン君、哀君、通路があるの  
がわかるかな。」



コナン・哀

「ええ。」

正宗

「その先にはさっきコーアンが言っていた、第3の超古代ガーディアンがいる。そいつを我々3人で目覚めさせる!!」

コナン

「正宗さんとオレ達とで、第3の超古代ガーディアンを目覚めさせる!？」

哀

「まさか、ここから先は私達だけで!？」

正宗

「大丈夫だ。君達は立派に実力を高めた。2体の激闘の影響を受け、日本は崩壊寸前だ。このまま事態を收拾できなければ、被害は他の国まで広がる!!それを食い止める唯一の方法、それが、第3の超古代ガーディアンを解放する事なのだ!!私は8年前から天空に消えた、第3の超古代ガーディアンの行方を追っていた。家族と過ごす時間さえ引き替えにして・・・そして、突き止めたのだ!ヤツはスカイヘブニー・キャッスル、その頂を根城にしている事を!コナン君、哀君!力を貸して欲しい!!進んでくれ!!」

コナン・哀

「わかりました!!」

ザッザッザッ・・・

コナン

「正宗さん、行き止まりです！」

正宗

「待っている。」

ギリギリギリ……

ズズズ……

正宗

「その通路の隔壁は、こっちで鎖を1本1本引かないと開かない。そして隔壁ごとに通路は……」

哀

「はい、狭くなってます！！私達を通るのもやっと……」

正宗

「わかつたろう、2人共。最初のゲートはガーディアンを拒絶し、中の通路は大人を拒絶する。私がガーディアンと共に1人で挑んだとしても、頂には絶対たどり着けない。下で鎖を引く指示者と、通路をくぐる突入者。この両者でなければ、成功し得ないミッションなのだ……」

ビュウオオオオ……

しばらく進んだコ哀を、突如突風が襲った。

コナン

「う……。！！！」

ゴゴゴゴゴゴ・・・

哀

「時津さん、いました!!」

正宗

「いたか！天空の光女レックウザ!! いいか？2人はそいつの周囲にあるオゾンに穴を空けるんだ！今の君達なら、どのガーディアンでもたやすくできる!!」

コナン・哀

「はい!!」

コナン

「ガーディアン・ルルリア!! ルウ、封印!!」

シュパン!!

哀

「イズナちゃん!! オゾンを貫けえ!! シャボンガトリンガー!!」

ズドドドドド・・・

イズナの攻撃が、オゾンを貫いた。

ブアッ・・・

『ギャオオオオオン!!!!』

レックウザは頂を突き破って飛んで行った。

コナン

「（正宗さん……やりました……!!）」

哀

「（時津さんがいない。……向かったんだわ!! 2体の対峙する地へ。第3の超古代ガーディアンによって、全てを止めるために……!!）」

七槻

「ボク・・・あなたの事が好きったい・・・」

幻惑島での静寂な風は、七槻の告白によって急に強風に変わったよ  
うな感じだった。

我暖

「時間が完全に同調したぞ！！クインドラ！合図の水火花だ！！」

パアアアン！！

その合図と共に、潤治と七槻はトロピノドンに乗って飛び出した。

ピリリリリ・・・

我暖

「潤治君、私だ。首尾良く飛び立てたようだな。しばらくは大丈夫  
だと思うが、時間の狭間に巻き込まれぬよう気をつけて飛ぶんだぞ。  
島からでもある程度モニターできるので、危険があればその都度知  
らせる！」

潤治

「！？大先生は島を出なかつたんですか？」

我暖

「ウイ、銀一と金美もね。君達が無事外界にたどり着くまでナビゲートするつもりだ。頼むぞ、2人共！」

潤治

「はい。」

電話を切った潤治に、七槻の声がかかった。

七槻

「スマンち。こんな時に変な事言うてしもて・・・でも今、言うとかんと・・・と思っただけ。がって、前に言うってたやる？」「いずれ、大学卒業したら父の実家がある外国に帰るつもりだ」って・・・あの気持ちが変わつたらんのなら、あなたはこの戦いが終わって大学生活が終わったら遠くに行ってしまう・・・ゆう事やね？あなたと一緒に居るのは、大学生活の間だけ。そう考えたら・・・胸が・・・苦しゅうなって・・・それで初めて・・・気づいたと・・・ボクはこん人が・・・潤治君の事が好きになつたんやって・・・実はね・・・ボク、前から好きな人がおつたとよ。ずっと小さい頃、何日間かだけ一緒に過ごした男の子。顔も名前も覚えとらんけどハッキリしてるのは・・・その男の子は頭に大ケガばしてまで、ボクはボーマンジャから守ってくれた事だけ・・・」

潤治

「！！！」

七槻

「前に講義中に『今でも憧れてる人がおる』って言ったの覚えとる？あれは、その男の子の事やったんよ。何年も何年も想い続けた、

それくらい好きやった。強くなるゆう目標も、その人の影響たい。でも、ボクはこの旅に出て、あなたと出会えて本当に良かったと思うとるんよ。あなたと出会えて過ぎたおかげで、あなたの良いところ沢山見れたけんね。ガーディアンと一緒に戦うあなたが好き。ボクは助けるために力出してくれるところも好き。こうと決めたら迷わず前に進むところも全部、全部好き。不思議やね。あれほど好きやった思い出の男の子より、今ではあなたの方が心の中いっぱいにしてるんやけ。こん気持ちば伝えられただけでよか。でも・・・ただ1つ、かなうのなら・・・ここに・・・おつて。もう1度蘇る故郷の自然ばいっぱい知って欲しい。・・・だから・・・ね?・・・一緒に・・・福岡へ戻ろう?」

しばらく沈黙が続いた。

その頃、幻惑島では・・・

銀一

「何か変ですね、我暖さん。外界との時間の同調が安定しませんね。」

我暖

「ウム・・・実は潤治君をここに連れて来る時にも、同じような現象が起こったのだよ。だからここに残ってナビをしようと思ったのだが・・・潤治君、気をつける!時間の狭間に落ちたら最終戦どこ

るじゃないぞ！！ムリに突っ込まず、時間の波にうまく乗るのだ！  
「！」

潤治

「くうっ！」

落ちかけた七槻の右腕を、潤治がつかんで引き上げた。

我暖

「潤治君！！！」

潤治

「大丈夫です、大先生！！もうすぐこの空間を抜けられそうです！  
！見えてきました！！！！あれは……」

シュバツ！！

トロピノドンが出た場所は、レジギガスに乗って戦っている三稜と  
ユーリの真上だった。

三稜

「潤治君！七槻ちゃん！」

潤治

「戻って来たぞ、北海道！七槻ちゃん、クリーバーは今、体外に出  
せる？」

七槻

「う、うん。む……く。」



七槻はクリーバーを右手から出した。

ズズズ・・・

潤治

「先生、すみません。エア・カーを勝手に使います。携帯からリモートコントロールする番号は前に見て覚えてるから・・・」

ピピピ・・・

潤治は七槻からクリーバーを受け取った。

潤治

「どれ。」

七槻

「エア・カーを使って何ばすつと？」

潤治

「うん、こつするんだ。」

そう言うと、潤治は七槻とプラズマ達を突き落とした・・・

その後潤治はエア・カーを呼び寄せる。

七槻がエア・カーに落ちると、潤治はリモートコントロールでエア・カーのハッチを閉じた。

七槻はハッチを叩く。

七槻

「なして!?! なしてこんな事すつと!?!」

潤治

「今、お礼を言うよ。小生も君に出会えて良かった。本当に、  
．．．  
ありがとう。だけど、君とは一緒に行けないんだ。なぜって、君の  
気持ちを聞いてしまったから。そして．．．」

そう言うと、潤治は帽子を取り去った。

潤治

「小生も君が好きだったからさ。小さな頃からずっとずっと、  
．．．  
想ってた．．．」

七槻

「!?!」

潤治

「だから、君を連れては行けない。超古代ガーディアンとの再戦に  
．．．連れては行けないんだ!?!」

七槻

「額のキズ．．．!?! あなたが．．．潤治君が．．．!?! ボクはボ  
ーマンじゃから守ってくれた男の子．．．!?!」

その時、潤治の後ろに誰かが現れた。

それは．．．

「お別れは済んだかい?」

潤治

「ええ。行きましょう。篝さん。」

潤治は帽子をかぶり直すと、七槻のトロピノドンで、篝と共に2体に向かって行った。

潤治

「オオオオオオ!!!」

そして、レックウザを駆る正宗も、北海道に近づきつつあった・・・

正宗

「早まるな。早まるなよ、潤治。」

七槻

「額のキズ……！！あなたが……潤治君が……！！ボクはボ  
ーマンじゃから守ってくれた男の子……！！！！」

その時、潤治の後ろに誰かが現れた。

それは……

「お別れは済んだかい？」

潤治

「ええ。行きましょう。篝さん。」

潤治は帽子をかぶり直すと、七槻のトロピノドンで、篝と共に2体  
に向かって行った。

潤治

「オオオオオオ！！！！」

七槻

「……！！……！！」

三稜

「どついう事なんだ！？我が父我暖の元で修業を終えた、潤治君と  
七槻ちゃんが戻って来た、そこまではいい！！だが七槻ちゃんを私  
のエア・カーに閉じ込めた上、赤の組織の女幹部と共に戦い始めた  
だと！？何を……何を考えている！？潤治君！！私は潤治君と七

槻ちゃんという2人だからこそ、日本の希望となりえると期待したのに！！だからこそ我が父に君達を託し、修練を頼んだのに！！・・・なぜ！なぜなんだ！！」

ユーリ

「落ちて三稜！このままでは危険すぎる！七槻ちゃんをあの場合から遠ざけるんだ！！」

三稜

「・・・ム、わかった！！」

一方、他のメンバー達は・・・

鈴也

「これだけ長期間の攻防を続けてるつてのに、まだ力の衰えを見せないとは・・・」

花鳥

「さすが日本に散らばる伝説のガーディアンだけの事はあるわ。しかし鈴也君、」

ジヨディ

「力の衰えを見せない事が逆に、別の現象を生みつつあるわね、リアンちゃん。」

リアン

「うん！アタシも気づいてました、ジヨディさん！！」

ハヤテ

「18方向からの押さえ込みで、激突が生み出すエネルギーは、」

理沙

「周囲に広がる事ができず、この北海道の周辺に押し留められている。」

咲夜

「そやけど、カイオーガとグラードンのぶつかり合う衝撃はその力を増し続けとる。」

伊澄

「つまりエネルギーはこの中にたまる一方！周囲に広がれないのなら、行き場を失ったエネルギーはどこへ向かう？」

暁

「上にしかないよな？」

風月

「少しずつ……少しずつ……！天空へ向かって……！！」

ゴゴゴゴゴ

潤治

「うわっ……く。」

潤治は飛んでくる岩に耐えながら、向こうに移動していくエア・カ  
ーを見つめる。

潤治

「（……これで、これで本当に良かったのか？）」

七槻『ボクは、あなたの事が好きったい。』

潤治

「（あんな良い娘が、こんな小生の事を好きだと言ってくれて……しかも……やっと会えた小さい頃の思い出の女の子だった……っというのに……）」

その時、上から篝の声が聞こえた。

篝

「オイ、コラ！スパツと決断したと思ったら……まだぐらついているのかい？集中してなきゃ、アイツらの戦いに飲み込まれるよ！」

潤治

「ハ、ハイ！……」

潤治は笑みを浮かべる。

篝

「何だい？」

潤治

「いえ……まさか、あなたと一緒に戦う事になるとは思ってもみませんでしたからね。あの日……幻惑島で出会うまで……」

潤治『うくん、やっぱり調子悪いな、RINGの図鑑。おや？』  
ガーガー……

潤治『これは！！どう見ても彼女の冒険の記録だ。小生のなのに、なぜ……考えられるのは、超古代ガーディアンとの戦いのシヨックでぶつかり合った2つの図鑑の記録が……混ざり合った……』  
『よう！』

潤治『！！』

潤治が振り向くと、そこには炎が……

篝『いいかい？今……』

赤の組織の女幹部、篝が現れた。

潤治『オマエはニュースに出ていた赤の組織の……なぜ、ここに！？』

篝『フツ、アタイは気になった相手はどこにいようと追いかける性格なんだ。孤島だろぅが関係ないよ。』

潤治『銀一君と金美ちゃんが、小生達以外の人かガーディアンの気配を感じるって言ったのは……』

篝『アタイの気を感じ取ったんだろうね。他にガーディアンが紛れ込んでたおかげで、うまくごまかせた。』

潤治『何を企んでる！？』

篝『そう尖るなよ、提案があるんだ。この島から出て挑む超古代ガーディアンとの再戦、君は七槻ちゃんっていう女の子とタッグを組むみたいだけど。そのバトル、アタイと組まないかい？』

篝の言葉に、潤治は驚いた。

潤治『！？バ、バカな！グランドン侵攻を進めてる赤の組織の幹部が、それを食い止めようとする側の小生と共闘するなんて……信じられるか！！』

篝『もつともなご意見だな。でも陸地を増やしたいってのは、元々アタイらの頭領の考えでさ、アタイは別にどっちでも良かったのさ。大暴れさせてもらえりゃあね。それに、これだけのお祭り騒ぎが見られてもう結構満足してんだ。イヤ、むしろ想像をはるかに上回っ



て……やり過ぎちゃったね、アタイらも青の連中も……このままの状況が続いて、日本が丸ごと滅んじまったら元も子もない。それはアタイらも同じなのさ。だから、君にこう持ちかけてる。』

潤治『……』

箒『アタイは少なくとも、グラードンの事は知り尽くしている。それと……君ら精神の特訓してるみたいだけど、もし：RINGの力に取り込まれちゃったら、あの娘、どうなんのかね？』

潤治『!!』

潤治の脳裏に、：RINGに乗り移られた七槻の姿が浮かぶ。

潤治は箒と握手を交わした。

箒『交渉成立、だね。』

箒

「……あの一言で即決だもんね。よっぼあの娘が大切なんだ……  
・うらやましいよ。」

潤治

「？何ですか？」

箒

「ここからはアタイと刻む記録って事だ。さあ！」

箒は潤治からブレイバーを受け取った。

箒

「一発命じてみようじゃないか。制止せよ！ってね！！」

ゴゴゴゴゴ...

ハヤテ

「戦いの場を引きはがし、空に浮かび上がってもなおも戦い続けているとは・・・!」

ジヨデイ

「一体あそこでは、何が起っているのでしょうか?」

潤治と箒は、カイオーガとグラードンが戦っている場所の近く、目覚めの祠に降り立った。

箒

「さあ、行くよ!」

潤治・箒

「クリーバー・ブレイバーの名の下に命ずる!!超古代ガーディア  
ン・カイオーガ!グラードン!制止せよ!!戦いを止め、安らぎの  
地へ帰れ!!!」

潤治と箒は叫んだ。

しかし、2体は微動だにしない。

箒

「チツ！まだまだお互いの相手しか見てない目だね！こっちの命じる力が足りないのか！？ガーディアンで攻撃を仕掛けて、こっちに注意を向けさせるよ！！」

潤治

「ハイ！篝さん！！GUGU、濁流！！！！」

篝

「キュウビン、破壊光線！！！！」

潤治と篝は2体に攻撃を放った。

篝

「潤治君、狙うなら土手っ腹だ！！頭や背中も頑丈だから大したダメージは与えられないよ！！」

潤治

「わかりました！！」

潤治は照準を調整した。

潤治

「（・・・七槻ちゃんと一緒に・・・カイオーガ・グライダーと最初に戦った時・・・グランド・メテオの一撃を放ったのも確かこの・・・目覚めの祠の前だった。）」

その時、潤治の左腕が浸食を始めた。

クリーバーが体に入り始めたのだ。

潤治

「むくく……！」

篝

「気を散らすな！集中してろって言っただろ！？…RINGを介して、エネルギーが逆流してくるぞ……！」

そう言った篝の右腕にも、ブレイバーが入り込み始めた。

篝

「あぐっ……！」

潤治

「篝さん……！」

篝

「ハンツ！言ってるアタイがこれじゃあ、ザマアねえな……！ヤツらに取り込まれないように、気合を入れてもう1発行くよ……！」

潤治

「オオオオオ……！」

篝

「止まれ、このデカブツ……！」

キンツ……！！

一瞬2体の動きが止まった。

潤治

「・・・止まった。」

しかし、次の瞬間・・・

ギロツ！！

2体は潤治と篝の方を向いた！！

潤治

「篝さん！！」

篝

「マズイ！！戦いに水を差すアタイ達を、先に始末する気だ！！」

2体は向かって来た。

手を伸ばしたグライドンを、GUGUが押し留める。

潤治

「いいぞ、GUGU！そのまま全身の力を込めて・・・がむしゃらだ！！」

GUGUの攻撃が、巨体をぐらつかせた。

潤治

「篝さん、大丈夫で・・・」

篝

「！！！！」

潤治の後ろから、カイオーガが攻撃を仕掛けた。

箒

「危ない!!」

箒は潤治を突き飛ばした。

その箒の上から、容赦なく瓦礫が降り注いだ。

ズゴー!!

箒

「はぐう!!」

潤治

「箒さん!!」

助けようとした潤治も、グラードンの手に押し潰された。

バン!!

潤治

「がはっ!!」

箒

「1度は制止しかけたのに……やっぱりアタイじゃ……ダメなの……か。ブレイバーに選ばれなかった……アタイじゃ……」

その時、箒が何かに気づいた。

篝

「!?!?!?!あれは?」

不意に、空に1つの影が浮かび上がった。

グラードンとカイオーガも、そちらの方を見上げた。

篝

「レックウザ!!!」

天空を裂きながら、巨大な竜が姿を現した。

ギン!!!

カイオーガとグラードンの注意は、完全にそちらへと向いた。

そのスキに、潤治は篝を助け出した。

潤治

「篝さん、あれは……天空を裂いて現れた竜は……あのガーディアンは……!?!?」

篝

「第3の超古代ガーディアン……天空光女レックウザだ!!!」

潤治

「第3の超古代ガーディアン!?そんな者がいたんですか!?!」

篝

「ああ……表だって語られる事はなかったらしいがね。(宮崎宇

宙センターにあつた資料通りだ……！！だとすれば……」

『キエアアアア！！』

3体のガーディアンは組み合った。

ガガガガガ……

潤治

「3つ巴の戦い……！！陸と海と空！3界の頂点に君臨する3体が入り乱れて！！」

篝

「（……潤治君。レックウザを駆って、ここまで来たのは……オマエの……！！）」



ファイル438：陸海空の交響歌（シンフォニア）『25・届け、フィーセンガン

箒

「潤治君！天空光女レックウザを駆って、スカイヘブニー・キャツスルからやって来たのは・・・オマエの・・・！」

『グオオオオ！！！！』

3体のけたたましい咆哮に、箒と潤治は耳をふさいだ。

箒

「う・・・つつ！！」

潤治

「箒さん！今、何て・・・何て言ったんですか!？」

箒

「あのレックウザは・・・!!」

その時、何かが箒を引っ張った。

箒

「!？」

ズザザザザ・・・

箒はそのまま何かによって祠の奥へと引きずり込まれた。

潤治

「篝さん！！一瞬、触手みたいな物が見えた！！祠の奥に何かいる！！来い！GUGU！！」

3体の口から放たれた光線が、真正面からぶつかり合った。

その衝撃で、潤治は吹っ飛ぶ。

潤治

「う・・・く・・・篝さん、篝さん大丈夫ですか！？GUGU！瓦礫をどかすんだ！！篝さんを助け出さないと！！」

その時、篝の声が聞こえた。

篝

「・・・よしな・・・潤治君・・・アタイはもうダメだ・・・どういうワケだか・・・足が・・・動かねえ。完全にイカレちゃった・・・アタイを助ける余力があるのなら・・・それを少しでも超古代ガ―ディアン達に・・・向け・・・ろ。」

カシャン！

潤治

「！！（ブレイバー・・・篝さんが自力で、体の外に出したのか・・・小生達があればだけ修業をして、やっとできるようになった事を・・・何て精神力だ！！）篝さん！！」

篝

「潤治君、よく聞くんだった！！表で・・・行われて・・・」

篝は潤治に何かを伝えようとするが、瓦礫が崩れてきてうまく伝わ

らない。

篝

「……！！声すら届かなくなっちゃったか！！だが、これだけは！！」

そう言うと、篝はフーセンガムをかんだ。

クチャクチャクチャ……

プウツ……

篝

「記憶のライター……ハア、ハア、潤治君に伝えないと……手袋から絞り出す、シンとシホの実から取った特殊液。フーセンガムの強度と浮力を上げて……」

シュボツ！

フワ……

篝

「潤治君に届けるんだ。アタイが見てきた……炎の記憶を……」

潤治は篝を助け出そうとしたが、3体の激突によって生じた揺れで完全に祠が崩れた。

ガラガラ……

潤治

「篝さあん!!」

ズズズズズズ……

潤治

「祠が……完全に崩れた。あの中の篝さんは……。!!」

その時、潤治の目の前に何かが飛んで来た。

潤治

「あれは、篝さんのフーセンガム!？」

トッ!

パチン!

潤治はリュックの中に入っていた紙の下に、ライターをかざした。

ライターによって熱せられた紙に、何かが写し出されていく。

それは……

『時津 正宗』

潤治

「時津正宗……小生の父さんの……福岡ディティクティブマスタの名前だ!!……!!父さん……なんだね。篝さん……!!」

潤治の声と同時に、ライターから火が噴き出した。

篝

「（・・・そうとも、あれは、君の父親・・・福岡のディテイクテイブマスター、・・・時津正宗・・・だ。記憶の炎から・・・読みとってくれ。アタイが宇宙センターで見た事。レックウザ搜索に全てをかけた君の父の生き様を！！）」

篝

「（レックウザの体はオゾンで覆われている。だが、そのオゾンの切れ間から見えるだろう。）」

潤治

「見えました・・・父さん。」

篝

「（・・・アタイはね、潤治君。アタイ達がしている事が予想外の事態になるとわかった後、2体を食い止めるべく強い子を仲間にしたくて、たまたま目をつけた君の事を調べたんだ。誕生日、年齢、血液型。東京から引越して来た事、どんな家庭で生まれたのかも・・・そんな中で、君の父親が、福岡のディテイクティブマスターという事実に行き着いたんだ。8年前にディテイクティブマスター試験を受けてるが、その時は落ちていた。最近やっと再試験に合格し、家族を福岡に呼び寄せた。不可解なのは、その8年間だ。正宗きみのちちはその間、1度も再試験を受けず、ただただ宮崎の宇宙センターに通い詰めていた。その真相はこうだ・・・君の父親は8年もの間、ディテイクティブマスター受験の権利を奪われ、レックウザ搜索を命じられていたんだ！！）」

潤治はそれに驚愕した。

篝

「（レックウザは空と宇宙の間、成層圏で活動するガーディアンだ。宮崎の宇宙センターの観測データから、その動きをとらえようとしていたんだろう。やがて正宗はレックウザが成層圏を離れ、スカイ

へブニー・キャッスルを根城にしている事を突き止めた。元々レックウザという第3の超古代ガーディアンを発見し、グラードン・カイオーガの粛正をさせようとしていたのは探偵協会だがな。」

潤治

「粛正・・・！」

篝

「（レックウザには、その力がある。2つの：RINGを持つ君と、レックウザを操る君の父親。この両者がそろった今、2体は確実に鎮められる！！さあ！行け！！）」

潤治は向かって来たレックウザの頭に飛び移り、正宗と共に2体の元へと向かった。

潤治

「（篝さん・・・あなたは最初っからなかまだったんですよ。2体の侵攻を止めようと動いてくれた、その時点で・・・ありがとう・・・篝さん・・・）」

潤治がつばやいたと同時に、記憶のライターから炎も消えた。

潤治

「・・・父さん。」

潤治は正宗に話しかけた。

正宗は黙っている。

潤治

「これだけ久しぶりに会ったっていうのに、『今は戦いだけ』ですか・・・フフ・・・わかりました。いいですよ！！やる事はハッキリしてるんだ！！」

そう言うと、潤治は飛び出した。

潤治

「オオオオオオオオオオ！！！」

ギンツ！！

潤治は2つの：RINGをカイオーガ・グライドンへとぶつけた。

レックウザによる肅正の咆哮と・・・！

2つの：RINGによる制止の命令・・・！！

カイオーガとグライドンは吹っ飛んだ。

潤治は無事に着地する。

ドオオオン！！

ザバアアン！！

潤治と正宗、レックウザが見守る中・・・

グライドンとカイオーガは、それぞれ別の方向へと進み出した。

潤治



「グライドンとカイオーガが戻って行く・・・それぞれの・・・還る場所へ・・・」

その光景を、ジエ・グーンの中にいた全員がハッキリと見た。

潤治

「父さん・・・これで・・・全て元通りなんだね・・・あのさ、父さん・・・実は小生、この旅で好きな子ができたんだよ・・・父さん？」

正宗は・・・

動かない。

三稜

「ハア・・・ハア・・・やったな、ユーリ！」

ユーリ

「ああ。レジ18体を使い、破壊エネルギーの拡大を抑え込む我らが役目・・・無事果たし切れたのだな？」

三稜

「そつとも!」

ユーリ

「本当・・・に、・・・よか・・・」

潤治

「父さん！父さん！！ちょっと、父さん！！！」

三稜

「ユーリ！！おい、ユーリ！！！」

潤治

「父さあああん！！！！！」

三稜

「ユーリイイイ！！！！！」

ゴゴゴゴゴゴ

果たして、2人の身に何が起こったのか・・・！？

そして、その様子を影から見つめる2つの目の正体は・・・！？

ファイル440：陸海空の交響歌（シンフォニア）『27・罪、そして罰』

カイオーガとグラードン、2体の超古代ガーディアンは決戦の地・北海道を去り再び悠久の眠りに就いた。

・・・ただし、かつての入眠と異なるのは・・・

「2体は別々の場所に眠るようです。カイオーガはこれまでと同じく海底洞窟ですが、グラードンは阿蘇山の火口を新たに選んだようです。」

「ボス！これは・・・！！」

「離れた・・・という事は、もうお互いに求め合っではないという事だ。2体は極限まで戦い抜き、闘争本能が満たされたのだろう（・・・結局は、正宗がレックウザを呼び起こしてくれた事で決着がついた・・・か。）みんな・・・よくやってくれた。敵幹部との激闘に力を尽くしたディティクティブマスター達、日本各地の住民を避難させてくれたディティクティブマスター達、レジ18体で破壊エネルギーの拡散を抑えた6天王と選抜されたディティクティブマスター達とWの長。2つの：RINGを手にし暴走した青・赤の組織の両ボスに挑んでくれた男女2人も・・・！！戦いに関わった全戦士達よ！！我々はこの天変地異に勝利した！カイオーガ、グラードンは去った！！このグッド・ニュースを共に日本中に伝えようではないか！！」

その時、三稜からの報告が入った。

三稜

「ボス、水を差すようですが、こちらはバッド・ニュースです。ユーリが・・・倒れました。」

「何だと！？すぐに病院の手配を・・・」

三稜

「・・・いえ、手遅れです。・・・もう・・・死んでいる！！」

三稜は手首をガタガタと震わせた。

三稜

「なぜ、なぜこんな事に・・・！！確かにユーリはこの場の相として6天王やディクティクタイプマスター達に指示をし、レジフレア・レジリーフ・レジバブル・レジエレン・レジゴース・レジソウル・レジエアロ・レジマージ・レジポイズ・レジサンド・レジドラゴ・レジダーク・レジロック・レジアイス・レジスチル・レジライト・レジセクト・レジギガスの18体を統制していた。我々より負担が大きかったかもしれん！！・・・だが・・・！！」

リアン

「・・・三稜さん、・・・それほど事やったんよ！！ユーリ兄が石版を読み解く場に立ち会ったアタシにはわかる。古代の人は石版にこう書いていた。『ダガワタシタチハアノガーディアンヲトジコメタ』、『コワカッタノダ』。」

鈴也

「古代人が怖かった事、それは・・・強大すぎるガーディアンを操る『危険性<sup>リスク</sup>』だったんじゃないの？」

ハヤテ

「そうですとも。このレジフレア・レジリーフ・レジバブル・レジエレン・レジゴース・レジソウル・レジエアロ・レジマージ・レジポイズ・レジサンド・レジドラゴ・レジダーク・レジロック・レジアイス・レジスチル・レジライト・レジセクト・レジギガスだって、何かを少し間違えたら、カイオーガ・グラードンのように我々にとつて驚異となっていたかもしれませぬ。」

ジヨデイ

「見てください。ユーリが倒れた事で戦いの間ずっと保たれていた、あの6体の隊列が崩れました!!」

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!』

次の瞬間、レジ18体は咆哮でディティクティブマスター達や7天王を吹っ飛ばした。

リアン・鈴也・花鳥・ジヨデイ・美保・エル・メトロ・フレア・清兵衛・雷雑・狐・兎・雷牙・隼人・陽・陽太・歩美・朝美・風月・暁・真・隆太・瑛祐・琴美・深雪・弓雁・美香・綾子・ミサオ・羽鳥・伊澄・理沙・ハヤテ・咲夜・三稜  
「うわああああああ!!!!」

レジ18体はその後、空の彼方へと消えていった。

ドシューウウウ・・・

三稜

「ユーリ・・・」

潤治

「父さん！！父さん！！」

潤治が叫んでいると、突然レックウザが2人を突き飛ばした。

ドカツ！！

レックウザはその後、ゆっくりと空へ消えた。

正宗

「フフ・・・フ・・・レックウザ、ヤツもまたカイオーガ・グラードンと同じ超古代ガーディアン。完全に手なずける事は不可能・・・むしろ眠っているところを無理矢理起こし連れて来たオレに対し、腹を立てていた・・・というワケか。潤治・・・、驚く事はない。わかっていたのだ・・・カイオーガとグラードンでさえ、クリーバー・ブレイバーという媒介があつて初めて命じたり鎮めたりできる。しかしレックウザにはその：RINGに当たる物がない。ないままに操ろうとした時、どうなるか・・・結果がこれだ・・・この・・・無様な・・・姿だ・・・探偵協会もずいぶん長い時間をかけてレックウザを捕獲、研究していた。レックウザに命じるための媒介・・・いふなれば『カリバー』とも呼べる物を人工的に作るうとしていた。しかし当時それはかなわなかった。それどころか・・・ディティクティブマスター試験のあつたあの日、レックウザは探偵協会の研究棟から逃げ出し、オレはその行方を追う事になった。」

潤治

「・・・！！！！」

篤『君の父親は8年もの間、ディテイクティブマスター受験の権利を奪われ、レックウザ搜索を命じられていたんだ。』

潤治

「(ディテイクティブマスター試験を受けさせてもらえず、代わりに搜索を命じられていた。これは・・・何かの『罰』だ!!何か大きな『罪』があつて・・・父さんは責任を取る事になったんだ!!・・・でも、これだけ強く完璧な父さんが、『罪』など犯すだろうか?・・・何がちがう!!・・・あの日!あの場所にいた誰かが犯した失敗の責任を父さんが受けたんだとしたら・・・!!それは・・・!!その誰かは・・・!!)」

潤治の脳裏に、8年前の出来事の記憶が蘇る。

潤治

「・・・も、・・・もしか・・・して、小生・・・なの!?レックウザを逃がしてしまったのは、小生なの!!?」

正宗

「そつだ。」

『いよいよ今日ね、あなたがディテイクティブマスターになる日!ずっと目指していた夢が叶うんだわ!!』

『まゝだわかりませんぞお。試験は今からなんですからな。なぐんで失礼!正宗にかぎって不合格なんてまず考えられないですな。気

が早い、合格後の就任地区がどこになるのかの方が気になるでしよう?。」

『いいえ。この人と一緒ならどこへでも!』

『お、この幸せ者め! 正宗よ、せ、ひ、我が福岡に來い!』

正宗『フツ。潤治はどうした?』

『向こうで遊んでたわ。ウフフ、見るもの全部珍しいみたい。』

正宗『そうか、じゃあそろそろ試験会場へ行くとするか。』

『ちよつと・・・まだずいぶん早いわよ! せつかちすぎる。』

『ハハハ。』

ズガアン!!

『あ、あなた・・・!』

正宗『研究棟の方からだ!! オマエはここにいろ!!』

『ハ、ハイ。』

ダツ!!

正宗『!!』

ドガア!!

『あれは・・・!!』

ゴゴゴゴゴ

カカカカカ!!

正宗『ゼエイ!!』

カツカツカツ・・・

パパパパパン!!

ブン!!

ゴオオオオン!!

正宗『うわあああ!!』

コオオオオ・・・

正宗『今のは・・・?』



『研究棟の天井を突き破って出て来たぞ！とにかく研究棟の方へ行ってみよう！』

正宗『これは・・・！』

『うう・・・』

正宗『！！大丈夫か！？しっかりしろ！！』

『何があつたんだ！』

『今、逃げ出したのは・・・探偵協会が管理・研究していた・・・  
ガーディアン・・・なんです。』

『何と！』

『この場所はセキュリティも完璧で・・・何者の侵入も許さない・・・ハズでした・・・しかし、ついさっきこのボーマンジャが突然侵入し、メチャクチャに暴れ始めたんです。私達はガーディアンを持つてませんし、全く歯が立たず・・・騒動の中で抑制装置が破壊されてしまったんです。』

『それで、『アレ』が・・・外に出てしまったのか・・・』

正宗『・・・ボーマンジャ自身もかなりのキズを負っているようだが、これらのキズは研究棟で・・・？』

『いいえ・・・入って来た時からついていました。』

『どうした？正宗。』

正宗『（破壊光線、アイアンテイルでついたキズ・・・さらに・・・常に左から左から攻めたであろう攻撃のクセ・・・！！潤治だ！！！潤治がこのボーマンジャと戦ったのだ！おそらく偶然出会したのだろう。普通の子供なら逃げるか人に知らせる。だが、子供離れした強さを持つ潤治は・・・戦って・・・しまった。しかし倒しきるか、捕まえてしまうか・・・そのどちらもできなかった。手負いとなったボーマンジャは我を失い、暴れ狂ってここに迷い込んだ！！）』

』

『遅い。もう試験開始時間は過ぎてているのに・・・受験者はまだなのか!!』

鉄泉『本当に遅いですな。』

『後数分で失格になってしまっぞ・・・』

『た、ただ、大変です!!研究棟で事故が・・・!!』

『な、な、何という事だ!!』あのガーディアン』が逃げ出したのか!?なぜだ!?誰がこんな事を!!』

正宗『申し訳ありません。私の責任です。』

『では、処分を下す。君が黙秘しているため事件の経過はわからない。しかし、あのガーディアンが逃げ出したという事実は重大だ。

よって、君への処分は次のように決定した。これから8年間、君からディテイクタイプマスター試験を受験する権利を剥奪する。それまでは、逃がしたガーディアンの搜索を命じる!ディテイクタイプマスターの資格は8年後、改めて取りたまえ!』

正宗『わかりました。1つだけ伺いたい。協会があればどのガーディアンを管理・研究していたのは何のためですか?』

『今の君には、関係ない事だ。』

潤治

「・・・しょ、・・・小生が・・・小生が犯してしまった失敗のせいで父さんは8年間も・・・！！夢だったデイトイクティブマスタ―試験も後回しにして・・・！！自分の身体がこんなになるまで・・・！！何で・・・何でそんな事したんだよ！？」

その時、潤治の後ろにあったライターに再び炎が灯った。

ポツ！！

篝

「（何でそんな事したかって・・・？そんなの、君と同じさ。君が七槻ちゃんをエア・カーに閉じ込めたのと同じ事さ。本当に大切な人のためには、誰もがそうしちゃうんだ。みんながみんな、甘いったらない・・・）」

そして、ついに正宗の心臓は止まった。

潤治

「父さん？父さあぁん！！！！」

その時、崩れた祠の瓦礫が吹き飛んだ・・・

幻惑島

銀一

「我暖さん、うまくいったみたいですね。カイオーガとグライドンはそれぞれいるべき場所に還った。」

金美

「潤治君が七槻ちゃんを突き落とした時には、どうなる事かと驚きましたけど・・・最後は、潤治君とレックウザの力で終了。予言は外れましたね？」

我暖

「予言？」

銀一

「何度も言ってたじゃないですか。『カイオーガとグライドンの決着をつける運命にあるのは時津潤治と越水七槻』って。」

我暖

「ウイ！確かに言った。それは私の中にイメージが浮かんでいたからだ。あの2人が2つの巨大な力に立ち向かっていくイメージが・・・。。。。しかし・・・私はそこに思いちがいをしていた。2人が立ち向かう巨大な力とは・・・カイオーガとグライドンではなかったのだ。」

銀一・金美

「ええ！？」

七槻

「ちよ、ちよっと!!どこに向かって電撃ば放ってる?!?もう超古代ガーディアンは去ったったい!」

『・・・』

七槻

「あそこ!?!あの上はまだ何がおるとか!?!」

プラスマとマイナズマの戦意が上がった原因・・・

それは、目覚めの祠の中から松房と青桐が姿を現したからだ・・・

潤治

「松房と青桐!!最初の激突の後姿が見えなくなったと思ったら・・・目覚めの祠の中にとんと身を潜めていたのか!?!」

松房

「そつとも。どいつもコイツも・・・」

青桐

「弱者の分際で我らにたてつきおつて。その罪、万死に値する!?!」

松房・青桐

「邪魔をした全ての者共!!今、鉄槌を下す!?!」

青桐のジバクラゲの触手が、潤治を襲った!?!

シュルルルル!!

潤治

「ぐあつ!!」

ジバクラゲの触手に締め上げられる潤治。

ギリギリギリ……

潤治

「うぐ……ぐ。この触手、そうか！ 篝さんを引きずり込んだのは……オマエ達……！」

松房

「そうだ。」

青桐

「これも1つの……裁き……!!！」

三稜

「ム!! 私のアア・カー、七槻ちゃんが閉じ込められたままだ!! 早く出してやらねば!!……だが、あの放電は一体……!? メタグロス、頼む!!！」

ザッ!

三稜はエア・カーへと飛んで行く。

三稜

「七槻ちゃん！！無事か！？」

七槻

「三稜さん！！」

三稜

「どうしたんだ！？この状況は！！」

七槻

「わからんつたい！カイオーガとグラードンがおとなしくなって、  
事件は解決したハズなのに・・・プラズマとマイナズマは逆に戦意  
が上がつてると・・・！北海道あそこにまだ戦うべき相手がおるみたいに  
・・・！！」

三稜

「我々にはないガーディアンの鋭敏な感覚が何かをとらえたのだろ  
うか！？ともかく、潤治君もまだあの中にいる！エア・カーはここ  
らから遠隔操作する！！共にあの場合へ向かうぞ、七槻ちゃん！！」

2人は進もうとしたが、何かに跳ね返された。

バシ！！

七槻

「キヤー！！！！」

三稜

「むおっ！！」



七槻

「跳ね返されたったい！！何で・・・！？」

三稜

「そうか。グラードンとカイオーガが去ってもなお浮かんでいられただけのエネルギーが、この北海道周辺に残っているんだ！それだけじゃない！レックウザが放出したオゾンまでもが加わって・・・堅固な障壁が取り巻いているんだ！！どうすればここを突破できる！？何か打つ手は！？」

七槻

「三稜さん！あるとよ！ホラ！放電しながらエア・カーがぶつかった所、わずかやけど穴が空いたみたい！元々この2体は両手から出した火花でボンボンは作る事ができるんやけど、我暖さんの特訓でそれば攻撃に使えるようになったと！最大級の威力で直接障壁に撃ち込めば、ボクらが飛び込めるぐらいの穴になるかもしれんったい！」

三稜

「わかった！」

ピポパポピ・・・

ガーッ・・・

七槻

「さあ！プラズマ、マイナズマ！でかいのば一発・・・頼むったあ  
ああい！！」

シュバツ！！

バリバリバリバリ・・・

三稜

「（確かに少しずつは効いてきている！だが、しかし・・・この2体で貫くにはやはり対象としては巨大すぎる！！）」

七槻

「何でや・・・？アカンと？ボクがあそこへ行ったらアカンと？あそこにはあん人が、潤治君がおるったい！！ボクはあん人の所へ行かねばならんとっ！！」

「強い電気のエネルギー、必要なんだな。」

「そういう事なら、アタシ達協力できるかも。」

潤治は地面に叩きつけられた。

潤治

「・・・グ・・・ハ・・・オ、オマエ達・・・何を・・・つもり・・・だ・・・」

松房と青桐は：RINGを拾い上げた。

松房

「フフフフ、何をするつもりだ、と？言うまでもない。もう1度同

じ事をするまでだ。」

青桐

「しかも今度は一切の邪魔が入らない状況でな。」

松房

「目覚めの祠の中に身を潜め、2人で話し合ったのだ。」

青桐

「今回の作戦で我々は1度手を組んだ。その時だけはうまくいった。」

松房

「今から思えば、最初からそうやっていればよかったのだ。」

青桐

「我々2人だけで協力し合い、まずは全ての敵を消せばいい!」

松房

「全ての人間、ディティクティブマスター、6天王、探偵協会、伝説のガーディアン達、そして、我々の足手まといでしかなかった無能な部下達も含め全てを叩き潰す。」

青桐

「そして、我々2人だけになった世界で最後に頂上決戦をする!!  
それが驚愕の結論だ!!」

潤治は無言になった。

松房

「最も邪魔なレックウザを操った者が真っ先に消えてくれて、良い露払い。・・・だが、念には念を入れ・・・」

松房のガードイアンが、攻撃の矛先を正宗に向けた。

潤治

「や、やめろおおっ!!!!」

ゴアッ!!

正宗は炎に包まれた。

潤治

「父さん!!父さ・・・ん・・・!!」

青桐

「クククク!!」

松房

「ウワハハハ!!」

七槻

「あ、あなた達は・・・!!」

エア・カーの後ろに現れたのは、FBIのバリーとキースだった。

バリィ

「よう！」

キース

「元気そうじゃない？」

七槻

「バリィさん、キースさん！どうしてここに！？」

バリィ

「リアンちゃん達がんばってるのに、オレ達だけノンキに待ってられないからな！そんでキース乗っけて出撃したまでは良かったんだが……」

キース

「途中で少し時間食っちゃってね、やっとここまで来たと思ったら事態は収束してるし、帰ろうかと思ってたトコなのよ。」

七槻

「……うわぁあん！！」

七槻は泣き出した。

バリィ

「あ、あれ？オレ達、何かタイミング悪かった？」

七槻

「うわん！うわん！」

七槻は泣きながら首を左右に振った。

三稜

「七槻ちゃん、泣くのは後だ！今は！」

七槻

「うん！」

バリ

「ここんトコ修業続きだったからな・・・キースも新しい術2つを修得してきたところだ。」

キース

「今日はその初披露って事で・・・」

バリ

「七槻ちゃん！キースに電撃を放ってくれ。」

七槻

「ええ！？」

バリ

「大丈夫。オレ達を信じて。」

七槻

「う、うん！行きたい、プラスマ、マイナズマ！」

ドシュツ！！

キース

「シアン・アクシルド！！」

キースが出した水の盾が、電撃を吸収した。

キース

「これがアタシの1つ目の『シン』・・・電撃すらも吸収する、強固な水流の盾よ！そして・・・それを何百倍にも増幅させ、一気に放つ！！シアン・アクシオ・スプレイド！！！」

ドシュツ！！！！

キースの放った光線が、障壁に大穴を空けた。

三稜

「やった！！抜けたぞ！！！」

三稜達は中へと入り込んだ。

『！！！！』

七槻

「プラズマとマイナズマが何か見つけた！！！」

七槻・三稜

「！！！！」

七槻と三稜の目に映ったのは、不適な笑みを浮かべる2大組織のボス、瓦礫に埋もれた篝、炎の中にいる正宗、そしてジバクラゲの触手によって地面に叩きつけられた潤治の姿だった。

七槻

「2体を感じ取っていたのは、……この、……惨状……!」

三稜

「わかったよ、ユーリ……なぜ、オマエが長の座を……私に託したのか。今こそ……!これをまとう時……!」

バツ……!

松房・青桐

「誰だ?」

三稜

「このマントを見て悟る者なら……、……名乗る必要はない。このマントを見て悟らぬ者には……、……名乗るに値しない!」

バサアッ……!

ついに長のマントをまとった三稜……!

このまま逆転なるか……!?



三稜

「このマントにかけて！！日本をここまで蝕んだオマエ達を、絶対に許さん！！」

三稜は2体のガーディアンを出すと、猛攻を始めた。

松房・青桐2人のガーディアンが追い詰められる。

青桐

「ぬ……う……長……」

松房

「長のマントか……！！」

三稜

「このマントの意味を知っていたか！ならば私と、戦う資格はあると認めよう！！」

三稜の猛攻は続く。

七槻

「三稜さん、ボクも……！！」

三稜

「こっちはいい！！七槻ちゃん、君は潤治君を頼む！！」

七槻は潤治の元に向かった。

七槻

「潤治君!!!」

七槻は潤治を抱えた。

七槻

「……こげになるまで……」

青桐

「クフウ……強いな。すさまじい強さだ。」

松房

「さすが長なだけはある。だが、こうなる事を予想しなかった我々だと思っのか？」

青桐

「我らにはオマエを退けるだけの切り札がある。」

三稜

「!?!?」

松房

「わからないのか？超古代ガーディアンとの激突を邪魔しに来たもつ1人の……登場人物を!!!」

ボゴオ!!!

ジバクラゲが地面から顔を出した。

ジバクラゲの触手には、何かが捕らえられている。

それは……

凧だった。

三稜

「凧!!」

松房

「おっと、待てよ。オマエ、自分の立場がわかってんのか？見る！」

ギリ!!

触手に締め付けられる凧。

凧

「は……ぐ……」

三稜

「……く!!」

松房

「よし、物わかりいいじゃねえか。いくら強いオマエだろうと、も  
うどうにもできまいよ。おとなしくガーディアンをしまえ。」

パシュ……

松房

「おりこつさんだ。」

青桐

「・・・さてと。」

ガッ！

ジバクラゲの触手が三稜に絡みつき、彼を壁に打ち付けた。

七槻

「・・・み、三稜さん・・・！！」

しばらく痛めつけられた三稜は、そのまま地面へと落とされた。

ドッ！

青桐

「フウ・・・実にすがすがしい気分だな。」

松房

「全くだ。この高さから見下ろす地上。まるで我々を主としてひびき  
まずいているかのようにじゃないか。」

潤治

「う・・・」

潤治が目を覚ました。

潤治は辺りを見回す。

潤治

「みんな・・・父さん！ 父さん！ 先生！ 風さん・・・！ ユーリさんまで！！ みんな・・・みんな倒れてしまった・・・！！ もう・・・戦える人なんて・・・誰一人いない！！」

松房

「その通りだ。」

青桐

「もはや我々を邪魔できる者などおらぬ。」

その時、青桐の顔に水がかかった。

バシヤ！

青桐

「ムウ！ 場違いに迷い込んだガーディアンか？」

突然姿を現した1体のガーディアン。

それは・・・

潤治が小さい頃飼っていたコイキングだった。

潤治

「！！・・・ウ・・・」

水から飛び出し、松房と青桐に攻撃を仕掛けるコイキング。

しかし、最弱のガーディアンが2人にならなうハズもなかった。

松房

「雑魚があ！！」

青桐

「この晴れがましい舞台に薄汚い姿をさらしおって！！」

痛めつけられたコイキングは、潤治の所へと飛ばされた。

潤治はコイキングを抱き上げた。

潤治

「う・・・URURU・・・まさか・・・ずっと小生の事を探して・・・！？」

松房

「そのまま朽ち果てる。弱く・・・鈍く・・・不快なまでの不格好さ！」

青桐

「そんな醜い存在は、生きている価値がない。」

潤治

「醜いか、このURURUは・・・醜いか？そうだろうな。小生も出会った頃はそう思っていた。でも今は・・・むしろ、美しく、優しいと思う。幼い頃に別れを告げた小生なのに、それでもずっと探してくれていた健気さ・・・かなわない相手とわかっていても、才マエ達に立ち向かった勇敢さ・・・外見じゃない。この子の想い、1つ1つがたまらなく美しく、優しく・・・愛おしいんだ。優しい人やガーディアンは、その場にいるだけで人を慰めたり励ましたり

できる事を小生は知った。・・・だから、オマエ達も知ってくれ。  
本当の美しさは心の美しさだ！！誰かを愛し、想いやる心そのもの  
なんだ！！強大な力に全てを飲み込まれる前に、そんな気持ちを思  
い出してくれ！！」

潤治は精一杯叫んだ。

松房

「クク、」

青桐

「グククク。」

その時、三稜の声が聞こえた。

三稜

「潤治君・・・よく言った・・・それでこそ、私の生徒だ。さあ、  
これをつけてやれ・・・優しさのスカーフ・・・だ。」

潤治

「URURU、ありがとう。小生をずっと愛してくれた君に、これ  
を贈るよ。優しさのスカーフ・・・」

潤治はスカーフを首に巻いた。

その時、URURUの様子が・・・！！

カッ！！

メキメキメキ・・・

パシユウウ・・・！！

潤治

「・・・君・・・だったのか！！ずっと小生が憧れ、探し求めていた・・・愛おしみのガーディアン・ウルミアス・・・！！！！」

今こそ、決着をつける時！！



』ミュオオオオオン！！』

潤治

「戦えつて言うんだね？」

コク・・・

潤治

「七槻ちゃん。2体の超古代ガーディアンは去った。ここからは・・・  
・今度こそ戦おう！2人で！！」

七槻

「うん！」

松房はバラクーダ、青桐はトドゼルバを出してきた。

潤治と七槻も応戦する。

七槻

「スカイ・アッパー！！」

チャモの一撃が、2体を突き上げた。

潤治

「回り込んで、濁流！！」

回り込んだGUGUの濁流が、2体にトドメを刺す。

七槻

「幻惑島で練習したコンビネーションンったい!!」

青桐

「グクククク。」

松房

「クカ・・・カカ。」

松房と青桐はさらにガーディアンを出した。

三稜

「全てのガーディアンを出し、これを最終決戦にする気か・・・！  
イヤ、ちがう！私のエア・カーに!!」

いつの間にか、松房と青桐はエア・カーに乗り込んでいた。

松房

「正直ここまで粘られるとは思わなかったぞ。その粘りに免じこの  
場は引いてやろう。」

青桐

「クリーバーとブレイバー、2つの：RINGは我らの手に戻った。  
オマエ達の始末などいつでももつけられるわ。」

松房と青桐はエア・カーで逃げ出した。

バリ

「ムッ!!あれが敵か!!」

キース

「障壁の入り口はここだけ！アタシ達が断じて通さない！！」

松房・青桐

「どけ！！」

エア・カーはキースを弾き飛ばした。

キース

「キャア！！」

バリー

「キース！！フェイ・イグリュウ！！」

バリーはキースを助ける。

七槻

「あの2人、意地でも逃げ通すつもりとね！！だったらよか！こっちにも考えがあるったい！！」

プラズマとマイナズマの電気エネルギーが、急上昇していく。

七槻

「キースさんからもらった増幅電気エネルギー！！潤治君、同時にぶつけるったい！！」

潤治・七槻

「1、2の、3！！！！」

ズガッ！！！！

電撃はエア・カーを直撃し、動きを止めた。

七槻

「よし！」

潤治

「七槻ちゃん。これを！」

潤治は携帯を渡した。

潤治

「『3919』と押してくれないか。君を閉じ込めた時、小生が設定し直したりモコンコードだ。エア・カーのシールドを閉じられる。電撃を防ぐ事ができる。せめて彼らの命が……失われないように……」

七槻

「潤治君……」

潤治

「脱出は、阻んだ。後は……返してもらおう。2つの：RINGを……」

七槻

「どぎゃんして！？あそこまで届いて……しかもあん強烈なビリビリの中に飛び込めるガーディアンなんておると！？」

潤治

「……いる。1体だけ。」

そう言うと、潤治はかまえた。

潤治

「小生も滅多に召還しない……スゴく不思議なガーディアンなんだ。旅の途中で出会った。何て種類かもわからない。：RINGの図鑑も認識しない。だけど、ずっと持っていた……6体目!!!」

カツ!!

潤治の手から放たれたのは……

セーラとセレビィの愛の子……

我暖

「おお……セ、セレナード!! そうだったのか……! 幻惑島に潤治君が入りするたびに起こった時軸の乱れ……! 時回遊ガーディアンを持っていたというなら……むしろ当然!!」

セレナードはエア・カーに飛び込み、2人から：RINGを奪い取った。

松房

「(……おのれ……今1度……)」

青桐

「(……今1度……我が願いを……!!)」

成美

「見て、永井君！！障壁のエネルギーが四散して・・・北海道が静かに下降し始めた。これで終わったのね。本当に全てが・・・終わったんだわ。」

潤治

「（眠い・・・スゴく眠いや・・・ここはどこだろう・・・夢・・・？それとも・・・あは・・・ユーリさん。篝さん。父さん・・・！！この戦いで倒れていった人達の・・・命の燃え尽きる・・・瞬間・・・！！もう戻らない。小生の出会った・・・大切な人達！！）」

『・・・セー、ラーツ！！！！』

ビシ、ビシ・・・

パキイイイイン！！！！

潤治・七槻

「・・・。。。。！！！！」

潤治と七槻は飛び起きた。

「おお！！気がついたか？人共。よかった、よかった！！君達2人の活躍で、全ての事態が収束したと聞いたぞ！日本を代表して、ワ

シからお礼を言おう！お疲れ様！そして・・・ありがとう！」

潤治と七槻の前にいたのは、今回の事件で戦った人達。

そして・・・

正宗とユーリの姿も・・・！！

潤治

「ここは・・・？」

「探偵協会本部、ジェ・グリーンの中だよ。」

潤治

「！！」

潤治の目に、ジェ・グリーンから飛び立つ篝の姿が映った。

潤治

「（時間が逆戻りして・・・少しだけズレた未来に着地したのか。もしかして、君はこのために・・・小生の手元に来てくれたのかい？）」

七槻

「潤治君。」

潤治

「？」

七槻

「今回の旅で、あなたのいいところ一杯見られた。……ありがとう  
!!!」

七槻は潤治に唇を重ねた……

『祝・復活！熊本温泉』

明日奈

「熊本温泉の復活だよー！」

「よぉ！姉ちゃん！」

明日奈

「焰さん！」

焰

「入りに来たぜ！熊本温泉によー！」

明日奈

「ありがとう！あの……」

焰

「ん？」

明日奈

「後で、大事な話があるから……」

焰



「おう！」

泉美

「じじはじじやって・・・」

躑躅

「泉美さんがいると、助かりますわ！」

「・・・ン君。コナン君。」

コナン

「ん・・・哀・・・？」

コナンは起き上がった。

哀

「ああ、やっと目が覚めた。優作さんから連絡があったわ。全ての事態が収束したって。」

コナン

「そっか。それじゃ、そろそろ帰ろっか？」

哀

「そっね。」

その時・・・

「やっと見つけた・・・」

コナン・哀

「え!?!」

コナンと哀は振り返った。

「ようやく見つけたよ・・・」

柱から、謎の影が姿を現した。

コナン

「その声・・・ま、まさか・・・兄さん・・・!?!」

「久しぶりだな・・・シン・・・」

コナンを『シン』と呼ぶ、謎の影の正体とは・・・!?!?

ファイル443：陸海空の交響歌（シンフォニア）『30・世界の平和と2人の

『名探偵コナン・陸海空の交響歌』シンフォニア

主題歌・夏を待つ帆セイルのように

メインテーマ・名探偵コナンメインテーマ『世紀末バージョン』

サウンド・名探偵コナン『世紀末の魔術師』マジシャン オリジナル・サウンド  
トラック

ファイル444：謎めく少年、純一

「久しぶりだな、シン……14年ぶりか……？」

コナン

「純一……兄さん……？」

哀

「え？この人、あなたのお兄さんなの？」

哀が訪ねた。

純一

「そうだ、シエリー。私はシンの双子の兄……私は3歳の頃に祖父母の元に預けられ、そこで育った。だが……私にとってあれほど辛かった事はない……」

コナン

「どうして！？あんなに幸せに暮らしているって、ずっと手紙が来ていたじゃない……！」

純一

「表向きではな。だがその後、何年も手紙が途絶えていただろう？」

コナン

「う、うん……確か、10年前からパツタリ……その10年の間に一体何があったの……！」

純一

「言わない。私は絶対に言わない．．．あんな思いをして、生きていたのが不思議なぐらいだ．．．」

コナン

「一体、何が．．．」

純一

「黙れ！！何も知らずに、両親の愛情を受けて育ったオマエが私の辛さなどわかるまい！！私はあの日以来、感情を押し殺して生きてきた．．．オマエと再会するため、そして．．．私の目的を果たすために．．．」

コナン

「兄さんの、目的．．．？」

純一

「そうだ、シン。私はオマエが憎い．．．憎くてしょうがないのだ！！」

コナン

「に、兄さん．．．？」

純一

「覚えておけ、シン．．．私は必ずオマエを．．．殺す！！！！」

純一の叫びに、コナンは驚愕した。

「弟との話は済んだかい？」

純一の後ろから、クラレットが現れた。

純一

「ああ。行こう、クラレット。」

コナン

「ま、待って！兄さ……」

純一はクラレットのマントに包まれ、クラレットと共に姿を消した。

コナン

「兄さん……どうして……どう……し……て……」

コナンはしばらくうつむいていた……

純一がコナンを憎む理由は何なのか？

そして、純一が話そうとしない辛い過去とは……!?!?

運命の歯車が、回り出す……

第4章、完。

ファイル444：謎めく少年、純一（後書き）

予告のページ

第1弾：呪われたクルージングツアー

第2弾：天空上の恋愛劇  
ラブアース

第3弾：伝説の蝶彦  
レジェンド バタフライズ

第4弾：六千五百万年前の亡霊  
ファントム ダイナソー

第5弾：友情と愛の鼓動  
ハートビート

第6弾：地球の神秘と陰謀  
ストレンジー

第7弾：業火の中の断末魔  
クラーバー

第8弾：ユリと深海の王女セーラ  
プリンセス

第9弾：七海島の海賊記  
ジョリー・ロジャール

第10弾：陸海空の交響歌  
シンフォニア

そして・・・

11番目の物語が始まる・・・！！

名探偵コナンスペシャル第11弾、執筆決定!!!



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1887c/>

---

FBIから来た女:4 ~ 清流・青の章

2010年10月28日06時26分発行